

鏡水箕隅原C遺跡

—沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴う緊急発掘調査報告—

2011年3月

那覇市教育委員会

かがんじみーぬしんばるしーいせき
鏡水箕隅原C遺跡

—沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴う緊急発掘調査報告—



巻首図版 1 遺跡一帯の空中写真

(S=1:8,000)



巻首図版2 調査区全景 上：南西から
下：北から



巻首図版3 主な層序と遺構

- 1 段目左：I・J-8・9グリッド東側アゼ
- 2 段目左：I-10~13グリッド北側アゼ
- 3 段目左：焼土遺構No.2・1 (J-8グリッド)
- 4 段目左：貝溜り遺構 (J-13グリッドNo.2)

- 1 段目右：K~M-15グリッド南側アゼ
- 2 段目右：H-10~13グリッド北側アゼ
- 3 段目右：貝塚 (I・J-7~9グリッド)
- 4 段目右：溝状遺構No.5



巻首図版 4 主な出土遺物

- 1 段目左：沖縄新石器時代前Ⅱ期の土器
 2 段目左：沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の遺物
 3 段目左：沖縄新石器時代前Ⅳ期の遺物
 4 段目左：沖縄新石器時代後期の遺物

- 1 段目右：沖縄新石器時代前Ⅱ期の石器
 2 段目右：脊椎動物遺体
 3 段目右：沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の石器
 4 段目右：貝製品

序

本書は2005（平成17）年度と2006（平成18）年度に実施した沖縄西海岸道路那覇西道路建設に係る埋蔵文化財緊急発掘調査の成果報告書であります。

「鏡水箕隅原C遺跡」は、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所による上記道路建設計画に伴って発見されたものです。この道路は、「慢性的な渋滞をきたしている本島の大動脈・国道58号、331号の混雑を緩和するため」、「那覇市街部及びその周辺の交通渋滞対策に大きく寄与し、那覇空港へのアクセス向上並びに南北の接続機能の向上を図るために計画」されたもので、今後の整備に期待が高まります。

さて、本遺跡の発掘調査では、「沖縄新石器時代前期・後期」、グスク時代等における様々な時代の資料が得られています。特に、沖縄新石器時代前Ⅱ期（縄文時代早期相当期）の「爪形文土器」は、那覇市において初めての出土で大きな話題となり、本市における先史時代の研究に新たな知見を加えることとなりました。今後とも周辺地域での発掘調査を進めることで先史時代における先人達の生活の一端が明らかになることでしょう。

本報告書が、市民の皆様はもとより多くの方々にご利用され、文化財保護行政の一助となることを希望いたします。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成23年3月

那覇市教育委員会

教育長 城間 幹子

例 言

1. 本報告書は、那覇市教育委員会が内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所の委託を受けて2005（平成17）・2006（平成18）年度に実施した「鏡水箕隅原C遺跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 調査は、沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴うもので、那覇市教育委員会が実施した。
3. 中国産および本土産陶磁器の鑑定等について、下記の方々よりご教示を得た。記して感謝申し上げます。
金武正紀氏（今帰仁村埋蔵文化財発掘調査アドバイザー）
堀内秀樹氏（東京大学）
野上建紀氏（有田町歴史民俗資料館）
4. 石器・石材の石質鑑定等について、下記の方々よりご教示を得た。記して感謝申し上げます。
大城逸郎氏（おきなわ石の会 会長）
神谷厚昭氏（金城町石畳地質研究）
5. 土器の鑑定等について、丑野毅氏（当時、東京国際大学）、堂込秀人氏（当時、鹿児島県教育庁文化財課）、伊藤慎二氏（国学院大学）よりご教示を得た。記して謝意を表する。
6. 比較資料収集において、下記の方々よりご教示を得た。記して感謝申し上げます。
鹿児島県教育庁文化財課（木原俊孝氏、青崎和憲氏、堂込秀人氏）
鹿児島県立埋蔵文化財センター（池畑耕一氏、新東晃一氏、長野眞一氏）
鹿児島県立上野原縄文の森（富田逸郎氏）
鹿児島市立ふるさと考古歴史館（竹之内祐司氏、岩坪秀樹氏、出口浩氏）
奄美市教育委員会文化課（久伸博氏）
奄美市教育委員会生涯学習課（松本信光氏）
奄美市立奄美博物館（中山清美氏、高梨修氏）
奄美市歴史民俗資料館
榊原えりこ氏（龍郷町教育委員会）
新里尚美氏、金城達氏（八重瀬町教育委員会文化課）
島袋春美氏、山城安生氏、東門研治氏、松原哲志氏（北谷町教育委員会社会教育課）
山崎真治氏（沖縄県立博物館・美術館）
相美伊久雄氏（志布志市教育委員会生涯学習課）
7. 調査および資料整理は下記の方々に指導・協力を得た。記して感謝申し上げます。
金武正紀氏（今帰仁村埋蔵文化財発掘調査アドバイザー）
大城逸郎氏（おきなわ石の会 会長）

黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）

島袋洋氏・盛本勲氏・金城亀信氏（沖縄県教育庁文化課）

安里嗣淳氏、岸本義彦氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）

島袋利恵子氏（宜野座村教育委員会）

大城竜也氏・伊波かおり氏（豊見城市教育委員会）

瑞慶覧長順氏・三澤祐大氏・井上浩彰氏（沖縄国際大学生）

中村フサ子氏（那覇市教育委員会臨時職員）

宮城みさ子氏・城間千栄子氏・仲西美那子氏・宮良知子氏・山城千夏氏・仲井真美佐枝氏・志良堂

恵氏・渡辺幸夫氏（那覇市教育委員会非常勤職員）

鏡水自治会・鏡水郷友会ほか関係各位

8. 本報告で使用した先史時代の名称は、高宮廣衛『沖縄先史遺跡と文化』(続第一書房 1994年3月 p133より引用した表を参考にした(第2表)。
9. 巻首図版1および図版1の空中写真(2007年1月撮影)、第2図の那覇市全図(平成18年2月発行)は、国土地理院発行のものを複製して使用した。
10. 第1図に使用した広域図は、坂本幸雄 株式会社 ティビーエス・ブリタニカ『ブリタニカ国際地図』1991年7月1日(第2版改訂発行)の91ページの部分をトレースして使用した。
11. 第4図は、米軍作成地形図(1947・1948年撮影の航空写真をもとに1948年作成)を縮小複写して貼り合わせたものを重ねて作図したものである。
12. 第3・7図は、「都市計画図 1:2,500 平成7年12月修正 那覇市作成」を縮小複写し貼り合わせて使用した。
13. 第5図は、那覇市企画部市史編集室『那覇市史 那覇の民俗 資料篇 第2巻中の7』昭和54年1月 付録「旧小祿の歴史・民俗地図」を縮小したものである。
14. 第6図は、沖縄タイムス朝刊「思い出のわが町」より、「<66>戦前の字鏡水民俗地図」1977年12月8日を加筆・トレースして作図した。
15. 本報告書の執筆は以下の通りである。編集は比嘉君子、大城弘子、請盛智秋、真栄城和美、山下真利子および各執筆者の協力を得て、仲宗根が行った。なお、第VI章 第3節は城間千栄子氏より原稿を頂いた。記して感謝申し上げます。また、附篇は、バリノ・サーヴェイ株式会社より報告いただいた。記して感謝申し上げます。

第I章～第V章 仲宗根啓

第VI章 第1・2節 仲宗根啓 大城弘子

第3節 城間千栄子

第4節 伊波かおり

第5節 北條真子

第6節 尾木綾

第7～10節 樋口麻子

第Ⅶ章 仲宗根啓

附篇 パリノ・サーヴェイ株式会社

16. 番号と写真図版の番号は一致するように配置してある。
17. 出土遺物は那覇市教育委員会文化財課で保管している。

目 次

- 巻首図版 1 遺跡一帯の空中写真
- 巻首図版 2 調査区全景
- 巻首図版 3 主な層序と遺構
- 巻首図版 4 主な出土遺物

序
例言

第 I 章 調査に至る経緯	1
第 II 章 遺跡の位置と環境	3
第 III 章 調査経過と調査組織	13
第 1 節 調査経過	13
第 2 節 調査組織	20
第 IV 章 層序	23
第 V 章 遺構	29
第 1 節 沖縄新石器時代前 II 期（8 期）の遺構	29
第 2 節 沖縄新石器時代前 III・IV 期（6・7 期）の遺構	31
第 3 節 沖縄新石器時代後期（5 期）の遺構	32
第 4 節 グスク時代以降（4 期）の遺構	33
第 5 節 近世（3 期）の遺構	34
第 6 節 近代（2 期）の遺構	36
第 VI 章 遺物	49
第 1 節 土器	49
第 2 節 石器	61
第 3 節 貝製品	81
第 4 節 外国産陶磁器	85
A 白磁	85
B 青磁	87
C 青花	89
D 青磁染付	91
E 瑠璃釉	91
F 黒釉陶器	91

G 緑釉	91
H 翡翠釉	91
I 褐釉陶器	92
J タイ産半練	92
第5節 本土産陶磁器	103
第6節 錢貨	115
第7節 円盤状製品	119
第8節 煙管	122
第9節 陶製品	123
第10節 玉	123
第Ⅶ章 總括	125

附篇

1 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告	129
2 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告	135
3 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告	143
4 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告	149
5 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告	153
6 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告	159
7 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告	163

報告書抄録

挿図目次

第1図	沖縄本島と那覇市の位置	6
第2図	那覇市内の主な遺跡	7
第3図	本遺跡周辺の地形と 周辺の遺跡(平成7年)	8
第4図	本遺跡周辺の地形 (1947・1948年)	9
第5図	旧小禄の歴史・民俗地図	10
第6図	戦前の字鏡水民俗地図 (昭和18年頃)	11
第7図	グリッド設定図	12
第8図	土層堆積模式図	23
第9図	グリッド及び 土層観察用アセ設定図	26
第10図	土層断面図	27
第11図	沖縄新石器時代前Ⅱ期の 遺構・遺物分布図	37
第12図	沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の 遺構・遺物分布図	39
第13図	沖縄新石器時代後期の 遺構・遺物分布図	41
第14図	グスク時代以降の遺構 (ピット・銀跡)分布図	43
第15図	グスク時代以降の遺構 (銀跡)分布図	45
第16図	近世の遺構 (溝状遺構)分布図	47
第17図	土器①	53
第18図	土器②	55
第19図	土器③	57
第20図	土器④	59
第21図	石器①	73
第22図	石器②	74
第23図	石器③	75
第24図	石器④	76
第25図	石器⑤	77
第26図	石器⑥	78
第27図	石器⑦	79

第28図	石器⑧	80
第29図	貝製品①	83
第30図	貝製品②	84
第31図	白磁・青磁	95
第32図	青磁・青花	97
第33図	青花・青磁染付・瑠璃軸・ タイ産半練	99
第34図	本土産磁器集中部 出土遺物①	109
第35図	本土産磁器集中部 出土遺物②	111
第36図	本土産陶磁器	113
第37図	銭貨①	117
第38図	銭貨②	118
第39図	円盤状製品の最大径と 重さ相関	120
第40図	円盤状製品	121
第41図	煙管・陶製品・玉	124

挿表目次

第1表	調査工程	13
第2表	沖縄諸島の暫定編年	50
第3表	沖縄新石器時代前Ⅱ期土器 集計一覧	51
第4表	土器観察一覧①	52
第5表	土器観察一覧②	54
第6表	土器観察一覧③	56
第7表	土器観察一覧④	58
第8表	石質同定一覧①	62
第9表	石質同定一覧②	63
第10表	石質同定一覧③	66
第11表	石器観察一覧	71
第12表	貝製品出土一覧	81
第13表	貝製品観察一覧①	81
第14表	貝製品観察一覧②	82
第15表	白磁出土一覧①	85
第16表	白磁出土一覧②	86
第17表	青磁出土一覧①	87

第18表	青磁出土一覧②	88
第19表	青花出土一覧①	89
第20表	青花出土一覧②	90
第21表	褐釉陶器出土一覧①	92
第22表	褐釉陶器出土一覧②	93
第23表	白磁観察一覧①	94
第24表	青磁観察一覧①	94
第25表	青磁観察一覧②	96
第26表	青花観察一覧①	96
第27表	青花観察一覧②	98
第28表	青磁染付観察一覧	98
第29表	瑠璃釉観察一覧	98
第30表	タイ産半練観察一覧①	98
第31表	白磁観察一覧②	100
第32表	青磁観察一覧③	100
第33表	青磁観察一覧④	101
第34表	青花観察一覧③	101
第35表	青花観察一覧④	102
第36表	褐釉陶器観察一覧	102
第37表	タイ産半練観察一覧②	102
第38表	本土産磁器出土一覧①	104
第39表	本土産磁器出土一覧②	105
第40表	本土産陶器出土一覧	106
第41表	本土産磁器集中部出土の 砥部焼計測一覧	107
第42表	本土産磁器集中部 出土遺物観察一覧①	108
第43表	本土産磁器集中部 出土遺物観察一覧②	110
第44表	本土産陶磁器観察一覧	112
第45表	銭貨出土一覧	115
第46表	銭貨観察一覧①	116
第47表	銭貨観察一覧②	116
第48表	銭貨観察一覧③	116
第49表	銭貨観察一覧④	118
第50表	円盤状製品観察一覧	119
第51表	円盤状製品出土一覧	120
第52表	煙管計測一覧	122
第53表	陶製品計測一覧	123

第54表	玉計測一覧	123
第55表	放射性炭素年代測定一覧①	128
第56表	放射性炭素年代測定一覧②	128

図版目次

図版 1	遺跡一帯の空中写真
図版 2	遺跡の状況
図版 3	主な層序の状況
図版 4	主な層序の状況
図版 5	主な遺構と出土遺物 (沖縄新石器時代前II期)
図版 6	主な遺構と出土遺物 (沖縄新石器時代前III・IV期)
図版 7	主な出土遺物 (沖縄新石器時代前III・IV期)
図版 8	主な出土遺物 (沖縄新石器時代前III・IV期)
図版 9	主な出土遺物 (沖縄新石器時代前III・IV期)
図版10	主な遺構 (沖縄新石器時代後期)
図版11	主な遺構 (沖縄新石器時代後期)
図版12	主な出土遺物 (沖縄新石器時代後期)
図版13	主な出土遺物 (沖縄新石器時代後期)
図版14	主な遺構 (グスク時代以降)
図版15	主な遺構 (グスク時代以降)
図版16	主な遺構 (グスク時代以降)
図版17	主な遺構と出土遺物 (グスク時代以降)
図版18	主な遺構 (近世)
図版19	主な遺構 (近世)
図版20	主な遺構 (近代)
図版21	表土剥ぎ作業と樹木の移植作業
図版22	表土剥ぎ作業と委託業務
図版23	発掘調査作業の状況
図版24	発掘調査作業の状況
図版25	発掘調査作業の状況

- 図版26 発掘調査作業の状況
- 図版27 土器①
- 図版28 土器②
- 図版29 土器③
- 図版30 土器④
- 図版31 石器①
- 図版32 石器②
- 図版33 石器③
- 図版34 石器④
- 図版35 石器⑤
- 図版36 石器⑥
- 図版37 石器⑦
- 図版38 石器⑧
- 図版39 貝製品①
- 図版40 貝製品②
- 図版41 白磁・青磁
- 図版42 青磁・青花
- 図版43 青花・青磁染付・瑠璃釉・タイ産半練
- 図版44 白磁・青磁
- 図版45 青磁・青花
- 図版46 青花・褐釉陶器・タイ産半練
- 図版47 本土産磁器集中部出土遺物①
- 図版48 本土産磁器集中部出土遺物②
- 図版49 本土産陶磁器
- 図版50 銭貨
- 図版51 円盤状製品
- 図版52 煙管・陶製品・玉

鏡水箕隅原C遺跡発掘調査報告書

第I章 調査に至る経緯

本遺跡は、沖縄県那覇市宇鏡水に位置する。同地域は、陸上自衛隊那覇駐屯地として使用されている地域である。同地域において、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、南部国道事務所）による「沖縄西海岸道路 那覇西道路」建設が計画された。「那覇西道路は、沖縄西海岸道路（延長50km）の一部を構成する道路で」、「国道58号の渋滞緩和」「那覇空港へのアクセス向上」「那覇港の機能向上」が整備効果として上げられている。

さて、那覇西道路（那覇市若狭～那覇市鏡水の約3km）開発計画の中で、沖縄県那覇市鏡水地先における「埋蔵文化財事前審査願」が平成15年10月30日付け、南部国道事務所から那覇市教育委員会（以下、市教委）に提出された。同地域は、前述のとおり、自衛隊基地内との制約された区域であったため、埋蔵文化財の有無が確認されていないのが現状であった。そのため、平成15年11月11日～11月14日までの期間で踏査及び試掘調査が市教委によって実施された。その結果、二遺跡の所在が確認され、平成15年11月28日付け、「事前調査報告書」が市教委から南部国道事務所あて回答された。

さらに、平成16年1月19日付け及び平成16年4月20日付けで開発計画区域の大部分について「埋蔵文化財事前審査願」が南部国道事務所から市教委へ再度提出された。

市教委では、平成16年2月4日・5日及び平成16年6月14日～6月22日までの期間で試掘調査を実施した結果、合計四遺跡（遺跡A・遺跡B・遺跡C・遺跡Dと仮称）の所在が明らかになることとなった（平成16年2月16日付け及び平成16年8月18日付けで事前調査報告書が市教委から南部国道事務所あて回答）。

その後、南部国道事務所と市教委、沖縄県教育庁文化課（以下、県文化課）との間で、遺跡保存のための調整が行われることになる。

まず、平成16年7月5日、南部国道事務所と市教委にて遺跡保存のための調整が行われた。その結果、遺跡B及び遺跡Dについては現地保存が可能、遺跡A及び遺跡Cについては、記録保存のための発掘調査が必要であるとの結論に達した。しかし、市教委では、諸事情により調査対応が困難である旨の回答がなされた。

平成16年8月24日、南部国道事務所、市教委、県文化課で遺跡保存のための調整が行われた。南部国道事務所からは、遺跡Cは平成17年度、遺跡Aは平成18年度対応で、市教委と県文化課で協力して記録保存のための発掘調査を実施してほしいとの依頼であった。市教委及び県文化課は、調査対応の詳細について検討するとした。

平成16年10月5日、県文化課と市教委で調整を行い、遺跡Cは市教委、遺跡Aは県文化課が対応するとの結論に至った。

平成16年10月18日、南部国道事務所、市教委による調整において、県文化課と市教委による調査対応の結論についての報告及び確認が行われ、今後の日程についても調整が行われた。

一方、三者による遺跡保存のための調整を実施しながら、合わせて文化財保護法による手続きも行われた。

南部国道事務所から、沖縄県教育委員会への進捗依頼である「沖縄西海岸道路（那覇西道路）に係る埋蔵文化財の発見について」が平成16年9月28日付け、市教委に提出された。

平成16年10月14日付け、市教委より県教育委員会あて「遺跡の発見通知について」が進達され、平成16年10月21日付け、沖縄県教育委員会より市教委あて「遺跡の発見について」の回答が送付された。なお、道路開発計画地区内で発見された四つの遺跡は、同地区内に所在する「ミノシン毛」と称される小高い丘陵の周辺に位置することから、箕隅原A・B・C・D遺跡とされた。その後、遺跡の所在する大字名である「鏡水」を付して鏡水箕隅原C遺跡とした。

平成16年11月12日付け、市教委より南部国道事務所あて「遺跡の発見について」が送付され、発見された四遺跡は周知の埋蔵文化財となった。

その後、文化財保護法による埋蔵文化財（箕隅原C遺跡）発掘調査着手通知が平成17年5月18日付け、「埋蔵文化財発掘調査について」として市教委より沖縄県教育委員会あて報告された。

鏡水箕隅原C遺跡の発掘調査（手作業による実質的な調査）は、第1次調査が2005（平成17）年5月26日、第2次調査が2006（平成18）年7月3日から実施された。

参考資料

内閣府 沖縄総合事務局 南部国道事務所 『沖縄西海岸道路 那覇西道路』（パンフレット）

内閣府 沖縄総合事務局 南部国道事務所 ホームページ 『お約束プロジェクト 2007』

内閣府 沖縄総合事務局 南部国道事務所 『沖縄西海岸道路 那覇西道路 お約束プロジェクト』（パンフレット）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

那覇市の現況

本遺跡は、沖縄県那覇市鏡水地内に所在する。

市の位置について那覇市のホームページによると、「沖縄県は、北緯24～28度、東経122～133度の南北約400km、東西約1,000kmの海上に弧を描いて連なる160の島しょの内、有人島39からなっています。その中で那覇市は最大の島、沖縄本島南部に位置します。また、本市は鹿児島と台北のほとんど中間にあり、那覇を中心とする1,500kmの円周域には、東京、ビョンヤン、香港、ソウル、北京、マニラなどの主要な都市があり、交通通信機能の上からも東南アジアの各都市を結ぶ要衝の地点であり、わが国の南の玄関として地理的に好条件の位置にあります。」と紹介されている（第1図）。

本市の地形等を概観すると、東シナ海に西面し、東側に弁ヶ嶽・首里城付近を頂点とする台地があり、南側には小緑台地、北側は天久台地が占地する。その台地などを源として、北から安謝川・安里川・国場川が西流する。安謝川は安謝港、安里川は泊港、国場川是那覇港を経て、東シナ海に注ぐ。また、市の周辺は、北に浦添市、東に西原町、南風原町、南に豊見城市が接している。

本市の概要は、その面積39.23^{*}㎡、総人口318,658人（2011年1月現在）を擁する県庁所在地である。県庁などが所在する泉崎、国際通り（県道39号線）周辺に企業や官公庁が集中し、活気を呈している。さらに、本市北西側では、1987（昭和62）年、「天久解放地」と称されていた米軍用地が全面返還され、「那覇新都心」として整備され発展を遂げている。

那覇市内の主な遺跡

本市における主な遺跡分布を第2図に示した。その分布は、ほぼ市内全域に点在する。近世期の遺跡は、古墓群・古窯跡・集落跡がそれぞれの地域に散在して位置している。特に、近世期の集落跡に関する発掘調査については、首里地域や壺屋地域において、その事例が増加しているものの、小緑や真和志地域では希薄の感がある。今後、範囲確認調査や分布調査などの事前調査も積極的に実施する必要がある。

字鏡水と周辺の遺跡

先の大戦直後（第4図）と平成7年頃（第3図）の地形図に本遺跡の位置を示した。かつては、直線距離で約100mほどに海岸線が迫った位置に本遺跡が所在していたことが理解できる。

以下、諸書籍等から「字鏡水」について引用してみる。

『字鏡水創立百周年記念誌』

鏡水の起源として「西原間切安室村の住人、大屋と称する人は大嶺村長山原に移住し、半農半漁の生活をしてきたが、同郷の知人で平良、新垣の一族を誘い鏡水原に居住せしめたことが字鏡水の起源である。（省略）」と紹介されている。

『沖縄大百科事典』鏡水 かがみず

「(前略) 方言は<カガンジ>。旧小緑村の西北岸に位置。戦前は鏡水大根(カガンジデークニ)の生産地として有名。1933年(昭和8)小緑海軍飛行場が建設される。戦後は米軍基地に接収され、

復帰（1972年）後は自衛隊が駐屯、那覇空港は米軍管理から運輸省の所管となる。（後略）」と紹介されている。

『角川日本地名大辞典』47沖縄

〔近代〕鏡水村 によると、「明治36～41年の村名。島尻郡小禄間切のうち。もとは小禄間切安次嶺村・儀間村の各一部。地内には仕明知行地や仕明請地が多く、仕明地を小作する人のハルヤー（自作小屋）から発達した屋取を中心とする。はじめ崎原・箕隅原にあったウンジュムイ屋取ができ、のちに鏡水屋取などができた。（後略）」とある。

同じく、かがみず 鏡水<那覇市>によると、「（前略）「ベリー訪問記」にアベイポイント（Abbey Point）と見え、「その岬は樹葉に覆われ、その先端は孤立した一群の岩石をいただき……丘陵には所々に白いものが点在していた。自分は最初それを住家と思ったが、しかしそれは石灰岩で出来た墳墓であった」と記す。」とあり、「アビーポイントの観音像」の図が『青い目が見た大琉球』に紹介されている。これが同地区内に所在する「ミースシン」と称される拝所のことであろう（那覇市歴史地図：『琉球国由来記』に、前の洞穴には、正観音、後の洞穴にはピンズルを祭ってあるという。琉球国由来記：メイノスミノ事 岩穴アリ、形ち箕ニ似タリ。故ニ、メイノスミト、云ヨシナリ。前ノ竈ニハ 正観音ノ尊像ヲ安置シ、且、寶頭藏在ス也。誰人之建立シケルヤ、不可考知。（後略））。

さて、本遺跡周辺の主な遺跡を第3図に示している。那覇港の北岸に三重グスク（近接して渡地村跡、那覇港内に御物グスク）、那覇港南岸に屋良座森グスク（近接して垣花村跡・住吉遺跡、東側丘陵にガジャンピラ丘陵遺跡・住吉遺物散布地）、南側丘陵に那崎原遺跡などが立地する。これらは、グスク時代や沖縄新石器時代前期・後期などの遺跡である。また、本遺跡が所在する陸上自衛隊那覇駐屯地内の遺跡は、鏡水名座原A遺跡・鏡水名座原B遺跡・鏡水名座原古墓群・鏡水箕隅原A遺跡・鏡水箕隅原B遺跡・鏡水箕隅原D遺跡・鏡水箕隅原E遺跡・鏡水水溜原遺跡・鏡水土砂場原A遺跡・鏡水土砂場原B遺跡など多数の遺跡が所在することが知られるようになってきた。これは、本遺跡発見の契機となった沖縄西海岸道路（那覇西道路）建設計画や陸上自衛隊那覇駐屯地内の諸開発計画に伴い「埋蔵文化財事前審査願」の提出が増加してきたためである。

第5図と第6図は、昭和期の遺跡周辺の民俗地図を示した。遺跡は集落から離れた海岸寄りに位置している。本遺跡が位置する環境は、近代期に成立・発展を遂げたと言われる「字鏡水」においては、原野あるいは畑地、後に火薬庫が建ち並ぶ空間であったことが推察される。

なお、同地域周辺における遺跡の位置と環境、歴史的背景等について『鏡水土砂場原A遺跡』発掘調査報告書にて詳述されている。参照頂きたい。

参考資料・引用文献

- ・「那覇市 位置・面積」 那覇市ホームページ
- ・『広報なは 市民の友』 第722号 那覇市 2011年（平成23年）3月
- ・『字鏡水創立百周年記念誌』 鏡水郷友会 発行 鏡水創立百周年記念事業記念誌発行部 編集 平成17年9月
- ・「思い出のわが町」<66> 字鏡水 1977年12月8日付け沖縄タイムス朝刊
- ・『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983年5月発行

- ・『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』 株式会社角川書店 昭和61年7月8日
- ・『青い目が見た大琉球』ニライ社 1987年8月1日
- ・『ペルリ提督琉球訪問記』国書刊行会（東京） 1997年7月
- ・『那覇市歴史地図—文化遺産悉皆調査報告書—』 那覇市教育委員会 1986年3月
- ・『琉球史料叢書』第二巻 東京美術 昭和四十七年四月十二日
- ・『渡地村跡』—臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告— 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成19（2007）年7月
- ・『埋蔵文化財発掘調査概要 渡地村跡』 那覇市教育委員会 2009年3月
- ・新田重清ほか「第3回米軍基地内等文化財調査報告」『昭和55年度 文化行政要覧』 沖縄県教育委員会 昭和56年3月
- ・新田重清「基地内文化財調査概要—御物域の考古学的知見—」『沖縄県立博物館紀要』 第3号 沖縄県立博物館 1977年3月
- ・『沖縄県歴史の道調査報告書—真珠道・末吉宮参詣道—』 沖縄県教育委員会 1984年3月
- ・『垣花村跡』 那覇市文化財調査報告書 第78集 那覇市教育委員会 2009年2月
- ・『住吉遺跡』 那覇市文化財調査報告書 第71集 那覇市教育委員会 2006年3月
- ・『ガジャンピラ丘陵遺跡』 那覇市文化財調査報告書 第36集 那覇市教育委員会 1997年3月
- ・『那覇市の遺跡』 那覇市文化財調査報告書 第5集 那覇市教育委員会 1982年3月
- ・高宮廣衛「那覇の考古資料」『那覇市史 資料篇』 第1巻1 那覇市役所 1968年
- ・『那覇原遺跡』 那覇市文化財調査報告書 第30集 那覇市教育委員会 1996年3月
- ・伊波かおり・北條真子「鏡水名座原A遺跡～那覇市で初めて発掘された縄文時代後期相当期の集落遺跡～」『南島考古だより』
第87号 沖縄考古学会 平成21年（2009年）12月18日
- ・伊波かおり「第Ⅱ章 遺跡の位置と環境」『鏡水土砂場原A遺跡』 那覇市教育委員会 2010（平成22）年3月
- ・『鏡水箕隅原A遺跡発掘調査現地説明会資料』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2008.11.9
- ・『平成20年度企画展 発掘調査速報展2008』「箕隅原A遺跡」 沖縄県立埋蔵文化財センター 2008（平成20）年7月29日
- ・『平成21年度企画展 発掘調査速報展2009』「鏡水箕隅原A遺跡」 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009（平成21）年7月22日

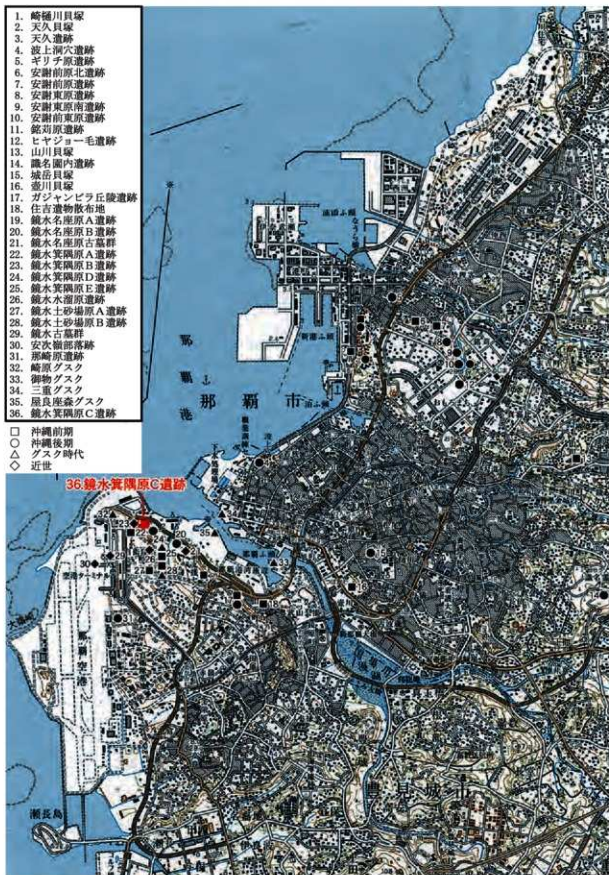


沖縄前Ⅱ期の遺跡

- | | |
|----------------------|------------------|
| 1. 屋敷地大堂原貝塚 (名護市) | 2. 仲泊遺跡 (恩納村) |
| 3. 大久保原遺跡 (読谷村) | 4. 遊真知原遺跡 (読谷村) |
| 5. 野嶺貝塚跡日地点 (高千穂町) | 6. 伊礼原C遺跡 (北谷町) |
| 7. ヤブチ洞穴遺跡 (うるま市与那城) | 8. 城間古基碑 (清原町) |
| 9. チヂチチャー洞穴遺跡 (清原市) | 10. 船越原遺跡 (読真教村) |
| 11. 新城下原第二遺跡 (宜野湾市) | 12. 鹿家湾 (南城市) |
| 13. 気懸原C遺跡 (那覇市) | |

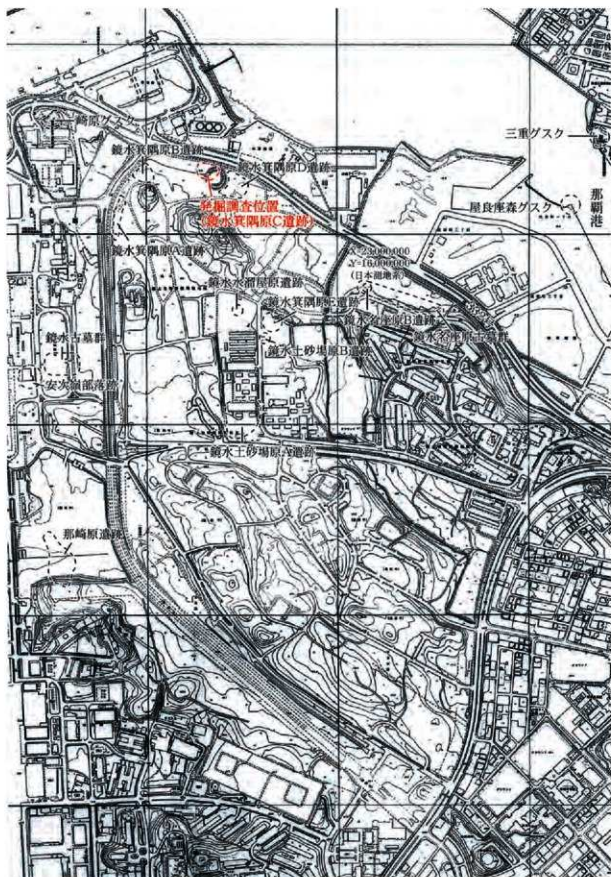


第1図 沖縄本島と那覇市の位置



第2図 那覇市内の主な遺跡

S=1:50,000



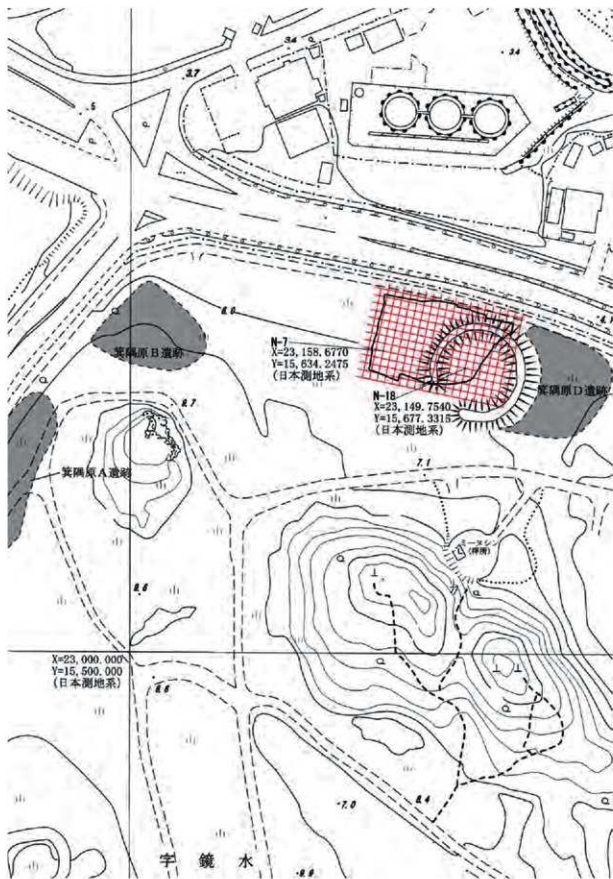
第3図 本遺跡周辺の地形と周辺の遺跡（平成7年）

(S=1:10,000)





第6図 戦前の字鏡水民俗地図 (昭和18年頃)



第7図 グリッド設定図

S=1:2,000

第三章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

本遺跡の発掘調査は、第1章でも述べたとおり、2003（平成15）年度及び2004（平成16）年度の試掘調査成果を受けて、2005（平成17）年度と2006（平成18）年度に実施された（第1表）。調査は、第1次調査（2005（平成17）年5月26日～2006（平成18）年1月10日）、第2次調査（2006（平成18）年7月3日～2007（平成19）年3月30日）と二次にわたる調査となった。

調査期間中の2005（平成17）年10月29日（土）には、調査の成果について現地説明会を実施した。

調査開始時は、梅雨の時期であったため、降雨が多く困難な作業が続いた。雨水の処理や現地の赤土防止対策には、南部国道事務所をはじめ現地工事施工業者（三善建設（株））には多大な協力と配慮を賜った。なお、雨天時には、室内作業（出土遺物洗浄作業・写真フィルム・アルバム整理作業など）も行いながら現地作業を実施した。

本遺跡の調査は、沖縄西海岸道路（那覇西道路）建設計画に伴って実施されたもので、その範囲は、当初約400㎡を予定していた。調査開始の前に、遺跡の表土剥ぎをバックホーを使用して実施した結果、約2400㎡まで遺跡の範囲が広がることが判明した。また、鏡水箕隅原D遺跡は、本遺跡と一体の遺跡となる可能性も示唆された。

一方、表土剥ぎ作業と平行しながら磁気探査作業も実施された。

発掘調査は、遺跡の短軸（略南北方向）に略北から、F・G・H・・・とアルファベットを、長軸（略東西方向）に略西から、6・7・8・・・と算用数字を付して4m×4mのグリッドを設けた（第7・9図）。グリッドは、北西隅の交点をグリッド名とし、F-6、G-7、H-8と称した。

なお、調査区内において、遺跡長軸の土層観察用アゼとして「Hグリッドライン」「Kグリッドライン」「Nグリッドライン」、短軸の土層観察用アゼとして「6グリッドライン」「9グリッドライン」「12グリッドライン」「14グリッドライン」「15グリッドライン」「18グリッドライン」に幅1mで設定した（第9図）。

以下、調査概要を業務日誌より略記する。

第1表 調査工程

年度 工程	2003年度 (平成15年度)	2004年度 (平成16年度)	2005年度 (平成17年度)	2006年度 (平成18年度)	2007年度 (平成19年度)	2008年度 (平成20年度)	2009年度 (平成21年度)	2010年度 (平成22年度)
試掘調査		→						
本発掘調査			→	→				
資料整理				→	→	→	→	
報告書作成								→

第一次調査

2005（平成17）年度

発掘調査の開始前には、仮設事務所設置、発掘調査道具類の確認作業などを行いながら、現地での諸調整を行った。

5月26日（木）晴れ

バックホーによる表土剥ぎ作業を開始する。磁気探査を合わせて作業していくこととする。

31日（火）晴れ時々曇り

発掘調査道具を仮設事務所に搬入する。

6月6日（月）晴れ

グリッド設定作業及び手作業による遺物包含層の精査作業を開始する。爪形文土器が採取される。

7日（火）晴れ

遺跡の全体図作成のため、平板測量を実施する。

9日（木）晴れ

J-7・8・9グリッド、I-9グリッド掘り下げ作業を開始する。

14日（火）雨

現地作業を開始するも雨が強まったため、室内作業とする。

16日（木）雨

現地の赤土防止対策について関係部局と調整を行う。以後、7月5日まで現地作業を休止して室内作業を行う。

7月6日（水）晴れ

現地作業を再開する。N-7・8・9・10グリッドの掘り下げ作業を実施。

8日（金）晴れ

N-8グリッド（北側トレンチ）にて銀跡と見られる遺構が確認される。

11日（月）晴れ

バックホーによる表土剥ぎ作業をほぼ終了する。

15日（金）晴れ

台風接近のため、土のう袋作りなどの対策を講じる。

8月8日（月）晴れ

作業状況の写真撮影を行う。

16日（火）晴れ

N・O・P-5・6・7グリッド土層堆積状況の写真撮影を行う。

17日（水）晴れ

発掘調査実習生として興南高校生（一名）が8月26日まで参加した。

26日（金）晴れ

N・O・P-5・6グリッド土坑（ビット）半裁作業及び断面写真撮影作業を行う。

29日（月）曇り

O-5・6・7、P-6・7グリッド検出遺構を完掘する。作業状況の写真撮影を合わせて行う。

9月1日（木）曇り後晴れ

N・P-5・6グリッド検出の土坑（ビット）平面実測作業を実施。

- 2日(金) 晴れ
N～P-5～9グリッド検出遺構の完掘状況写真撮影を行う。
- 5日(月) 雨
雨天のため、室内作業(出土遺物洗浄作業、図面整理など)を行う。
- 14日(水) 晴れ
I-9グリッドにて出土した石器(石鏃)の写真撮影を行う。
- 21日(水) 晴れ
J-8・9グリッドの出土遺物について、実測(平面・標高値を記入)を行う。
- 10月3日(月) 晴れ
G-9グリッド東壁・南壁土層観察アゼ実測作業を行う。
- 7日(金) 晴れ
H～K-7～10グリッドのⅡe層にて検出の貝塚について写真撮影を実施。
- 19日(水) 晴れ
K-7グリッドⅡe層の貝塚に伴う遺物の取り上げ作業を行う。
- 29日(土) 晴れ
午前10:30と午後14:30の二回、現地説明会を実施した。
- 11月1日(火) 晴れ
道路建設工事と発掘調査の工程について、南部国道事務所との調整会議を行う。
- 9日(水) 曇り
H-10、I-9、J-8・9、K-7グリッドⅡe層検出貝塚に伴う遺物の取り上げ作業を行う。
- 15日(火) 曇り
作業状況の写真撮影を行う。
- 30日(水) 晴れ
K・L-7グリッドについてデジタルカメラ測量の試行を行う。
- 12月9日(金) 曇り
遺跡全体撮影を行う。
- 14日(水) 曇り
K-6グリッドⅡf層のサンプリングを行う。
- 15日(木) 曇り
I-9(土器)、J-7(土器)、L-7(石器:石斧)、M-7(土器底部)、P-10(石器)グリッド出土遺物の写真撮影を行う。
- 21日(水) 雨
雨天のため室内作業を実施。
- 28日(水) 晴れ
K-6グリッドⅡe層検出の炉跡について焼土と灰のサンプリングを行う。
- 2006(平成18)年
- 1月4日(水) 晴れ
J・K-6グリッドの土層観察用アゼの掘り下げ作業を行う。

5日(木) 雨

室内作業を行う。

6日(金) 曇り

K-6グリッド検出の炉跡№2よりサンプル土を採集する。

10日(火) 晴れ時々曇り

I・J-8グリッドについて、バックホーを使用して深掘を行い、最下層の状況を確認して第一次調査を終了する。

その後、3月31日までの期間において出土資料の確認・整理作業などを実施した。

第二次調査

2006(平成18)年度

昨年度に実施した出土遺物、作成図面、撮影写真の整理・確認作業を行いながら、本年度の調査工程の調整や磁気探査作業、仮設事務所の設置などの諸準備作業を行って現地調査に備えた。

7月3日(月) 晴れ

第二次調査を開始する。グリッド杭の確認作業を行う。

5日(水) 晴れ

南部国道事務所、工事施工業者との調整を行う。L・M-8・9グリッドII d層上面にて溝状の遺構を確認する。

7日(金) 曇り

台風接近のため、現地対策を施す。

12日(水) 晴れ

工事工程との調整により、H-15~17グリッドの掘り下げ作業を主体とする。

13日(木) 曇り

台風の影響が開始する。

18日(火) 晴れ

工事施工中に礎石を発見する。

8月2日(水) 晴れ

H-16グリッドにて近代以降の所産考えられる石囲い遺構を完掘する。

8日(火) 晴れ

J・K・L-16グリッドII d層の掘り下げ作業を継続する。作業状況の写真撮影。

9日(水) 曇り

台風の影響が開始する。

11日(金) 晴れ

H-O-8~13グリッドにて検出された溝状遺構の写真撮影を実施。

14日(月) 晴れ

K~M-8・9グリッド溝状遺構の断面図作成作業を行う。

18日(金) 曇り

M-8グリッド、II c層・II d層の掘り下げ作業終了。赤土が露出する。

- 28日(月) 晴れ
遺跡内に仮置きしていた残土の処理作業を行う。
- 9月5日(火) 曇り
G-16グリッド掘り下げ作業終了。地山検出。
- 6日(水) 曇り
K-8~12グリッド掘り下げ作業をほぼ終了する。地山が露出する。
- 15日(金) 晴れ
I-14、L-10・14、M-10~12・14グリッドの主にII d層の掘り下げ作業を行う。
- 27日(水) 曇り
各グリッドの作業状況について写真撮影を行う。
- 10月10日(火) 晴れ
H~J-13グリッド西側壁、H~J-15グリッド東側アゼの断面実測作業を行う。
- 13日(金) 晴れ
H・I-15グリッド出土遺物(土器・石器)の出土ポイント詳細図作成を行う。
- 26日(木) 曇り
国際縄文学協会のメンバーが現地視察に訪れる。
- 11月1日(水) 雨
雨天のため、室内作業(出土遺物洗浄作業)を行う。
- 2日(木) 晴れ
K~M-14グリッド西側アゼ、K-13グリッド北側アゼ、K・L-13グリッド東壁、M-16グリッド南壁の断面実測作業を行う。
- 7日(火) 晴れ
K・L-8グリッド西アゼの掘り下げ作業を行う。
- 10日(金) 晴れ
J-17グリッドにてデジタルカメラによる作図の試行のための測量作業を実施する。
- 24日(金) 晴れ
N-8・9、O-9グリッドの遺構面精査作業を行って、土坑(ピット)の確認、掘り下げ、平面図作成作業を実施する。
- 29日(水) 曇り
各グリッドに設定していた土層観察用アゼの掘り下げ作業を行う。
- 12月4日(月) 曇り時々晴れ
K-16~18グリッド出土の遺物について、出土ポイント詳細図を作成する。
- 5日(火) 晴れ時々曇り
M-13グリッド南壁における土層堆積状況の写真撮影を行う。
- 7日(木) 曇り後雨
J-9グリッド南壁における土壌サンプル採取後の写真撮影を行う。
- 11日(月) 曇り
L-14グリッド西アゼのII d層(粘土質)より黒曜石が出土した。

13日（水）晴れ後曇り

K-8、L-8・9、M-8・9、N-9グリッド検出の土坑（ピット）について半裁状態で土色の観察を行う。各土坑（ピット）によって色調が異なることから時期差が考慮された。

20日（水）晴れ時々曇り

K・M-8、N-8・9グリッド検出の土坑（ピット）を完掘する。

28日（木）曇り時々晴れ

各グリッド検出の土坑（ピット）について完掘作業、平面実測作業、写真撮影作業などを行う。

2007（平成19）年

1月4日（木）曇り時々雨

午前中は雨天のため、室内作業を行い午後より現地を調査開始する。

22日（月）曇り

G-21グリッド東アゼ、G-22北壁断面実測作業を行う。

24日（水）曇り

G～I-19～22グリッド周辺についてコンター図を作成する。

26日（金）晴れ

遺跡の全体撮影を行う。その際、高所作業車を使用した。

31日（水）晴れ

二回目の遺跡全体撮影を行う。その際、再度高所作業車を利用した。

2月5日（月）晴れ

L-12・13、M-12・15、N-11・14・15、O-14・15グリッド検出の土坑（ピット）について、覆土の色調観察、深さ、長軸、短軸の計測作業を行う。

6日（火）晴れ

H・I-17グリッドⅡd層検出の貝塚の取り上げ作業を行う。

14日（水）雨

雨天のため、室内作業を行う。

28日（水）晴れ

H-14グリッド白砂層の掘り下げ作業を行う。

3月1日（木）晴れ

H-13～15グリッド白砂層の掘り下げ作業を行う。

5日（月）雨

H-14グリッド白砂層より条痕文様を有する土器が多数出土する。

7日（水）曇り

H-13グリッド東側トレンチにて土層の堆積状況を観察する。赤土の地山に移行する際、黒色を帯びる土層となる。Ⅱf層と対応しそうな様相を呈している。

13日（火）雨時々曇り

丑野先生（東京国際大学）による調査指導を仮設事務所にて賜る。

16日（金）曇り

H-11グリッド白砂層・Ⅱe層掘り下げ後、Ⅱf層の掘り下げ作業を行う。爪形文土器が出土する。

19日（月）雨時々曇り

沖縄大学生が遺跡の見学を行う。

28日（水）晴れ時々曇り

H-10～13グリッド北側アゼについて断面実測を終了する。

29日（木）曇り

バックホーを使用してI-11～13グリッドの深掘りを実施する。遺物の採集が可能か確認を行った。

30日（金）晴れ

遺跡内の整理・確認、仮設事務所内の片付けを行う。調査道具類の撤収を行い、本遺跡の現地調査をすべて終了した。

なお、資料整理及び報告書作成は、2006（平成18）年度から2010（平成22）年度までの期間で実施した。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下のとおりである。

(1) 調査組織

事業主体	那覇市教育委員会	教育長	仲田美加子（平成17年度）
〃	〃	教育長	桃原 致上（平成18～21年度）
〃	〃	教育長	城間 幹子（平成22年度）
事業所管	文化財課	課 長	古塚 達朗（平成15～22年度）
調査総括	文化財課	副参事	島 弘（平成19～22年度）
調査事務	文化財課	主 幹	大城 伸雄（平成17年度）
〃	〃	主 幹	島 弘（平成18年度）
〃	〃	主 幹	田端 睦子（平成20年度）
〃	〃	主 幹	内間 靖（平成21・22年度）
〃	〃	主 査	島 弘（平成17年度）
〃	〃	主 査	田端 睦子（平成18・19年度）
〃	〃	主任主事	池間 孝子（平成17年度）
〃	〃	主任主事	赤嶺 増美（平成18・19年度）
〃	〃	主任主事	仲宗根 健（平成21・22年度）
〃	〃	主 事	新里真知子（平成20年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	長田まり子（平成17年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	本浜 美希（平成18年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	島袋由美子（平成19年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	長谷川さゆり（平成20・21年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	金城 栄子（平成21年度）
調査員	文化財課	副参事	島 弘
〃	〃	主 幹	内間 靖
〃	〃	専門員主査	玉城 安明
〃	〃	専門員主査	北條 真子
〃	〃	主任専門員	仲宗根 啓
〃	〃	主任専門員	樋口 麻子
〃	〃	主任専門員	當銘 由嗣
〃	〃	専 門 員	知念 政樹

調査員	文化財課	発掘調査補助員(臨時職員)	栗山 初美
	"	発掘調査補助員(臨時職員)	山里 千春
	"	発掘調査補助員(臨時職員)	比嘉 君子
	"	発掘調査補助員(臨時職員)	請盛 智秋
	"	発掘調査補助員(臨時職員)	本村麻里衣
	"	発掘調査補助員(臨時職員)	慶田 秀美
	"	発掘調査補助員(臨時職員)	山下真利子
	"	発掘調査補助員(臨時職員)	運天 綾
	"	発掘調査補助員(臨時職員)	尾木 綾
	"	発掘調査補助員(臨時職員)	大城 弘子

(2) 発掘調査(第1次:平成17年度)

調査補助員

本村麻里衣 具志尚樹

発掘調査作業員

嘉数すみ子 翁長しのぶ 山城千夏 西銘須磨子 玉城初美 松長謙輔 喜瀬彰 仲木さゆり

赤嶺智規 安里勝則 玉城弘美 砂辺理恵 上江洲由昇 山城嘉勝 中塚末子 當眞哲 親川まゆみ

平安名哲子 浦崎美知子 知花智子 具志堅良子 仲間美佐子 當眞祐樹 玉城久美 崎濱悠貴

世話人

宮城かの子 我如古育子

(3) 発掘調査(第2次:平成18年度)

調査指導員

山里千春 栗山初美 比嘉君子

資料整理員

請盛智秋

調査補助員

喜瀬彰

発掘調査作業員

比嘉千賀子 中塚末子 桃原佐恵美 山城嘉勝 宮国恵子 樋口光子 砂辺理恵 瑞慶覽繁美

知花智子 泉谷壘 玉寄みつえ 佐渡山正子 平安名哲子 比嘉洋子 上江洲由昇 浦添美知子

我我フジ子 石垣浩充 玉城初美 根間俊光 安里勝則 翁長しのぶ 仲木さゆり 西銘須磨子

世話人

我如古育子 仲間美佐子

(4) 資料整理

平成18年度（洗浄、分類など）

山里千春 栗山初美 比嘉君子 請盛智秋 喜瀬彰

平成19年度（洗浄、ナンバーリング、分類、集計、実測など）

比嘉君子 大城弘子 宮城かの子 尾木綾 請盛智秋 真栄城和美 西銘定子 山下真利子
平井麻香 津波あずさ 金城いずみ 具志良子 比嘉由紀乃 親泊育子 仲宗根美奈子 喜瀬リサ
上江洲由昇 我如古育子 中塚末子 砂辺理恵 比嘉洋子 泉谷暎 島千香子

平成20年度（コンテナ整理、サンプリング土洗浄、分類、接合など）

比嘉君子 慶田秀美 宮城かの子 大城弘子 請盛智秋 真栄城和美 金城薫 運天綾 平井麻香
平良明子 山下美也子 泉谷暎 城間邦子

平成21年度（遺物集計、実測、トレース、挿図版作成、遺物写真撮影、図版作成など）

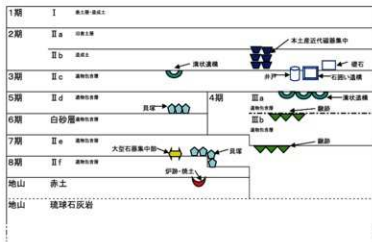
比嘉君子 大城弘子 伊波かおり 阿部直子 尾木綾 請盛智秋 真栄城和美 金城薫 運天綾
平良明子 山下美也子

第IV章 層序

本遺跡の層序（第8・10図 巻首図版3 図版3・4）は、大きく12枚の土層に大別した。分層にあたっては、『標準土色帖』及び視覚的に色調の違いや、包含する遺物等の多少、しまり具合の違いなどによって細分した。

遺跡の時期は、層序全体の様相から第8図に示したとおり8期に分けられる。概念的に略記してみると以下のとおりである。

- 1期（Ⅰ層 戦後の造成土）
- 2期（Ⅱa層・Ⅱb層 近代期における表土層及び造成土）
- 3期（Ⅱc層 近世の遺物包含層）
- 4期（Ⅲa層・Ⅲb層 グスク時代遺構の遺物包含層）
- 5期（Ⅱd層 沖縄新石器時代後期：弥生時代～平安時代並行期）
- 6期（白砂層 沖縄新石器時代前Ⅳ期：縄文時代前～中期相当期）
- 7期（Ⅱe層 沖縄新石器時代前Ⅲ期：縄文時代前～中期相当期）
- 8期（Ⅱf層 沖縄新石器時代前Ⅱ期：縄文時代早～前期相当期）



第8図 土層堆積模式図

第10図にJ-5～20グリッド南側壁及びF～O-13グリッド東側壁の断面状況を代表的な層として図示した。

以下、各層の特徴を略記する。

第Ⅰ層 盛土（攪乱）

層厚は、10～40cm前後を確認した。

第Ⅱ層

a 旧表土層

層厚は、10～30cm前後を測る。

b 明茶褐色土層（間層的な様相を呈する）

本土産磁器がまとまった状態で検出されている。また、井戸跡、礎石、石囲い遺構など近代期と考えられる遺構の検出も見られた。層厚は約20cmを測る。

c 褐色（10YR 4/6）

砂質でしまりがある。貝類、中国産磁器、土器などが混入する。溝状遺構⑦は本層を掘り込む。層厚は約10～65cmを測る。溝状遺構が検出されている。放射性炭素年代測定結果は、190±30、280±30 B Pであった（補正年代 附篇4参照）。

d 暗褐色（10YR 3/4）

砂質でしまりがある。貝類が多数含まれる。層厚は約30cm前後を測る。

d層下部 暗褐色（10YR 3/3）

上層より色調がやや暗くなる。しまりがある。層厚は約25cm前後を測る。放射性炭素年代測定結果は、1,490±30 B Pであった（補正年代 附篇3参照）。

d層粘土質 暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）

砂が若干混入し、しまりがある。貝類が若干含まれる。層厚は15cm前後を測る。放射性炭素年代測定結果は、1,440±30 B Pであった（補正年代 附篇2参照）。

Ⅱd層全体では、土器（主に沖縄新石器時代後期）、石器の出土とともに貝塚を形成し、貝溜り遺構が多数検出されている。

e 褐色土層（7.5YR 4/6）

粘土質でしまりがある。砂が多量に混入し乾燥するとヒビ割れが著しい。ハイガイの混入が多量に見られる。層厚は、約60cm～200cmを測る。本層は、大型貝の集中した貝塚が形成される。調査区南側では、一見、地山の赤土層と見られた層準にも石器（大型石器）・石材片や土器片（主に沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）などが混入しており、ある時期にかなりの攪乱（Ⅱe層の時期）を受けたことが示唆された。放射性炭素年代測定結果は、1,360±20、2,470±30、1,690±40（粘土質）、1,310±30・1,350±30（地山＝赤土混土） B Pであった（補正年代 附篇2・3・6参照）。

f 暗褐色（10YR 3/4）

黒味を帯びる層。土器（主に沖縄新石器時代前Ⅱ期）、石器、獣骨、貝類などを含む。K-6

グリッド周辺において安定的な堆積状況を示していた。その堆積は、標高約3.3m～3.4mで約10cmほどの厚さであった。放射性炭素年代測定結果は、6,110±40、6,040±40、6,360±40 BPであった（補正年代 附篇1・3・7参照）。

第Ⅲ層

a 暗茶色土層

粘土質で茶色を帯びる。層厚は5～10cm前後を測る。放射性炭素年代測定結果は、370±20 BPであった（補正年代 附篇6参照）。

b 黒褐色土層

粘土質で黒味を帯びる。中国産青花が出土している。本層上面で鍛跡が確認できる。層厚は15cm前後を測る。放射性炭素年代測定結果は、2,080±30 BPであった（補正年代 附篇6参照）。

b層下部 黒色土層

上層より粘性が強くなり、焼土、炭が多量に混入する。土器、石器などが混入する。層厚は約10cmを測る。

Ⅲ層では、鍛跡、土坑（ピット）と見られる遺構が検出されている。

白砂層 黄褐色（10YR 5/6）

砂質でしまりがある。土器（主に沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）、サンゴつぶてなどが多量に含まれる。下部がやや黄色味を帯びる。層厚は約50～100cmを測る。放射性炭素年代測定の結果は、340±30、2,420±40 BPであった（補正年代 附篇4参照）。

地山 赤土

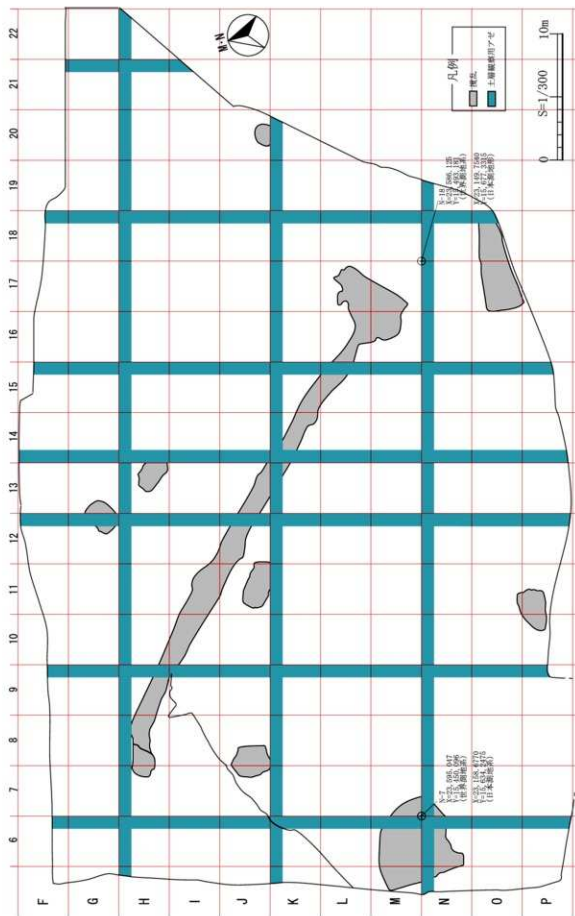
調査区の東側で標高約4.8m、西側で標高約3.3mで露出した。しかし、遺跡の中心から南側では、Ⅱe層がかなり深く掘り込んだ状況で琉球石灰岩直上まで堆積していた。

地山 琉球石灰岩

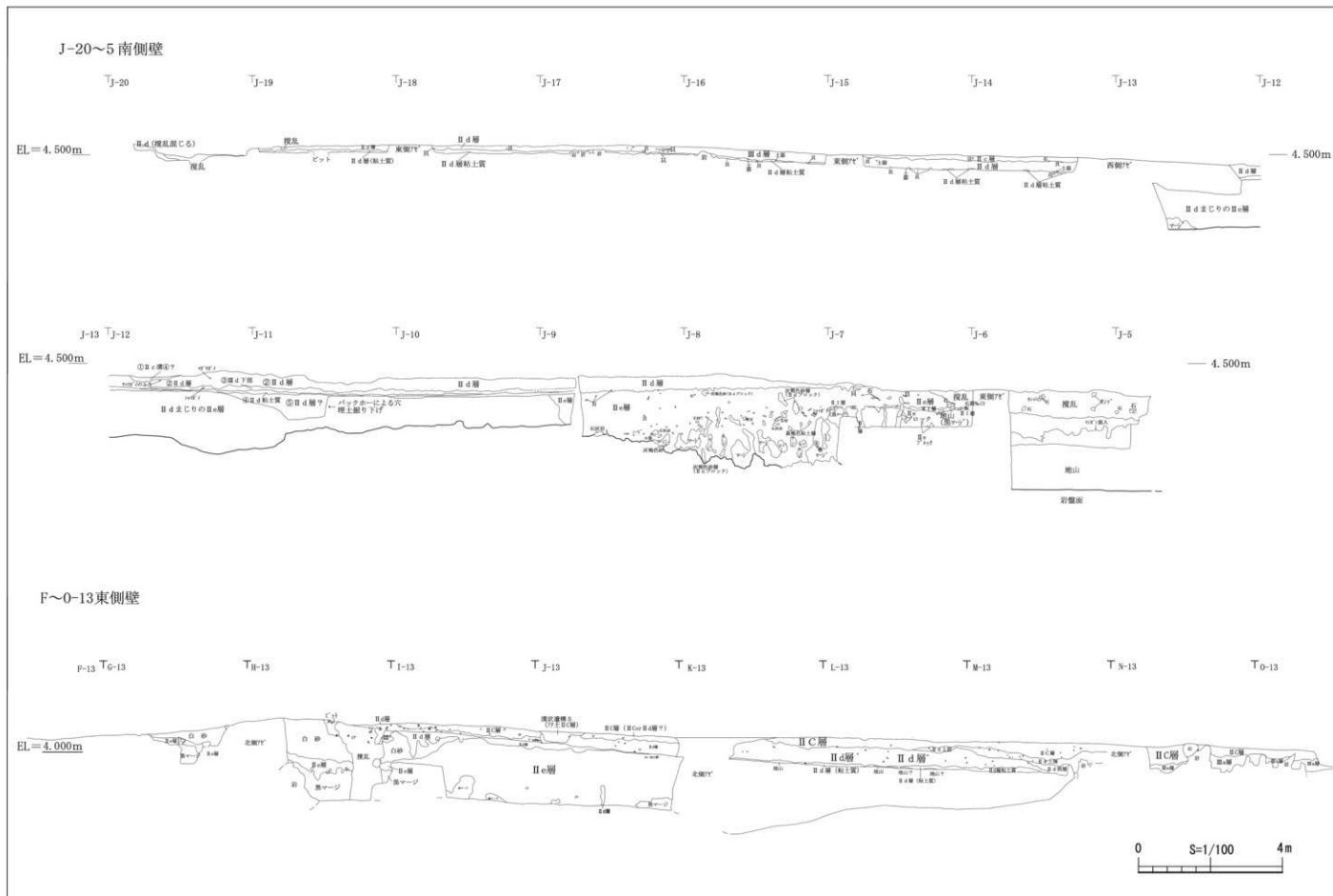
琉球石灰岩の露頭が、調査区の東側と南側の一角に見られる。本遺跡の最下層の地山を成す。

参考文献

『新版 標準土色帖 1997年版』 農林水産省農林水産技術会事務局 監修 財団法人 日本色彩研究所 色票監修



第9図 グリッド及び土層観測用アゼ設定図



第10図 土層断面図

第V章 遺構

本遺跡より検出された遺構は、井戸跡、石囲い遺構、礎石、本土産磁器集中部（近代）・溝状遺構（近世）・土坑（ピット）、鉋跡（グスク時代以降）・貝塚、貝溜り遺構（沖縄新石器時代後期）・貝塚、大型石器集中部（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）・焼土遺構（沖縄新石器時代前Ⅱ期）など多様な様相を呈している。

以下、第IV章で示した時期別（8～2期）に遺構の概略を記す。

第1節 沖縄新石器時代前Ⅱ期（8期）の遺構

本期の遺物は、調査区の北東側（F-13グリッド）から南西側（K-6グリッド）にかけて分布する状況が見て取れる（第11図 図版5）。その軸は、略東西に延びるように見える。

本期の遺構としては、焼土遺構で5基が確認されており、調査区北西側（J-8グリッド、K-6・7グリッド）に集中する。特にK-6・7グリッドで検出された焼土遺構の周辺からは、獣骨（イノシシ）の頸骨がまとまって出土している。焼土遺構と獣骨の共存出土事例として捉えることが可能と考えられた。他遺跡での類似資料の増加に期待したい。

焼土遺構No.1（巻首図版3 図版5）

J-8グリッドで検出された。平面形は、卵形の楕円形を呈する（長軸58cm、短軸52cmを測る）。遺構の北西側一部が攪乱によって欠損する。深さは4cm程度と浅い。遺構確認面は、標高3.36m付近である。地山（赤土）上で検出された。本遺構は、放射性炭素年代の分析結果（5,860±30 B.P. 補正年代 附篇7参照）から第6・7期（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）の所属の可能性も示唆される。

焼土遺構No.2（巻首図版3 図版5）

J-8グリッドで検出された。平面形は、不定形（長軸32cm、短軸28cmを測る）。深さは2cm程度と浅い。遺構確認面は、標高3.36m付近である。地山（赤土）上で検出された。

焼土遺構No.3

J-8グリッドで検出された。平面形は、卵形の楕円形を呈する（長軸62cm、短軸50cmを測る）。遺構の東側が一部攪乱によって欠損する。

焼土遺構No.4

J-8グリッドで検出された。平面形は、不定形（長軸60cm、短軸30cmを測る）。遺構の西側が一部攪乱によって欠損する。

焼土遺構No.5

K-6グリッドで検出された。平面形は、卵形の楕円形を呈する（長軸54cm、短軸50cmを測る）。

焼土遺構No.6

K-6グリッドで検出された。平面形は、長軸108cmを測る円形あるいは楕円形と見られるが遺構西側が欠損するため判然としない。深さは10cm程度でII f層が覆土となる。遺構確認面は標高約3.3m付近である。地山（赤土上部に黒色のすじが観察される。マンガンの混入の影響が考えられる）上で検出された。遺構内から爪形文土器が2点出土している（標高3.276m、3.272m）。本遺構の放射性炭素年代の分析結果は、 $6,360 \pm 40$ BPであった（補正年代 附篇7参照）

焼土遺構No.7

K-7グリッドで検出された。平面形は、ほぼ円形を呈する（直径58cmを測る）。遺構検出面は、標高約3.3~3.4m付近である。

焼土遺構No.8

K-7グリッドで検出された。平面形は、隅丸方形を呈する（長軸65cm、短軸55cmを測る）。石器2点（石斧、石器片）が遺構の縁に伴って出土している（標高3.350m、3.358m）。

第2節 沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期（6・7期）の遺構

本期の遺物は、調査区の北東側（F-13グリッド）から南西側（M-7グリッド）にかけて分布する状況が見て取れる（第12図 図版6～9）。その軸は、略東西に延びるように見える。沖縄新石器時代前Ⅲ期と捉えられる土器群は特に調査区北西側（I-9グリッド、J-8グリッド周辺）で得られる傾向にあった。沖縄新石器時代前Ⅳ期と捉えられる土器群は、調査区北側（H-11～14グリッド）で出土する傾向にあった。

本期の遺構としては、大型の貝類で形成された貝塚、大型の石器が3点まとまって確認された大型石器集中部が確認されている。

貝塚（図版6）

J-8グリッド周辺で確認された。調査区の北東（I-9グリッド）から南西側（K-7グリッド）に広がりを持ち、その軸は、略東西に延びるように見える。貝塚を形成する遺物は、大型の貝類（ハイガイ、シャコガイ、サラサバテイ、カキ、クモガイなど）や土器片、石器片、軽石などが北西側から南東側にかけて傾斜して堆積している。標高は、3.6m～2.6m付近に位置する。遺構の縁辺部では、II f層を切る状況が確認された。

大型石器集中部（第23・28図 図版8 図版33・38）

G-13グリッドで検出された。3点の大型石器が標高約4.1mのII e層より得られたものである。検出時は、埋納遺構の可能性も想起されたが確証を得るまでには至らなかった。

第3節 沖縄新石器時代後期（5期）の遺構

本期の遺物は、調査区の東側にかけて密に分布する状況が見て取れる（第13図 図版10～13）。本期の遺構としては、小型の貝類で形成される貝塚、その範囲の中に楕円形や不定形に掘り込まれた貝溜り遺構が確認されている。

貝塚（図版10）

貝塚の範囲は、調査区の北側はHグリッドライン（H-13～16グリッド）、南側はM-16グリッド、西側はI-12グリッド、東側はJ-19グリッドに広がりを見せる。貝塚の広がり軸は南北に延びるように見える。

貝塚を構成する遺物は、小型の貝類や土器片、石器片、北側から南側にかけて緩やかに傾斜して堆積している。標高は、3.6m～2.6m付近に位置する。貝塚の南側では、琉球石灰岩の地山にその堆積が確認されている。

貝溜り（図版10・11）

貝溜り遺構は、貝塚の内側で少なくとも11箇所確認された。その分布をグリッド別にみると、I-13グリッドで1箇所、J-13グリッドで2箇所、K-14グリッドで1箇所、I-17グリッドで2箇所、I-18グリッドで4箇所、L-18グリッドで1箇所である。貝塚の縁辺部に沿った状況でその分布が認められる状況にある。遺構の多くは、不定形な平面形を呈し、ごく浅い掘り込み内に貝類などが集まった状況を呈していた。

なお、その他に、主に獣骨が集中する箇所も幾つか認められる（I・J-15グリッド）。また、K-15グリッドでは、ヤドカリ（?）の遺殻が50～60cmほどの範囲に集中する箇所も確認された（図版11）。

第4節 グスク時代以降（4期）の遺構

本期の遺構は、調査区の南西側で密に分布する状況が見て取れる（第14・15図 図版14～17）。一見すると、3期の遺構の分布と重なる様相も見て取れる。

本期の遺構としては、略三角形を呈する「鋳跡」、円形・楕円形・不定形の土坑（ピット）が確認されている。

遺構の確認面としては、Ⅱe層及びⅢb層上面で検出されている

鋳跡（図版16）

鋳跡は、調査区内に散在して認められる（第14図）。調査区中央側（K・L-8・9グリッド）や調査区東側（J-12、K-13グリッド）で散在し、南西側隅（O・P-6・7グリッド付近）に密に分布する傾向にある（第15図）。

平面形は、主に略三角形を呈する。直線側の長さは、6～8cm。深さは3cm前後のものが多い。遺構短軸半截時の断面形は「V」字状となる。

土坑（ピット）（図版14）

土坑（ピット）は、調査区の南西側で密に分布する。平面形は円形・楕円形・不定形と様々な様相を呈する。また、遺構の覆土は、その色調からⅢ層およびⅡd層の堆積が認められ、時期差が想定できる。ただし、明確なプランを想定することはできなかった。

また、遺構の中には、覆土（Ⅲ層およびⅡd層）の内側に円形（直径5～8cm）の砂の混入が認められるものがあつた（図版16）。調査時には、小動物による攪乱として判断した。他遺跡での類例の増加を待ちたい。

第5節 近世（3期）の遺構

本期の遺構としては、溝状遺構が7基確認されている。溝状遺構は、調査区のほぼ中央付近で東西南北にほぼ沿った状況で確認されている（第16図）。このことから、遺構を構築する際には、ある程度方位が想定されていたものと推察できる。

遺構の確認面としては、Ⅱc及びⅡd層面で検出されている。

溝状遺構①（図版18）

K・L-8グリッドからK-13グリッドに所在し、ほぼ西側（標高約4.16m）から東側（標高約4.02m）に緩やかに傾斜する遺構である。遺構東側では、溝状遺構⑥と合流する。遺構の長さは、約20m、幅は約1.4～2.4m、深さは約12～30cmである。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込み、覆土は基本的にⅡc層であるが、黄褐色砂層、黒褐色砂層、茶褐色砂層の3枚が確認された。

溝状遺構②（図版18）

L-9グリッドからK-13グリッドに所在し、ほぼ西側（標高約4.14m）から東側（標高約4.12m）に緩やかに傾斜する遺構である。遺構東側では、溝状遺構⑥と合流する。遺構の長さは、約16m、幅は約40～60cm、深さは約15cm前後である。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込んでⅡc層が覆土となる。

溝状遺構③（図版18）

L・M-8グリッドからL-13グリッドに所在し、ほぼ西側（標高約4.18m）から東側（標高約4.12m）に緩やかに傾斜する遺構である。遺構東側では、溝状遺構⑥と合流する。遺構の長さは、約20m、幅は約1.2～2.4m、深さは約32cm前後である。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込み、覆土は基本的にⅡc層であるが、黄褐色砂層、茶褐色砂層、黒褐色砂層、赤褐色砂層の4枚が確認された。

溝状遺構④

J-11グリッドからJ-13グリッドに所在し、ほぼ西側から東側に緩やかに傾斜する遺構である。標高約4.16m。遺構東側では、溝状遺構⑥と合流する。一部攪乱によって切られる。遺構の長さは、約5.4m、幅は約1m、深さは約12cm前後である。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込んでⅡc層が覆土となる。

溝状遺構⑤（図版19）

J-18グリッドからJ-13グリッドに所在し、ほぼ東側（標高約4.5～4.9m）から西側（標高4.352m）に緩やかに傾斜する遺構である。遺構西側で溝状遺構⑥と合流する。遺構の長さは約20m、幅は1m前後、深さは約30cm前後である。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込んでⅡc層が覆土となる。

溝状遺構⑥（図版19）

I-13グリッドからO-13グリッドに所在する。I-13グリッドでは、東側から西側に2.8mほど傾斜して南側にほぼ直角に折れる。平面形は「L」字状となる。遺構の全体としては、ほぼ北側（標高約4.56m）から南側（標高約4.2m）に傾斜する遺構である。遺構東側では、溝状遺構⑤、西側で溝状遺構①、②、③、④と合流する。一部攪乱によって切られる。遺構の長さは、約23m、幅は約0.6～1m、

深さは約20～100cmである。遺構確認面は、Ⅱ d層を掘り込み、覆土は基本的にⅡ c層であるが黄褐色の砂層の堆積が確認できた。

溝状遺構⑦

〇-7グリッドからN-11グリッドに所在し、ほぼ東側から西側に緩やかに傾斜する遺構である。標高約4.32m。遺構西側で、その掘り込みが不明瞭となる。遺構の長さは約15m、幅は1m前後、深さは約5cm前後である。遺構確認面は、Ⅱ c層を掘り込んでおりⅡ b層が覆土となる。遺構の縁は、鋸歯状を呈する。これは、遺構縁辺部に工具痕（鋸跡）と見られる略三角形の掘り方が観察できるためであった。

第6節 近代（2期）の遺構

本期の遺構としては、礎石、井戸跡、石囲い遺構などの建物跡に関連すると考えられる遺構と本土産近代磁器の集中部が確認されている。

礎石、井戸跡、石囲い遺構などの建物跡に関連すると考えられる遺構は、比較的近い位置関係（調査区の北東側 H-16・17・18グリッド）を示しており、何かしらの建物が建っていた可能性が示唆される。ただし、第5図の民俗地図（昭和期）には、対応しそうな印は見当たらない。第6図の民俗地図（昭和18年頃）には、火薬庫が隣接して建ち並ぶ様子が見て取れる。

一方、本土産近代磁器集中部は、調査区中央南西側で検出されている。

井戸跡

H-17グリッドの標高5.0mで検出された。平面形はほぼ円形を呈する。確認した深さは、約80cmほどで琉球石灰岩を掘り込んでいる。調査時間の都合上、完掘するには至らなかった。

石囲い遺構（図版20）

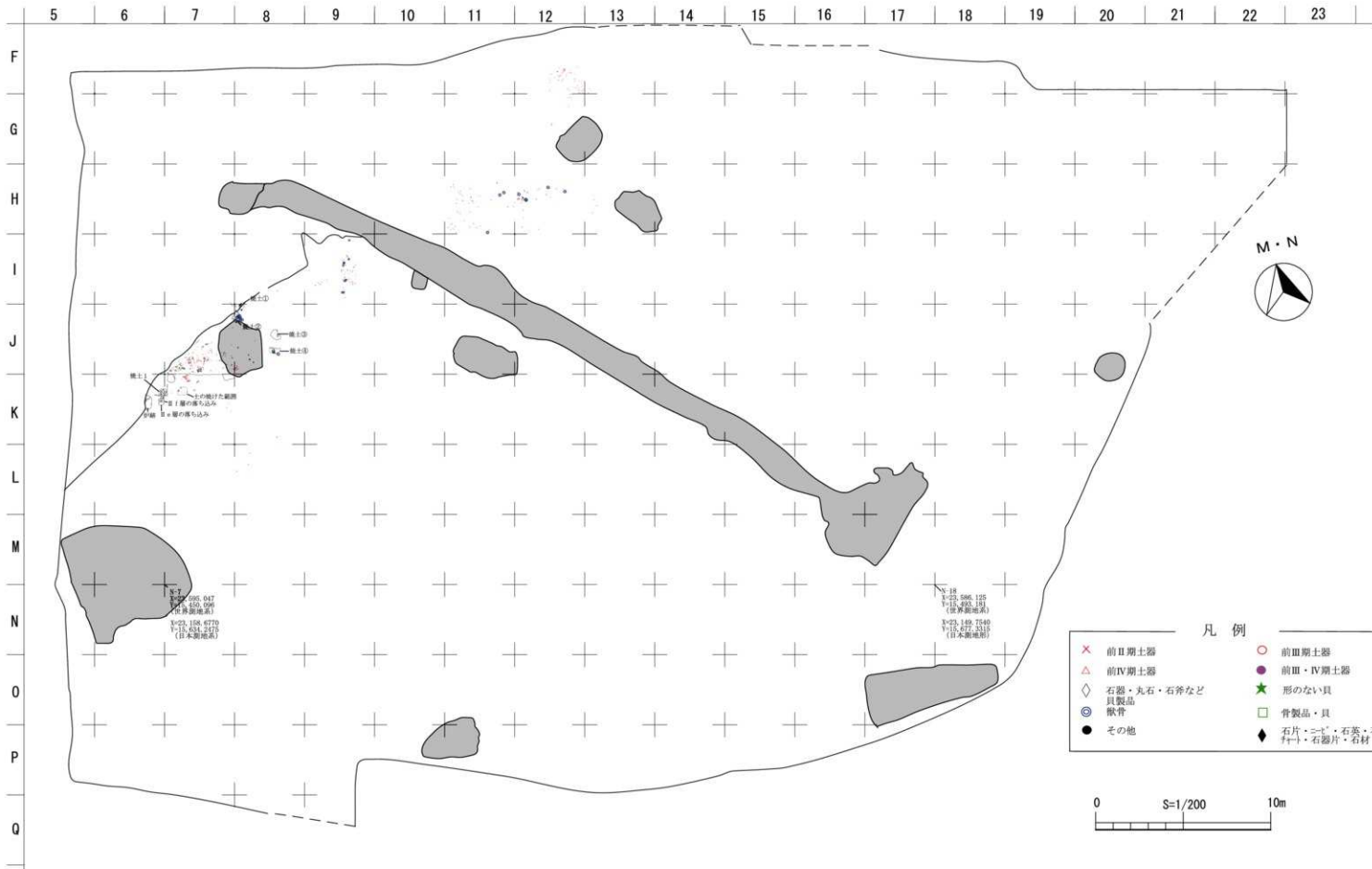
H-16グリッドの標高約5.04m付近で検出された。平面形は、長軸約150cm、短軸約110cmを測る長方形を呈する。琉球石灰岩を使用して囲いを形成し、その周りには一回り大き目の不定形な掘り方も確認できた。深さは、約22.5cmと浅い。琉球石灰岩礫を2段ほど積み上げた状態が確認できた。覆土内から近代銭（一銭）が1点得られている（第38図）。

礎石

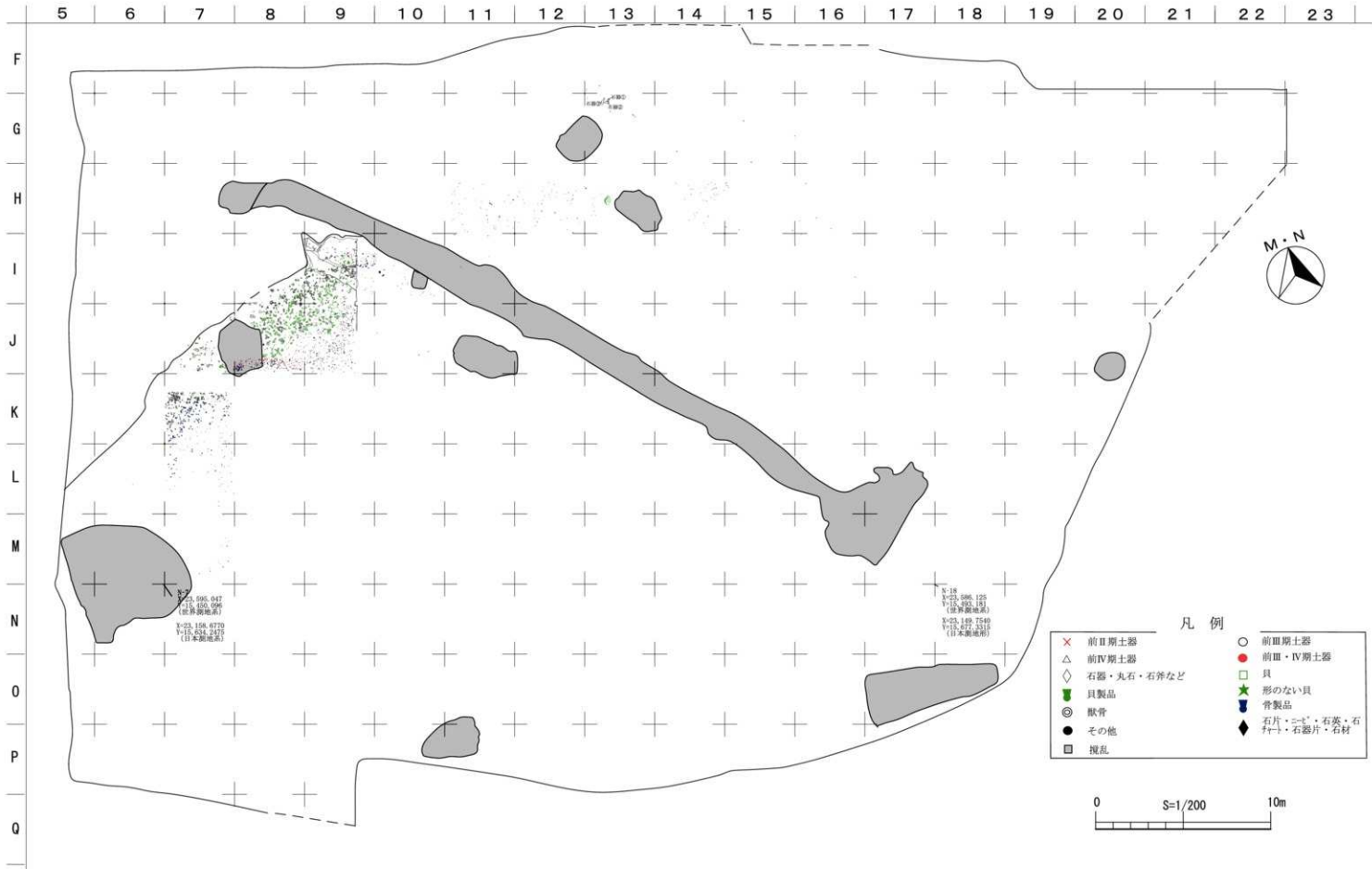
H-18グリッド周辺で琉球石灰岩製の礎石が幾つか確認された。建物跡を確定できるような配置はうかがえなかった。また、遺跡周辺の残土から細粒砂岩製（方言でニービ）の礎石が幾つか採取されている。

本土産磁器集中部（第34・35図 図版20・47・48）

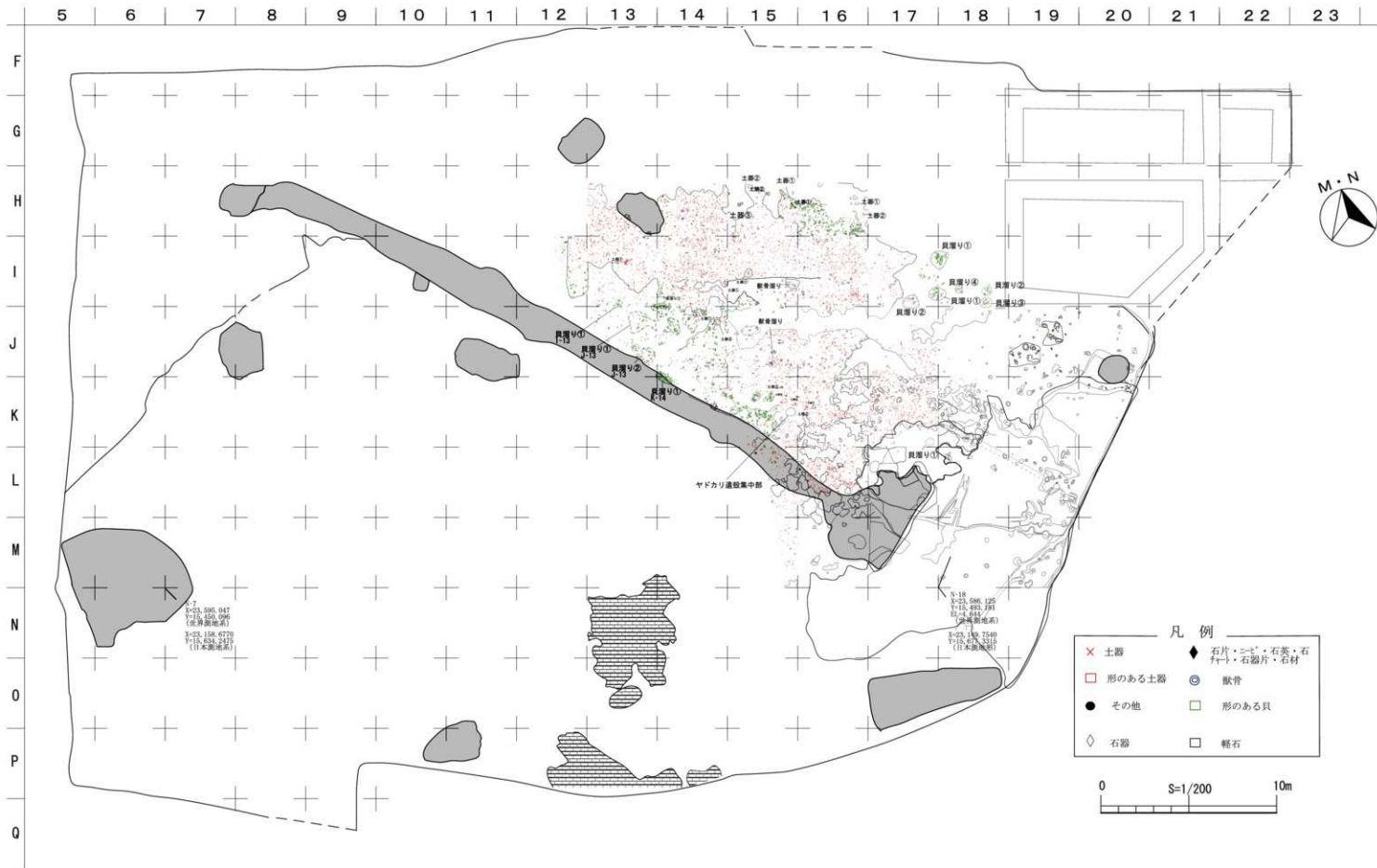
L-12グリッド、II a層～II b層で確認された。ほぼ完形の碗が10数点まとまって出土した。一括廃棄など、意識的に埋められた可能性が想起されたが判然としない。



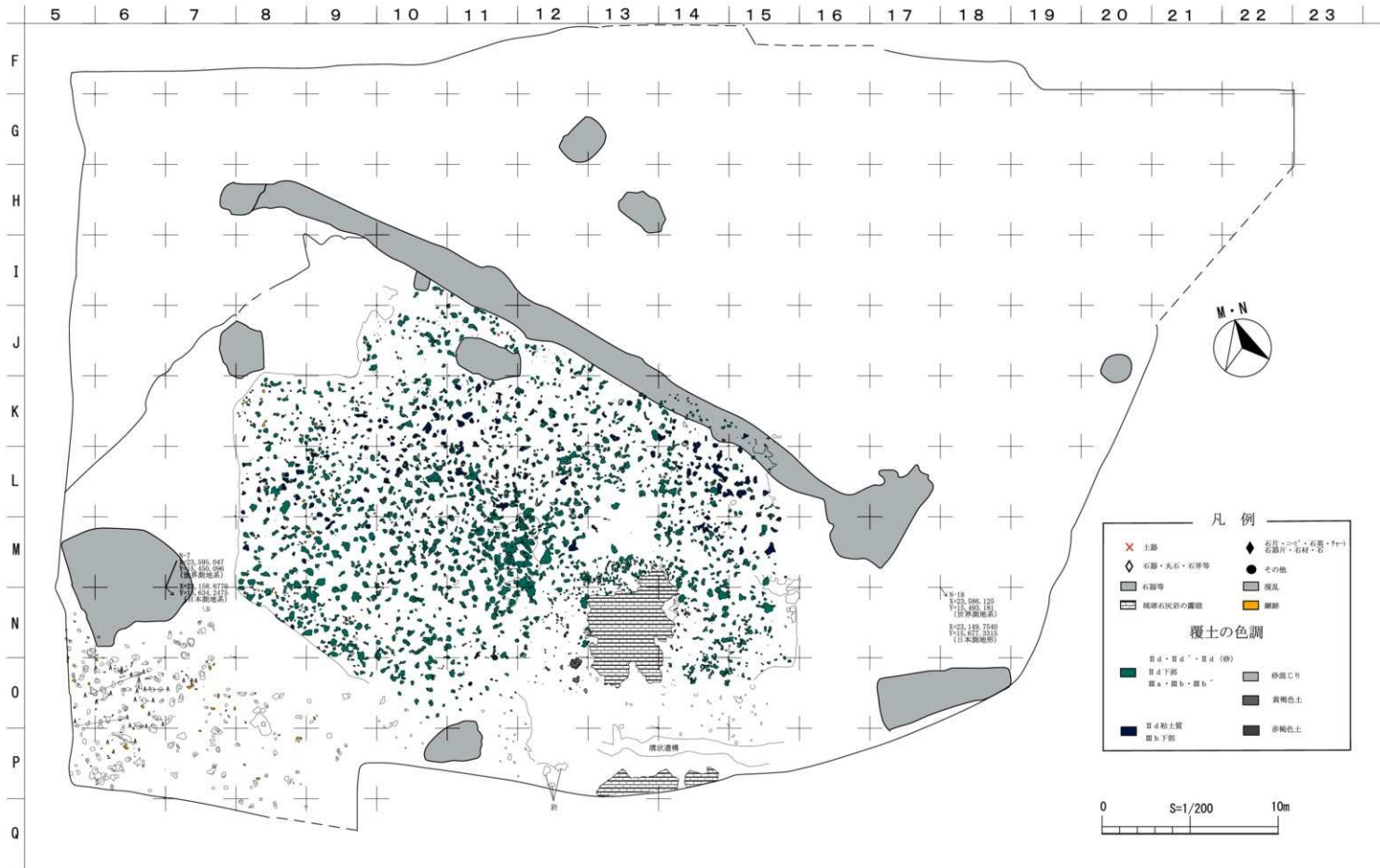
第11図 沖縄新石器時代前II期の遺構・遺物分布図



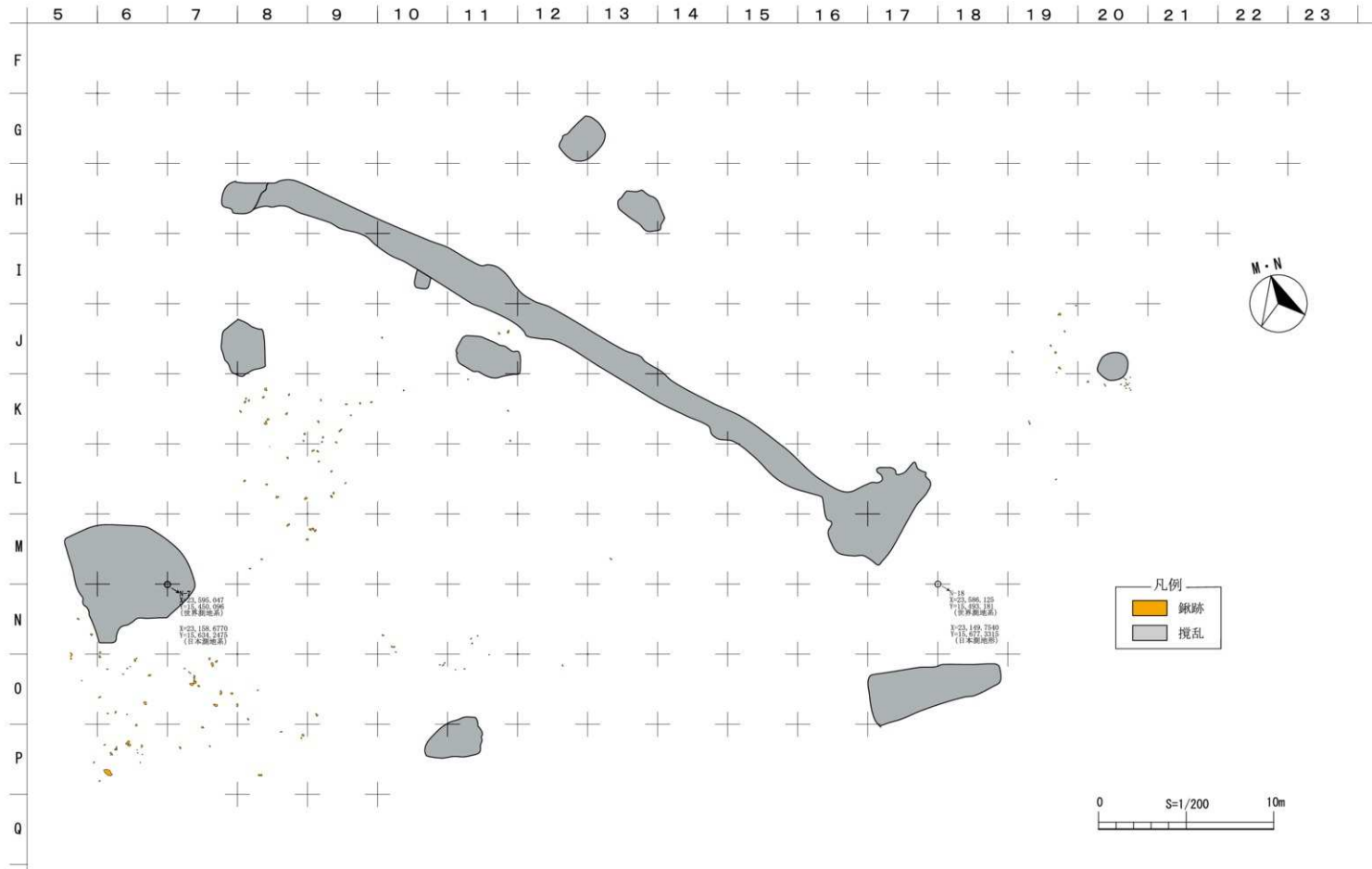
第12図 沖縄新石器時代前III・IV期の遺構・遺物分布図



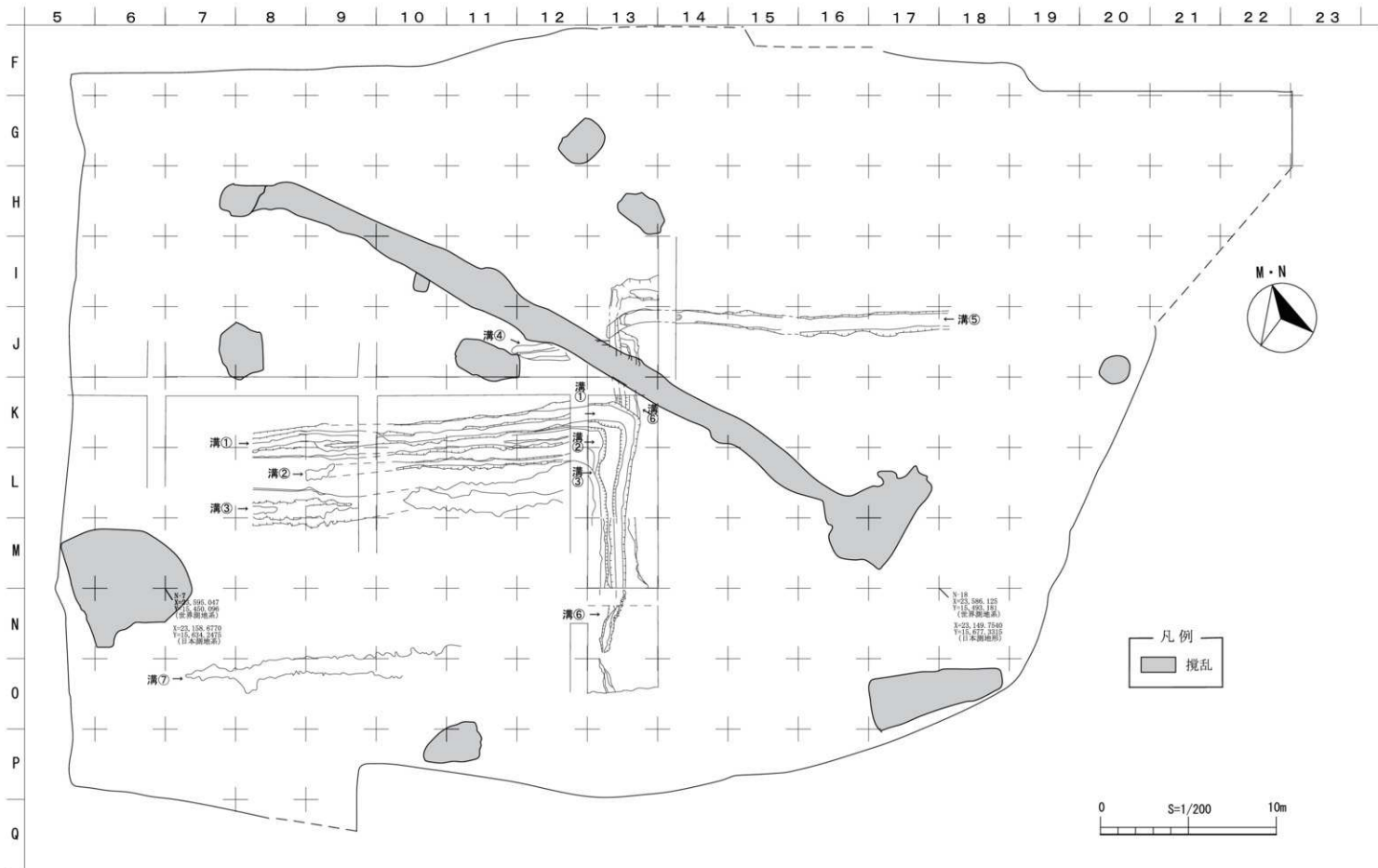
第13図 沖縄新石器時代後期の遺構・遺物分布図



第14図 グスク時代以降の遺構（ビット・銅跡）分布図



第15図 グスク時代以降の遺構（鉄跡）分布図



第16図 近世の遺構（溝状遺構）分布図

第VI章 遺物

ここでは、土器、石器、貝製品、外国産陶磁器、本土産陶磁器、銭貨、円盤状製品、煙管、陶製品、玉を紹介する。

なお、今回の報告は、整理時間等の都合上、一部資料のみを掲載した。そのため、本遺跡出土遺物の全体像を把握しきれていないのが現状である。今後、機会を改めて再整理・分析を行う必要がある。

以下、出土遺物の種類ごとに概略を示す。

第1節 土器

土器は、以下のように大きく四時期の資料に大別できる。なお、時期区分については、第2表を参考にした。

1. 沖縄新石器時代前Ⅱ期（縄文時代早期相当期）
2. 沖縄新石器時代前Ⅲ期（縄文時代前期相当期）
3. 沖縄新石器時代前Ⅳ期（縄文時代中期相当期）
4. 沖縄新石器時代後期（弥生時代～平安時代相当期）

上記1は、爪形文土器と称されるもので、第3表に示したとおり、総数17,119個（14,978個+2,141個）、総重量22,892g（22,526.9g+365.1g）で1個当たり約1.34gとなる。資料のサイズとしては、かなり小さめのものが多く得られたことになる。

上記2は、曾畑式土器及び室川下層式土器を含むものである。

上記3は、鹿児島県曾於郡末吉町・財部町に所在する「榎木耳取遺跡」出土資料（縄文時代前期・中期土器第V-2類）に類似するものを含むものである。

上記4は、大当原式土器に所属する資料を含むものである。

個々の資料は、第17～20図及び図版27～30に示した。また、その特徴などは第4～7表に譲る。

第2表 沖縄諸島の暫定編年

本土	沖縄	土器型式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の編年資料	現行編年	
縄文時代	草創期	前期 I			早期	
	早期	II	野国第四群 ヤブチ式土器 東原式土器	瓜形文土器 ヤブチ式 6670±140 y.B.P. 東原式 6450±140 y.B.P.		
	前期	III	条痕文土器 室川下層式土器 曾畑式土器 神野A式土器 神野B式土器	条痕文土器 曾畑式土器		曾畑式土器 (渡具知東原) 4880±130 y.B.P.
	中期	IV	面縄前庭I式土器 ← 面縄前庭II式土器 ← 面縄前庭III式土器 ← 面縄前庭IV式土器 ← 面縄前庭V式土器 ←	旧具志川A式 旧具志川B式 具志川C式 旧神野C式 旧面縄前庭式		
	後期	V	神野D式土器 神野E式土器 伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器		伊波式 (熱田原) 3370±80 y.B.P. 伊波式 (室川) 3600±90 y.B.P.
	晩期	VI	室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器			入佐式並行 黒川式土器
弥生時代	前期	後期 I	真栄里貝塚	板付II式土器 亀ノ甲類似土器	後期	
	中期	II	具志原式土器	山ノロ式土器		
	後期	III	アカジャンガー式土器	免田式土器 アカジャンガー式は中津野式並行か？		
古墳時代 ⇩ 平安時代		IV	フェンサ下層式土器	類須恵器		

◎「フェンサ下層式は城時代初期」とする見解もある。

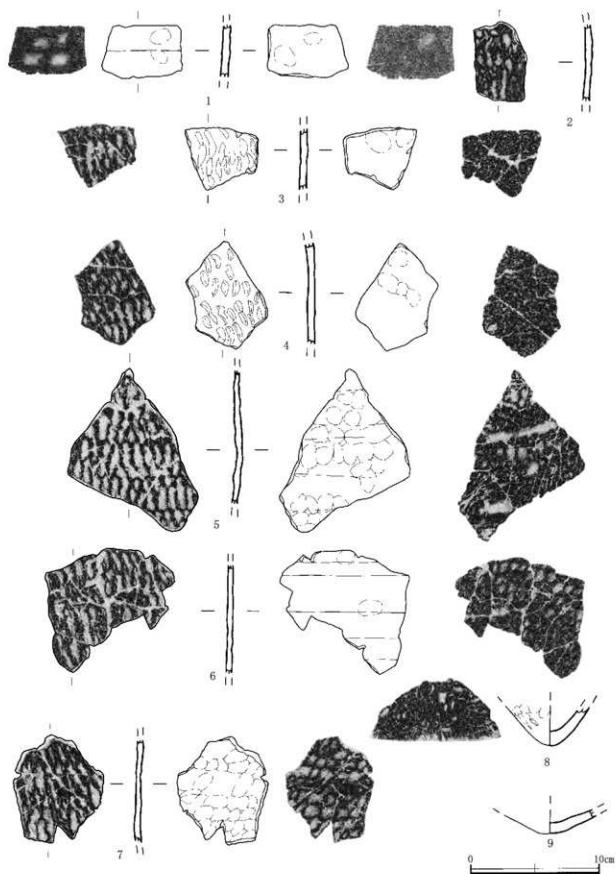
(1991年4月5日改訂)

第3表 沖縄新石器時代前Ⅱ期土器集計一覧

番 号	数 量		重 量		備 考
	1 cm以上の資料	1 cm未満の資料	1 cm以上の資料	1 cm未満の資料	
集計1	45	13	333.5	1.7	
集計2	27	3	89.6	0.1	
集計3	142	1	341.9	0.1	
集計4	228	23	312.6	4.3	
集計5	1234	236	1249.0	38.0	
集計6	8	0	32.8	0	
集計7	2	0	7.2	0	
集計8	19	0	40.2	0	
集計9	317	25	552.8	3.2	
集計10	1	0	4.7	0	
集計11	1	0	3.8	0	
集計12	244	91	462.7	10.2	
集計13	95	25	162.9	3.4	
集計14	4	0	9.5	0	
集計15	103	52	246.9	8.8	
集計16	15	1	73.3	0.2	
集計17	360	139	588.5	24.5	
集計18	91	34	93.0	5.1	
集計19	0	10	0	1.5	
集計20	56	4	193.4	0.8	
集計21	18	0	13.3	0	炭より抜き出し
集計22	18	1	19.8	0.3	
集計23	1468	243	2148.4	52.1	
集計24	1463	201	2234.7	36.4	
集計25	98	34	404.6	4.4	
集計26	1	0	2.0	0	
集計27	29	17	44.9	2.4	
集計28	3	4	4.8	0.4	
集計29	18	2	73.9	0.2	G-12ドット取り上げ
集計30	2	0	3.7	0	I-8ドット取り上げ
集計31	277	66	531.1	12.1	
集計32	58	36	123.7	3.5	J-9ドット
集計33	197	38	391.2	3.9	J-8ドット取り上げ
集計34	35	13	66.8	1.1	K-7ドット取り上げ
集計35	1	0	1.0	0	K-6ドット取り上げ
集計36	1876	182	2444.9	37.7	
集計37	1013	124	1829.5	24.9	
集計38	778	38	1161.1	5.5	
集計39	897	102	979.6	18.2	
集計40	2383	225	3503.6	34.4	
集計41	1353	158	1745.9	25.6	
小計	14978	2141	22526.8	365.1	
合計	17119		22891.8		

第4表 土器観察一覧①

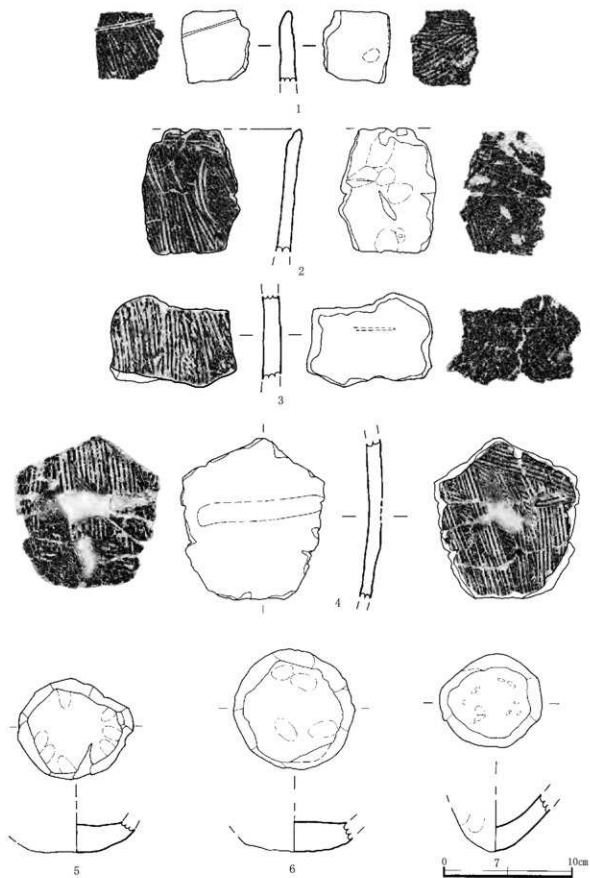
挿図番号 図版番号	時期	器形	部位	法 量			観 察 事 項				出土地点
				口径 底径 (cm)	器厚 底面厚 (mm)	重さ (g)	焼成	色調	混入物	文様・調整・他	
第17図 1 図版27の1	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	6.5 —	21.3	良	外：黄褐色 内：赤褐色	石英 黒色粒 雲母	外面：煤痕と指圧による稜が 残る。 内面：指頭押痕有り。	H-12 IIe層 dot No89
第17図 2 図版27の2	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	5.5 —	17.8	良	外：黄褐色 内：赤褐色	石英 黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、施文は縦長で、一 部明確な爪形文も確認できる。 煤痕有り。 内面：器面が荒れ、混入物 でザラつく。	F-12 II f 7層 dot No31
第17図 3 図版27の3	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	5.5 —	18.2	良	外：黄褐色 内：黄褐色	石英 黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、爪形文は三日月形 で明確。 煤痕有り。 内面：指頭押痕有り。	F-12 II f 7層 dot No47
第17図 4 図版27の4	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	6.0 —	28.8	良	外：赤褐色 内：赤褐色	石英 黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、施文は縦長で、明 瞭な爪形文も確認できる。煤 痕有り。 内面：指頭押痕有り。混入 物でザラつく。	F-12 II f 7層 dot No63
第17図 5 図版27の5	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	5.5 —	58.0	良	外：赤褐色 内：暗赤褐 色	黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、爪形は明確で横位 に並べて施文。煤痕有り。 内面：指頭押痕とナデによる 調整。約3cm幅で稜が数条 見られる。	H-11 II f層 dot No58
第17図 6 図版27の6	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	4.5 —	41.9	良	外：黒褐色 内：赤褐色	黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、文様は全体的に浅 く不明瞭だが、爪形の深い部 分は残る。 残外全面を煤が付着。 内面：指頭押後、ナデによる 丁寧な調整痕が見られる。	K-7 II f層 dot No320
第17図 7 図版27の7	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	5.0 —	30.6	良	外：黒褐色 内：赤褐色	黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、文様は全体的に浅 く不明瞭。 残外全面を煤が付着。 内面：指頭押後、ナデによる 丁寧な調整痕。一部煤痕が 見られる。	J-7 南ハナ II f層0/10 dot No253
第17図 8 図版27の8	沖縄 前Ⅱ期	尖底	底部	— 1.0	6.5 11.0	52.3	良	外：黒褐色 内：黄褐色	黒色粒 雲母	外面：接地面より約2cmの 位置から上部は爪形文が見ら れるが、以下はナデにより不 明。残存外面は全て煤が付 着。 内面：ナデによる調整が見ら れる。	F-12 II f 7層 dot No33
第17図 9 図版27の9	沖縄 前Ⅱ期		底部	— 1.4	6.0 8.5	16.8	良	外：赤褐色 内：黄褐色	黒色粒 雲母	胴部へ大きく開く器形。 外・内面共に、器面が荒れ ていて、調整は不明。混入 物が露出しザラつく。	H-10 IIe層 0/10



第17图 (图版27) 土器①

第5表 土器観察一覧②

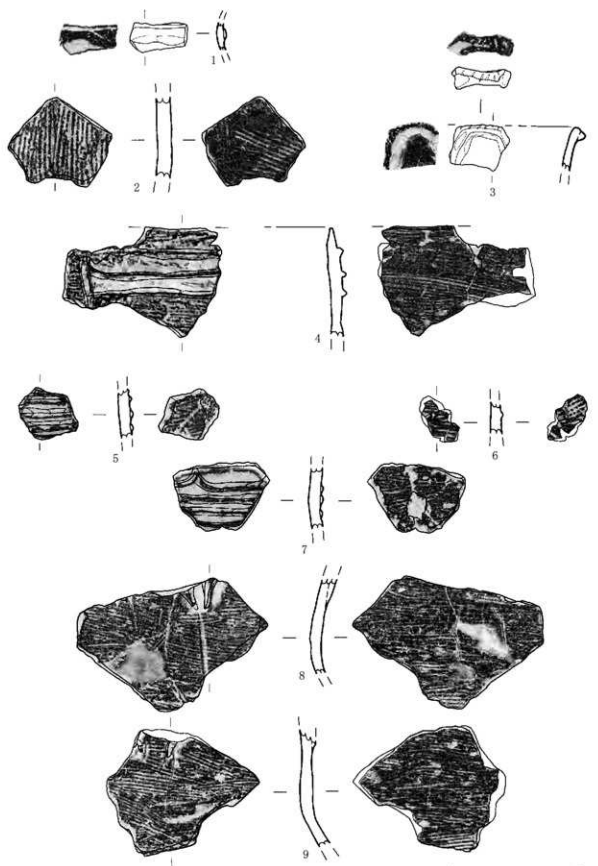
挿図番号 図版番号	時期	器形	部位	法量			観察事項				出土地点
				口径 底径 (cm)	器厚 底面厚 (mm)	重さ (g)	焼成	色調	混入物	文様・調整・他	
第18図 1 図版28の1	沖縄 前Ⅲ期	深鉢形	口縁部	— —	12.0 —	47.1	良	外：褐色 内：褐色	白色粒	外面：斜行の条痕を全面に施した後、口縁近くに斜位の沈線を2条施す。 内面：交斜する条痕を施す。 口縁近くはナデ痕が見られる。	H-15 白砂層
第18図 2 図版28の2	沖縄 前Ⅲ期	深鉢形	口縁部	— —	10.5 —	109.5	良	外：褐色 内：褐色	白色粒 白英	外面：斜行の条痕を施す。 口唇下には横位に曲を持つ沈線。 内面：条痕を施すがナデにより消され僅かに見られる。	H-16 白砂層 dot No 2
第18図 3 図版28の3	沖縄 前Ⅲ期		胴部	— —	15.0 —	128.1	良	外：赤褐色 内：暗褐色	白色粒 白英 雲母	外面：残存部全面に条痕が鮮明。一部交斜するところも見られる。 内面：条痕を施すがナデにより消され、1本深いものが残る。	I-11 白砂層
第18図 4 図版28の4	沖縄 前Ⅲ期		胴部	— —	10.0 —	183.4	良	外：赤褐色 内：暗褐色	白色粒 白英 雲母	外面：条痕は縦・横に格子状に見られる。中央部に幅約1.5cmの帯状に割れた痕が残る。 内面：縦・横・斜の条痕が明瞭に残る。	I-10 IIe層 0/10 dot No 1
第18図 5 図版28の5	沖縄 前Ⅲ期	平底	底部	— 5.3	12.0 21.0	143.4	良	外：暗褐色 内：暗褐色	白色粒 白英	外・内面共に丁寧なナデによる調整が施される。残外面全体と内面一部に煤痕が見られる。	I-8 IIe層
第18図 6 図版28の6	沖縄 前Ⅲ期	丸底	底部	— 7.0	— 23.0	209.7	やや良	外：赤褐色 内：暗褐色	白色粒 白英 雲母	外面：器面が荒れ、調整痕など不明。煤痕が見られる。 内面：条痕らしき痕が見られるが不明瞭。全面に煤痕が見られる。	M-7 地山 20/30
第18図 7 図版28の7	沖縄 前Ⅲ期	丸底	底部	— 2.5	13.0 19.0	183.4	良	外：赤褐色 内：赤褐色	白色粒 白英 雲母	外面：ヘラミガキにより丁寧に調整される。 内面：ナデ・ミガキにより調整するが、粗い成形痕が見られる。	K-17 II d 貝塚下20/30



第18圖 (圖版28) 土器②

第6表 土器観察一覧③

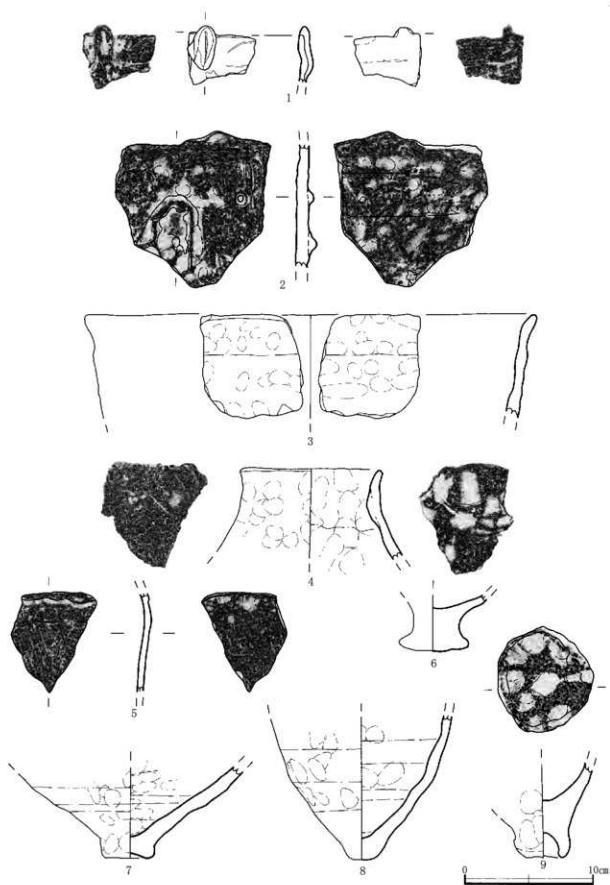
挿図番号 図版番号	時期	器形	部位	法 量			観 察 事 項					出土地点
				口径 底径 (cm)	器厚 底面厚 (mm)	重さ (g)	焼成	色調	混入物	文様・調整・他		
第19図 1 図版29の1	沖繩 前IV期		胴部	— —	4.0 8.0	8.4	やや良	外：褐色 内：赤褐色	白色粒 石英 雲母	外面：凸帯を横位に貼り付ける。ナテによる調整痕が見られる。 内面：磨耗しているが、指頭圧痕のような窪みが僅かに確認できる。	K-16 II d 層 貝塚下	
第19図 2 図版29の2	沖繩 前IV期		胴部	— —	11.0	67.3	良	外：褐色 内：褐色	白色粒 石英 雲母	外面：縦位の条痕が鮮明。煤痕も見られる。 内面：ナテ調整されるが、条痕が残る。	H-14 白砂層 dot No328	
第19図 3 図版29の3	沖繩 前IV期	深鉢形	口縁部	— —	7.0	20.6	やや良	外：暗褐色 内：暗褐色	白色粒 赤色粒 石英 雲母	外面：口唇面に台形状の凸物を貼り付ける。口唇上面には刻み文を施す。 内面：ナテ調整を施す。	I-10 西側 H-7 II e 層 土器No1周辺	
第19図 4 図版29の4	沖繩 前IV期	深鉢形	口縁部	— —	7.5	116.1	良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：凸帯を横位に3本、縦位に1本貼り付ける。残全面煤付着。 内面：上部はナテにより調整され条痕は不鮮明。	H-14 白砂層 dot No25	
第19図 5 図版29の5	沖繩 前IV期		胴部	— —	9.0	16.2	やや良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：凸帯を横位4本確認できるが、上部1本は帯の間隔が小さい。 内面：磨耗しているが、条痕は確認できる。	H-11 白砂 土器①	
第19図 6 図版29の6	沖繩 前IV期		胴部	— —	9.0	9.6	良	外：黒褐色 内：黒褐色	白色粒 雲母	外面：凸帯を1本と条痕は確認できる。 内面：条痕が見られる。	I-12 白砂	
第19図 7 図版29の7	沖繩 前IV期		胴部	— —	8.0	40.1	やや良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：凸帯が4本確認できる。上部の帯は2本に分かれ、端が口縁向きに伸びる形を反転させている。 内面：条痕を施した後ナテによる調整。	H-11 白砂	
第19図 8 図版29の8	沖繩 前IV期		胴部	— —	9.0	138.1	良	外：黒褐色 内：褐色	白色粒 石英 雲母	外面：先細りの凸物が2つ貼り付けられ、文様の一部と思われる。条痕が施される。 内面：条痕を施した後ナテによる調整。	I-13 II e 層	
第19図 9 図版29の9	沖繩 前IV期		胴部	— —	8.5	116.6	やや良	外：黒褐色 内：褐色	白色粒 石英 雲母 焼土粒	外面：先細りの凸物が2つ貼り付けられ、文様の一部と思われる。条痕が施された後ナテ調整。 内面：条痕を施した後ナテによる調整。	H-14 白砂 dot No24	



第19图 (图版29) 土器③

第7表 土器観察一覧④

挿図番号 図版番号	時期	器形	部位	法 量			観 察 事 項				出土地点
				口径 底径 (cm)	器厚 底面厚 (mm)	重さ (g)	焼成	色調	混入物	文様・調整・他	
第20図 1 図版30の1	沖縄後期	深鉢形	口縁部	— —	4.0 —	18.5	良	外：橙褐色 内：橙褐色	白色粒 雲母	外面：紐状の粘土を二つに折り曲げ口縁に貼り付ける。口唇直下に細沈線による曲線をほどこす。 内面：磨耗しているが、ナデ調整痕が見られる。	H-15 II d層 貝塚下
第20図 2 図版30の2	沖縄後期		胴部	— —	9.0 —	153.5	良	外：褐色 内：暗褐色	白色粒 雲母	外面：紐状の粘土を楕円状に貼り付け、その内に円形の突起を貼り付ける。直径約10mmの孔が外→内へ穿つ。煤痕が見られる。 内面：磨耗しているが、ナデ調整痕が確認できる。煤痕が見られる。	J-14 II d層 貝塚下10/20
第20図 3 図版30の3	沖縄後期	深鉢形	口縁部	35.0 —	9.0 —	70.9	やや良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：指頭圧痕による成形後ナデによる調整。煤痕が見られる。 内面：磨耗が激しい。ナデ調整を施すが、擦痕が僅かに残る。	J-14 II d層 貝塚下10/20
第20図 4 図版30の4	沖縄後期	壺形	口縁部	11.1 —	8.0 —	64.7	良	外：褐色 内：赤褐色	白色粒 石英 雲母	外面：ナデ調整が丁寧に施される。 内面：指頭圧痕、粘土の横痕にナデ調整を施す。	I-13 II d層 貝塚下
第20図 5 図版30の5	沖縄後期		胴部	— —	5.0 —	28.4	良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：粘土を指圧により貼付、弧状に3つ重なり確認される。ヘラナデによる調整が施される。 内面：ナデ調整が施される。残全面に煤痕が見られる。	H-15 II d層 貝塚下
第20図 6 図版30の6	沖縄後期	くびれ 平底	底部	— 5.4	6.5 33.0	105.1	良	外：赤褐色 内：黄褐色	白色粒	外・内面にナデ調整が施される。	J-16 II d層 貝塚下10/20
第20図 7 図版30の7	沖縄後期	乳房状	底部	— 4.1	10.0 13.0	137.6	良	外：赤褐色 内：黄褐色	白色粒	外面：磨耗しているが、ナデによる調整がみられる。 内面：丁寧なナデ調整が施される。煤痕が見られる。	J-16 II d層 貝塚下dot No 1
第20図 8 図版30の8	沖縄後期	乳房状	底部	— 2.2	8.0 16.0	217.2	良	外：赤褐色 内：赤褐色	白色粒	外面：磨耗しているが、指圧痕、ナデによる調整が見られる。隆起帯が見られる。 内面：ヘラナデ調整が施される。煤痕が見られる。	I-10 II d 土器 No 3
第20図 9 図版30の9	沖縄後期	乳房状	底部	— 4.4	7.0 24.0	167.0	良	外：橙褐色 内：黄褐色	白色粒	外面：底部を握ったような指圧痕による成形後ナデ調整が施される。 内面：ナデ調整が施される。煤痕が見られる。	I-16 II d層 貝塚下20/30



第20图 (图版30) 土器④

参考文献

- ・談谷村文化財調査報告第3集 『渡具知東原 第1次・第2次調査報告』 談谷村教育委員会 昭和51年3月31日
- ・沖縄県文化財調査報告書第57集 『野国 野国貝塚群B地点発掘調査報告』 沖縄県教育庁文化課 昭和59年3月30日
- ・浦添市文化財調査報告書第12集 『チヂフチャー洞穴遺跡 範囲確認調査報告書』 浦添市教育委員会 昭和63年3月
- ・浦添市文化財調査報告書 『城間古墓群一牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書一』 浦添市教育委員会 1990年3月
- ・中山清美 「イヤンヤ（ヤーヤ）洞穴遺跡出土の瓜形文土器」『奄美考古』第3号 奄美考古学研究会 1992年11月
- ・三島格 「ヤーヤ洞窟遺跡調査のころ」『奄美考古』第3号 奄美考古学研究会 1992年11月
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集 『新城下原第二遺跡一キャンプ環慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告一』 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成18（2006）年3月31日
- ・北谷町文化財調査報告書第26集 『伊礼原遺跡一伊礼原B遺跡ほか発掘調査一』北谷町教育委員会 2007年3月
- ・山崎真治・藤田祐樹・西秋良宏 「平成19・20年度南城市武芸河遺跡発掘調査の概要」『沖縄県立博物館・美術館紀要』第2号 2009年3月31日
- ・山崎真治・新里尚美・金城達・山田浩久・藤田祐樹 「八重瀬町具志頭グスク崖下採集の遺物について」『沖縄県立博物館・美術館紀要』第2号 2009年3月31日
- ・『南城市武芸河遺跡発掘調査概要報告書』 沖縄県立博物館・美術館 2010（平成22）年3月
- ・鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書91 『榎木耳取遺跡Ⅲ 東九州自動車道建設（末吉財部IC～因分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ 縄文時代前期～晩期 古墳時代～中世編』 鹿児島県立埋蔵文化財センター 平成17年3月31日

第2節 石器

ここでは、刃部磨製石斧、大型石器（石斧等）、石礮、磨石・敲石、搔器（スクレイパー）、剥片等の石器を図示した。

刃部磨製石斧は、第Ⅱf層（沖縄新石器時代前Ⅱ期）を主体に出土する。全長15cm以下の資料が多く、幅は5cm前後で「小振りの石斧」の感がある。使用されている石質は、緑色片岩や輝緑岩である。

大型石器は、第Ⅱe層（沖縄新石器時代前Ⅱ・Ⅲ期）を主体に出土する。全長37.7cm、31.9cm、幅11.5cmとかなりの大型となる資料である。使用されている石質は、緑色片岩である。

本遺跡では、主要な石器・石材に関して、石質同定を依頼した（第8～10表）。その結果、緑色片岩、輝緑岩、黒色片岩、黒色千枚岩、蛇紋岩、輝石安山岩、石英安山岩、石英閃緑岩、頁岩、石英、チャート、角閃石ひん岩、細粒砂岩等、多種多様であった。その中では、緑色片岩が最も多く利用されているようである。産地としては、名護市・慶良間、本部半島、石垣島、久米島などが見られる。石器・石材として使用される原石は、遺跡から遠く離れた場所に産するものも意識されていたことがうかがえた。個々の資料は、第21～28図及び図版31～38に示した。また、その特徴などは第11表に譲る。

参考文献

- ・沖縄県文化財調査報告書第57集 『野国 野国貝塚群B地点発掘調査報告』 沖縄県教育庁文化課 昭和59年3月30日
- ・沖縄県文化財調査報告書第65集 『牧港貝塚・真久原遺跡—県道153号線バイパス工事に伴う発掘調査報告—』 沖縄県教育委員会 1985年3月31日
- ・神谷厚昭『琉球列島ものがたり』 南ボーダーインク 2007年3月1日

第8表 石質同定一覧①

遺物 No.	出土地点	種類	石質	産地	備考
1	J-8 do/nk2	磨製石鏃	黒色片岩	石垣産(石原市山崎区)	EL=3483m
2	I-6 do/nk 10/20	小型石鏃	緑色片岩	石垣産(石原市山崎区)	
3	O-7 nk/n37月 do/nk①	石材	石英	新橋	
4	農土層下	石鏃	緑色片岩		
5	J-7-8 カクラン坑	石鏃	輝緑岩		
6	O-7 畑上層上 do/nk1	燧石? 燧石	輝緑岩?		EL=3722m
7	農土層下	大型石鏃	緑色片岩		
8	農土層下	大型石鏃	緑色片岩		
9	J-7 Ⅱ層 30/40	石鏃	緑色片岩		
10	J-8 南側トレンチ 南壁遺構	燧石	輝緑岩		
11	K-7 Ⅱ層 O/10 do/nk315	石鏃	緑色片岩		
12	K-7 Ⅱ層 O/10 do/nk316	石鏃	緑色片岩		
13	J-8 南側トレンチ Ⅱ層 40/50	石鏃	緑色片岩		
14	J-8 南側トレンチ Ⅱ層 120/130	小型石鏃	緑色片岩		
15	J-7 Ⅱ層 7層上	石鏃	輝緑岩		
16	MA-7 畑上層上	石鏃	緑色片岩		
17	I-8 Ⅱ層 O/10 do/nk1	石鏃	黒色片岩		EL=3561m
18	I-9 J-8 貝塚下 Ⅱ層	石鏃	黒色千枚岩		
19	I-9 カクラン(黒色土)	石材	チャート	本部平島?	
20	J-8 南側トレンチ Ⅱ層 60/90 do/nk133	石鏃	花崗岩?	石垣島	
21	I-8 Ⅱ層 130/20	小型石鏃	輝緑岩		
22	J-7-8 カクラン坑	石鏃	緑色片岩		
23	J-7-8 カクラン坑	石鏃	緑色片岩		
24	J-8 Ⅱ層 110/120	燧石	輝石燧岩		
25	J-9 貝塚下 Ⅱ層 120/130	磨製石鏃?	黒色片岩		
26	I-6 東側アザ Ⅱ層	小型石鏃	緑色片岩		
27	I-6 東側アザ Ⅱ層	石鏃	緑色片岩		
28	J-9 貝塚下 Ⅱ層 110/120	内腔石鏃	片状輝緑岩		
29	L-7 Ⅱ層 50/60 do/nk68	小型石鏃	輝緑岩		
30	I-8 貝塚下 Ⅱ層 do/nk50	小型石鏃	緑色片岩		
31	K-7 Ⅱ層 O/10 do/nk5	石鏃	輝緑岩		
32	農土層下	燧石	輝緑岩		
33	K-7 Ⅱ層 O/10	石鏃?	輝緑岩		
34	L-6 Ⅱ層 O/10	石鏃?	輝緑岩		
35	L-7 Ⅱ層 30/40	燧石	石英燧岩		
36	J-8 貝塚下 Ⅱ層 50/60	燧石	輝緑岩		
37	J-8 貝塚下 Ⅱ層 90/100	内腔石鏃	石英燧岩		
38	L-7 東側トレンチ 畑山 O/10 do/nk10	石鏃	輝緑岩		
39	L-7 西側トレンチ 畑山 10/20 do/nk11	石鏃	緑色片岩		
40	J-20 カクラン O/20	石材	緑色片岩		
41	J-7 Ⅱ層 10/20 do/nk12	石鏃	輝緑岩		
42	K-6 北側トレンチ カクラン	大型石鏃	緑色片岩		
43	J-20 カクラン O/20	石材	スユリア		
44	K-18 貝塚中 Ⅱ層(黒土質) 20/30	燧石	輝緑岩		
45	K-7 北側アザ Ⅱ層	石鏃	緑色片岩		
46	L-5 北側アザ Ⅱ層下層	石鏃	輝緑岩		
47	K-7 北側アザ Ⅱ層	石鏃	緑色片岩		
48	L-7 Ⅱ層(黒土質) 10/20	石鏃	輝緑岩		
49	I-13 do/nk1	大型石鏃	緑色片岩		
50	I-13 do/nk2	大型石鏃	緑色片岩		
51	I-13 do/nk3	不明	緑色片岩		
52	K-7 Ⅱ層 40/50 do/nk138	石鏃	緑色片岩		
53	I-8 東側トレンチ Ⅱ層 O/10 do/nk128	石鏃	輝緑岩		
54	J-9 Ⅱ層 60/70 do/nk192	石鏃	黒色片岩		
55	J-9 Ⅱ層 110/120 do/nk327	燧石?	緑色片岩		
56	J-9 Ⅱ層 40/50 do/nk398	石鏃	黒色片岩		
57	J-9 Ⅱ層 O/10 do/nk18	石鏃	輝緑岩		
58	J-9 貝塚下 Ⅱ層 90/100	石鏃	緑色片岩		
59	J-8 南側トレンチ Ⅱ層 80/90 do/nk254	石鏃	緑色片岩		
60	K-7 東側トレンチ Ⅱ層 30/40 do/nk131	燧石?	緑色片岩		
61	J-8 貝塚下 Ⅱ層	石鏃	輝緑岩		
62	K-7 Ⅱ層 30/40 do/nk1	石鏃	黒色片岩		
63	K-7 北側トレンチ Ⅱ層 O/10	石鏃	緑色片岩		
64	J-9 貝塚下 Ⅱ層 50/60	小型石鏃	緑色片岩		
65	K-7 北側アザ Ⅱ層	石鏃	緑色片岩		
66	J-8 Ⅱ層 30/40 do/nk49	小型石鏃?	緑色片岩		
67	J-8 南側トレンチ Ⅱ層 110/120	石鏃	緑色片岩		
68	MA-18 Ⅱ層+Ⅲ層 10/20	石鏃	緑色片岩		
69	K-7 北側アザ Ⅱ層	石鏃	輝緑岩		
70	J-9 東側トレンチ Ⅱ層 80/90 do/nk356	燧石	内腔石ひん岩	石垣島	
71	I-8 Ⅱ層 Ⅱ層 do/nk34	燧石	輝緑岩		
72	J-9 貝塚下 Ⅱ層 do/nk447	燧石	内腔石燧岩		

第9表 石質同定一覧②

遺物 №	出土地点	種類	石質	産地	備考
73	M7 堀山 0/40	石斧	緑色片岩		
74	L6 北1下層 8E0	石斧	緑色片岩		
75	9-12 北17 do№13	石斧	緑色片岩		EL-v3953m
76	H-12 北17 do№37	石斧	緑色片岩		EL-v3745m
77	H-12 北17 do№87	石斧	緑色片岩		EL-v3830m
78	M8 北東土	石斧	緑色片岩		
79	H9 北東土	石斧	緑色片岩		
80	J8 北東層下 60/70	石斧	緑色片岩		
81	J9 北東層下 60/70	石斧	緑色片岩		
82	J9 北東層下 80/90	石斧	緑色片岩		
83	J9 北東層下	石斧	緑色片岩		
84	H-11 北 10/20 do№80	石斧	緑色片岩		
85	H-11 北 10/20 do№81	石斧	緑色片岩		
86	H-16 北 do№84	石斧	緑色片岩		
87	F-12 北 0/10	石斧	緑色片岩		
88	F-13 北	石斧	緑色片岩		
89	F-13 北	石斧	緑色片岩		
90	H-12 白砂 30/40	石斧	緑色片岩		
91	J-12 北 0/10	石斧	緑色片岩		
92	J-17 北 貝層下	石斧	砂岩		
93	K-9 北東層下 土橋土層上部	石斧	緑色片岩		
94	K-10 北東層下 土橋土層上部	石斧	緑色片岩		
95	K-11 北 70/80	石斧	緑色片岩		
96	K-12 北 0/10	石斧	緑色片岩		
97	K-15 北 20/30	石斧	緑色片岩		
98	L-8 北 30/50	石斧	緑色片岩		
99	L-11 北 30/40	石斧	緑色片岩		
100	L-11 北 50/80	石斧	緑色片岩		
101	M-14 北東土層	石斧	緑色片岩		
102	M-16 北 土層 10/20	石斧	緑色片岩		
103	M-16 北 30/50	石斧	緑色片岩		
104	H-12 北東層下 北 20/30	石斧	緑色片岩		
105	M-9 北東層下 北 10/20	石斧	緑色片岩		
106	M-9 北東層下 北 20/30	石斧	緑色片岩		
107	H-14 北 0/10	石斧	緑色片岩		
108	L-8 北 貝層下 do№40	鏡石	砂岩(ニ-ビ)		
110	J-9 北 貝層下 10/20 do№48	鏡石	砂岩(ニ-ビ)		
111	H-11 北 10/20 do№82	鏡石	緑色片岩		
112	H-12 北 do№28	石皿	砂岩(ニ-ビ)		
113	K-7 北東層下 北	石皿	角閃石ひん岩	久米島	
114	M-8 北東土	石皿	砂岩		
115	F-12 北 20/30	石皿	スクレイパー		
116	K-17 北 10/20	石皿	有孔石製品	緑色片岩	
117	M7 堀山 10/20 do№9	石皿片	緑色片岩		
118	J9 北 0/10 do№165	石皿	頁岩		
119	J-9 北 貝層下 do№48	鏡石	砂岩(ニ-ビ)		
120	K-7 北東層下 北(土橋上) do№327	石皿片	緑色片岩		
121	K-7 北東層下 北 do№328	石皿片	緑色片岩		
122	H-12 北 do№38	石皿片	緑色片岩		
123	H-12 北17	石皿片	緑色片岩		
124	H-12 北17 do№42	石皿片	砂岩(ニ-ビ)		
125	H-12 北17 do№82	石皿片	砂岩(ニ-ビ)		
128	H-12 北17 do№83	石皿片	緑色片岩		
127	J-9 南側トレンチ 北17 0/10 do№161	石皿片	緑色片岩		
128	L-8 北 40/50 do№1	石皿片	緑色片岩		
129	L-8 北 40/50 do№2	石皿片	緑色片岩		
130	M-13 南側面北	石皿片	緑色片岩		
131	J-9 南側トレンチ 北 80/90 do№57	鏡片	緑色片岩		
132	K-7 北東層下 北 0/10 do№333	石皿片	緑色片岩		
133	H-12 北 do№40	石皿片	緑色片岩		
134	H-12 北 do№45	鏡	砂岩(ニ-ビ)		
135	H-12 北 do№71	石皿片	緑色片岩		
136	H-12 北 do№75	石皿片	緑色片岩		
137	H-12 北 do№77	石皿片	砂岩(ニ-ビ)		
138	J-9 南側トレンチ 北17 10/20	石皿片	角閃岩		
139	J-9 貝層下 北1	石皿片	緑色片岩		
140	J-9 貝層下 北1	石皿片	緑色片岩		
141	J-7 北 0/10	鏡片	緑色片岩		
142	J-7 北 0/10	鏡片	緑色片岩		
143	J-7 北 0/10	鏡片	緑色片岩		
144	J-8 貝層下 北1	石皿片	緑色片岩		
145	J-8 貝層下 北1	鏡片	緑色片岩		
146	J-9 貝層下 北1	石皿片	緑色片岩		
147	J-9 貝層下 北1	石皿片	緑色片岩		
148	K-6 北アザ 北1	石皿片	緑色片岩		
149	K-6 北アザ 北1	石皿片	角閃岩		
150	K-7 北アザ 北1	鏡片	緑色片岩		
151	K-7 北アザ 北1	鏡片	緑色片岩		
152	K-7 北アザ 北1	鏡片	緑色片岩		
153	K-7 北アザ 北1	鏡片	緑色片岩		
154	K-7 北アザ 北1	鏡片	緑色片岩		
155	K-7 北アザ 北1	鏡片	緑色片岩		
156	K-7 北アザ 北1	鏡片	緑色片岩		

遺物 №	出土地点	種類	石質	産地	備考
157	K-7 北アザ 3F	鏡片	緑色片岩		
158	K-7 北アザ 3F	鏡片	緑色片岩		
159	K-7 3F	鏡片	緑色片岩		
160	K-7 3F	鏡片	緑色片岩		
161	K-7 3F	鏡片	緑色片岩		
162	K-7 北アザ 3F	鏡片	緑色片岩		
163	K-7 北アザ 3F	鏡片	緑色片岩		
164	K-7 3F	鏡片	緑色片岩		
165	K-7 北アザ 3F	鏡片	緑色片岩		
166	K-7 北アザ 3F	鏡片	緑色片岩		
167	K-7 北アザ 3F	鏡片	緑色片岩		
168	K-7 北アザ 3F	鏡片	緑色片岩		
169	K-7 北アザ 3F	鏡片	緑色片岩		
170	K-7 北アザ 3F	石磨片	砂岩(ニービ)		
171	L-6 3F 下層 (95)	石磨片	緑色片岩		
172	L-6 3F 下層 (95)	石磨片	緑色片岩		
173	橋本遺跡	石磨片	粘板岩		
174	J9 東アザ 3e Q/10	鏡片	黒板石		
175	J9 3e Q/10	燧石	石英		
176	J9 3e 130/140	鏡片	石英		
177	K-7 北アザ 3F	鏡片	石英		
178	M-10 3c or 3d 20/30	鏡片	石英		
179	M-7 南トレンチ 地山 10/20	鏡片	石英		
180	J9 南トレンチ 3e 粘土層 80/90 dntk56	鏡片	チャート		
181	3e	鏡片	チャート		
182	J9 南トレンチ 3e 粘土層 110/120	鏡片	チャート		
183	J9 3e 130/140	鏡片	チャート		
184	J9 3e 130/140	鏡片	チャート		
185	K-7 北アザ 3e	鏡片	チャート		
186	M-7 地山 10/20	鏡片	チャート		
G-13 dntk1		大型石群	緑色片岩		大型石群集平部出土
G-13 dntk2		大型石群	緑色片岩		"
G-13 dntk3		大型石群	緑色片岩		"
19-21 東遺跡		石群	粘板岩		
J6 貝塚 3e dntk34		燧石	緑粘板岩		
J6 貝塚下 3f dntk30		小型石群	緑色片岩		
J9 3f 7 Q/10 dntk128		石群	輝緑岩		
J9 dntk2		燧石石群	黒色片岩		
J9 貝塚下 3f dntk447		燧石	内陸石炭山前		
J9 3e Q/10 dntk1		石群	黒色片岩		長3.561m
J9 3e 50/80		燧石	輝緑岩		
J9 貝塚下 3e 50/80		小型石群	緑色片岩		
J9 雑土(黒色土)		石材	チャート		本部平巻?
J9-J9 貝塚下 3e		石群	黒色片岩		
J-20 雑土 Q/20		石材	スリッパ		
J-7 3e 30/40 dntk26		石群	緑色片岩		
J-7 3f dntk12		石群	輝緑岩		
J-7 3f 7 地山 dntk5		石群	輝緑岩		
J-7-4 雑土坑		石群	緑色片岩		
J-7-5 雑土坑		石群	緑色片岩		
J-7-6 雑土坑		石群	輝緑岩		
J8 3e 貝塚下 40/50 dntk667		石群	緑色片岩		
J8 3f		石群	輝緑岩		
J8 南側トレンチ 3e 80/90 dntk133		石群	粘板岩?	石炭山	
J8 南側トレンチ 3e 110/120 dntk341		石群	緑色片岩		
J8 南側トレンチ 3e 80/90 dntk254		石群	緑色片岩		
J8 南側トレンチ 南壁遺跡		燧石	緑粘板岩		
J8 粘土層 3e 30/40 dntk48		小型石群?	緑色片岩		
J9 3e 110/120		燧石	輝石炭山前		
J9 120/130 貝塚下		燧石石群?	黒色片岩		
J9 3e Q/10 dntk18		石群	輝緑岩		
J9 3e 110/120 dntk227		燧石?	緑色片岩		
J9 3e 40/50 dntk193		石群	黒色片岩		
J9 3e 貝塚下120/130		小型石群	緑色片岩		
J9 貝塚下 3e 110/120		内陸石群	片状砂岩		
J9 貝塚下 3e 90/100		内陸石群	石英閃緑岩		
J9 貝塚下 3e 70/80		石材	緑色片岩		
J9 貝塚下 3e 90/100		石群	緑色片岩		
J9 南側トレンチ 3e 80/90		燧石	内陸石炭山前	石炭山	
K-18 貝塚中 3d 粘土層20/30		燧石	輝緑岩		
K-6 北アザ 3f		石群	緑色片岩		
K-6 北側トレンチ 雑土		大型石群	緑色片岩		
K-7 3e Q/10		石群?	緑粘板岩		
K-7 3f Q/10 dntk315		石群	緑色片岩		
K-7 3e Q/10 dntk5		石群	緑色片岩		
K-7 3e 40/50 dntk138		大型石群	緑色片岩		
K-7 3e 40/50 dntk269		石群	黒色片岩		
K-7 3f Q/10 dntk316		石群	緑色片岩		
K-7 東側トレンチ 3e 30/40 dntk131		燧石?	緑色片岩		
K-7 北アザ 3e		石群	緑色片岩		
K-7 北アザ 3e		石群	緑色片岩		
K-7 北アザ 3e		石群	輝緑岩		
K-7 北側トレンチ 3e Q/10		石群	緑色片岩		
K-7 北側トレンチ 3e Q/10 dntk1		石群	緑色片岩		

遺物 №	出土地点	種類	石質	産地	備考
L-6 Ⅱa 9/10		石斧?	緑閃石類		
L-6 Ⅱaアゼ Ⅱf 下部		石斧	輝緑岩		
L-6 Ⅱe 10/20		小型石斧	輝緑岩		
L-6 Ⅱaアゼ Ⅱd		小型石斧	緑色片岩		
L-6 Ⅱaアゼ Ⅱd		石斧	緑色片岩		
L-7 Ⅱe 20/40 dot№14		燧石	石炭層山前		
L-7 Ⅱe 50/90 dot№16		小型石斧	輝緑岩		
L-7 Ⅱe 粘土質10/20		石斧	輝緑岩		
L-7 西側トレンチ Ⅱe 10/20 dot№11		石斧	緑色片岩		
L-7 東側トレンチ 粘土 9/10 dot№10		石斧	輝緑岩		
M-11 岩盤の上		石斧	緑色片岩		
M-10 Ⅱaアゼ 10/20		石斧	緑色片岩		
O-6 30 Ⅱb 10/20		小型石斧	緑色片岩	石炭層(石炭層の下部)	
O-7 ピット№37内 窟跡 dot№1		石材	石灰		
O-7 地山遺上 dot№1		磨礫刀部?	砂岩		
Ⅱa土割せ		石斧	緑色片岩		
Ⅱa土割せ		大型石斧	緑色片岩		
Ⅱa土割せ		燧石	燧石片岩		
Ⅱa土割せ		大型石斧	緑色片岩		

第10表 石質同定一覧③

調査地	出土地点	種類	石質	産地	備考
1	J7 31層 Q/10 №185	石鏃	緑色片岩		
2	J7 31層 トレンチ層土層 21層 Q/10 №75	石鏃片	緑色片岩		
3	J7 31層 Q/10 №175	石	緑肉砂岩	奥部一層	
4	J7 31層 Q/10 №130	石鏃	緑色片岩		
5	J7 31層 Q/10 №179	石鏃片	緑色片岩		
6	J7 31層 Q/10 №143	石鏃	緑色片岩		
7	J7 31層 地上 №39	石鏃片	緑色片岩		
8	J7 31層 Q/10 №147	石鏃片	緑色片岩		
9	J7 31層 Q/10 №134	石鏃	緑色片岩		
10	J7 31層 Q/10 №145	石	ニーズ		
11	J7 31層 Q/10 №242	石鏃	緑色片岩		
12	J7 31層 Q/10 №131	石鏃	緑色片岩		
13	J7 トレンチ層土層 21層 №77	石鏃片	緑色片岩		
14	J7 31層 Q/10 №174	石鏃	緑色片岩		
15	J7 31層 Q/10 №190	石鏃片	緑色片岩		
16	J7 31層 Q/10 №139	石鏃	緑色片岩		
17	J7 31層 Q/10 №136	石鏃片	緑色片岩		
18	J7 31層 Q/10 №146	石鏃	緑色片岩		
19	J7 31層 Q/10 №166	石	ニーズ		
20	J7 31層 Q/10 №142	石鏃片	緑色片岩		
21	J7 トレンチ層土層 21層 50/90 №74	石鏃片	緑色片岩		
22	J7 31層 Q/10 №193	石	ニーズ		
23	J7 31層 Q/10 №135	石鏃・丸石	ニーズ		
24	J8 31層 貝層 №304	石材?	砂岩石浜岩	瀬崎周辺	ピーチロック
25	J8 31層 貝層 №477	石材?	ニーズ		
26	J8 31層 貝層 №545	石材	緑肉砂岩		ニーズの骨
27	J8 31層 貝層 №666	石	緑肉砂岩		ニーズの骨
28	J8 31層 貝層 №621	石材	緑肉砂岩		ニーズの骨
29	J8 31層 貝層 №518	石材	緑肉砂岩		ニーズの骨
30	J8 31層 貝層 №29	石	泥岩		クマツの骨
31	J8 31層 貝層 №469	石鏃製品	ニーズ		
32	J8 31層 貝層 №553	石材	ニーズ		
33	J8 31層 貝層 №637	石材	ニーズ		
34	J8 31層 貝層 №544	石材	ニーズ		
35	J8 31層 貝層 №469	石鏃?	ニーズ		
36	J8 31層 貝層 №48	石材	ニーズ		
37	J8 31層 貝層 №309	石材	ニーズ		
38	J8 31層 貝層 №435	石鏃片	緑色片岩		
39	J8 31層 貝層 №535	石材	砂岩		
40	J8 31層 貝層 №433	石材	緑色片岩		
41	J8 31層 貝層 №486	石鏃	ニーズ		
42	J8 31層 貝層 №456	石鏃	ニーズ		
43	J8 31層 貝層 №448	?	片状砂岩		
44	J8 31層 貝層 №592	石材	ニーズ		
45	J8 31層 貝層 №510	石材	ニーズ		
46	J8 31層 貝層 №446	石材	ニーズ		
47	J8 31層 貝層 №350	石材	ニーズ		
48	J8 31層 貝層 №480	石材	ニーズ		
49	J8 31層 貝層 №397	石鏃	片状砂岩		
50	J8 31層 貝層 №438	石材	ニーズ		
51	J8 31層 貝層 №497	ニーズ	ニーズ		
52	J8 31層 貝層 №483	ニーズ	ニーズ		
53	J8 31層 貝層 №479	石材	ニーズ		
54	J8 31層 貝層 №306	石材	ニーズ		
55	J8 31層 貝層 №317	石材	ニーズ		
56	J8 31層 貝層 №466	石材	ニーズ		
57	J8 31層 貝層 №546	石材	緑肉石浜岩		
58	J8 31層 貝層 №342	石材?	緑肉石浜岩		
59	J8 31層 貝層 №473	石鏃片	緑色片岩		
60	J8 31層 貝層 №41	石材	ニーズ		
61	J8 31層 貝層 №400	石鏃	ニーズ		
62	J8 31層 貝層 №634	石材	砂岩		
63	J9 東側トレンチ 21層?/10 №177	石鏃	ニーズ		
64	J9 東側トレンチ 21層 70/90 №211	石	ニーズ		
65	J9 東側トレンチ 21層? Q/10 №133	石	緑肉石浜岩		
66	J9 東側トレンチ 21層 100/110 №273	石鏃	砂岩		
67	J9 東側トレンチ 21層 70/90 №221	石鏃片	緑色片岩		
68	J9 東側トレンチ 21層 20/30 №99	ニーズ	ニーズ		
69	J9 東側トレンチ 21層? Q/10 №132	ニーズ	ニーズ		
70	J9 東側トレンチ 21層 90/90 №198	石鏃	片状砂岩		
71	J9 東側トレンチ 21層 70/90 №220	石鏃片	緑色片岩		
72	J9 東側トレンチ 21層 110/130 №284	石鏃片	緑肉石浜岩		
73	J9 東側トレンチ 21層 90/90 №248	石	ニーズ		
74	J9 東側トレンチ 21層 Q/10 №173	石鏃	緑色片岩		
75	J9 東側トレンチ 地山 20/30 №204	石鏃片	緑色片岩		
76	J9 東側トレンチ 21層 90/90 №240	石鏃	緑色片岩		
77	J9 東側トレンチ 21層 100/110 №278	石鏃	緑色片岩		
78	J9 東側トレンチ 21層 70/90 №210	石鏃	緑色片岩		
79	J9 東側トレンチ 21層 70/90 №215	石鏃	緑色片岩		
80	J9 東側トレンチ 21層 90/100 №208	ニーズ	ニーズ		
81	J9 東側トレンチ 21層 40/50 №171	石鏃	ニーズ		
82	J9 東側トレンチ 21層? 10/20 №131	石材	緑色片岩		
83	J9 東側トレンチ 21層? 10/20 №130	ニーズ	ニーズ		
84	J9 東側トレンチ 21層 90/90 №244	ニーズ	ニーズ		
85	J9 東側トレンチ 21層? Q/10 №134	石材	ニーズ		
86	J9 東側トレンチ 21層? Q/10 №124	石材	緑色片岩		
87	J9 東側トレンチ 21層 90/90 №222	石鏃	緑色片岩		
88	J9 21層 №29	石	ニーズ		

遺物 No.	出土地点	種類	石質	産地	備考
88	19 東条トレンチ Ee層 100/110 №279	石鏝	緑色片岩		
90	19 東条トレンチ Ee層 90/100 №268		ニーズ		
91	19 東条トレンチ Ee層 90/90 №256		ニーズ		
92	19 Ee層 №56	石鏝	ニーズ		
93	19 東条トレンチ Ee層 90/100 №262		ニーズ		
94	19 東条トレンチ Ee層 90/90 №247	石鏝	緑色片岩		
96	19 東条トレンチ Ee層 0/10 №129	石材	緑色片岩		
98	19 東条トレンチ Ee層 70/80 №212	石	ニーズ		
97	19 東条トレンチ Ee層 0/10 №239	石鏝片	緑色片岩		
98	19 Ee層 №55	石材	ニーズ		
99	19 東条トレンチ Ee層 90/100 №263	石鏝	ニーズ		
100	19 東条トレンチ Ee層 90/100 №260	石材	ニーズ		
101	19 東条トレンチ Ee層 90/100 №272	石	塊状石灰岩		
102	19 東条トレンチ Ee層 90/80 №246		ニーズ		
103	19 東条トレンチ Ee層 100/110 №276		ニーズ		
104	19 東条トレンチ Ee層 90/90 №265		ニーズ		
105	19 東条トレンチ Ee層 90/90 №251	石	ニーズ		
106	19 東条トレンチ Ee層 100/110 №274		ニーズ		
107	17 Ee層 30/40 №37	石鏝	緑色片岩		
108	17 Ee層 40/50 №43	石鏝	緑色片岩		
109	17 Ee層 30/40 №38	石鏝	緑色片岩		
110	17 東トレンチ 地山 10/20 №8		片状砂岩		
111	17 Ee層 40/50 №61	石鏝片	緑色片岩		
112	17 Ee層 40/50 №63	石鏝片	緑色片岩		
113	17 Ee層 40/50 №45	石鏝	緑色片岩		
114	17 東トレンチ 地山 20/30 №2	石鏝	緑色片岩		
115	17 Ee層 20/20 №44	石鏝	緑色片岩		
116	17 東トレンチ 地山 40/50 №48	石鏝	緑色片岩		
117	17 東トレンチ 地山 0/10 №9	石鏝	緑色片岩		
118	17 Ee層 40/50 №53	石鏝	緑色片岩		
119	17 東トレンチ 地山 40/50 №50	石鏝	緑色片岩		
120	17 Ee層 40/50 №66	石鏝片	緑色片岩		
121	17 Ee層 30/40 №59	石鏝	緑色片岩		
122	17 Ee層 40/50 №40		ニーズ		
123	17 Ee層 20/20 №18	石鏝	ニーズ		
124	17 Ee層 40/50 №41	石材	ニーズ		
125	17 Ee層 40/50 №56	石材	ニーズ		
126	17 東トレンチ 地山 40/50 №52	石材	ニーズ		
127	17 Ee層 40/50 №57	石材	片状砂岩		
128	17 東トレンチ 地山 10/20 №5	石鏝	石鏝		
129	17 Ee層 30/40 №55	石材	ニーズ		
130	17 東トレンチ Ee層 10/20 №12		ニーズ		
131	17 東トレンチ 地山 10/20 №1	?	砂岩		
132	17 東トレンチ 地山 10/20 №3	石鏝	石鏝		
133	17 東トレンチ 地山 10/20 №4	石鏝	石鏝		
134	19 東トレンチ Ee層 120/130 №399	石材	ニーズ		
135	19 東トレンチ Ee層 120/130 №404	石材	ニーズ		
136	19 東トレンチ Ee層 120/130 №408	石材	ニーズ		
137	19 東トレンチ Ee層 120/130 №402	石鏝片	緑色片岩		
138	19 東トレンチ Ee層 120/130 №405	石材	ニーズ		
139	19 東トレンチ Ee層 120/130 №410	石材	ニーズ		
140	19 東トレンチ Ee層 120/130 №409	石材	ニーズ		
141	19 Ee層 100/110 №289	石鏝片	緑色片岩	久米島	
142	19 東トレンチ Ee層 120/130 №415	石鏝片	緑色片岩		
143	19 東トレンチ Ee層 120/130 №398	石材	ニーズ		
144	19 東トレンチ Ee層 120/130 №403	石鏝片	緑色片岩		
145	19 東トレンチ Ee層 120/130 №400	石鏝片	緑色片岩		
146	19 Ee層 60/70 №208		石鏝		
147	19 Ee層 貝層 №495		緑石		
148	19 Ee層 貝層 №471		緑石		
149	19 Ee層 貝層 №453		緑石		
150	17 Ee層 50/60 №199	石	片状砂岩		
151	17 Ee層 40/50 №133	石鏝	緑色片岩		
152	17 Ee層 30/40 №209	石鏝	緑色片岩		
153	17 Ee層 40/50 №215	石材	ニーズ		
154	17 Ee層 40/50 №278	石	ニーズ		
155	17 Ee層 40/50 №275	石	ニーズ		
156	17 Ee層 40/50 №245		ニーズ		
157	17 Ee層 40/50 №144	石鏝	ニーズ		
158	17 Ee層 40/50 №157	石鏝	ニーズ		
159	17 Ee層 30/40 №210	石鏝	ニーズ		
160	17 Ee層 50/60 №207	石鏝	緑色片岩		
161	17 Ee層 50/60 №203	石鏝	ニーズ		塊状
162	17 Ee層 40/50 №218	石鏝	ニーズ		
163	17 Ee層 20/30 №204	石鏝	ニーズ		
164	17 Ee層 40/50 №267	石鏝	緑色片岩		
165	17 Ee層 40/50 №169		ニーズ		
166	17 Ee層 40/50 №183	石鏝	緑色片岩		
167	17 Ee層 40/50 №193		ニーズ		
168	17 北トレンチ Ee層 30/40 №96	?	灰岩(クチャの層)		
169	17 Ee層 40/50 №145		石片		
170	17 Ee層 40/50 №164	石鏝	緑色片岩		
171	17 東トレンチ Ee層 30/40 №92		貝層		緑色が多い
172	17 Ee層 0/10 №8	石鏝	ニーズ		
173	17 Ee層 30/40 №205		ニーズ(緑片)		
174	17 Ee層 50/60 №306	石鏝	緑色片岩		
175	17 Ee層 40/50 №203	石鏝	緑色片岩		
176	17 Ee層 30/40 №209	石鏝	片状砂岩		
177	17 Ee層 30/40 №201	石鏝	ニーズ		
178	17 Ee層 40/50 №217	石材	緑色片岩		

遺物	出土地点	種類	石質	産地	備考
179	ト7 Ⅱ層 50/80 №305	石鏃	緑色片岩		
180	ト7 Ⅱ層 0/10 №314	石	ニーズ		
181	ト7 Ⅱ層 40/50 №165	石鏃	ニーズ		
182	ト7 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 30/40 №81		ニーズ		
183	ト7 Ⅱ層 0/70 №7	石材	ニーズ		
184	ト7 Ⅱ層 0/10 №3	?	ニーズ		
185	ト7 Ⅱ層 30/40 №119	石鏃	砂岩		
186	ト7 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 30/40 №88	?	塊状石灰岩		
187	ト7 Ⅱ層 0/10 №3	?	ニーズ		
188	ト7 Ⅱ層 0/10 №5	?	ニーズ		
189	ト7 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 30/40 №89	?	ニーズ		
190	ト7 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 30/40 №113	?	ニーズ		
191	ト7 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 30/40 №122	?	ニーズ		
192	ト7 Ⅱ層 40/50 №181	石鏃	ニーズ		
193	ト7 Ⅱ層 40/50 №274	石	ニーズ		
194	ト7 Ⅱ層 0/10 №58	?	炭素(クチャの骨)		炭化が著しい
195	Ⅱ層 Ⅱ層 90/100 №268	石鏃	緑色片岩		
196	Ⅱ層 Ⅱ層 120/130 №328	石材	ニーズ		
197	Ⅱ層 Ⅱ層 100/110 №302	石材	石灰岩	讃岐藩・本部	中・古先代のもの
198	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №132	石鏃片	緑色片岩		
199	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №137	石鏃片	緑色片岩		
200	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №125	石鏃	緑色片岩		
201	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №136	石	塊状石灰岩		
202	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №127	石鏃片	緑色片岩		
203	Ⅱ層 Ⅱ層 100/110 №293	石材	ニーズ		
204	Ⅱ層 Ⅱ層 100/110 №305	石鏃	緑色片岩		
205	Ⅱ層 Ⅱ層 100/110 №305	石鏃	緑色片岩		
206	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №133	石鏃片	緑色片岩		
207	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №129	石	石(海胆殻カ)		
208	Ⅱ層 Ⅱ層 110/120 №325	石鏃片	緑色片岩		
209	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №14	石鏃片	緑色片岩		
210	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №111	石鏃片	ニーズ		
211	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №147	石材	石英		
212	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №141	石	土の塊ったもの		
213	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №150	石鏃片	緑色片岩		
214	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №152	石鏃片	緑色片岩		
215	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №157	石鏃片	緑色片岩		
216	Ⅱ層 Ⅱ層 90/90 №261	石材	ニーズ		
217	Ⅱ層 Ⅱ層 80/90 №267	石材	片状砂岩		
218	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №145	石鏃	緑色片岩		
219	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №155	石鏃片	石灰岩	讃岐藩・本部	
220	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №158	石	ニーズ		
221	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №168	石鏃片	緑色片岩		
222	Ⅱ層 Ⅱ層 №171	石鏃片	緑色片岩		
223	Ⅱ層 Ⅱ層 №172	石鏃片	緑色片岩		
224	Ⅱ層 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 70/90 粘土質 №52	石鏃片	緑色片岩		
225	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №258	石鏃片	緑色片岩		
226	Ⅱ層 Ⅱ層 90/90 №240	石鏃片	緑色片岩		
227	Ⅱ層 Ⅱ層 80/90 №250	石鏃	緑色片岩		
228	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №222	石鏃片	緑色片岩		
229	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №226	石鏃片	緑色片岩		
230	Ⅱ層 Ⅱ層 70/80 №221	石鏃片	緑色片岩		
231	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №118	石鏃	緑色片岩		
232	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №227	石材	ニーズ		
233	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №193	石鏃	塊状石灰岩		
234	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №119	石鏃	片状砂岩		
235	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №122	石鏃片	緑色片岩		
236	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №199	石鏃片	緑色片岩		
237	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №162	石鏃	炭素(クチャの骨)		
238	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №166	石鏃片	緑色片岩		
239	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №164	石鏃	緑色片岩		
240	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №187	石鏃片	緑色片岩		
241	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №180	石鏃片	緑色片岩		
242	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №175	石鏃片	緑色片岩		
243	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №177	石鏃片	緑色片岩		
244	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №178	石鏃	緑色片岩		
245	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №220	石鏃片	緑色片岩		
246	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №191	石鏃片	石灰岩	讃岐藩・本部	
247	Ⅱ層 Ⅱ層 90/100 №254	石鏃片	緑色片岩		
248	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №204	石鏃	砂岩		
249	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №206	石材	細粒砂岩(ニーズ)		
250	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №163	石鏃	チャート		
251	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №184	石鏃片	ニーズ		
252	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №213	石材	ニーズ		
253	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №117	石鏃	緑色片岩		
254	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №116	石鏃片	ニーズ		
255	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №101	石鏃	炭素(クチャの骨)		
256	Ⅱ層 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 50/80 粘土質 №53	石鏃	炭素(クチャ)		
257	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №107		炭素(クチャ)		
258	Ⅱ層 Ⅱ層 90/100 №277		ニーズ		
259	Ⅱ層 Ⅱ層 90/100 №276	石材	ニーズ		
259	Ⅱ層 Ⅱ層 90/100 №276		緑色片岩		
260	Ⅱ層 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 50/80 粘土質 №36	石鏃	ニーズ		
261	Ⅱ層 Ⅱ層 30/50 №101	石鏃	緑色片岩		
262	Ⅱ層 Ⅱ層 50/80 №138	石鏃片	緑色片岩		
263	Ⅱ層 Ⅱ層 60/70 №228	石鏃片	緑色片岩		
264	Ⅱ層 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 50/80 粘土質 №35	石質	石英		
265	Ⅱ層 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 60/70 №43	石	緑色片岩		
266	Ⅱ層 Ⅱ層 トレンチ Ⅱ層 60/70 粘土質 №48	石鏃	緑色片岩		
267	Ⅱ層 Ⅱ層 70/80 №231	石鏃片	チャート		

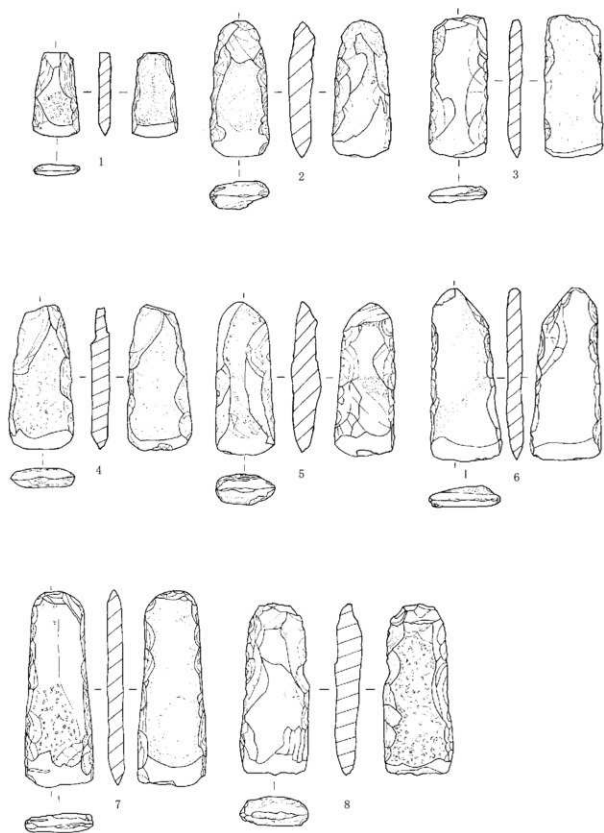
遺物 №	出土地点	種類	石質	産地	備考
268	J9 E8層 30/50 №115	石磨片	緑色片岩		
269	J9 E8層 20/30 №96	石磨	緑色片岩		
270	J9 E8層 70/80 №246	石磨	ニーズ		
271	J9 E8層 70/80 №247	石磨片	緑色片岩		
272	J9 E8層 80/90 №270	石磨	石灰		
273	J9 東トレンチ E8層 50/80 粘土質 №45	石磨	緑色片岩		
274	J9 E8層 80/80 №252	石材	チャート		
275	J9 E8層 80/90 №249	石磨片	緑色片岩		
276	J9 E8層 80/90 №253	石磨片	黒色千枚岩		
277	J9 E8層 80/90 №255	石磨片	緑色片岩		
278	J9 E8層 80/90 №266	石磨	緑色片岩		
279	J9 東トレンチ E8層 90/100 №367	石磨	ニーズ		
280	J9 東トレンチ E8層 110/120 №395	石材	ニーズ		
281	J9 E8層 90/100 №290	石	ニーズ		
282	J9 E8層 90/100 №280	石磨片	ニーズ		
283	J9 E8層 110/120 №294	石磨片	片状砂岩		
284	J9 東トレンチ E8層 110/120 №388	石磨	緑緑石炭質		
285	J9 E8層 110/120 №310	石材	緑色片岩		
286	J9 E8層 100/110 №294	石磨片	片状砂岩		
287	J9 E8層 100/110 №307	石磨片	緑色片岩		
288	J9 E8層 100/110 №227	チャート	石灰		
289	J9 E8層 100/110 №300	石磨	ニーズ		
290	J9 E8層 100/110 №292	石	ニーズ		
291	J9 E8層 110/120 №313	石材	ニーズ		
292	J9 E8層 90/100 №308	石磨片	緑色片岩		
293	J9 E8層 110/120 №318	石材	片状砂岩		
294	J9 E8層 110/120 №305	石材	ニーズ		
295	J9 E8層 110/120 №336	石材	ニーズ		
296	J9 東トレンチ E8層 80/90 №381	石材	ニーズ		
297	J9 東トレンチ E8層 90/100 №367	石材	ニーズ		
298	J9 東トレンチ E8層 110/120 №388	石磨	緑色片岩		
299	J9 東トレンチ E8層 90/100 №372	石材	ニーズ		
300	J9 東トレンチ E8層 100/110 №354	石材	ニーズ		
301	J9 E8層 110/120 №335	石材	ニーズ		
302	J9 東トレンチ E8層 100/110 №377	石材	ニーズ		
303	J9 東トレンチ E8層 110/120 №387	石材	ニーズ		
304	J9 東トレンチ E8層 110/120 №380	石材	ニーズ		
305	J9 E8層 110/120 №327	石材	ニーズ		
306	J9 E8層 110/120 №334	石材	ニーズ		
307	J9 東トレンチ E8層 140/150 砂礫リゾグ 層1 №426	石磨	泥炭質		
308	J9 E8層 110/120 №335	石材	ニーズ		
309	J9 西テ 1 E8層 110/120 №517	石磨片	緑色片岩		
310	J9 東トレンチ E8層 110/130 №385	石材	ニーズ		
311	J9 東トレンチ E8層 110/130 №384	石材	ニーズ		
312	J9 東トレンチ E8層 110/120 №379	石磨	緑色片岩		
313	J9 東トレンチ E8層 90/100 №369	石材	緑緑石炭質		
314	J9 東トレンチ E8層 100/110 №365	石磨片	緑色片岩		
315	J9 東トレンチ E8層 110/130 №393	石材	ニーズ		
316	J9 東トレンチ E8層 90/100 №374	石磨片	緑色片岩		
317	J9 東トレンチ E8層 120/130 №421	石材	ニーズ		
318	J9 東トレンチ E8層 120/130 №384	石材	緑色片岩		
319	J9 東トレンチ E8層 120/130 №391	石材	泥炭 (クチャの礫)		
320	J9 東トレンチ E8層 110/130 №396	石材	ニーズ		
321	J9 東トレンチ E8層 100/110 №376	石磨片	緑色片岩		
322	J9 東トレンチ E8層 100/110 №371	石磨片	細粒砂岩		
323	J9 東トレンチ E8層 120/130 №416	石磨片	緑色片岩		
324	J9 東トレンチ E8層 110/120 №381	石材	ニーズ		
325	J9 東トレンチ E8層 120/130 №419	石磨片	緑色片岩		
326	J9 東トレンチ E8層 120/130 №423	石磨片	緑色片岩		
327	J9 東トレンチ E8層 140/150 砂礫リゾグ 層1 №425	石磨	緑色片岩		
328	J9 東トレンチ E8層 90/100 №366	石材	ニーズ		
329	J9 東トレンチ E8層 100/110 №359	石磨	ニーズ		
330	J9 東トレンチ E8層 50/80 粘土質 №38	石磨	緑色片岩		
331	J9 東トレンチ E8層 60/70 №46	石磨	緑色片岩		
332	J9 東トレンチ E8層 50/80 粘土質 №33	石磨	緑色片岩		
333	J9 E8層 20/30 №93	石磨	ニーズ		
334	J9 東トレンチ E8層 50/80 粘土質 №44	石磨	緑色片岩		
335	J9 東トレンチ E8層 60/70 粘土質 №31	石磨	緑色片岩		
336	J9 E8層 30/50 №110	石磨	緑色片岩		
337	J9 東トレンチ E8層 90/100 粘土質 №80	石材	ニーズ		
338	J9 E8層 20/30 №90	石材	ニーズ		
339	J9 E8層 5/20 №71	石磨	緑色片岩		
340	J9 東トレンチ E8層 60/70 粘土質 №40	石磨	緑色片岩		
341	J9 E8層 5/20 №88	石磨	緑色片岩		
342	J9 E8層 10/20 №72	石磨	緑色片岩		
343	J9 E8層 5/20 №77	石磨	ニーズ		
344	J9 E8層 5/20 №75	石材	ニーズ		
345	J9 東トレンチ E8層 90/90 粘土質 №58	石磨	緑色片岩		
346	J9 E8層 30/50 №109	石磨	ニーズ		
347	J9 東トレンチ E8層 90/100 粘土質 №59	石材	サンゴ		
348	J9 E8層 30/50 №99	石磨	ニーズ		
349	J9 E8層 5/20 №70	石磨	緑色片岩		
350	J9 東トレンチ E8層 90/100 粘土質 №83	石材	石灰		
351	J9 東トレンチ E8層 90/110 №67	石磨	緑色片岩		
352	J9 東トレンチ E8層 90/100 粘土質 №82	石磨	緑色片岩		
353	J9 E8層 20/30 №87	石材	泥炭 (クチャの礫)		
354	J9 E8層 5/20 №72	石磨	ニーズ		
355	J9 E8層 5/20 №74	石磨	緑色片岩		
356	J9 E8層 5/20 №73	石磨	緑色片岩		
357	J9 東トレンチ E8層 40/50 粘土質 №8	石磨	チャート		

遺物 No.	出土地点	種類	石質	産地	備考
358	J9 南トレンチ E8層 40/50 粘土質 №7	石器	緑色片岩		
359	J9 南トレンチ E8層 30/40 粘土質 №1	石器	緑色片岩		
360	J9 E8層 20/30 №94	石器片	緑色片岩		
361	J9 E8層 0/10 №190	石器	ニーズ		
362	J9 南トレンチ E8層 50/80 №16	石器	緑色片岩		
363	J9 南トレンチ E8層 30/40 粘土質 №17	石器	緑色片岩		
364	J9 南トレンチ E8層 30/40 粘土質 直上 №14	石器	粘板岩		
365	J9 南トレンチ E8層 30/40 粘土質 №3	石器	緑色片岩		
366	J7 E7層直上 №54	石器	ニーズ		
367	J7 E7層直上 №59	石器	ニーズ		
368	J7 E7層 0/10 №225	石器	緑色片岩		
369	J7 E7層直上 №58	石器	緑色片岩		
370	J7 E7層直上 40/50 №71	石	緑色片岩		
371	J7 E7層 0/10 №201	石器	緑色片岩		
372	J7 E7層 0/10 №80	石器	緑色片岩		
373	J7 E7層 0/10 №227	石	ニーズ		
374	J7 E7層直上 №117	石材	ニーズ		
375	J7 南トレンチ E8層 70/80 №245	石器	緑色片岩		
376	J7 E7層直上 №51	石器	緑色片岩		
377	J7 E7層 0/10 №202	石器	ニーズ		
378	J7 E7層 10/20 №89	石器	ニーズ		
379	J7 E7層7 直上 №59	石器	ニーズ		
380	J7 E8層 40/50 №22	石器	ニーズ		
381	J7 E8層 40/50 №107	石器	緑色片岩		
382	J7 E8層 直上 40/50 №103	石器	ニーズ		
383	J7 E8層 40/50 №91	石器	ニーズ		
384	J7 E7層 直上 №10	石器	ニーズ		
385	J7 E7層 直上 №42	石材	ニーズ		
386	J7 E8層 40/50 №58	石材	ニーズ		
387	J7 E8層 40/50 №47	石材	ニーズ		
388	J7 E8層 40/50 №50	石材	ニーズ		
389	J7 E8層 30/40 №4	石器	緑色片岩		
390	J7 E7層 0/10 №228	石材	ニーズ		
391	J7 E7層 直上 40/50 №53	石器	ニーズ		
392	J7 E8層 40/50 №24	石器	ニーズ		
393	J7 E7層 0/10 №220	石器	緑色片岩		
394	J7 E7層 直上 №112	石材	ニーズ		
395	J7 E8層 50/80 №247	石材	緑色片岩		
396	J7 E7層 0/10 №196	石材	ニーズ		
397	J7 E7層 0/10 №232	石	地球石炭層		
398	J7 E7層 0/10 №229	石器	緑色片岩		
399	J7 E7層 0/10 №198	石器	緑色片岩		
400	J7 E7層 0/10 №226	丸石	地球石炭層	ワゴン	
401	J7 E7層 直上 №57	石器	緑色片岩		
402	J7 E7層 直上 №108	石器片	緑色片岩		
403	J7 E7層 0/10 №221	石器	緑色片岩		
404	J7 E7層7 直上 №95	石器片	緑色片岩		
405	J7 E7層 0/10 №223	石	緑色片岩		
406	J7 E7層 0/10 №238	石材	ニーズ		
407	J7 E7層 0/10 №211	石器片	緑色片岩		
408	J7 E7層 0/10 №203	石材	ニーズ		
409	J7 南トレンチ E7層 0/10 №252	石片	緑色片岩		
410	J7 E7層 0/10 №229	石器	緑色片岩		
411	J7 E7層 0/10 №210	石器片	緑色片岩		
412	J7 南トレンチ E7層 0/10 №281	石器	緑色片岩		
413	J7 E7層7 直上 №122	石器片	緑色片岩		
414	J7 E8層 30/40 №3	—	ニーズ		
415	J9 E8層 貝層 №358	礫石	礫石		
416	J9 E8層 貝層 №356	礫石	礫石		
417	J9 E8層 貝層 №359	礫石	礫石		
418	J9 東側トレンチ E8層 70/80 №209	石	ニーズ		
419	J9 東側トレンチ E8層 0/10 №207	石	ニーズ		
420	J9 E8層 貝層 №30	礫石	礫石		
421	J9 E8層 貝層 №39	礫石	礫石		
422	J9 E8層 貝層 №46	礫石	礫石		
423	J9 E8層 貝層 №38	礫石	礫石		
424	J9 東側トレンチ E8層 10/20 №67	礫石	礫石		
425	J9 E8層 №50	礫石	礫石		
426	J9 E8層 №48	礫石	礫石		
427	J9 E8層 №37	礫石	礫石		
428	J9 E8層 №40	礫石	礫石		
429	J9 E8層 №33	礫石	礫石		
430	J9 E8層 №53	礫石	礫石		
431	J9 E8層 №41	礫石	礫石		
432	J9 E8層 10/20 №9	礫石	礫石		
433	J9 E8層 10/20 №15	礫石	礫石		
434	J9 E8層 10/20 №14	礫石	礫石		
435	J9 E8層 10/20 №48	礫石	礫石		
436	J9 E8層 10/20 №30	礫石	礫石		
437	J9 E8層 10/20 №49	礫石	礫石		
438	J9 E8層 貝層 №495	礫石	礫石		
439	J9 E8層 貝層 №497	礫石	礫石		
440	J9 E8層 貝層 №496	礫石	礫石		
441	J9 E8層 貝層 №519	礫石	礫石		
442	J9 E8層 貝層 №613	礫石	礫石		
443	J9 E8層 貝層 №554	礫石	礫石		
444	J9 E8層 貝層 №559	礫石	礫石		
445	J9 E8層 貝層 №665	石	地球石炭層		
446	J9 E8層 貝層 №439	礫石	礫石		
447	J9 E8層 貝層 №476	礫石	礫石		
448	J9 E8層 貝層 №455	礫石	礫石		
449	J9 E8層 貝層 №473	礫石	礫石		
450	J7 E8層 40/50 №69	石器	緑色片岩		

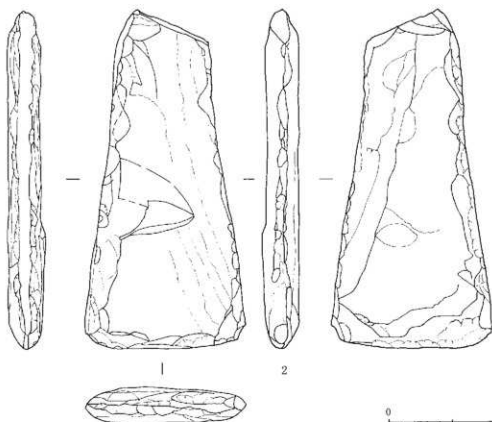
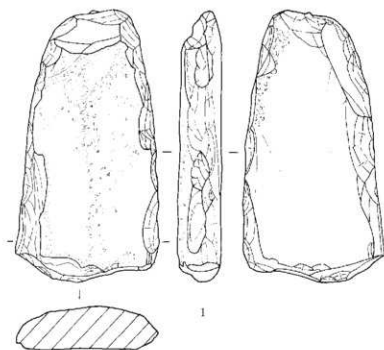
第11表 石器観察一覧

探検番号 図版番号	種類	出土地点	順序	法量 (cm・g)				材質	観察事項
				長	幅	厚	重		
第21図 1 図版31の1	石斧	I-8 貝塚下	I f 圖 No50	6.50	3.70	0.90	37.50	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。小型。敲打と研磨で成形。平面形は扁平なバ字形。横断面は長楕円形。背面側面は平坦に研磨する。刃縁は明瞭で、刃こぼれが殆んどない。
第21図 2 図版31の2	石斧	J-7	I f 圖10/20 No12	10.50	4.60	1.90	143.70	輝綠岩	刃部磨製石斧。両刃。敲打と研磨で成形する。平面形は刃部から頸部へやや窄まる短楕円形。頸部は丸みを帯び、横断面はほぼ円形。僅かな刃こぼれはあるが、刃縁は明瞭。
第21図 3 図版31の3	石斧	J-7	I f 圖7圖上 No5	10.90	4.45	0.90	92.60	輝綠岩	刃部磨製石斧。片刃（背・腹で刃面の大きさが違う。両刃か?）。扁平な裏材を使用。敲打と研磨で成形する。平面形は短楕円形。横断面は長楕円形。刃縁、刃角とも明瞭。
第21図 4 図版31の4	石斧	I-9 東側トレンチ	I f 圖0/10 No128	11.15	5.00	1.40	143.80	輝綠岩	刃部磨製石斧。両刃。敲打と研磨で成形。平面形は刃部から頸部へやや窄まるバ字形。横断面は長楕円形。刃縁は厚鈍する。
第21図 5 図版31の5	石斧	J-7・8	攪乱坑	11.85	4.50	2.35	193.20	輝綠岩	刃部磨製石斧。両刃。敲打と研磨で成形する。平面形は刃部から頸部へゆるやかに窄まる短楕円形。頸部は丸みを帯び、横断面は楕円形。一部刃こぼれがあるが、刃縁・刃角とも明瞭。
第21図 6 図版31の6	石斧	表土割ぎ	-	13.20	5.50	1.50	172.30	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。扁平な裏材を使用。敲打と研磨で成形する。平面形は短楕円形。頸部は内側に窄まる（頸部は欠失?）。横断面は扁平な楕円形。小さな刃こぼれがあるが、刃縁は明瞭でやや流線的。
第21図 7 図版31の7	石斧	K-7	I f 圖 0/10 No315	15.00	5.25	1.40	204.70	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。扁平な裏材を使用。敲打と研磨で成形する。平面形は刃部から頸部へやや窄まるバ字形（短楕円形?）。頸部は丸みを帯び、横断面は長楕円形。一部刃こぼれがあるが残存刃縁は明瞭。
第21図 8 図版31の8	石斧	K-7	I f 圖 0/10 No316	13.20	5.40	2.20	239.90	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。側面を打ち欠いて成形する。平面形は短楕円形。頸部はやや丸みを帯び、側面の一部を挟む。横断面は楕円形。側面はやや斜鋭状を呈する。大きな刃こぼれがあるが残存刃縁、刃角は明瞭。刃角両側面に平坦な研磨面が僅かに残る。
第22図 1 図版32の1	大型石斧	表土割ぎ	-	21.10	11.10	3.40	1400.00	緑色片岩	大型石斧。厚みのある裏材を使用。平面形は頸部へ窄まる狭長方形。横断面は長楕円形。側面を打ち欠いて成形。表面は研磨と自然派。裏面は平坦な割製面。（大型石斧の半壊品か?）
第22図 2 図版32の2	大型石斧	表土割ぎ	-	26.30	13.60	2.90	1400.00	緑色片岩	大型石斧。平面形はバ字形。横断面は長楕円形。研磨と敲打で成形する。左側面と頸部はやや平坦。右側面は表裏両面から敲打痕がある。刃部製作途中の未製品と思われる。（或いは敲打痕?）
第23図 1 図版33の1	大型石斧	G-13	No1	37.70	8.7~11.5	2.10	1250.00	緑色片岩	大型石斧。扁平な裏材を使用。側面を打ち欠き成形する。平面形は刃部から頸部へ窄まる短長方形。表面半分は大きな割製面。刃部は敲打痕で刃縁が明瞭でない。大型石器集中部出土。
第23図 2 図版33の2	大型石斧	G-13	No2	31.90	11.50	2.20	1450.00	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。扁平な裏材を使用。側面を打ち欠き成形する。平面形は狭長方形。刃部は小さく刃こぼれが多い。大型石器集中部出土。
第24図 1 図版34の1	割片	M-19	I c or II d 圖 20/30	2.40	2.10	0.55	3.10	石英	（割片石）。平面形はほぼ円形。表裏面は滑らかな割製面。縁面は刃状に尖る。
第24図 2 図版34の2	石錐 （スクレイパー）	J-12	II d 圖20/30	6.80	2.90	0.40	9.90	緑色片岩	スクレイパー（小型磨製石）。片刃で非常に薄い。平面形は扁平なやや斜鋭状を呈する。縁全面が刃のように尖る。磨製石斧刃部分割片を再利用か?。
第24図 3 図版34の3	石斧	L-8	II d 圖30/50	8.20	4.80	1.30	76.60	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。全体的に敲打による成形。平面形は短楕円形で頸部は内側に窄まる。側面はやや斜鋭状を呈する。刃部は刃こぼれが自明だが、残存刃縁は明瞭。頸部は割れを刃状に調整か?。
第24図 4 図版34の4	石斧	M-16	II d 圖10/20 （粘土質）	7.80	5.80	1.40	121.70	緑色片岩	磨製石斧。両刃。平面形はバ字形（短楕円形?）。全体的に研磨され、手触りは滑らかな。側面は平坦で、表面は縦溝の摩耗か?。刃こぼれはあるが残存刃縁と刃角は明瞭。刃縁は直鋭状。

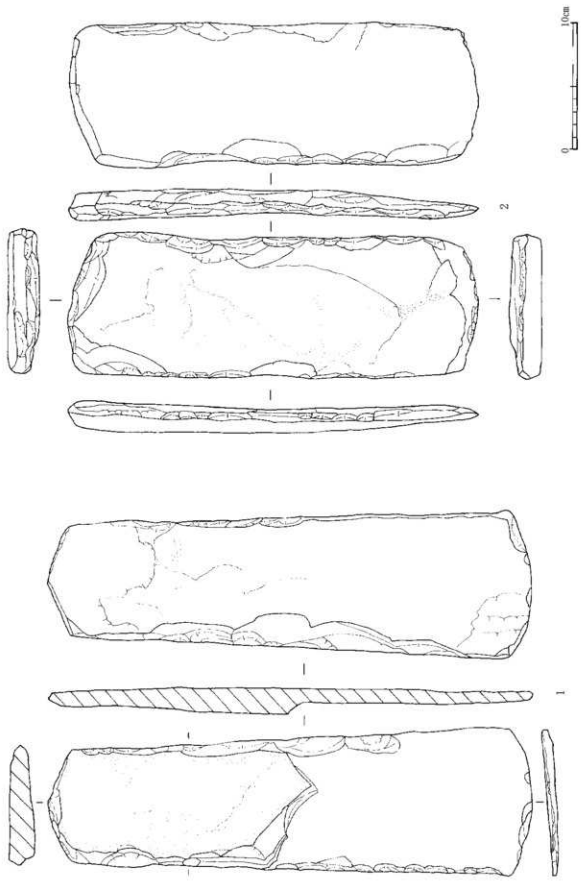
採掘番号 図版番号	種類	出土地点	順序	質量 (cm・g)				石質	観察事項
				長	幅	厚	重		
第24回 図版34の5	石斧	J-12	II d編0/10 黄銅アゼ	9.40	4.70	2.10	105.60	緑色片岩	磨製石斧。片刃（表面で刃面の大きさが違う。片面が大きく割離した両刃石斧か?）。平面形は「バ」字形。刃縁は直状に。側面は磨削と研磨で成形。刃こぼれや刃縁の磨削があるが一部明確な部分もある。側面形はやが筋形。
第24回 図版34の6	石鏝	J-15	II d編 貝塚	7.70	5.80	4.40	264.40	(砂岩)	磨石（磨石）。平面形。側面形とも楕円形。表面中央部に磨打痕があり、内面は凹む。両側面に凹凸を有し、磨り部状になる。下部に磨打痕がみられる。
第25回 図版35の1	石鏝 (石球)	H-16	II d編 貝塚下	(縦: 9.7)	(横: 8.7)	(高: 7.3)	789.20	(砂岩)	石鏝（石球）。球全面に磨打痕。部分的に研磨が見られる。一部欠落する。
第25回 図版35の2	石鏝	J-17	II d編 貝塚下	10.30	11.20	2.60	352.80	砂岩	磨製石斧（未製品?）。片刃。自然面と割離面で表面をなす。刃縁は直状で刃こぼれが多い。側面に凹凸を有し、製作途中か? 側面形はやが筋形。
第25回 図版35の3	凹石	K-18	II d編20/30 貝塚中粘土質	-	-	-	362.60	輝綠岩	凹石。大部分が欠落し、中央部に凹みの一部が見える。
第25回 図版35の4	磨石 ・ 磨石	H-15	II d編 貝塚下20/30	9.95	9.10	5.00	839.10	緑色片岩	磨石（磨石）。平面形は楕円形（第六角形）。側面形は楕丸形状を呈する。厚みのある素材で表面とも研磨する。側面全面と表面中央部に磨打痕を有し、表面は凹凸、側面は盛りを持つ。
第26回 図版36の1	石斧	L-6	II f編下部(机)	6.80	3.10	0.60	25.70	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。小型。扁平な素材を使用する。平面形は略短冊形。刃部から刃部へやや窄まじ。刃縁は小さい。側面は磨打痕がみられる。刃部は平坦に成形する。刃縁は明瞭。
第26回 図版36の2	石斧	H-12	II f編 dot No.87 EL=3.630m	6.10	4.30	0.65	32.20	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。小型。扁平な素材を使用。平面形は短冊形（側面は欠落?）。刃こぼれは殆んどなく、刃縁は明瞭。
第26回 図版36の3	石斧	O-12	II f編 dot No.13 EL=3.953m	18.70	5.40	3.00	427.10	緑色片岩	打製石斧（両刃）。平面形はややカーブする楕丸長方形。横断面は部分的に角を持つ楕円形で刃部が刃部より厚い。側面から表面に手に馴染む厚縁（磨り部分）が見られる。刃こぼれが多く、刃部は磨れている。
第26回 図版36の4	石斧	H-12	II f編 dot No.37 EL=3.745m	10.90	5.25	1.80	145.40	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。平面形は側面が窄まる略「バ」字形。表面は磨削。研磨がみられる。横断面は楕円形。側面形はやが筋状を呈する。
第26回 図版36の5	小型石斧	O-6	II b編10/20	6.20	3.00	1.05	28.70	緑色片岩	磨製石斧。小型。両刃。表面とも研磨する。平面形は「バ」字形で側部は尖る。刃部の刃こぼれが目立つ。磨製石斧の縦割れ破片か?
第26回 図版36の6	石鏝	O-7	地山道上5No.1 EL=3.732m	(長軸9.3)	(短軸8.6)	3.40	304.40	砂岩	磨石（磨石）。平面形は楕円形。円盤状の縁厚2/3ほどが刃部で厚くなる。表面は研磨と割離。裏は割離面。大型石斧の破片。2次使用か?
第26回 図版36の7	石鏝	I-9	II e編0/10 dot No.2 EL=3.483m	4.50	3.00	0.39	6.70	黒色片岩	有蓋磨製石鏝。平面形は「U」状。表面とも研磨する。刃縁に沿って強い凹凸がある。全面に細かい刃こぼれが見られ、基部は僅かに残り（凸蓋有蓋磨）。殆んどは欠失する。
第26回 図版36の8	石杖	O-7	pit No.37内① EL=3.732m	(6.60)	(4.10)	(3.10)	131.60	石英	ほぼ立方体の石杖。側面全面に打割痕が見られる。
第27回 図版37の1	大型石鏝	N-8	II e編・赤土	33.85	12.40	4.80	3425.00	緑色片岩	大型磨石。厚みのある素材を使用。平面形は「バ」字形。横断面は楕円（楕円形）を呈する。表面は平坦。下部に磨打痕。側面に凹凸が入る。表面には左右状に磨り残り痕が見られる。
第27回 図版37の2	大型(石)斧	K-7	II e編40/50 dot No.138	22.60	8.10	1.00	352.80	緑色片岩	石斧（未製品?）。薄く扁平な素材を使用。平面形は長方形。刃部は製作途中か?（或いは使用による割れ?）
第28回 図版38の1	大型石鏝	O-13	No.3	28.00	18.00	2.60	2300.00	緑色片岩	（磨石?）。大型で厚みのある扁平な素材を使用。平面形はいびつな五角形で一部狭い。その両側面は角部分のひびつた磨打痕が見られ、その両側面は平坦な研磨面を呈する。大型石鏝属中部出土。



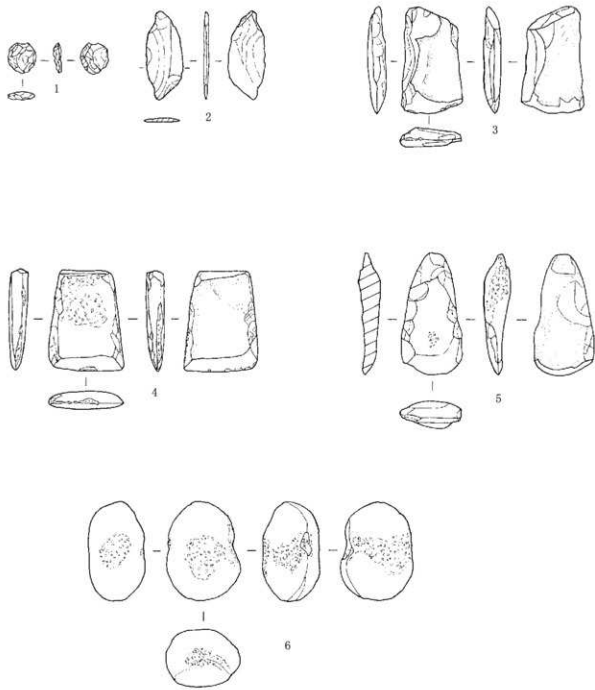
第21圖 (圖版31) 石器①



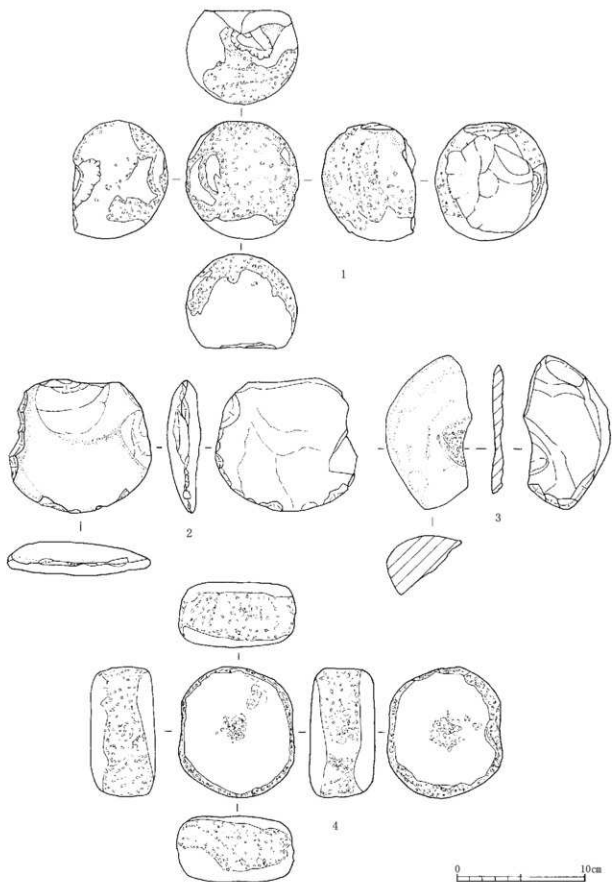
第22图 (图版32) 石器②



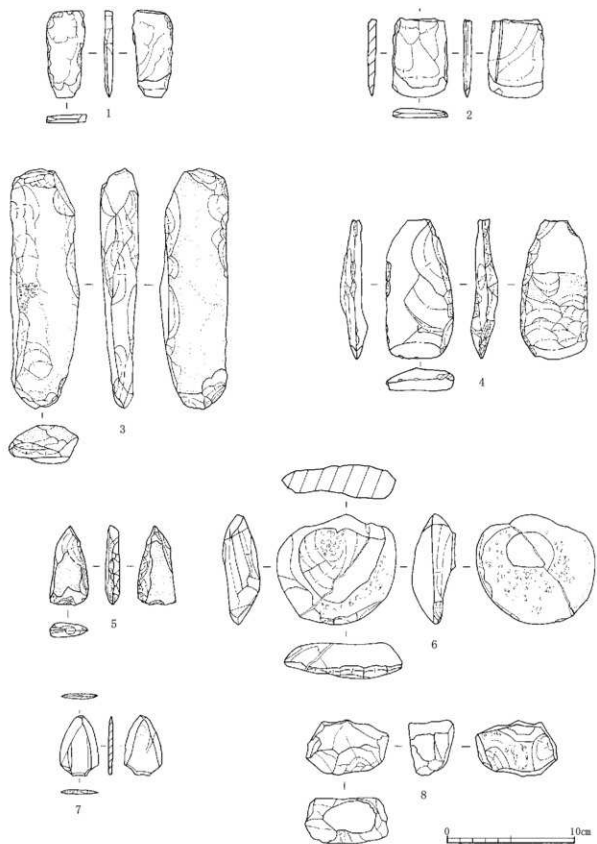
第23圖 (圖版33) 石器③



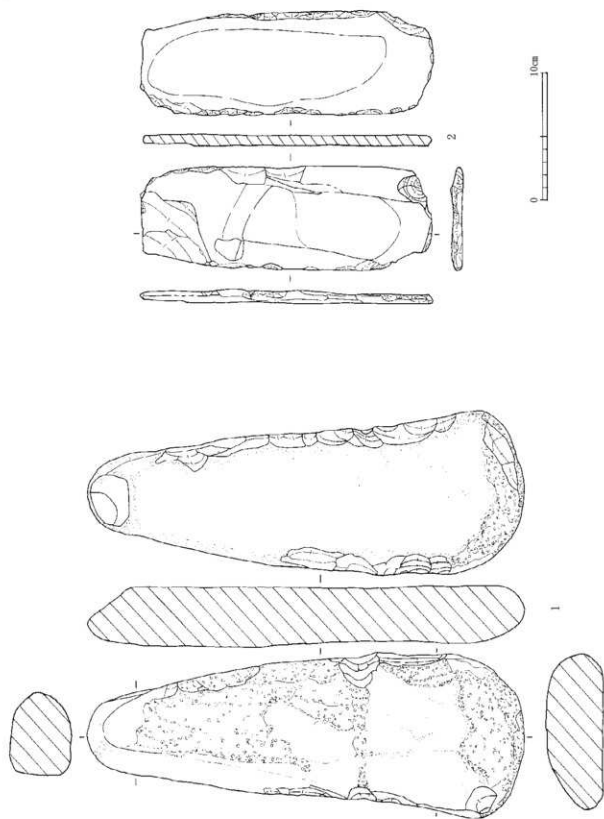
第24图 (图版34) 石器④



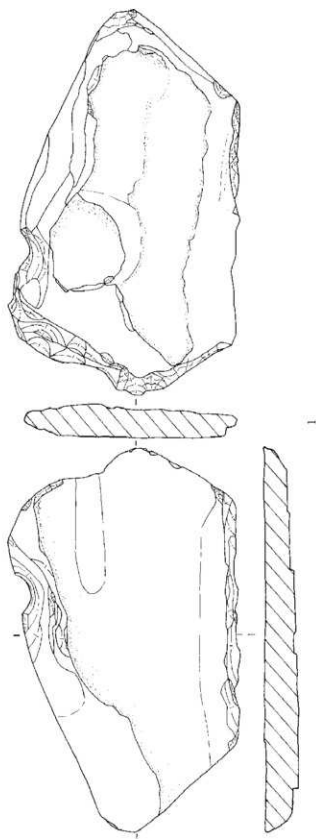
第25图 (图版35) 石器⑤



第26图 (图版36) 石器⑥



第27圖 (圖版37) 石器⑦



第28圖 (圖版38) 石器⑤

第3節 貝製品

本遺跡から貝製品は12点得られた（第12表）。

貝製品の内訳は実用品と考えられるもの5点、装飾品と考えられるもの6点、不明品1点であった。そのうちの特徴的な10点を図示した（第29・30図 図版39・40）。実用品と装飾品の割合はほぼ同数で、その中でも完形品は第30図4メンガイ製貝輪、同図5小玉と同図6札状製品の装飾品3点である。出土層はⅡd層が9点、Ⅱc・Ⅱd層が1点、攪乱1点、出土層序不明が1点である。

個々の特徴について、第13・14表の観察表に示す。

第12表 貝製品出土一覧

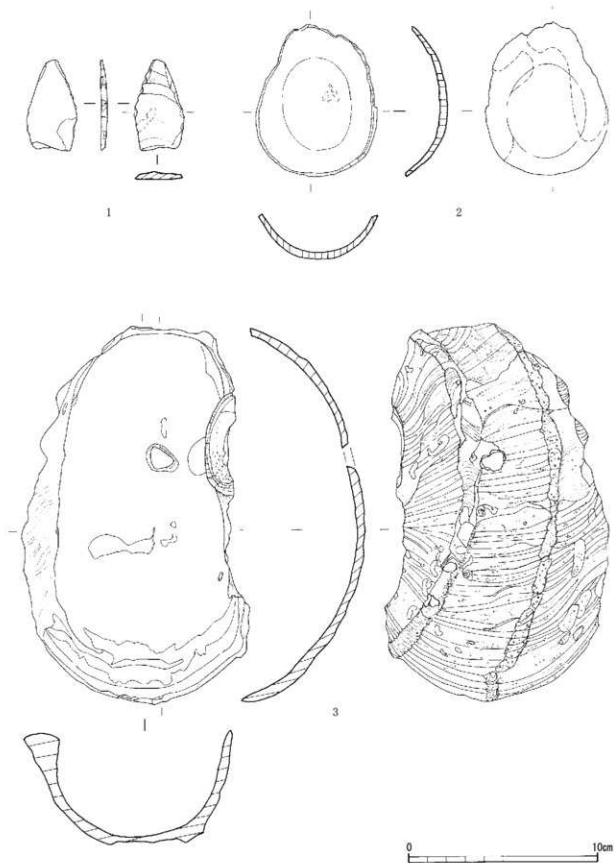
			実用品				装飾品			不明品	合計
			貝弁	匙	鏡	貝輪	貝輪	札状製品	小玉	ウミウサギ	
H-14		貝塚下10/20								1	1
H-16	Ⅱd	貝塚下10/20	1								1
I-8	攪乱	30/40			1						1
I-11	Ⅱd			1							1
I-15	Ⅱd	貝塚下30/40					1				1
I-16	Ⅱd	貝塚下						1			1
J-15	Ⅱd	貝塚下					1				1
J-16	Ⅱd	貝塚下10/20		1							1
K-11	Ⅱc・Ⅱd10/20	検出フク土10/20							1		1
K-14	Ⅱd	Pit No.2 (砂)						1			1
L-12	Ⅱd	30/40					1				1
一括	Ⅱd	貝塚下10/20				1					1
小計			1	2	1	1	3	2	1	1	12
合計				5			6			1	

第13表 貝製品観察一覧①

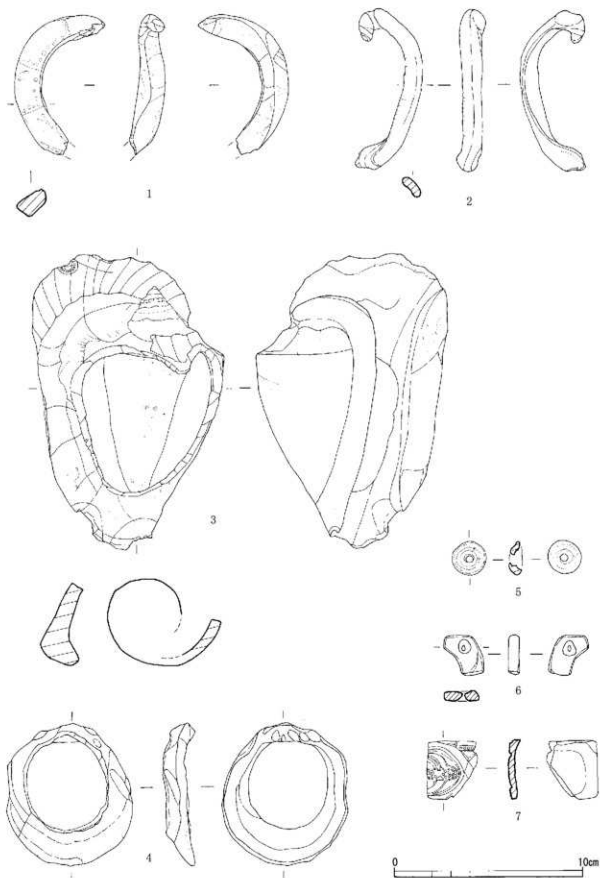
挿図番号 図版番号	貝種と器種	法量 cm g	観察事項	出土地点
第29図 1 図版39の1	クロチョウガイ 貝鏡	高さ：4.8 幅：2.7 厚さ：0.4 重量：5.1	真珠層を利用した製品である。真珠層の色が灰色で、まっすぐな製品なのでクロチョウガイを利用したものと考えられる。両側縁に剝離調整が顕著に確認できる。	I-8 攪乱30/40
第29図 2 図版39の2	ホシダカラガイ 貝匙	高さ：7.95 幅：6.45 重量：34.70	ホシダカラガイの背の部分を利用した製品である。研磨はなく、調整時の打割面そのままである。	I-11 Ⅱd
第29図 3 図版39の3	ヤコウガイ製 貝匙	高さ：19.9 幅：11.4 重量：418.6	ヤコウガイの体層部を利用した製品である。研磨はなく整形時の打割面はそのままの粗製品である。表面の一部には螺肋を打割し真珠層が確認できるが、ほとんどが自然面である。	J-16 Ⅱd貝塚下10/20

第14表 貝製品観察一覧②

挿図番号 図版番号	貝種と器種	法量 cm g	観 察 事 項	出土地点
第30図 1 図版40の1	ゴホウラ 貝輪	高さ：7.4 幅：1.8 重量：24.1	ゴホウラの外唇部を利用した貝輪なので厚いところで1cm、薄い場所で0.5cmの半欠品である。表面に直径2mm程の装飾を施している。縦に4個、その間に4～6個配列している。同図の7にも同様な装飾をしているが、それよりも直径が1mm程大きい。	L-12東側アゼ II d 30/40
第30図 2 図版40の2	ウミウサギガイ 不明品	高さ：8.45 幅：1.00 重量：17.60	外唇部だけの製品である。歯の部分も丸みを帯び、全面に研磨がみられる。上部には渦巻きに似た彫刻を施した製品である。	H-14 貝塚下 10/20
第30図 3 図版40の3	ゴホウラ 貝輪	高さ：15.5 幅：9.8 重量：377.1 孔径 (縦) 7.3 (横) 6.8	背面を大きく穿孔した未製品なのか、または取り出した背面を利用するための残骸なのか判断ができない。研磨はない。	J-15 II d 貝塚下
第30図 4 図版40の4	メンガイ 貝輪	高さ：7.45 幅：6.6 重量：27.8 孔径 (縦) 5.0 (横) 4.2	完形品である。メンガイの復縁を輪状に加工した製品である。切り取った部分に研磨はみられないが、滑らかである。表裏面共に自然のままである。	I-15 II d 貝塚下 30/40
第30図 5 図版40の5	イモガイ製 小玉	高さ：1.8 幅：1.8 重量：1.8 孔径 (縦) 0.50 (横) 0.55	小形イモガイの螺塔部を利用した製品である。殻長に穿孔している。	K-11溝状遺構 II c・II d 10/20 検出フク土 10/20
第30図 6 図版40の6	札状製品	高さ：2.1 幅：2.1 厚さ：0.6 孔径：0.3 重量：3.8	完形品である。全面に丁寧な研磨が施されている。上部に小さな孔があり、両面より穿たれている。紐ずれの跡はみられない。	I-16 II d 貝塚下
第30図 7 図版40の7	イモガイ製 札状製品	高さ：2.6 幅：2.9 厚さ：0.3 重量：4.8	イモガイの体層部を長方形に切り取り、研磨を施している。表面に細かな模様を細工している。幅4mmの帯状文をX状に配したものと思われる。同図1の貝輪に施した刺突文の装飾に酷似している。	K-14 PitNo2 (砂 II d)



第29圖 (圖版39) 貝製品①



第30圖 (圖版40) 貝製品②

第4節 外国産陶磁器

本遺跡から得られた外国産陶磁器は総数1209点を数える。中国産陶磁器の種類としては、白磁118点(第15・16表)、青磁353点(第17・18表)、青花414点(第19・20表)、青磁染付1点、瑠璃釉2点、黒釉陶器天目1点、緑釉2点、翡翠釉1点、褐釉陶器315点(第21・22表)、の9種類が確認できた。

そのほか、タイ産半練2点が確認できた。

A 白磁

白磁は総数118点得られており、器種は、碗、小碗、杯、小杯、皿、小皿が出土している(第31図 図版41・44)。碗が94点と多く、ついで皿が7点出土している。碗は、概ね17世紀～19世紀頃に比定されるものが多い。産地は、そのほとんどが中国福建・広東省系と考えられる。

出土地はⅡc層とⅡd層が多く、出土数の3/4を占め、器種構成も様々である。

第31図・図版41(第23表)1及び、図版44(第31表)1・2・3は、無文の外反碗である。第31図・図版41(第23表)1と図版44(第31表)1は、口唇部を舌状に成形する。第31図・図版41(第23表)2は、内底無釉の碗で、外面に轆轤痕が観察できる。高台は面取りされる。図版44(第31表)4・5・6・7は、型成形のようである。同図4・5は、外反口縁の小碗である。同図6は、高台付きの皿で、断面が逆三角形で皿付は細い。同図7は、小杯で高台断面は逆三角形になる。第31図・図版41(第23表)3は、菊花皿で、見込みに細い蛇の目軸剥ぎを施し、高台断面は逆三角形になる。

第31図・図版41(第23表)4は、白色もしくは青灰色の青花のような色調をしているが、今回は白磁に含めて報告する。器種不明で、底径は3.6cmとなり、見込みに直径2.25cmの窪みがあり、立ち上がりは急である。

第15表 白磁出土一覧①

器種 出土地点	碗			小碗			杯		小杯		皿			小皿		角小皿		器種不明		小計
	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	
表探		5					1		1											7
I層		2																		2
Ⅱa層		1	2																	3
Ⅱc層	8	20	5			1	1	1	1	1					1			1	1	41
Ⅱc・Ⅱd層	3	8	2	1								4								18
Ⅱd(上部)層		3																		3
Ⅱd層	5	11	1	1	1								2							21
Ⅲa層	1	4													1					6
Ⅲb層		1																		1
攪乱	3	7	2						2								1	1		16
合計	20	62	12	2	1	1	2	1	4	1	4	2	2	2	1	2	1	1		118

第16表 白磁出土一覽②

出土地点	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	一括	合計	グリッド 合計	
G IIa層																	1			1	1	
H 表探															1						1	3
I層														2							2	
I IIa層																2					2	5
攪乱				1	2																3	
J IIc・IId層										1											1	5
攪乱					2												1	1			4	
K IIc・IId層						1			1	1											3	11
IId層								3	1		1		1								6	
攪乱					2																2	
L 表探				1											1						2	19
IIc層					1																1	
IIc・IId層				1	1	1		1	1		1										6	
IId(上部)層												2									2	
IId層					2			2	1	1			2								8	
M IIc層				2	1				1	1											5	27
IIc・IId層					2			2		1	1			2							8	
IId(上部)層										1											1	
IId層						1	1		3		1			1							7	
攪乱				4											1	1					6	
N IIc層					2	2	3		1	1	4	6	5								24	28
IIIa層					1						1		1								3	
IIIb層					1																1	
O IIc層				2		1	1		1		2	2									9	12
IIIa層						1			1		1										3	
P 表探							1														1	5
IIc層					1	1		1	1												4	
N~P 表探								1													1	1
一括 表探																				1	1	1
合計		0	6	11	13	7	6	5	11	8	13	14	6	4	7	4	1	1	0	1	118	118

B 青磁

青磁は総数353点得られており、器種は、碗、小碗、皿、盤、瓶、袋物が出土している。碗が295点と多く、ついで皿が17点出土している。概ね、15世紀後半～16世紀中に比定されるものが多く確認でき、素地・釉が精良なものは少なく、粗雑なものが多い。産地は、そのほとんどが中国福建・広東省系と考えられる。出土地はⅡc層とⅡd層が多く、出土数の2/3を占め、器種構成も様々である。

碗の文様は、外体面に雷文・蓮弁・細蓮弁が各々13～15点ほどで、そのほか、見込みに刻花文や印花文+菊・渦巻文、草花文が数点確認できた。碗の器形は、直口口縁が多い。

図版44（第32表）8は、無文外反碗である。第31図・図版41（第24表）5～7と図版44（第32表）9は、直口口縁の線刻蓮弁文碗である。厚い釉を施した第31図・図版41（第24表）5と薄い釉を施した同図6・7、図版44（第32表）9とに分けられる。文様は、第31図・図版41（第24表）5は篋描きで幅0.6cm程の細蓮弁文を描き、同図7は片切り彫りで口唇部に一条の圓線が廻らされ、蓮弁の剣先が簡略化された、幅1cm程の蓮弁を描く。同図6は篋描きで蓮弁の剣先が簡略化し、口唇部に一条の圓線が廻らされ、幅1.3cm程の蓮弁を描く。図版44（第32表）9は、篋描きで蓮弁の剣先が簡略化し、口唇部に一条の圓線が廻らされ、幅0.8cm程の蓮弁を描く。第31図・図版41（第24表）8～10は、雷文帯碗である。同図8・9は、直口口縁で内体面は無文である。同図10は外反口縁の雷文帯碗で、内外体面に雷文が描かれる。いずれも、厚い釉を施す。同図8は、外体面口唇部に、片切り彫りで雷文帯を施す。同図9は、外体面口唇部に、型押しで雷文帯を施す。同図10は、内外体面胴部にくずれた雷文を施す。第32図・図版42（第25表）1・第31図・図版41（第24表）12～14と図版44（第32表）10・11は、碗の底部である。厚い釉を施した第31図・図版41（第24表）13、図版44（第32表）11と第32図・図版42（第25表）1、第31図・図版41（第24表）12・14、図版44（第32表）10とに分けられる。第31図・図版41（第24表）13と図版44（第32表）11は見込みに一条の圓線を描きその中に陰印花を施す。高台内は、蛇の目刺しが施される。第32図・図版42（第25表）1と第31図・図版41（第24表）12・14は、外対面に草花文？を施す。

第17表 青磁出土一覧①

器種 層序	碗				小碗	皿			盤		瓶	袋物		器種不明		合計
	直口碗	外反碗	胴部	底部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	胴部	胴部	底部	
表採	4	2	9	2		2	1								1	21
I層	1	1														2
Ⅱa層	2		8	2												12
Ⅱc層	16	4	37	15		3						1		27	3	106
Ⅱc(下部)層							1									1
Ⅱc・Ⅱd層	7	3	40	5	1	3						1	1			61
Ⅱd(上部)層	1															1
Ⅱd層	16	2	47	6		2		1		1	1	1		1		78
Ⅱd・Ⅱd(粘土質)層			1													1
Ⅱd(粘土質)層	1		6	1												8
Ⅲa層	7	1	24	2		2	1									37
Ⅲb層	1		4	2			1									8
攪乱	6		9						1						1	17
合計	62	13	185	35	1	12	4	1	1	1	1	3	1	30	3	353
器種別合計	295				1	17			3		3	1	33			353

*表採には、表土剥ぎ、表採、表面清掃、南壁清掃、不明が含まれる。

高台内は、無軸もしくは蛇の目軸刺ぎとなる。第31図・図版41(第24表)13は、外面に轆轤痕が観察でき、焼成も悪い。高台は幅が1.4cmと幅広く、畳付は面取される。図版44(第32表)10は、高台の脚が比較的高く、畳付は面取される。

図版45(第33表)1~3は皿である。同図1は、口折れ皿で、内体面から罍上面へ折れる部分に丸みを持つ。外体面には蓮弁文?が描かれている。同図2は、腰折れ外反皿で、外体面に蓮弁の文様を施す。蓮弁は弁先が尖っていない浅い片切彫りになる。器厚は、8mmと厚くなっている。同図3は、皿の底部で、見込みに菊花?の陰印花が施され、粗い貫入がみられる。同図4は、盤の底部である。見込み部分の器厚は、2.2cmの厚みがある。第32図・図版42(第25表)2は、瓶の胴部で、外面に篋描きによる弧状の文様を施す。

第18表 青磁出土一覧②

グリッド	層序	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	合計	グリッド 合計
G-19~22 H-19~22 I-19~21	表探														1				1	1
G	I層								1										1	8
	IIa層													2					2	
H	表探				1											1		2	2	5
	IIa層																1	1	2	4
I	表探			2					1										2	22
	IIa層																		5	
J	IIc・II d層									2			1						3	15
	II d層							1		1			3						5	
K	攪乱		7																7	27
	II d層				1						2	1		2					6	
L	攪乱	1	4				1	1							1		1		9	50
	IIc層			1	2				2	1		2							8	
M	IIc・II d層			3			1		1										5	94
	II d層			1	1	1	2	1	2	1	1	3	1	1					13	
N	攪乱	1																	1	72
	表探				1														2	
O	IIc層				1		1		2			1							5	40
	IIc・II d層						2	4	2	2	1								11	
P	II d層		2		4	4	3	4	2	3	5	1	3	1					32	94
	表探									1					1				3	
Q	IIc層		3	3	1			1	2	4		2							16	40
	IIc・II d層			9	8	2	6	5		2	4	4	1						41	
R	II d(上部)層									1									1	94
	II d層				1	2	1	6	5	1	1								17	
S	II d・II d(粘土質)層									1									1	94
	II d(粘土質)層										1	5	2						8	
T	IIIa層		1	2	2	1													6	94
	攪乱	1																	1	
U	表探				1														1	72
	IIc層		2	2	3	3	4	3	2	6	19	2							46	
V	IIc(下部)層							1											1	72
	II d層								1	1	1			1					4	
W	IIIa層			1	2	1		1				7	2						14	40
	III b層			2	1	1	1												5	
X	攪乱	1																	1	40
	IIc層		2	1	5	8			1	9	2								28	
Y	IIIa層		2	2	2	1					1	1							9	40
	III b層	1		1	1														3	
Z	表探												1						1	20
	IIc層	3	1	2		5													11	
AA	IIIa層	1	1	3	2	1													8	20
	合計	9	25	37	36	34	24	31	21	43	48	13	13	4	2	8	2	3	353	

*表探には、表土剥ぎ、表探、表面清掃、南壁清掃、不明が含まれる。

C 青花

青花は総数414点得られており、器種は、碗、小碗、皿、小皿、大皿、杯、小杯、瓶、大鉢、小鉢、鉢、レンゲが出土している。碗が309点と多く、ついで皿が39点出土している。概ね、16世紀～18世紀中頃に比定されるものが多い。産地は、そのほとんどが中国福建・広東省系と考えられる。

出土地はⅡc層とⅡd層が多く、出土数の1/2を占め、器種構成も様々である。

第32図・図版42（第26表）3・4・5及び、図版45（第34表）5～8は碗の口縁部である。第32図・図版42（第26表）3・4・5及び、図版45（第34表）5・6は直口口縁で、図版45（第34表）7・8は外反口縁である。第32図・図版42（第26表）3・4は、筆描きの文様で、外面口唇部に満状唐草文？や上部と下部に一本の圈線を廻らせ、その中に筆書きの文様を施す。そのほかに、直口口縁の文様は麒麟（第32図 図版42 第26表5）、波濤文？（図版45 第34表5）、花卉唐草文？（同図6）、があり、外反口縁は外体面に寿字文（同図7）や、外体面に唐草文？、内体面に波濤文（同図8）などがみられる。

図版45（第34表）9・10・11・12は碗の底部である。同図9・10は、見込みにホラ貝を描き、外面腰部には、芭蕉文？が施される。外面高台脇に、2条もしくは3条の圈線が施される。同図11・12は、腰部には蓮弁文が施される。同図11は、見込みに二条の圈線を廻らせる。同図12は、外面高台に2条の圈線が施され、高台内に、和美的銘を施す。

図版46（第35表）1・2は小碗の口縁部である。同図1は、外反口縁で外面口唇部に一条の圈線を施し、胴部に馬土文？が描かれている。同図2は、直口口縁で外面に寿字文が施される。

第32図・図版42（第26表）6・7は小碗の底部である。同図6は見込みに二条の圈線を施し、その中に拵じ花文？を施す。外面胴部に牡丹唐草を、高台脇に二条の圈線を施し、高台内に「大明年造？」を施す。同図7は外面胴部に仙芝祝寿文を配し、見込みに花卉を施す。高台内に四角銘款を施す。

第19表 青花出土一覧①

器種	碗		小碗				皿		小皿		大皿		杯		小杯		瓶		大鉢		小鉢		鉢		レンゲ(変皿)		不明		計		
	直口	外反	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部			
表探	3	3	10	6	1		1	1	1	5	3																		4	39	
I層		1	3	2																										5	
IIa層	4	3	11	2	1	2			1	1	2																		4	31	
IIb層	1		1	2											1															5	
IIc層	21	10	69	8	3	3	1			7				1			1	1							1			10	136		
IIc(下層)層				2																										1	3
IIc・IId層	7	3	37	4					1	5				1	1			1	2											62	
IIe(陶器)層			1	1																										2	
IIf層	8	5	21	2			2	1	1	5	1		4				2					1								53	
IIg(陶土質)層												1																		1	
IIh(陶器質)層			1																											1	
IIi層	1	6	12				1																						1	21	
III層			1							1																				1	3
埋瓦	3	9	23	2	4	2			2	1												1			1	1	2	2	52		
計	48	40	192	29	5	9	6	1	4	10	24	1	1	4	1	1	1	3	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	23	414	
合計			309				30			39			6	1	1		4	5		1	1	2		2		2			23	414	

*表探には、表探、表土剥ぎ、埋土、表面清掃、北トレンチ、東壁清掃、(攪乱壁) 清掃が含まれる。

D 青磁染付

青磁染付は1点得られており、皿が出土している。概ね、16世紀頃に比定される。出土地はJ-7のII d層から出土している。

第33図・図版43（第28表）5は、青磁染付の皿である。腰部から立ち上がる皿で、口縁部は直口である。外面に薄青色の釉が掛かり、内面には呉須で花唐草文が施され、その上から透明釉を施している。青磁染付の類似資料は、小皿であるが『天界寺跡 I』に掲載されている。¹¹²

E 瑠璃釉

瑠璃釉は2点得られており、碗と器種不明が出土している。概ね、16世紀頃に比定される。出土地は、II d層から出土している。

第33図・図版43（第29表）6は、瑠璃釉の碗である。腰部から緩やかに立ち上がり、外面に瑠璃釉を施し、内面と高台内には透明釉を施す。曇み付けは、露胎となる。

瑠璃釉の類似資料は、小碗や鉢であるが『天界寺跡 I』に掲載されている。¹¹³

F 黒釉陶器

黒釉陶器は1点得られており、碗が出土している。出土地は、M-6の攪乱から出土している。内外面には茶褐色の釉が掛かり、素地は灰色で黒色の微粒子を含む。胴部小片のため図示できなかった。

G 緑釉

緑釉は2点得られており、壺もしくは瓶と器種不明の胴部が出土している。出土地は、M-11のII c・II d層とP-8のII層から出土している。M-11のII c・II d層から出土しているものは、外面に緑釉を施し、内面無釉の壺か瓶で、P-8のII層から出土しているものは胴部小片であった。2点とも胴部小片のため図示できなかった。

H 翡翠釉

翡翠釉は1点得られており、器種不明の胴部が出土している。出土地は、I-21のII a層から出土している。外面に白化粧を施し、文様を描き、その上から翡翠釉を薄く施釉している。胴部小片のため図示できなかった。

I 褐釉陶器

褐釉は総数315点得られており、器種は、壺・鉢・不明が出土しており、壺が265点と多い。概ね、16世紀～18世紀中頃に比定されるものが多い。産地は、中国と考えられる。出土地はⅡc層とⅡd層が多く、出土数の3/4を占め、器種構成も様々である。

図版46（第36表）8～11が褐釉陶器である。同図8は壺の口縁部で、口唇部は僅かに凹がめぐり、内面は微弱に膨らむ。同図9は壺の底部で、僅かに上げ底状となる。内器面には、轆轤痕が明瞭に残る。同図10は小壺の底部で、逆ハの字状に立ちあがる。内器面には、轆轤痕が明瞭に残る。同図11は鉢で、口縁部は内彎し、口唇部を平坦に整える。外面に轆轤跡が残る。

第21表 褐釉陶器出土一覧①

層序	器種	壺				小壺				鉢	不明	小計
		口縁部	頸部	胴部	底部	口縁部	頸部	胴部	底部			
表探				11				1				12
I層				1				1				2
Ⅱa層				9				2				11
Ⅱc層	1		56	3	2		14	2	1			79
Ⅱc(砂混)層			1									1
Ⅱc(下部)層			2				1					3
Ⅱc・Ⅱd層	2		81				1					84
Ⅱd(上部)層			1					1				2
Ⅱd層	3	1	63		2	1	12		1	2		85
Ⅱd(粘土質)層			2	1								3
Ⅲa層			16				5					21
Ⅲb層			1	2								3
褐色砂			1									1
攪乱			6				1					7
地山直上			1									1
小計		6	4	252	3	4	1	38	3	2	2	315
器種別合計			265				46		2	2	2	315

*表探には、表探、清掃、表面清掃、東壁清掃、南壁清掃、埋土、北側畦が含まれる。

J タイ産半練

第33図・図版43（第30表）7と図版46（第37表）12は、タイ産半練の蓋である。

第33図・図版43（第30表）7は、蓋の器態は落とし蓋で、摘み部分の残存である。摘みの形態は、いわゆる宝珠形に類似している。頂部・首部は指撫による磨きがみられる。

図版46（第37表）12は、蓋の器態は落とし蓋で、蓋端部の残存である。

タイ産半練の類似資料は、『渡地村跡』に掲載されている^{註4}。

註

- 1『徳化民富 青花』 P35-28
- 2『天界寺跡Ⅰ』 第33図1～6 P61 青磁染付 小碗
- 3『天界寺跡Ⅰ』 第33図19～21 P61 小碗
- 4『渡地村跡』 第77図6 P116 タイ産半練 蓋

第22表 褐釉陶器出土一覧②

グリッド	層序	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	不明	合計	グリッド合計	
G	I層															2					2	7	
	IIa層																2	2	1		5		
H	表探								1												1	3	
	IIa層										1									1	1		
I	IIc層										1										1	19	
	IIa層																1	2	2		5		
	IIc層											3									3		
	IIc-IId層											2	1	2	2						7		
	II d層									1	1										2		
J	攪乱			2																	2	13	
	IIc-IId層									3											3		
	II d層					3	1	1			1			1							7		
	褐色砂			1																	1		
K	攪乱		1							1											2	40	
	IIc層				1	1			2												4		
	IIc-IId層				3			2	3	1											9		
	II d層			1	4	3	1	7	1	2	1	1	2	2							25		
	IIIb層			1																	1		
L	攪乱		1																		1	50	
	IIc層								1		4	1									6		
	IIc-IId層			2	2		2	8	1	5											20		
	II d層		1	1	7	1	2	3	1	2	3	1		1							23		
L・M	表探		1																		1	1	
M	IIc層		3	1	1			2	1		2	1									11	84	
	IIc-IId層				1	2	1	10	8		8	4	4		1	4					43		
	II d層				1	1		1	8	3	6	1	1								22		
	II d(粘土質)層												2								2		
	IIIa層					1	2		2												5		
N	攪乱		1																		1	67	
	表探				3			1						1							5		
	IIc層			1	2		4	3	1	3	8	10	6		1						39		
	IIc(砂泥)層					1															1		
	IIc(下部)層								3												3		
	IIc-IId層													2							2		
	II d(上部)層								1			1									2		
	II d層								2	1		3									6		
	II d(粘土質)層											1									1		
O	IIIa層					1	1	1	1	2											6	18	
	IIIb層			1									1								2		
	表探					1		1													2		
	IIc層			1	1		4	3		2	2										13		
P	IIIa層					1	1														3	10	
	IIc層					1	1														2		
	IIIa層		1		4		2							1							7		
Q	地山道上												1								1	1	
	表探				1																1		
一括	表探																				2	2	
	合計	0	3	17	32	12	24	38	44	23	40	32	20	9	4	5	4	4	4	2	2	315	315

*表探には、表探、清掃、表面清掃、東壁清掃、南壁清掃、埋土、北側畦が含まれる。

第23表 白磁観察一覧①

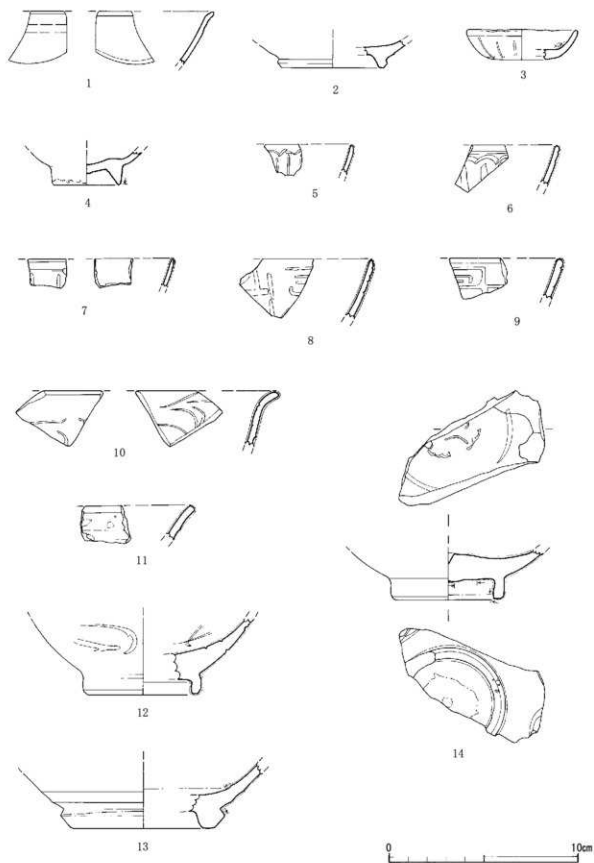
() 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
第31図 1 図版41の1	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多少含む。	内外面に施釉。	灰白色。	なし。	外反する口縁で、口唇部は舌状に成形される。	N-8 西側畦 Ⅲa層 10/20
第31図 2 図版41の2	碗 底部	— — (54)	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	底部を露胎。	なし。	なし。	混入物が多く、墨付を面取している。外面に轆轤痕が観察できる。	K-17 北側畦 Ⅱd層
第31図 3 図版41の3	小皿 口～ 底部	59 16 25	白色で粗粒子。見込みに細い蛇の目輪割ぎ。外底無釉。	内外面に施釉。	青灰色。	なし。	口唇部を刻み、菊花状にする菊花皿である。直口口縁で底部は平底。	N-10 Ⅱc層 0/10 O-9 東側畦 Ⅲa層 10/20
第31図 4 図版41の4	器種 不明 底部	— — 36	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	墨付及び高台面を露胎。	青灰色。	細かい貫入あり。	腰部の立ち上がりは急で、見込みに直径2.2cmの窪みがある。	M-13 Ⅱe層 0/10

第24表 青磁観察一覧①

() 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
第31図 5 図版41の5	碗 口縁部	— — —	乳白色で微粒子。赤褐色粒を多量に含む。	内外面に施釉。釉の厚みは厚い。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	直口碗で外面に蓮井文を施す。蓮井の剣先が鋭略化され、幅0.6cm程の蓮井を描く。	K-17 Ⅱd層 20/30
第31図 6 図版41の6	碗 口縁部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒を極少量含む。	内外面に施釉。釉の厚みは薄い。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	直口碗で外面に蓮井文を施す。蓮井が鋭略化され、口唇部に一条の墨線が隠される。幅1.3cm程の蓮井を描く。	L-11 Ⅱd層 50/60
第31図 7 図版41の7	碗 口縁部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。釉の厚みは薄い。	灰オリーブ色	内外面に、粗い貫入あり。	直口碗で外面に蓮井文を施す。口唇部に一条の墨線が隠される。蓮井の剣先が鋭略化され、幅1cm程の蓮井を描く。	G-22 Ⅱa層 10/20
第31図 8 図版41の8	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	明オリーブ灰色	なし。	直口碗で外体面口唇部に雷文帯を施す。	N-10 西側トレン子 Ⅲb層 0/10
第31図 9 図版41の9	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	明オリーブ灰色	なし。	直口碗で外体面口唇部に雷文帯を施す。	M-11 Ⅲa層 10/20
第31図 10 図版41の10	碗 口縁部	— — —	乳白色で微粒子。赤褐色粒を少量含む。	内外面に施釉。	明オリーブ灰色	なし。	外反碗で内外体面胴部にくずれた雷文を施す。	P-8 Ⅲa層 20/30
第31図 11 図版41の11	碗 口縁部	— — —	白色で粗粒子。黒色・赤褐色粒を多量に含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	直口碗で全体的に軸葉の掛け方である。素地にひびが入る。	I-17 東側畦 Ⅱc層 0/10
第31図 12 図版41の12	碗 底部	— — (63)	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。高台内無釉。	オリーブ灰色	なし。	内外面に草花文?を施す。	L-12 東側畦 Ⅱc層 20/30
第31図 13 図版41の13	碗 底部	— — (76)	赤褐色～灰白色で粗粒子。黒色・白色粒を少量含む。	内底、高台盤より高台内まで無釉。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	焼成が悪く、撫で調整も跡である。内底は軸割ぎの跡が明瞭に残る。高台は面取される。	L-17 Ⅱd層 0/10
第31図 14 図版41の14	碗 底部	— — (61)	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。高台内蛇の目輪割ぎ。	明オリーブ灰色	なし。	見込みに一条の墨線を隠し、文様を施しているようであるが不明である。外面にも、草花文?を施す。	M-16 Ⅱd (粘土質)層 30/40



第31图 (图版41) 白磁·青磁

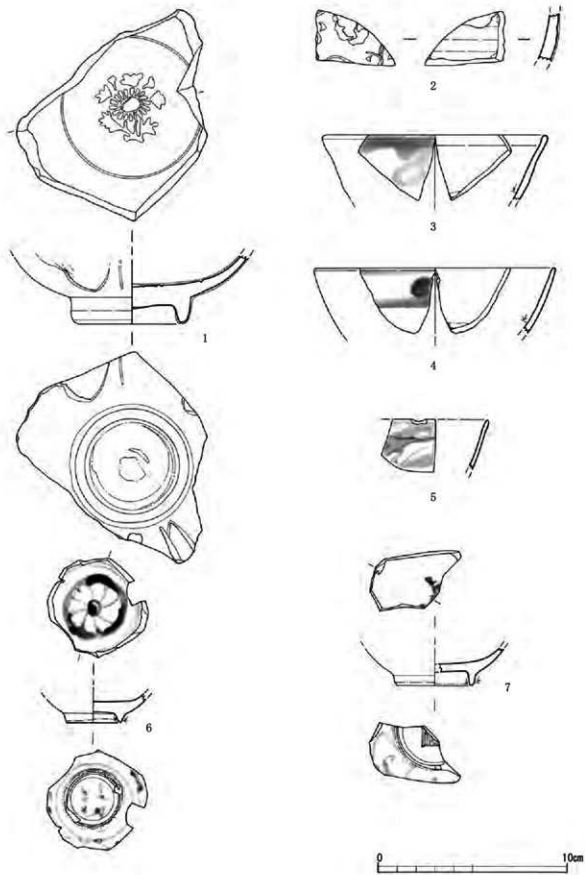
第25表 青磁観察一覧②

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
第32図 1 図版42の1	碗 底部	— — 63	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。高台内を蛇の目軸割ぎ。	オリーブ灰色	なし。	見込みに一条の墨線を廻らせ、陰印花？(スタンプ)を施す。外面には、草花文？を施す。	O-13 IIc層
第32図 2 図版42の2	瓶 胴部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	外面に施釉。内面は露胎。	明オリーブ灰色	粗い貫入あり。	内面は、酸蝕痕が残っており、外面には筒描きによる弧状の文様を施す。	K-9 II d層 0/10

第26表 青花観察一覧①

() 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	貫入	器形・文様	備考	出土地点
第32図 3 図版42の3	碗 口縁部	(120) — —	灰白色で粗粒子。黒色粒が散見される。	内外面に施釉。胴下部は無釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部に渦状唐草文？が施される。	福州周辺	N-12 北側畦 IIc層 0/10
第32図 4 図版42の4	碗 口縁部	(128) — —	灰白色で粗粒子。黒色粒が散見される。	内外面に施釉。胴下部は無釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部の上部と下部に一本の墨線を廻らせ、その中に筆書きの文様が施される。	福州周辺	K-14 西側畦 IIc層 10/20
第32図 5 図版42の5	碗 口縁部	— — —	白色で微粒子。茶褐色粒が多少、黒色粒が極少量散見される。	内外面に施釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部に一条の墨線が施され、胴部に麒麟の文様が施される。		L-12 II d層 0/10
第32図 6 図版42の6	小碗 底部	— — 29	灰白色で微粒子。	内外面に施釉。畳付のみ露胎。	なし。	見込みに、二条の墨線を施しその中に塗り花文を施す。外面胴部に牡丹唐草を、高台内に二条の墨線を施し、高台内に「大明年造？」を施す。	18世紀～19世紀頃	L-15 II d層 40/50 M-14 II d層 30/40 N-14 IIc層 20/30
第32図 7 図版42の7	小碗 底部	— — (40)	灰白色で微粒子。	内外面に施釉。畳付のみ露胎。	なし。	外面胴部に仙芝祝寿文を配し、見込みに花卉文？を施す。高台内に四角銘款を施す。	景徳鎮窯系 18世紀～19世紀	表土割ぎ



第32图 (图版42) 青磁·青花

第27表 青花観察一覧②

() 内は推定

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施軸	貫入	器形・文様	備考	出土地点
第33図 1 図版43の1	皿 底部	— — (97)	灰白色で微粒子。	内外面に施軸。 畳付のみ露胎。	なし。	外面胴部に文様を施し、 高台脇に三条の墨線を施す。 見込みに二条の墨線、 花卉文を施す。高台は、 断面三角形である。	15世紀末～ 16世紀中葉	J-15 II c 層 10/20 K-16 II d 層 10/20
第33図 2 図版43の2	皿 底部	— — (63)	黄白色で粗粒子。	内外面に施軸。 畳付のみ露胎。	粗い貫入あり。	外面胴部に唐草文を配し、 高台脇に二条の墨線を施す。 見込みに二条の墨線を 施し、玉取獅子文を施す。 高台は、断面三角形 である。	15世紀末～ 16世紀中葉	O-10 北側トレンチ III b 層 地山直上
第33図 3 図版43の3	粗 底部	— — (54)	灰白色で微粒子。	内外面に施軸。 畳付および高台 内露胎。	なし。	底部にラム式蓮井文を施す。	16世紀かちつ と古いかも?	M-11 II c・II d 層 30/40 L-12 II c・II d 層 20/30
第33図 4 図版43の4	大鉢 胴部	— — —	黄白色で粗粒子。	内外面に施軸。	粗い貫入あり。	外面胴部に丸文?を施す。 内面に一条の墨線を施す。	福建・広東 系。	I-10 攪乱 西側トレンチ

第28表 青磁染付観察一覧

() 内は推定

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施軸	貫入	器形・文様・軸色	備考	出土地点
第33図 5 図版43の5	皿 口縁～ 胴部	(90) — —	灰白色で粗粒子。茶褐色粒 が散見される。	内外面に施軸。	なし。	腰部から立ち上がる皿で、 口縁部は直口である。外 面に薄い青色の軸が掛か り、内面には呉須で花唐 草文が施され、その上か ら透明軸を施している。	16世紀～	J-7 II d 層 0/10 攪乱

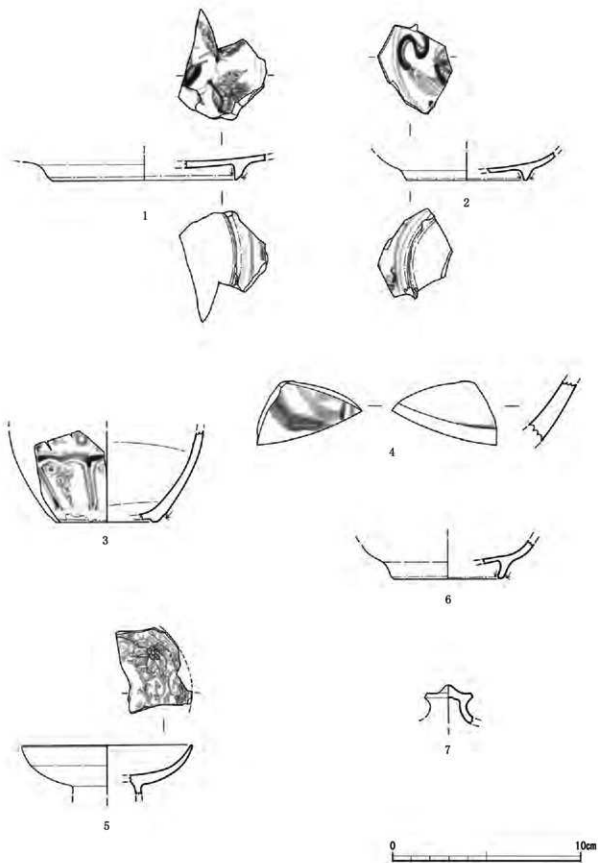
第29表 瑠璃釉観察一覧

() 内は推定

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施軸	貫入	器形・文様・軸色	備考	出土地点
第33図 6 図版43の6	碗 底部	— — (58)	灰白色で微粒子。	内外面に施軸。 畳付のみ露胎。	なし。	腰部から緩やかに立ち上 がる碗である。外面に瑠 璃釉を施し、内面と高台 内には透明軸を施す。		L-12 II d 層 30/40 40/50

第30表 タイ産半練観察一覧①

挿図番号 図版番号	器種 部位	直径 高さ 溝み径 (mm)	胎土	施軸	貫入	器形・文様	備考	出土地点
第33図 7 図版43の7	蓋 頂部	— — 26	灰色で微粒子。白色粒子・褐色 粒子・黒色粒子が多量に散見さ れる。			蓋の器態は落とす蓋で、溝み部分の残 存である。溝みの形態は、いわゆる宝 珠形に類似している。頂部・首部は指 撫による磨きがみられる。	14世紀後半 ～16世紀	L-9 II d 層 10/20



第33図 (図版43) 青花・青磁染付・瑠璃軸・タイ産半練

第31表 白磁観察一覧②

() 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
図版44の1	碗 口縁部	(128) — —	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	灰白色。	細かい貫入あり	僅かに外反する口縁で、口唇部は舌状に成形される。	L-14 II d 層 10/20
図版44の2	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒を多少含む。	内外面に施釉。	灰白色。	なし。	無文外反口縁である。	K-15 北御畦 II d 層 0/10
図版44の3	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	灰白色。	なし。	無文外反口縁である。	L-12 II d 層 30/40
図版44の4	小碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒を多少含む。	内外面に施釉。	乳白色。	なし。	外反口縁である。型造りのようである。	K-13 II d 層 20/30
図版44の5	小碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多少含む。	内外面に施釉。	乳白色。	なし。	外反口縁である。型造りのようである。	L-7 II c・II d 層 0/10
図版44の6	皿 底部	— — (106)	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。	畳付を露胎。	乳白色。	なし。	器厚は薄手である。高台断面は逆三角形で、畳付は細い。畳み付けに砂が少量付着する。	L-8 II d 層 10/20
図版44の7	小杯 底部	— — 20.5	灰白色で微粒子。	畳付を露胎。	乳白色。	細かい貫入あり。	畳付は露胎となり、砂?が付着する。高台断面は逆三角形となり、高台内に型造りのシワが残る。	M-19 攪乱 0/10

第32表 青磁観察一覧③

() 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
図版44の8	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	無文の、外反口縁の碗である。	M-10 II c・II d 層 10/40
図版44の9	碗 口縁部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	なし。	直口碗で外面に蓮井文を施す。蓮井の剣先が簡略化し消滅する。幅0.8cm程の蓮井を描く。	K-13 II d 層 0/10
図版44の10	碗 底部	— — (44)	白色で粗粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。高台内側の半ばまで施釉され、高台内は無釉である。	明オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	高台の脚が高く、面取される。	M-16 II c・II d 層 20/30
図版44の11	碗 底部	— — 62	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。高台内を蛇の目軸割ぎ。	明オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	見込みに一糸の墨線を廻らせ、印花文を施す。	表採

第33表 青磁観察一覧④

() 内は推定

神図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
図版45の1	皿 口縁部	(120) — —	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	なし。	口折れ皿である。内面体から踵上面へ折れる部分が丸みを持ち、踵部は狭い。外体面には蓮弁文?が描かれている。	M-11 IIc・II d層 0/10
図版45の2	皿 口縁部	(132) — —	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	なし。	踵折れ外反皿で、蓮弁の文様を施す。	表探
図版45の3	皿 底部	— — —	灰白色で粗粒子。赤褐色粒を多く含む。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。 高台内無釉。	明オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	見込みに、菊花?の陰印花が施される。	L-9 II d層 0/10
図版45の4	盤 底部	— — —	灰白色で微粒子。赤褐色・黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。 高台内を蛇の目軸割ぎ。	オリーブ灰色	なし。	器厚は、2.2cmで厚みがある。	L-15 II d層 10/20

第34表 青花観察一覧③

() 内は推定

神図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	貫入	器形・文様	備考	出土地点
図版45の5	碗 口縁部	(120) — —	灰白色で微粒子。茶褐色粒が散見される。	内外面に施釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部を肥厚させ、上部と下部に一本の墨線を施させ、その中に波濤文が施される。内面口唇部に、一本の墨線を施させる。	清代	N-11 北トレンチ II c層 10/20
図版45の6	碗 口縁部	(132) — —	白色で微粒子。茶褐色粒が多少、黒色粒が極少量散見される。	内外面に施釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部に二条の墨線が施され、胴部に花卉唐草文?が施される。	清代	表土剥ぎ
図版45の7	碗 口縁部	— — —	白色で微粒子。茶褐色粒が多少、黒色粒が極少量散見される。	内外面に施釉。	なし。	外反口縁である。外面口唇部に三条の墨線を施し、下部に寿字文が施される。		N-8 II c層 10/20
図版45の8	碗 口縁部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒が散見される。	内外面に施釉。	なし。	外反口縁である。外面口唇部に一条の墨線を施し、下部に唐草文?が施される。内面口唇下部に波濤文を施す。		N-10 北側畦 III a層 10/20
図版45の9	碗 底部	— — (58)	灰白色で微粒子。茶褐色粒が散見される。	畳み付けのみ無釉。	なし。	見込みに牡丹文?を描く。外面高台脇に2条の墨線を施らし、外面腹部には芭蕉文が施される。	15世紀~16世紀	M-16 II d層 0/10
図版45の10	碗 底部	— — —	灰白色で粗粒子。茶褐色粒が散見される。	内外面に施釉。	なし。	見込みに牡丹文?を描く。外面高台脇に3条の墨線を施らし、外面腹部には芭蕉文が施される。	15世紀~16世紀	M-9 II c・II d層 60/70
図版45の11	碗 底部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒が散見される。	畳み付けのみ無釉。	なし。	見込みに二条の墨線を施らせる。外面腹部には、蓮弁文が施される。		K-14 II c・II d層 0/10
図版45の12	碗 底部	— — 59	灰白色で微粒子。茶褐色粒が散見される。	畳み付けのみ無釉。	なし。	外面高台に2条の墨線が施され、腹部には蓮弁文が施される。高台内に、和英の銘を施す。		表探

第35表 青花観察一覧④

() 内は推定

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 高さ 高台径 (mm)	素地	施軸	貫入	器形・文様	備考	出土地点
図版46の1	小碗 口縁部	— — —	白色で微粒子。 茶褐色粒が多少、 黒色粒が極少量散見さ れる。	内外面に施軸。	なし。	反外口縁である。外面口 唇部に一条の墨線を施し、 胴部に馬土文が描かれて いる。		N-11 IIc層
図版46の2	小碗 口縁部	(60) — —	灰白色で微粒 子。	内外面に施軸。 口唇部は、無軸。	なし。	直口口縁である。外面に 寿字文が施される。	16世紀後半	M-13 IIc層 0/10
図版46の3	皿 口縁部	(205) — —	黄白色で粗粒 子。	内外面に施軸。	粗い貫入あ り。	腰折れ直口皿である。口 唇部外面に一条、内面に 筆書きの文様が施される。		O-13 IIIa層 10/20
図版46の4	皿 底部	— — (82)	灰白色で微粒 子。	内外面に施軸。 畳付のみ露胎。	なし。	外面胴部に唐草文?を配し、 見込みに二条の墨線を施し、 花卉文を施す。高台は、断 面三角形である。	15世紀末～ 16世紀中葉	L-11 II d層 10/20
図版46の5	皿 底部	— — (86)	黄白色で粗粒 子。	内外面に施軸。 畳付のみ露胎。	粗い貫入あ り。	外面胴部に唐草文?を配し、 見込みに二条の墨線を施し、 十字花文を施す。高台は、 断面三角形である。	15世紀末～ 16世紀中葉	L-11 II d層 20/30
図版46の6	皿 底部	152 — 67	灰白色で粗粒 子。茶褐色粒 が散見される。	内外面に施軸。 畳付のみ露胎。	なし。	口唇部に二条の墨線を施 し、見込みに鳥花文?を 施す。外面腹部の立ち上 がりに二条の墨線を施す。 高台内に、二条の墨線を 施し、合の印を施す。		表土剥ぎ
図版46の7	小杯 底部	— 18	灰白色で微粒 子。	畳み付け、高台 内無軸。	なし。	見込みに、一条の墨線を 施し、元の銘を施す。	16世紀～ 17世紀前半	P-9 II b層

第36表 褐釉陶器観察一覧

() 内は推定

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 高さ 底径 (mm)	素地	施軸 釉色	器形・文様	備考	出土地点
図版46の8	壺 口縁部	(206) — —	灰白色で、白色粒子・褐色粒子 が多量に散見される。	内外面に施 軸。黄褐色。	口唇部は僅かに凹がめぐ り、内面は微窩に彫らむ。		K-9 北側畦 II d層 0/10
図版46の9	壺 底部	— — (190)	赤褐色で、大粒 (1mm～2mm) の透明粒子 (石英)・白色粒子・ 褐色粒子が多量に散見される。	なし。	僅かに上げ底状となる。 内器面には、轆轤痕が明 瞭に残る。		N-15 北側畦 II b層 0/10
図版46の10	小壺 底部	— — 80	橙褐色で、透明微粒子 (石英)・ 白色微粒子・褐色粒子が多量に 散見される。	なし。	逆八の字状に立ちあがる。 内器面には、轆轤痕が明 瞭に残る。		N-15 北側畦 II d (上部) 層
図版46の11	鉢 口縁部	— — —	赤褐色で、透明微粒子 (石英)・ 白色微粒子・褐色粒子が多量に 散見される。	なし。	口縁部は内彎し、口唇部 を平坦に整える。外面に 轆轤跡が残る。		L-9 II d層 0/10

第37表 タイ産半練観察一覧②

() 内は推定

挿図番号 図版番号	器種	直径 高さ 積み径 (mm)	胎土	器形・文様	備考	出土地点
図版46の12	蓋 端部	(130) — —	焼成された内外面は淡褐色とな り、内側は灰色で微粒子である。 透明粒子 (石英)・白色粒子・ 褐色粒子・黒色粒子が多量に散 見される。	蓋の器態は落とし蓋で、蓋端部の残存 である。	14世紀後半 ～16世紀	M-13 IIc層 10/20

第5節 本土産陶磁器

鏡水箕隅原C遺跡から出土した本土産陶磁器の中から特徴的なものを報告する(第34~36図 図版47~49)。

全体として時代的には近代(19世紀後半~戦後)で、623点(磁器600点、陶器23点)を数えた(第38~40表)。磁器の産地は砥部・肥前系・瀬戸美濃系が確認できた。陶器の産地は珉平焼、内野山、薩摩焼、唐津であった。器種としては碗・小碗・皿・杯・蓋等が得られた。量的には碗が一番多く全体の約45%を占め、以下皿、小碗と続くが、僅かながら急須・香炉・瓶などの袋物も出土した。今回は細片が多く器種不明が1/3を占めた。この構成は鏡水箕隅原C遺跡から600mほど南に位置する鏡水土砂場原A遺跡(那覇市:近世・近代)とよく似た傾向にあると思われた。

確認できた技法は、型紙染付け、銅版刷り、印判、クロム青磁等であった。型紙染付けは特に砥部産(いわゆるスカンマカイ)が多く見られた。また、生産者別標記号の付された碗の底部が1点出土した(第36図10 図版49の10)。岐950とあり『土岐津町誌』史料編によると駄知町 加藤鳩次郎氏の作成によるものということが確認できた。

鏡水箕隅原C遺跡から出土した本土産陶磁器は鏡水土砂場原A遺跡に比べて、産地が九州から関西まで広範囲であるように思われる。主な本土産陶磁器は、第36図 図版49に図示した。なお、第44表に個々の資料の特徴を示す。

本土産磁器集中部について

L-12グリッドII a層から本土産磁器が集中して出土した(第34・35図 図版47・48)。中でも砥部焼(いわゆるスカンマカイ)が一番多かった。外面に同一の型紙が使われていてなおかつ器形も変わらないものでも、見込みの模様は3パターン確認できた。また、見込みの模様に合わせてサイズにやや違いが見られた(第41表)。端反り碗であることから、古い時期のものではないと思われる。第42・43表に個々の資料の特徴を示す。

珉平焼について

L-16グリッド埋土から珉平焼(淡路島産)が1点出土している(第36図17 図版49の17)。珉平焼は、江戸時代後期の文政年間(1818~1830年)に三原郡伊賀野村(現、南淡町伊賀野)で賀集珉平(1796~1871年)が創業した京風の流れを汲むやきものである。

賀集珉平は、京焼の陶工尾形周平(初代)と出会い、池の内村(現 洲本市城戸)での白土の発見などをきっかけに製陶業を始めた。和物の仁清写彩色や錆焼から当時流行の中国系の青花磁・絵高麗・白高麗・青磁・赤絵・紫泥・白泥、象嵌焼、朝鮮模製、按南・交趾模製、ヨーロッパ系の紅毛彩色など多種多様な焼成を手がけ、品種も茶器・酒器・花器・置物・その他の日常雑器にまで広くおよんでいた³¹⁾。

珉平の死後、その子力太と甥の三平が引き継いだ製陶業は、明治16(1883)年、「淡陶社」として会社組織となり、池ノ内土を原料とする食器・花器・茶器などの軟質陶器を生産し、販売は海外へも広がり、さらに発展を遂げていくことになるが、タイルの生産高の増加と反比例するように大正末から昭和初期に軟質陶器の生産は廃され、淡陶社の経営はタイル製造の専門会社へと替わっていった。淡陶社は明治26(1893)年、「淡陶株式会社」と改め、昭和60(1985)年には「ダントー株式会社」に社名を変更し、現在に至っている³²⁾。

第39表 本土産磁器出土一覧②

種類	出土地	I	IIa	IIc	II d	II c or II d	IIIa	岩盤直上	表面清掃	表採	清掃	カケラン	西壁	西壁清掃	南壁清掃	北トレンチ 清掃	本土産 磁器 集中部	計	合計					
								M-17			G-10 P-10	I-6	J-19	J-12 O-7	N-11									
磁器② (文様不明)	完(口/底)																	5	5	32				
	碗		4	1				1		1		1						7	15					
	碗		1	1	1							1						3	7					
	底		4															1	5					
	小																					3		
	碗		2						1												3			
	底																							
	皿			1				1	1		1											4	8	
	碗									1												1		
	底			2	1																	3		
	杯			2																			2	5
	碗			1																			1	
	底			1	1																		2	
	蓋																							1
	碗										1												1	
	底																							
	袋物																							2
	碗				1			1															2	
	底																							
	合子				1																		1	2
	身				1																		1	
	蓋				1																		1	
	器様不明		1																				1	22
	碗				9	3	2		4				1										20	
	底						1																1	
	白磁	碗																					1	7
		底																						
小			2	8								2										12		
碗				1																		1	15	
底				2																		2		
皿										1												1		
碗																							2	
底			1																			1		
杯				2				1		2												5		
碗																							7	
底										2												2		
瓶																								1
碗											1												1	
蓋																							2	
碗																								2
底(口)					2																			2
不明				1																			1	11
碗				3	5					2													10	
底																								
青磁		碗			1				1					1									4	5
		底																					1	
		香炉									1												1	
		急須																						1
		注口				1																	1	
		須																						
		不明																						140
		碗																						
	底		8	61	9	4		9	1	1	13	6		12		1	1		1			127		
	合計		16	122	18	8		18	2	2	26	12		24		2	2		2	16	270	270		

第40表 本土産陶器出土一覧

種類	出土地	I	II a	II c	II d	II c・II d	表面清掃	埋土	北トレン チ清掃	カクラン	清掃	合計
								L-16	N-12		H-11	
陶	碗	口				1	1					2
		胴			1							1
		底	1									1
	皿	口			1							1
		胴										
		底				1			1			2
	蓋	頭部										
		胴						2				2
		下部(口)		1				1				2
	壺	口										
胴												
底										1	1	
すり鉢	口											
	胴						1				1	
	底											
袋物	口											
	胴	1									1	
	底											
器種不明	口											
	胴	1		2	2	1			1	2	9	
	底											
合計		3	1	4	3	2	5	1	1	2	1	23

今回出土した珉平焼の角皿破片は明治20年代後半から40年代までに多く生産され、日本をはじめアジアへ向けて広域に輸出されたものであることが報告されているので、県内への流入も同時期だったのではないかと考えられる。今後、類例の報告が待たれる。なお、那覇市の「垣花村跡」でも珉平焼の瓶等を確認することができた。

引用文献

註1 兵庫の遺跡49号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003

註2 『珉平焼窯跡』兵庫県文化財調査報告書第284冊 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2005

参考文献

『垣花村跡』那覇市文化財調査報告書第78集 那覇市教育委員会 2009

『鏡水土砂場原A遺跡』那覇市文化財調査報告書第83集 那覇市教育委員会 2010

第41表 本土産磁器集中部出土の砥部焼計測一覧

番号	残存状況	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	文 様	備 考
1	完	13.60	6.60	4.96	見込み：松竹梅。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠を表現、中に花文、高台脇に三角形文。	針ハマ痕なし
2	ほぼ完	13.85	6.70	4.80	〃	〃
3	完	14.00	6.25	4.88	〃	針ハマ痕あり
4	完	13.65	6.60	4.87	〃	〃
5	ほぼ完	13.70	6.50	4.96	〃	〃
6	完	13.80	6.55	5.00	〃	〃
7	完	13.60	6.70	4.94	〃	〃
8	完	13.60	6.40	4.88	〃	〃
9	完	13.60	6.00	5.24	〃	〃
10	完	13.70	6.40	4.84	〃	〃
11	完	14.00	6.50	5.02	〃	〃
12	完	13.20	5.95	4.90	〃	〃
13	ほぼ完	13.60	6.55	4.85	〃	〃
14	完	13.00	6.50	4.85	〃	〃
15	完	13.50	6.35	4.87	〃	〃
16	完	13.85	6.60	4.73	〃	〃
17	完	13.60	6.30	4.87	〃	〃
18	完	14.10	6.70	4.85	〃	〃
19	完	13.60	6.05	4.93	見込み：やや丁寧な松竹梅。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠を表現、中に花文、高台脇に三角形文。	針ハマ痕あり
20	完	13.95	6.10	5.18	見込み：松竹梅。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠を表現、中に花文、高台脇に三角形文。	〃
21	完	13.40	6.30	4.77	見込み：五弁花。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠を表現、中に花文、高台脇に三角形文。	針ハマ痕なし
22	完	13.20	6.00	4.75	〃	〃
23	ほぼ完	12.90	6.25	4.56	〃	〃
24	ほぼ完	13.20	6.20	4.55	〃	〃
25	完	13.20	5.80	4.43	〃	〃
26	完	13.10	6.05	4.93	〃	針ハマ痕あり
27	完	13.35	6.10	5.02	〃	〃
28	完	13.20	5.80	4.58	〃	〃
29	完	13.50	5.85	4.57	〃	〃
30	完	13.00	5.80	4.41	〃	〃
31	完	13.30	6.30	4.88	〃	〃
32	完	13.20	6.20	4.80	〃	〃
33	完	13.60	6.10	5.07	〃	〃
34	完	13.45	6.25	4.98	〃	〃
35	ほぼ完	13.00	6.05	4.87	〃	〃
36	1/2破損	13.20	5.90	5.00	〃	〃
37	底部破損	13.50	-	-	見込み：欠失のため不明。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠、中に花文。	A口縁部：7個 B胴部：22個 C底部：10個
38	ほぼ完	13.80	5.80	4.97	見込み：松竹梅。口縁内側：花文、寿文(?)、四方禪文(?) 外面：花文、寿文(?)、四方禪文(?)、高台脇に三角形文。	針ハマ痕あり
39	ほぼ完	12.90	6.00	4.95	〃	〃
40	ほぼ完	13.10	6.00	5.10	〃	〃
41	ほぼ完	13.10	5.95	5.02	〃	〃
42	ほぼ完	13.30	6.00	4.94	〃	〃
43	完	13.10	5.95	4.70	見込み：松竹梅。口縁内側：花文、寿文(?)、四方禪文(?) 外面：花文、寿文(?)、四方禪文(?)、高台脇に三角形文。	針ハマ痕あり D口縁部：1個 E胴部片：2個
44	2/3破損	14.00	3.20	-	見込み：欠失のため不明。口縁内側：五弁花連続文。外面：五弁花、唐草文。	F口縁部：1個

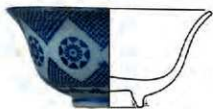
(口径・器高・底径は平均値を示した。)

第42表 本土産磁器集中部出土遺物観察一覧①

挿図番号 図版番号	器種	器形	残存部	口径 器高 底径 (cm)	素地の色 調/釉の 発色	施軸・釉色・ 技法	文様等の特徴			産地	年代	備考
							外面	内面	見込み			
第34図 1 図版47の1	碗	外反	完形	13.6 6.5 4.8	完形のため 不明/やや 青みがかる	機械ロク 口成型。	胴部中央には8 個の三角形で円 を作り、中心に 菊花を配する。 その周囲を点描 の三角形と逆三 角形で囲う。高 台周囲には直線 的な花(梅?) を並べる。胎土 にはロクロ目が 顕著に残る。	胴部に二条の圈 線を引いた後、 口縁部に合わせ て点描の逆三角 形を配し、間に 花(梅?)を描 く。内面に型紙 のずれはほとん ど見られない。 胎土にはロクロ 目が見られる。	松竹梅(松 ×3、竹× 2、梅×2)。	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。
第34図 2 図版47の2	碗	外反	完形	13.5 5.9 4.5	完形のため 不明/やや 青みがかる	機械ロク 口成型。 コバルト での型紙 染付け後、 全体に透 明釉を掛 ける。量 み付けの み釉を剥 ぎ取る。	四方罽を全体に 散らし、三箇所 に寿と菊花にト ンボを飛ばす。 高台周囲には直 線的な花を並べ る。	口縁部に沿って 四方罽と菊花と 寿を等間隔に並 べる。胎土には ロクロ目が見 られる。	松竹梅(松 ×3、竹× 2、梅×3)。	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 外面は型紙の 重なりが顕著。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。
第34図 3 図版47の3	碗	外反	完形	14.0 6.2 5.1	完形のため 不明/やや 青みがかる				五弁花	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。
第34図 4 図版47の4	碗	外反	完形	13.1 6.0 4.6	完形のため 不明/やや 青みがかる	機械ロク 口成型。 コバルト での型紙 染付け後、 全体に透 明釉を掛 ける。量 み付けの み釉を剥 ぎ取る。	四方罽を全体に 散らし、三箇所 に寿と菊花にト ンボを飛ばす。 高台周囲には直 線的な花を並べ る。	口縁部に沿って 四方罽と菊花と 寿を等間隔に並 べる。胎土には ロクロ目が見 られる。	松竹梅(松 ×3、竹× 2、梅×2)。	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 外面は型紙の 重なりが顕著。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。



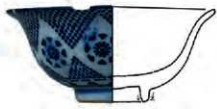
1



1



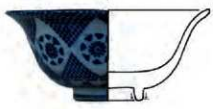
1



2



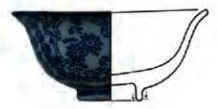
1



3



1



4

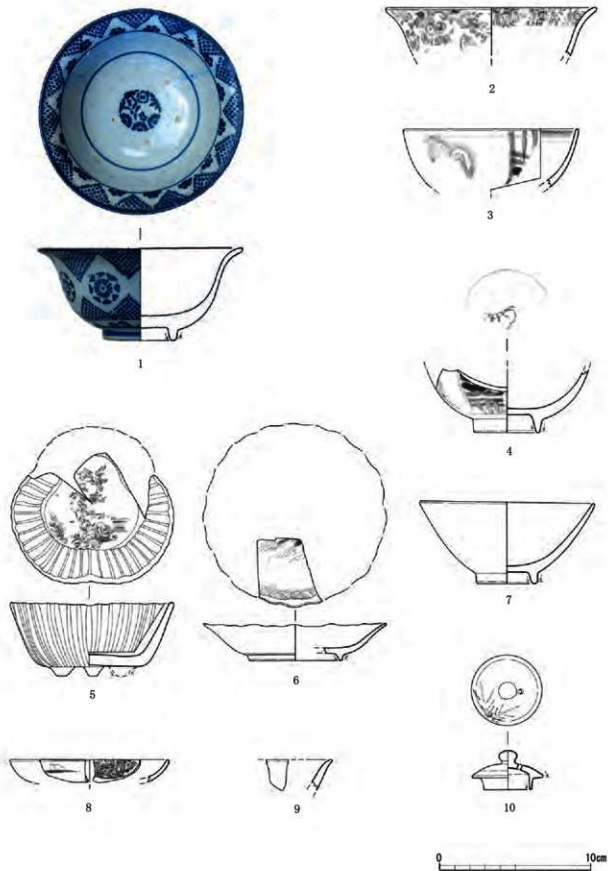


第34図 (図版47) 本土産磁器集中部出土遺物①

第43表 本土産磁器中部出土遺物観察一覧②

() 内は推定

挿図番号 図版番号	器種	器形	残存部	口径 器高 底径 (cm)	素地の色 調/釉の 発色	施釉・釉色・ 技法	文様等の特徴			産地	年代	備考
							外面	内面	見込み			
第35図 1 図版48の1	碗	外形	外形	13.6 6.1 4.9	完形のため 不明/やや 青みがかる	機械口ク 口成型。 コバルト での型紙 染付け後、 全体に透 明釉を掛 ける。壘 み付けの み釉を剥 ぎ取る。	胴部中央には8 個の三角形で円 を作り、中心に 菊花を配する。 その周囲を点描 の三角形と逆三 角形で囲う。高 台周囲には直線 的な花(梅?) を並べる。胎土 には口ク口目が 顕著に残る。	胴部に二条の圈 線を引いた後、 口縁部に合わせ て点描の逆三角 形を配し、間に 花(梅?)を描 く。胎土には口 ク口痕が顕著に 残る。	松竹梅。 中央に梅 の枝が延 びる。	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 外面は型紙の 重なりが顕著。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。 内外面とも型 紙と圈線に重 なりが見られ る。
第35図 2 図版48の2	碗	外形	口縁部	14.0 — —	薄灰色微粒 子/青みが かる	機械口ク 口成型。 コバルト での型紙 染付け後、 全体に透 明釉を掛 ける。	全体に唐草文と 梅を配する。	口縁部に沿って 梅花を配する。	—	砥部	大正	—
第35図 3-4 図版48の3-4	碗	直口	口く高台	11.6 (5.9) 4.4	白色微粒子 /青みがか る	鑄込み成 型。コバ ルト使用。 ゴム印と 手描きの 併用。	松とツルを描く	口縁部に沿って 二重の圈線をめ ぐらす。	ゴム印に よる松	瀬戸 美濃	大正	同一個体
第35図 5 図版48の5	小鉢	—	ほぼ 外形	10.7 4.6 4.2	白色微粒子 /薄い青	鑄込み成 型で三つ 葉を模る。 多色の銅 版転写。	全体に型による 縦じまが入る。 底部には3足。	絵付け無し。	山水画?	瀬戸 美濃	—	—
第35図 6 図版48の6	小皿	—	口く高台	12.2 2.4 6.2	白色微粒子 /やや青み がかる	鑄込み成 型による 波状口縁。 黒色銅版 転写。	高台に沿ってコ バルトによる二 本の圈線。	口縁部に沿って、 龍目。	不明	瀬戸 美濃	昭和	—
第35図 7 図版48の7	碗	直口	完形	11.6 5.5 4.0	完形のため 不明/濃緑	鑄込み成 型後、濃 緑釉を掛 ける。	—	—	—	—	昭和	—
第35図 8 図版48の8	小皿	直口	口縁部	(10.6) —	白色微粒子 /やや青み がかる	鑄込み成 型後、コ バルトで の型紙染 付け。	口縁部にコバル トで手描唐草	菊花を描く	—	肥前	明治	—
第35図 9 図版48の9	不明	やや 外形	口縁部 破片	—	茶褐色微粒 子/	白化粧後 透明釉を かける。	—	—	—	沖縄 産	—	—
第35図 10 図版48の10	蓋	—	完形	つまみ 径1.2 2.6 3.2	白色微粒子 /やや黄味 がかる	銅版転写	草の転写が剥げ ている	—	—	瀬戸 美濃	大正	—

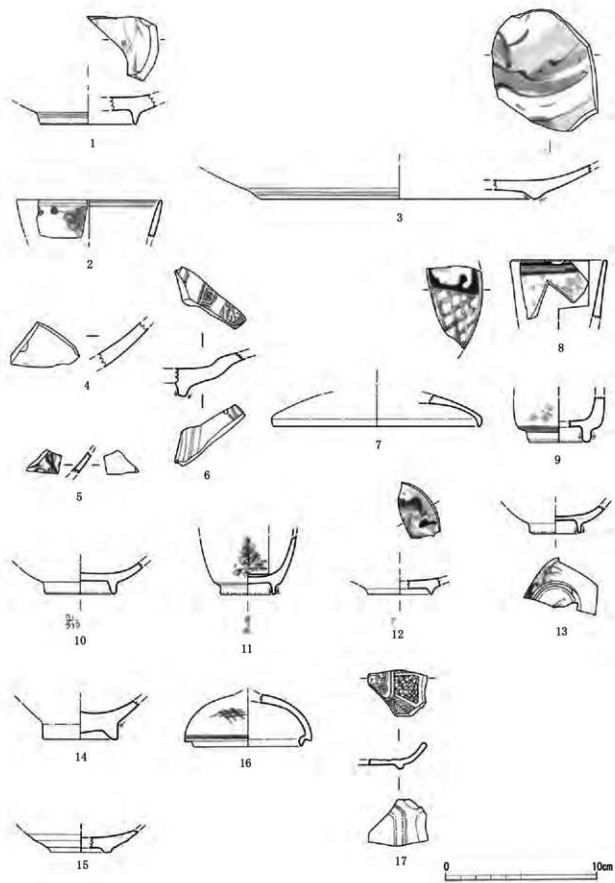


第35圖 (図版48) 本土産磁器集中部出土遺物②

第44表 本土産磁器観察一覽

()内は推定

挿図番号 図版番号	種別	器種	残存部	口径器高底径 (cm)	素地の色調/釉の 発色	施釉・釉色・ 技法	文様等の特徴		銘等	産地	年代	出土地点
							外面	内面				
第36図 1 図版49の1	染付	碗	底部	— 6.8	灰色がかった 微粒子/やや 濁る	成型後、兵須で 手描きし、透明 釉をかける。	高台脇に2本の 圓線。	見込みに荒縄文。	—	肥前系	17 世紀後半	M-12 東側アゼ IIc層 Q/10
第36図 2 図版49の2	染付	碗	口縁部	9.6 —	白色微粒子/ 黄みがかる	鑄込み成型後、 コバルトで手描 き。全体に透明 釉を掛ける。	口縁部に沿って 二本の圓線と花 文様?	口縁部に沿って 二本の圓線をめ ぐらす。	—	肥前系	17 世紀後半	N-16 IIc層 Q/10
第36図 3 図版49の3	染付	皿	高台	— 18.6	灰色がかった 微粒子/青 みがかる	鑄込み成型後、 コバルト使用。	高台脇に間隔を あけて1本と2 本の圓線	風景画?	—	肥前系	19 世紀	表土剥ぎ
第36図 4 図版49の4	染付	鉢	胴部	破片	灰色がかった 微粒子/青 みがかる	鑄込み成型後、 コバルトで手描 き。全体に透明 釉を掛ける。	絵付けの一部が 残る	無し	—	肥前系?	—	I-7 カクラン 10/20
第36図 5 図版49の5	染付	小碗	胴部	破片	白色微粒子/ 薄い青	鑄込み成型後、 コバルトで手描 き。全体に透明 釉をかける。	染色体文	無し	—	瀬戸美濃	19 世紀中頃	J-20 カクラン 10/20
第36図 6 図版49の6	染付	皿	腰り高台	破片	白色微粒子/ やや青みが かる	鑄込み成型後、 型紙染付けか印 判による施文。	何らかの文様あ り。	型紙か印版。見 込みに書文をめ ぐらせる。	—	瀬戸美濃	—	G-21 IIa層 Q/10
第36図 7 図版49の7	近代磁器	蓋	かかりまで	— 2.1 14.0	褐色粗粒子/ やや青みが かる	機械口クロ成型 後、上絵の銅版 刷り。印判の併 用。	格子と花を描く。	無し	—	瀬戸美濃	19 世紀	I-16 IIc or II d O/10 南アゼ
第36図 8-9 図版49の8-9	近代磁器	湯のみ	口り高台	6.4 (3.3) 4.2	白色粗粒子/ やや青みが かる	鑄込み成型後、 赤絵の銅版刷り。	桜の花・枝葉。	無し	—	肥前系?	—	I-16 IIc or II d Q/10
第36図 10 図版49の10	近代磁器	碗	底部	— 4.7	白色微粒子/ やや緑みが かる	鑄込み成型後、 総釉。	グリーンスタ ンプによる統制番 号の押印。	無し	岐 950	—	—	N-9 表探
第36図 11 図版49の11	近代磁器	小碗	底部	— 3.6	白色微粒子/ 青みがかる	鑄込み成型後、 多色の銅版刷り。 総釉後、疊付け のみ釉割ぎ。	樹木を描く。	無し	最上製	肥前系	—	M-16 IIc層 Q/10
第36図 12 図版49の12	染付	皿	高台	— 4.4	灰色がかった 微粒子/青 みがかる	鑄込み成型。コ バルト使用。ゴ ム印と手描きの 併用。	コバルトスタ ンプによる統制番 号の押印。	山水画?	あり(不明)	肥前系	—	J-7 40/50 カクラン
第36図 13 図版49の13	陶器	小碗	底部	— 3.8	黄色粗粒子	手描きによる施 文後、透明釉を かける。	草木?	—	あり(不明)	—	—	I-8 Q/10



第36圖 (圖版49) 本土產陶磁器

挿図番号 図版番号	種別	器種	残存部	口径 器高 底径 (cm)	素地の色 調/釉の 発色	施釉・釉色・ 技法	文様等の特徴		銘 等	産 地	年 代	出土地 点
							外面	内面				
第36図 14 図版49の14	陶器	碗	底部	— — 5.0	淡黄白色の 粗粒子/緑青 色	蹴ロクロ成型後、 銅緑釉を掛ける。	高台脇まで施釉。	無し	—	唐 津(内野山)	18 世紀	I-15 東側アゼII (上部) 20/30
第36図 15 図版49の15	陶器	皿	高台	— — 4.0	赤褐色粗粒 子/暗緑色	蹴ロクロ成型後、 銅緑釉を掛ける。	横位の調整痕が 明瞭に見られる。 残存部は無釉。	無し	—	唐 津?	17 世紀後半	L-15 III d層 0/10
第36図 16 図版49の16	陶器	合子蓋	かかりまで	— — 7.0	こげ茶褐色 微粒子/暗茶 色	蹴ロクロ成型後、 透明釉を掛ける。	鉄絵を描く。縁 に沿って一条の 墨線を引く。つ まみがあったと 思われる。	身の方に受けあ り	—	唐 津	—	G-21 II a層 0/10
第36図 17 図版49の17	陶器	角皿	口 く 底	— 1.75 —	白色粗粒子/ 山吹色	型作り成形。平 面形は花卉状。 高台は断面台形 状で低い。高台 曇み付けのみ釉 を剥ぎ取る。	無し	内面は型押しで 幾何学文とした 多様な線を組み 合わせた文様	—	淡 路	19 世紀後半	L-16 埋土

第6節 錢貨

調査地区より完形品、破損品を合わせて18点の錢貨が得られた。内訳は有文錢6点、無文錢9点、近代錢1点、判読不能2点である。層序別に見ると、IIc・II d層より上層で有文錢が、IIc or II d層より下層で無文錢が多く見られる傾向にある。以下、有文錢・無文錢・近代錢に分けて概述する。なお、拓影は状態の良いものを掲載した(第37・38図 図版50)。各層ごとの出土一覧を第45表に、個々の詳細については第46～49表に示した。

有文錢は祥符通寶(若しくは元寶)1点、洪武通寶1点、寛永通寶(新・古)3点の4種類が確認された。そのうち3点磁気反応を示すものが得られた。

無文錢は孔の形状の違いから2種に大別し、II類より磁気反応を示すものが3点得られた。

I類 孔の形状が方形をしているもの。

1 厚さ約0.7mm

2 厚さ約0.9mm

3 厚さ約1.0mm

II類 孔の形状が円形をしているもの。

1 外径1.60cm、孔径0.63cmのもの。1点のみの出土である。

2 外径0.64～1.0cm、中央の孔と外径の幅が細くリング状のもの。

近代錢は明治20年銘の半錢が1点得られた。

参考文献

- ・永井久美男『日本出土錢總覧 1996年版』兵庫県埋蔵錢貨調査会 1996
- ・嶋谷和彦「中世の模倣錢生産—堺出土の錢鑄型を中心に—」『考古学ジャーナル』No.372 1994
- ・内間靖「第V章 第5節 錢貨」『銘苅古墓群(II)』那覇市教育委員会 1999
- ・山里千春「第V章 第12節」『ナーチャー毛古墓群』那覇市教育委員会 2000
- ・山里千春「第V章 第4節 錢貨」『銘苅古墓群(III)』那覇市教育委員会 2001
- ・通貨の歴史研究会 他『わが国の歴史を映す日本の通貨』平成9年
- ・上原静「琉球国と鑄錢」『出土錢貨からみた環シナ海と琉球史』出土錢貨研究会 2008

第45表 錢貨出土一覧

※ 錢名の○は欠損部分

>

層序	錢種	祥符 ○○	洪○ ○寶	○○ ○寶	寛永通寶		無文錢		判読不能	半錢	計
					古	新	I	II			
0/10									1		1
I層 0/5									1		1
IIa層 0/10				1	1						2
IIa層 20/30										1	1
IIc層 0/10								2			2
IIc・II d 0/10					1	1					2
IIc・II d 20/30							1				1
II d層 0/10		1					1	1			3
II d層 10/20								1			1
II d層 30/40							1				1
IIIa層 0/10							1				1
清辨							1				1
表探			1								1
計		1	1	1	2	1	5	4	2	1	18

第46表 銭貨観察一覧①

※銭名の○は欠損部分、●は判読できないもの

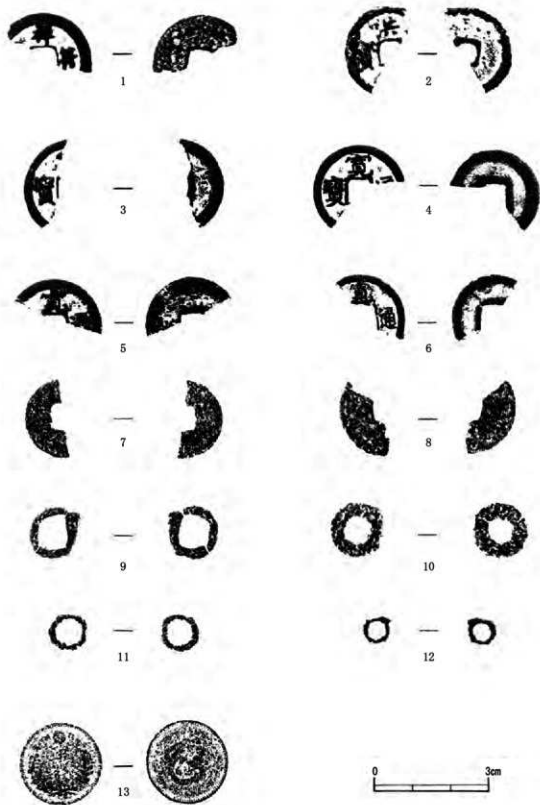
挿図番号 図版番号	出土 地点	出土層序	銭貨名 (種別)	国名 初铸年	法量 (cm・g)				残 存 率	状態・特徴
					外径	孔径	厚さ	重量		
	G-17	I層 0/5	○○○○	—	—	—	0.14	0.66	1/4	縁の輪郭が若干見られる。磁気反応有り。
	I-8	0/10	●○○○	—	—	—	0.13	0.61	1/4	銭文摩耗している一部「ㇿ」の字が見える。縁の輪郭明瞭。背の縁の輪郭弱食で弱い。磁気反応有り。
第37図 1 図版50の1	L-11	II d層 0/10	祥符○○	北宋 1009	—	—	0.11	1.42	2/5	銭文摩耗している。背の輪郭かなり弱い。祥符通貫または、祥符元寶と推定される。
第37図 2 図版50の2	表探	—	洪○○寶	明 1368	2.35	0.44	0.15	1.66	1/2	銭文・縁の輪郭弱食が進行している。背の縁の輪郭やや弱い。洪武通貫と推定される。
第37図 3 図版50の3	G-22	II a層 0/10	○○○寶	—	—	—	0.13	1.20	1/2	縁の輪郭明瞭。銭文摩耗。背の縁の輪郭弱い。
第37図 4 図版50の4	K-11	II c・II d層 0/10	寛○●寶 (古)	江戸 1636	2.40	0.48	0.12	2.12	2/3	縁の輪郭・銭文共に明瞭である。背の縁の輪郭ははっきりしている。
第37図 5 図版50の5	I-19	II a層 0/10	寛○●○ (古)	江戸 1636	—	—	0.08	1.03	1/2	縁の輪郭・銭文少し摩耗している。背の縁の輪郭弱い。
第37図 6 図版50の6	I-18	II c・II d層 0/10	寛○通○ (新)	江戸 1668	—	—	0.09	0.77	2/5	縁の輪郭・銭文共に明瞭である。背の縁の輪郭弱い。磁気反応有り。

第47表 銭貨観察一覧②

挿図番号 図版番号	出土地点	出土層序	銭貨名 (種別)	法量 (cm・g)				残 存 率	分類	状態・特徴
				外径	孔径	厚さ	重量			
	L-11	II d層 30/40	無文銭	1.80	0.86	0.07	0.71	破損	I-1類	両面とも平坦である。
	M-10	III a層 0/10	無文銭	—	—	0.09	0.46	1/2	I-2類	両面とも平坦である。
第37図 7 図版50の7	L-7	II c・II d層 20/30	無文銭	2.03	0.49	0.09	0.80	1/2	I-2類	両面とも平坦である。
第37図 8 図版50の8	G-19~22 H-19~22 I-19~22	清掃	無文銭	—	—	0.10	0.83	1/3	I-3類	錆跡がみられるが、縁の輪郭が若干みられる。
第37図 9 図版50の9	L-11	II d層 0/10	無文銭	1.31	0.74	0.09	0.32	破損	I-2類	右上にセキ痕がみられる。孔にバリがある。背は平坦である。
第37図 10 図版50の10	N-15	II c層 0/10	無文銭	1.60	0.63	0.08	0.50	破損	II-1類	錆跡が激しい。
第37図 11 図版50の11	L-10	II d層 10/20	無文銭	1.00	0.64	0.07	0.09	破損	II-2類	孔にバリがある。磁気反応有り。
第37図 12 図版50の12	M-7	II c層 0/10	無文銭	0.64	0.44	0.08	0.04	完形	II-2類	右上にセキ痕がみられる。背は平坦である。磁気反応有り。
	J-12	II d層 0/10	無文銭	—	—	0.65	0.03	1/2	II-2類	右上にセキ痕がみられる。背は平坦である。磁気反応あり。

第48表 銭貨観察一覧③

挿図番号 図版番号	出土 地点	出土層序	銭貨名 (種別)	初铸 年	法量 (cm・g)				残 存 率	材 質	周 径 mm	状態・特徴
					外径	孔径	厚さ	重量				
第37図 13 図版50の13	G-22	II a層 20/30	半銭	明治 20	2.20	—	0.12	3.23	完形	銅	なし	表裏とも摩耗されている。表：中央に半銭の文字。外輪菊花文の右に二百文、左に換一圓の小さな文字。右に朝、左に菊を記して両者は増元で結ばれる。輪郭内側に歯車状の歯線を通らる。裏：中央に点の歯線で囲まれた龍文(呼龍)。外輪は大日本・明治二十年・1/2 S E Nの文字を配す。輪郭内側は表と同じ。



第37図 (図版50) 銭貨①：有文銭（1～6）、無文銭（7～12）、近代銭（13）

なお、石圍い遺構（近代期）より、近代銭が1点出土した。第38図及び第49表を参照いただきたい。

第49表 銭貨観察一覧④

押印番号 図版番号	出土 地点	出土 層	遺構	銭貨名	初铸年	法量 (cm・g)				残存率	材質	周囲 ギザ	状態・特徴
						外径	孔径	厚さ	重量				
第38図	H-16	I層	石圍い 遺構 ①	一銭	昭和 14	1.745	—	0.140	0.890	完好	アル ミニ	なし	表裏とも一部破損。 表：中央に八咫鏡の中に一銭の文字。外 輪は上に菊花文、下に桐を配す。周囲を 波線、輪郭内側には点の圓線。 裏：中央に八咫鏡。その背景に桜花。上 に大日本・下に昭和14年の文字。両文字 の間左右に1個づつ小さな桜花文を配す。 輪郭内側には点の圓線。



第38図 銭貨②

第7節 円盤状製品

円盤状製品は22点を集計し、内12点を図示した(第40図 図版51 第50表参照)。種類別では、沖繩産施釉陶器が3点、沖繩産無釉陶器が9点、瓦が6点、褐釉陶器が4点となっている(第51表参照)。全体的に打割が粗雑である。大まかな成形後、更に円形に整形するための、細かな打割を加えた痕跡が見受けられない。

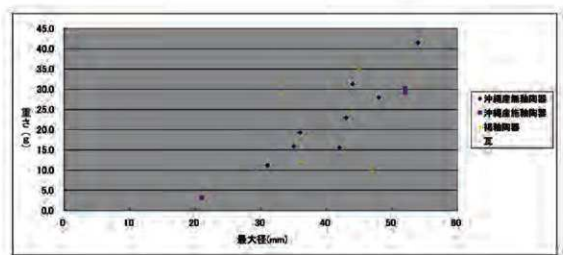
第39図は、種類別の最大径と重量の相関である。種類と大きさに相関関係は認められず、各種に様々な大きさの製品がある。

第50表 円盤状製品観察一覧

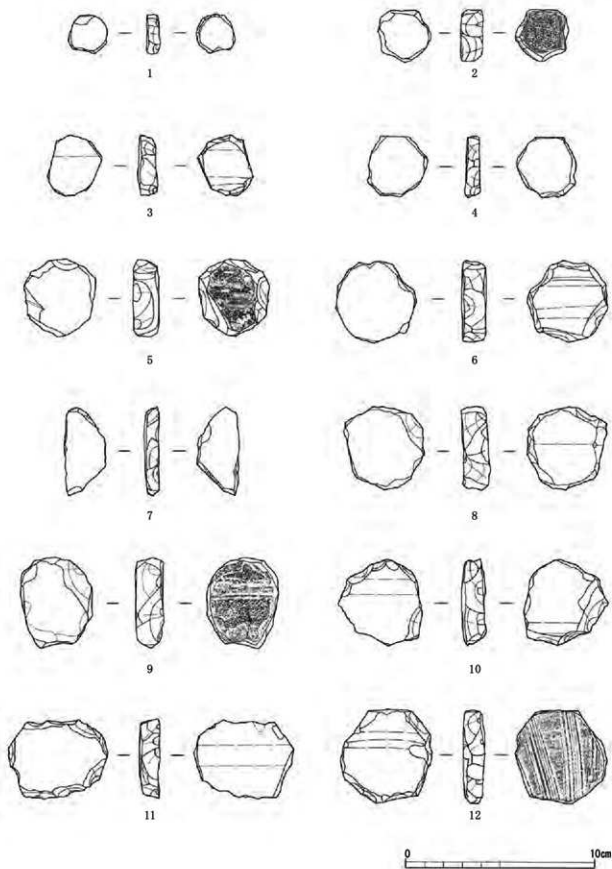
図版番号 図版番号	種類	器種	部位	完・破 (残存状況)	最大径 (mm)	重量 (g)	最大厚 (mm)	備 考	出土地点
第40図の1 図版51の1	沖繩産施釉陶器	—	胴部	完	21	3.2	6	主に裏面から剥離されている。比較的、小型の製品。	沖10-02 沖10-02 沖10-21 施釉陶器
第40図の2 図版51の2	瓦	—	破片	完	29	9.9	11	表裏面から剥離している。比較的、小型の製品。	1-02 瓦 施 07/0
第40図の3 図版51の3	沖繩産無釉陶器	—	胴部	完	31	11.3	9	主に裏面から剥離されている。	沖10-02 沖10-02 沖10-21 無釉陶器
第40図の4 図版51の4	褐釉陶器	—	胴部	完	33	29.2	8	主に裏面から剥離されている。形状は、円形に近い。	1-12 黒瀬アズ 瓦 施 02/0
第40図の5 図版51の5	瓦	—	胴部	完	40	22.6	14	裏面から剥離されている。大層な成形であるが、形状はほぼ円形にちがひ。	沖10 瓦 施 02/0
第40図の6 図版51の6	沖繩産無釉陶器	—	胴部	完	44	31.3	11	表裏面から剥離されている。ほぼ円形を呈している。	沖10 カクラン 施 02/0
第40図の7 図版51の7	褐釉陶器	—	胴部	1/2	47	9.9	7	表裏面から剥離されている。	1-04 瓦 施 02/0
第40図の8 図版51の8	褐釉陶器	—	胴部	完	45	35.2	19	表裏面から粗雑に剥離されている。	沖10 黒瀬アズ 瓦 施 02/0
第40図の9 図版51の9	瓦	—	胴部	完	48	29.0	15	主に表から剥離されている。形状は、楕円に近く、丁寧な成形とは言い難い。	1-10 黒瀬アズ 瓦 施 02/0
第40図の10 図版51の10	沖繩産無釉陶器	香?	胴部	完	48	28.0	11	香などの底部に近い部分を利用して、製作された製品かとする。表裏面から剥離されている。楕円形の形状である。	1-08 瓦 施 02/0
第40図の11 図版51の11	沖繩産無釉陶器	香?	胴部	完	52	29.2	10	香などの胴部を再利用して、製作されている。主に表面から剥離されている。楕円形の形状である。	沖11 無釉陶器
第40図の12 図版51の12	沖繩産無釉陶器	楕円	胴部	完	52	30.1	8	内面に5本1組の線目がある。主に表面から剥離されている。ほぼ円形に近い形状である。	沖12 瓦 施 02/0
計測No.8	沖繩産無釉陶器	楕円	胴部	完	35	15.9	11	内面に線目がある。主に外面から剥離されており、形状は、円形に近い。	沖12 瓦 施 02/0 黒瀬アズ
計測No.13	沖繩産無釉陶器	楕円	胴部	完	31	11.2	9	主に内面から剥離されている。形状は、円形に近い。	沖10 1 施 02/0
計測No.14	沖繩産無釉陶器	楕円	胴部	完	54	41.5	13	内面に線目がある。主に裏面から剥離されている。形状は三角形に近い。	沖10 1 施 02/0
計測No.23	瓦	—	胴部	完	31	16.1	14	全体的に摩耗が著しい。表裏面から剥離されていると考える。	沖10 黒瀬アズ 瓦 施
計測No.27	瓦	—	胴部	完	33	14.6	15	断面の摩耗が著しいが、主に裏面から剥離されているのではないかと推察される。ほぼ円形に近い形状である。	沖10 瓦 施 02/0
計測No.28	瓦	—	胴部	完	35	15.3	13	表裏面から剥離されているが、主に裏面から剥離されている。ほぼ円形に近い形状である。	1-01 瓦 施 02/0
計測No.9	沖繩産無釉陶器	—	胴部	完	43	23.0	11	表裏面から粗雑に剥離されている。	沖12 瓦 施 02/0
計測No.10	沖繩産無釉陶器	—	胴部	完	36	19.3	10	主に裏面から剥離されている。形状は、円形に近い。	沖12 瓦 施 02/0
計測No.11	褐釉陶器	—	胴部	完	36	12.4	7	主に裏面から剥離されている。形状は、円形に近い。	沖10 カクラン 施 02/0
計測No.16	沖繩産無釉陶器	—	胴部	完	42	15.6	8	表裏面から粗雑に剥離されている。	沖10 1 施 02/0

第51表 円盤状製品出土一覧

出土地点	遺物種類	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	瓦	褐釉陶器	総計	備考
表面清掃	G-19~22	1	1			3	第40図の1 図版51の1
	H-19~22						第40図の3 図版51の3
	I-19~21						
I層	I-21	1				3	計測No.16
	G-18		3				計測No.14
IIa層	I-21			1		1	計測No.28
IIc層	K-12				1	6	第40図の4 図版51の4
	M-15				1		第40図の8 図版51の8
	N-13		1				計測No.9
	N-14		2				計測No.10
	P-6			1			計測No.23
II d層	L-10			1		1	第40図の2 図版51の2
IIc・II d層	L-12			1		6	第40図の9 図版51の9
	L-14				1		第40図の7 図版51の7
	M-10			1			計測No.27
	M-12	1					第40図の12 図版51の12
	M-16			1			第40図の5 図版51の5
	I-15		1				第40図の10 図版51の10
攪乱	M-16		1		1	2	第40図の6 図版51の6 計測No.11
総計		3	9	6	4	22	



第39図 円盤状製品の最大径と重さ相関



第40圖 (圖版51) 円盤状製品

第8節 煙管

煙管は、8点を図示する。全て羅宇煙管である。

ほぼ同一の形状であるが、施釉されたものと、無釉のものとの2種類がある。第41図（図版52）の3・6～8は、外面に黒釉が施釉されている。また、同図3と8以外は、八面に面取りされている。同図3は七面に面取りされており、同図8は五面以上であることはわかるが、破損のため判然としない。

全て破損しており、1点（第41図の1）を除き、全長や羅宇接続部の径は不明である。接続部については、残存する計測可能な部位の数値を記載している。全長についても、残存している最長の数値である。

なお、個々の資料の特徴は、第52表に譲る。

第52表 煙管計測一覧

(単位: mm・g)

押図番号 図版番号	器種	材質	完/破	火 皿 (mm)		羅宇接続部		全長	重量 (g)	出土地
				外径	内径	外径	内径			
第41図 1 図版52の1	雁首	沖縄産無釉陶器	1/3破	19.0	12.0	(17.0)	(9.0)	43.0	(9.8)	M-16 表面清掃
第41図 2 図版52の2	雁首	沖縄産無釉陶器	破	(17.0)	(12.0)	(14.0)	(6.0)	(35.0)	(6.2)	L-15 II d層 10/20
第41図 3 図版52の3	雁首	沖縄産施釉陶器	破	20.0	13.0	(14.0)	(8.0)	(33.0)	(6.4)	N-15 北側畦 II c層 10/20
第41図 4 図版52の4	雁首	沖縄産無釉陶器	破	18.0	13.0	(15.0)	(7.0)	(29.0)	(8.0)	H-22 II a層 20/30
第41図 5 図版52の5	雁首	沖縄産無釉陶器	破	19.0	14.0	(12.0)	(7.0)	(24.0)	(4.4)	L-14 西側畦 II c層 20/30
第41図 6 図版52の6	雁首	沖縄産施釉陶器	破	19.0	18.0	—	—	(19.0)	(3.8)	O-9 東側畦 II c層 0/10
第41図 7 図版52の7	雁首	沖縄産施釉陶器	破	—	—	(14.0)	(8.0)	(27.0)	(6.2)	N-15 北側畦 II c層 10/20
第41図 8 図版52の8	雁首	沖縄産施釉陶器	破	—	—	—	—	—	(1.9)	K-11 II c・II d層 0/10

* () 内の数値は残存値

第9節 陶製品

土鍾が1点出土している。第41図（図版52）9は、胴部に若干の膨らみを有する円筒形であり、長軸に穿孔されている。図上部に紐擦れの痕跡が認められるが、下部は判然としない。

なお、資料の特徴は、第53表に譲る。

第53表 陶製品計測一覧

（単位：mm・g）

挿図番号 図版番号	器種	材質	完/破	長さ	幅	孔径	重さ	出土地
第41図 9 図版52の9	土鍾	陶器	完	26.0	12.0	4.0	3.0	G-22 IIa層 30/40

第10節 玉

玉は、3点を図示した。色調、形状ともに様々である。第41図（図版52）10は不透明な緑色を呈しており、紐擦れの痕跡などは認められない。同図11は、巻き上げ技法で成形されている。孔にはガラス片や粒子が詰まっており、完全には穿孔していない。同図12は外面に凹凸があり、本来は花形の製品と考える。中央部に、円形の孔が穿孔されているとみられる。渡地村跡において、類似の資料が出土している。

なお、個々の資料の特徴は第54表に譲る。

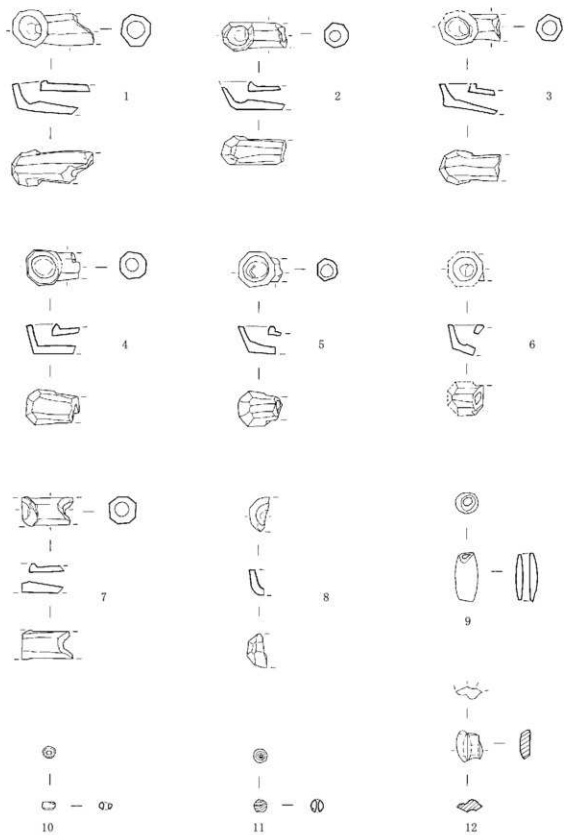
註1 比嘉尚輝 2007「第6章 第26節 玉」『渡地村跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集

第54表 玉計測一覧

（単位：mm・g）

挿図番号 図版番号	形状	材質	色調	完/破	直径	孔径	高さ	重量	出土地
第41図 10 図版52の10	臼形	ガラス	緑色	完	7.0	3.0	4.0	0.23	L-18 II d層 10/20
第41図 11 図版52の11	球形	ガラス	水色	完	7.0	2.0	7.0	0.46	N-16（北側トレンチ付近）
第41図 12 図版52の12	花形	水晶	半透明	1/4	(5.0)	—	(17.0)	(1.33)	G-16 I層 0/5

*（ ）内の数値は残存値



第41図 (図版52) 煙管・陶製品・玉

第Ⅶ章 総括

前章までに発掘調査の成果について述べた。ここでは、今一度整理してまとめたい。

遺跡の立地について

本遺跡が所在する陸上自衛隊那覇駐屯地内には、「鏡水名座原A遺跡」「鏡水名座原B遺跡」「鏡水名座原古葛群」「鏡水箕隅原A遺跡」「鏡水箕隅原B遺跡」「鏡水箕隅原D遺跡」「鏡水箕隅原E遺跡」「鏡水水溜原遺跡」「鏡水土砂場原A遺跡」「鏡水土砂場原B遺跡」など多数の遺跡が近年確認されている。

さらに、遺跡の周辺には、「住吉遺跡」「御物グスク」「屋良座森グスク」、港湾北岸に所在する「三重グスク」「渡地村跡」などを含む那覇港周辺遺跡群、また、16世紀代に整備されたことが知られる「真珠道」など琉球王府時代の重要な遺跡が立地する。特に、渡地村跡の発掘調査の成果は、琉球王府時代における那覇港の重要性を改めて知らしめた貴重なものとなっている。

また、旧石器時代の沖縄県指定史跡「山下第一洞穴遺跡」、沖縄新石器時代前Ⅳ期・後期の「ガジャンピラ丘陵遺跡」、沖縄新石器時代後期の「那崎原遺跡」など先史時代の遺跡も位置している。このことから、本遺跡周辺は古き時代から先人達の格好の生活環境であったことがうかがえる。

さて、本遺跡は、陸上自衛隊那覇駐屯地内における本格的な発掘調査の契機となった。第Ⅰ章でも述べたとおり、同地域は、立ち入りの制約された区域であったため、埋蔵文化財の有無さえ確認されていないのが現状であった。今後、地区内の開発についての動向が注意される。諸開発等の計画には、埋蔵文化財の取り扱いが極めて重要な位置を占めると言える。

層序について

今回は、第Ⅰ～Ⅲ層、砂層と名付け、大きく10枚に分層し、その時期を8期に分けて報告した。

第Ⅰ層は、戦後の造成土。

第Ⅱ層はa～f層に分層して調査を実施した。第Ⅱa・b層は近代期に想定される堆積土であった。第Ⅱc層は、近世期の遺物包含層として捉えられるが、表土剥ぎ作業の際、同層までバックホーにて掘削した。本調査では、第Ⅱd層以下を人力による作業とした。

第Ⅱd層は、沖縄新石器時代後期の土層である。黒味を帯びた暗褐色の砂質層である。

第Ⅱe層は、沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の土層である。明るい色調の褐色土層である。一見、琉球石灰岩の風化土である赤土と白砂が混ざり合った堆積土との感じを受けた。

第Ⅱf層は、沖縄新石器時代前Ⅱ期の土層である。黒味を帯びた暗褐色の堆積土である。本遺跡の調査において注目された爪形文土器が出土する土層で、層厚は約10cm程度であった。その堆積は、水平堆積を見せており、本来遺跡一帯に大きく広がっていたものと考えられた。

第Ⅲ層はa・b層に分層した。グスク時代から近世期の遺物包含層と捉えられた。第Ⅲa層は、暗茶褐色を呈する粘土質の堆積土。第Ⅲb層は、同じく粘土質で、色調は上層に比して黒味を帯びる。

白砂層は、沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の土層である。黄褐色を呈する砂層でサンゴ等も多く含まれる。本遺跡の土層堆積で注意されたことは、沖縄新石器時代前Ⅱ期の所産である爪形文土器が出土する第Ⅱf層の標高である。本層の標高は、約3.3～3.4mで、類似遺跡においては、標高0m付近に堆積する土層から同資料が出土していることが知られている。ただし、近年、発見された南城市武芸洞遺跡は、標高約20m付近の遺跡であり、遺跡の立地の在り方に留意が必要である。第Ⅱe層は、自然堆積ではない

感じを受けた。今後の検討課題としたい。

遺構について

遺構は、各時期ごとに分けて報告した。

第Ⅱf層の遺構（第8期）は、焼土遺構が主体であった。放射性炭素年代測定（補正年代）では、5,810±30BPとの結果が得られた。同層出土遺物の年代観に比して若干新しい年代観と言えることから、上層に属する遺構である可能性も示唆される。

第Ⅱe層及び第Ⅱd層の遺構（第7～5期）は、貝塚を主体に報告した。貝塚を形成する軸が略東西と略南北とズレがある。時期によって、貝塚を形成する海岸線の変化の指標になる可能性もうかがえた。第Ⅲ層の遺構（第4期）は、平面が略三角形、断面がV字形となる鋤跡と見られる遺構が多数検出されている。耕作痕あるいは整地痕の可能性を考えている。

第Ⅱc層の遺構（第3期）は、溝状遺構が主体であった。概ね東西南北を軸として構築されており、近世以降、方位の意識が定着していたとの推察もでき貴重な成果であった。

第Ⅱb層に対応する第2期の遺構は近代として捉えた。建物の礎石や掘り込み井戸などが検出された。以上のように多種多様な遺構の検出により、本遺跡が断続的に人々の活動を示す貴重な成果となった。

遺物について

本遺跡における出土遺物として注意される資料は、沖縄新石器時代前Ⅱ期の爪形文土器と沖縄新石器時代前Ⅳ期の突帯を貼り付けるタイプの土器群が挙げられる。両資料とも市内では、初例をなすものである。

爪形文土器は、指頭押圧を主体とするもの、縦長の指頭押圧を主体とするもの、爪形を主体とするものに分類され、それぞれ、ヤブチ式、野国タイプ、東原式と称される。今後、本遺跡で得られた資料（17,119点）の細分類を検討したい。

突帯を貼り付けるタイプの土器群は、主に白砂層から出土する傾向にある。これらの資料は、鹿児島県の桐木耳取遺跡出土資料と酷似しており九州本土との交流を裏付けるものである。

その他に注意される遺物としては、爪形文土器と同じ層準から出土する石器は小振りの刃部磨製石器が主体であったことである。このことは、野国貝塚でも同様な傾向を示すことが知られており、本時期における石器の一つの様式を提示しているものと考えられる。また、大型石器は、三点が重なり合うような状態で出土した。一見、何らかの埋納遺構も想起されたが判然としなかった。今後、類例資料の追加を待って検討したい。なお、同資料は、出土の状況から第Ⅱe層（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）に属するものと解している。

さて、放射性炭素年代測定（補正年代）から本遺跡の年代観を概観してみる。第55表は土層の堆積順に、第56表は年代順に分析結果を並べたものである。

第Ⅱf層（最下層）で約6,400BP～6,000BP（縄文時代早期から前期）、第Ⅱe層及び赤土混土層で2,500BP～1,310BP（縄文時代晩期から古墳時代）、白砂層で2,460BPから310BP（縄文時代晩期から近世）、第Ⅱd層で1,520BPから1,410BP（古墳時代）、第Ⅲb層で2,110BPから2,050BP（弥生時代）、第Ⅲa層で390BPから350BP（中世末）。第Ⅱc層で310BPから160BP（近世）との分析結果である。

①第Ⅱf層（最下層）と第Ⅱc層の年代観は概ね分析結果と符合している。

②第Ⅱe層における出土土器の年代観は縄文時代前期から中期であったが、分析結果とはかなりの年

代的開きがある。

- ③白砂層では、二点の分析資料間で年代的誤差が大きく、資料採集時のエラーも考えられる。出土土器の年代観は縄文時代中期であったが分析結果からその年代は得られなかった。
- ④第Ⅲb・a層では出土資料の年代観はそれぞれ、グスク時代から琉球王府時代（中世から近世）であるのに対し、弥生時代・中世との結果であった。

出土遺物の年代観と分析結果の比較は、分析試料の採集作業を慎重に行うことはもちろんのことであるが、その作業の積み重ねと類似遺跡との比較、出土遺物自体の型式分類作業を進めることによって、より先史時代の様相を解明することにつながることとなろう。

今回の報告は、多種多様な遺物が大量に得られたため多くの資料を割愛し限られた資料の提示にとどまった。特に主要な資料である土器・石器について、分類、集計が不完全であることは否めない。今後、機会を改めて再整理を行い、詳細な検討を加えたい。

今後の課題

本遺跡の調査を契機に以下のような課題が挙げられる。

- ①沖縄新石器時代前Ⅱ期（爪形文土器）における遺跡の立地の比較・検討
- ②第Ⅱe層の堆積に関して、類似遺跡との比較・検討
- ③沖縄新石器時代前Ⅳ期に所属する土器群についての類例資料の収集
- ④各期における微細遺物（特に魚類等）の検出と類似遺跡との比較・検討

最後に、今回の発掘調査は、那覇市内で初となる爪形文土器の出土が目玉された。今後、同資料の出自、類似遺跡との比較検討を行うことによって、先史時代における具体的な人々の営みの全容が明らかにされていくものとする。これまでに得られた調査成果の集成・整理を行い、今後の先史時代研究の発展に向けて、他地域の類似遺跡との比較・検討をより一層充実させる必要がある。

第55表 放射性炭素年代測定一覧①

番号	グリッド	位置	層序	出土年月日	試料の種類	測定年代 (BP)	補正年代 (BP)	時代	備考
1	P-10		ⅡC層 0/10	2005.06.15	炭化材	180±30	190±30	近世	附篇4
2	N-16		ⅡC層 30/40	2005.12.05	炭化材	340±30	280±30	近世	附篇4
3	M-14	西側アゼ	Ⅲa層	2006.12.18	炭化材	310±20	370±20	グスク時代	附篇6
4	N-9	PitNo.12	Ⅲb層	2006.12.19	炭化材	2,140±20	2,080±30	沖縄後期	附篇6
5	K-17		Ⅱd層 貝塚下	2007.02.28	炭化材	1,610±30	1,490±30	沖縄後期	附篇3
6	M-13	東壁	Ⅱd層 粘土質	2006.12.05	炭化物	1,460±30	1,440±30	沖縄後期	附篇2
7	H-11		白砂層 0/10	2007.03.08	炭化材	360±30	340±30	近世	附篇4
8	I-14		白砂層 40/50	2007.03.08	炭化材	2,440±30	2,420±40	沖縄前Ⅵ期	附篇4
9	L-7	東トレンチ	地山(=Ⅱe層:赤土層) 10/20	2005.11.02	炭化材	1,460±30	1,350±30	沖縄後期	附篇3
10	L-7		地山(=Ⅱe層:赤土層) 50/60	2005.12.16	炭化物	1,440±30	1,310±30	沖縄後期	附篇3
11	J-9	南壁	Ⅱe層 120/130	2005.11.21	炭化材	2,490±30	2,470±30	沖縄前Ⅴ期	附篇2
12	J-8	南側トレンチ	Ⅱd層 160/170	2005.11.29	炭化材	1,380±20	1,360±20	沖縄後期	附篇6
13	J-7	南側トレンチ	Ⅱe層 粘土質 160/170	2005.11.29	炭化材	1,880±40	1,690±40	沖縄後期	附篇3
14	H-10		Ⅱf層 10/20	2005.11.18	炭化材	6,070±40	6,040±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附篇3
15	K-7	北側アゼ	Ⅱf層	2005.12.28	炭化物	6,230±40	6,110±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附篇1
16	K-7	北側アゼ	Ⅱf層	2005.12.28	炭化材	6,330±30	6,360±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附篇7
17	J-8	焼土遺構No.1		2005.12.25	炭化材	5,810±30	5,860±30	沖縄前Ⅲ期	附篇7

第56表 放射性炭素年代測定一覧②

番号	グリッド	位置	層序	出土年月日	試料の種類	測定年代 (BP)	補正年代 (BP)	時代	備考
1	P-10		ⅡC層 0/10	2005.06.15	炭化材	180±30	190±30	近世	附篇4
2	N-16		ⅡC層 30/40	2005.12.05	炭化材	340±30	280±30	近世	附篇4
3	H-11		白砂層 0/10	2007.03.08	炭化材	360±30	340±30	近世	附篇4
4	M-14	西側トレンチ	Ⅲa層 0/10	2006.12.18	炭化材	310±20	370±20	グスク時代	附篇6
5	L-7		地山(=Ⅱe層:赤土層) 50/60	2005.12.16	炭化材	1,440±30	1,310±30	沖縄後期	附篇3
6	L-7	東トレンチ	地山(=Ⅱe層:赤土層) 10/20	2005.11.02	炭化材	1,460±30	1,350±30	沖縄後期	附篇3
7	J-8	南側トレンチ	Ⅱe層 160/170	2005.11.29	炭化材	1,380±20	1,360±20	沖縄後期	附篇6
8	M-13	東壁	Ⅱd層 粘土質	2006.12.05	炭化物	1,460±30	1,440±30	沖縄後期	附篇2
9	K-17		Ⅱd層 貝塚下	2007.02.28	炭化材	1,610±30	1,490±30	沖縄後期	附篇3
10	J-7	南側トレンチ	Ⅱe層 粘土質 160/170	2005.11.29	炭化材	1,880±40	1,690±40	沖縄後期	附篇3
11	N-9	PitNo.12	Ⅲb層	2006.12.19	炭化材	2,140±20	2,080±30	沖縄後期	附篇6
12	I-14		白砂層 40/50	2007.03.08	炭化材	2,440±30	2,420±40	沖縄前Ⅵ期	附篇4
13	J-9	南壁	Ⅱe層 120/130	2005.11.21	炭化材	2,490±30	2,470±30	沖縄前Ⅴ期	附篇2
14	J-8	焼土遺構No.1		2005.12.25	炭化材	5,810±30	5,860±30	沖縄前Ⅲ期	附篇7
15	H-10		Ⅱf層 10/20	2005.11.18	炭化材	6,070±40	6,040±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附篇3
16	K-7	北側アゼ	Ⅱf層	2005.12.28	炭化物	6,230±40	6,110±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附篇1
17	K-7	北側アゼ	Ⅱf層	2005.12.28	炭化材	6,330±30	6,360±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附篇7

附篇 1 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果	p. 2
4. 考察	p. 2
引用文献	p. 3

<表一覧>

表1. 放射性炭素年代測定結果
表2. 暦年較正結果

はじめに

箕隅原C遺跡は、那覇市の西南部に位置し、標高3m前後の海岸砂丘上に形成されている。これまでの調査により、調査区の南部には琉球王府時代の遺構が確認されており、銀跡などが検出されたことから「生産の場」が想定されている。一方、調査区の北部では、土器・石器・貝・獣骨などが大量に出土した遺物包含層が確認されている。これら遺物の中で特筆すべき点は、爪型文土器、室川下層式土器、磨製石斧などの縄文時代早期および前期とされる資料の出土である。このことから、遺跡の北側には縄文時代の遺跡群が分布すると考えられている。このような状況が明らかにされたことにより、本遺跡は先史時代の那覇市周辺を検討することができる貴重な遺跡であるとされた。

本報告では、調査区北部の遺物包含層より出土し、県内でも出土例の少ない爪型文土器に関わる年代資料を得ることを目的として、土器と同層位より出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施する。

1. 試料

試料は、箕隅原C遺跡より検出した炭化物1点である。試料の採取された層位であるII f層からは、爪形文とされる土器片も出土していることから、発掘調査所見では、炭化物の年代は爪形文土器の年代指標になり得るものとされている。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。試料の年代は、 $6,110 \pm 40$ BPを示す。また、校正した暦年代を表2に示す。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期5,730 \pm 40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。なお、今回の試料では、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
K-7、II f層	炭化物	$6,110 \pm 40$	-32.28 ± 0.55	$6,230 \pm 40$	IAAA-63019

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
		σ	cal BC 5,202 - cal BC 5,174	cal BP 7,152 - 7,124		
K-7、II f層	$6,110 \pm 43$	σ	cal BC 5,071 - cal BC 4,956	cal BP 7,021 - 6,906	0.825	IAAA-63019
		2σ	cal BC 5,209 - cal BC 4,936	cal BP 7,159 - 6,886	1.000	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

暦年較正の計算においては、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を求める。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差を σ として計算させた結果、試料の較正暦年は7,152-6,906calBPとなる。

4. 考察

K-7地点、II f層からは爪形土器が出土し、同層位出土炭化物の放射性炭素年代測定では、 $6,110 \pm 40$ BPの値が示された。これまでの爪形土器に関わる放射性炭素年代としては、ヤブチ式の $6,670 \pm 140$ BP、東原式の $6,450 \pm 140$ BPという年代が、沖縄県史(財団法人沖縄県文化振興会ほか編, 2003)の縄文時代編年表に示されている。今回の結果は、これらの年代値に対してどのように整合させていくかが今後の課題である。

なお、今後、これまでの測定例との詳細な比較を行う場合には、その測定例における試料の質について注意する必要がある。特に、試料が海生の貝やサンゴなどでは、大気より遙かに循環の遅い海水中の ^{14}C 濃度を反映するため、その同位体補正年代は、炭化物などの大気中の ^{14}C 濃度を基準とした年代に比

べて数百年古くなることも考慮に入れなければならない。

また、今回の測定では、校正された暦年代7,152-6,906ca1BPという値を呈示したが、これまでの南西諸島における縄文時代に関わる放射性炭素年代測定例では、校正暦年代が示されているものはほとんどない。したがって、現時点では、校正暦年代での検討は行わない。

今回の年代測定結果は、現時点で本遺跡が爪形文土器出土地の沖縄本島南限であるということ を考慮すると、重要な年代指標になるものと考えられる。今後は、爪形文土器検出層においてさらに複数の試料による年代測定を実施し、それらの比較から、より確実な年代観を得るとともに、あわせて地形・層序の検討および遺跡の古環境に関する総合的な調査なども期待される。

引用文献

財団法人沖縄県文化振興会・公文書管理部史料編集室編，2003，沖縄県史 各論編 第二巻 考古，沖縄県教育委員会，662p

附篇 2 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 2
(1) 放射性炭素年代測定	p. 2
(2) 花粉分析	p. 2
(3) 植物珪酸体分析	p. 2
(4) 微細植物片洗い出し分析	p. 3
3. 結果	p. 3
(1) 放射性炭素年代測定	p. 3
(2) 花粉分析	p. 4
(3) 植物珪酸体分析	p. 4
(4) 微細植物片洗い出し分析	p. 4
4. 考察	p. 4
引用文献	p. 5

<表・図版一覧>

- 表 1. 放射性炭素年代測定結果
- 表 2. 暦年較正結果
- 表 3. 花粉分析結果
- 表 4. 植物珪酸体分析結果

図版 1 植物珪酸体

はじめに

那覇市に所在する箕隅原C遺跡は、那覇市南西部の国場川河口よりもさらに西方へ1kmほど離れた海岸低地に位置する。氏家・兼子（2006）による地質図に従えば、遺跡の背後には島尻層群を構成する豊見城層からなる緩やかな丘陵地が広がるが、その縁辺には那覇層とされる石灰岩からなる小丘も分布している。遺跡が位置する低地については、埋め立て地となっており、本来の地形を窺い知ることはできない。ただし、箕隅原C遺跡および隣接する箕隅原A遺跡などの発掘調査により、海浜堆積物であるサンゴ礫を多量に含む砂礫層や海浜砂あるいは砂丘砂と考えられる砂層の堆積や、その南側（陸側）には低湿地の堆積物と考えられる腐植質なシルト層や粘土層などが確認され、海岸砂丘や砂丘背後の低湿地などの地形が伏在している可能性のあることが指摘されている。

これまでの発掘調査により、遺跡の南側では琉球王府時代の畑地など生産の場を示唆する遺構が検出され、北側では縄文時代の遺物群が検出されている。出土した土器には、約6500年前とされる爪形土器や約5000年前頃とされる室川下層式などが確認されており、沖縄本島における縄文時代早期～前期を示す遺跡としても注目されている。

本報告では、発掘調査により推定された砂丘背後の低地に相当すると考えられる調査区において、湿地の堆積物が示唆されるような腐植質の土壌層が認められたことから、その形成環境の推定を目的として、放射性炭素年代測定および花粉、植物珪酸体の各微化石分析さらに種実遺体の検出を目的とした微細植物片洗い出し分析を行う。これらの結果により、箕隅原C遺跡の古環境に係わる資料を作成するものである。

1. 試料

分析の対象とした土層断面は、M-13 東壁およびJ-9 南壁である。

M-13 東壁では、現地地表下約1mまでの断面が作成された。現地調査所見により、箕隅原遺跡における基本層序の層位名が付され、上位よりⅡc層、Ⅱd層上部、Ⅱd層間層、Ⅱd層、Ⅱd層（粘土質）とされた。各層とも厚さは20cm程度であり、いずれも灰黒～暗灰色を呈する土壌であるが、Ⅱc層およびⅡd層上部は砂質、それより下位の各層は砂を含むが粘土質であり、特にⅡd層（粘土質）とした層位は、粘土分が多く、また酸化鉄も多量に含まれることから、水田等の人為的な影響のある土壌である可能性も指摘されている。

試料は、Ⅱc層から試料番号1、Ⅱd層上部から試料番号2、3、Ⅱd層間層から試料番号4、Ⅱd層から試料番号5、6、およびⅡd層（粘土質）から試料番号7の合計7点を採取した。本分析では、水田等の可能性が考えられているⅡd層（粘土質）の試料番号7とその直上の試料番号6の2点を対象として微化石分析および微細植物片洗い出し分析を行う。さらに、Ⅱd層（粘土質）の試料番号7からは、炭化物を抽出し、放射性炭素年代測定の試料（¹⁴C試料1）とした。

J-9 南壁では、上位よりⅡc層、Ⅱd層、Ⅱd層（粘土質）の各層が認められ、Ⅱd層（粘土質）の下位にはⅡe層とされる層位も確認された。Ⅱe層は、いわゆるマーヅと呼ばれる褐色土を基質とし、礫や貝類などを多く包含していることから、背後の石灰岩段丘上のマーヅの再堆積物であるとも考えられている。

試料は、Ⅱc層、Ⅱd層、Ⅱd層（粘土質）の各層からそれぞれ試料番号1、2、3を採取し、Ⅱe層からは試料番号4～7を採取した。今回の分析では、Ⅱe層の試料番号5を対象として微細植物片洗い出し分析を行う。また、Ⅱe層から抽出した炭化材1点を放射性炭素年代測定の試料（¹⁴C試料2）とした。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

根等の目的物と異なる年代を持つと思われるものが混入している場合は、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位での表記が通例とされるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正時の再計算、再検討に対応するため、本報告では1年単位で表記している。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリスス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

(3) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に

由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された分類群とその個数を一覧表で示す。

(4) 微細植物片洗い出し分析

試料（M-13）東壁試料番号6は717g、同試料番号7は916g、J-9南壁試料番号5は570g、を容器に広げ、常温で数日乾燥させる。乾燥後の試料を肉眼やルーペで観察し、目に付いた炭化物や貝類などの遺物を拾い出す。乾燥抽出後の試料を水に満たした容器に投入し、浮いた炭化物をすくい取って回収する。容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20-30回程度）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材などの炭化物を抽出する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。II d層（粘土質）の¹⁴C試料1は1,440±30BP、II e層の¹⁴C試料2は2,470±30BPである。また、暦年較正結果を表2に示す。測定誤差σの場合の暦年は、¹⁴C試料1でcalAD603-646、¹⁴C試料2でcalBC752-520であった。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	地点名	層位	種類	補正年代 BP	δ ¹³ C (‰)	測定年代 BP	Code No.
¹⁴ C試料1	M-13東壁	II d層(粘土質)	炭化物	1,440 ± 30	-26.40 ± 0.65	1,460 ± 30	IAAA-72401
¹⁴ C試料2	J-9南壁	II e層	炭化材	2,470 ± 30	-25.98 ± 0.61	2,490 ± 30	IAAA-72402

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.	
		σ	cal AD	603 -	cal AD	646	cal BP			1,347 -
¹⁴ C試料1	1,436 ± 31	σ	cal AD	569 -	cal AD	655	cal BP	1,381 -	1,295	1.000
		σ	cal BC	752 -	cal BC	686	cal BP	2,702 -	2,636	0.368
¹⁴ C試料2	2,470 ± 31	σ	cal BC	667 -	cal BC	634	cal BP	2,617 -	2,584	0.183
			cal BC	623 -	cal BC	613	cal BP	2,573 -	2,563	0.051
		cal BC	595 -	cal BC	520	cal BP	2,545 -	2,470	0.398	
		2σ	cal BC	763 -	cal BC	681	cal BP	2,713 -	2,631	0.298
			cal BC	672 -	cal BC	483	cal BP	2,622 -	2,433	0.611
			cal BC	466 -	cal BC	415	cal BP	2,416 -	2,365	0.091

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
- 5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 花粉分析

結果を表3に示す。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。木本花粉ではマツ属が、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が検出されるものの保存状態は悪く、いずれも花粉外膜が破損・溶解している状態で産出していた。また、ヨモギ属は複数の花粉が固まった状態（花粉塊）のものも検出された。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表4に示す。各試料から検出される植物珪酸体は少なく、30個程度である。保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

M-13東壁試料番号6では、タケ亜科やウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。同試料番号7では、ススキ属やイチゴツナギ亜科などが認められる。なお、各試料から検出されたイチゴツナギ亜科の中には、オオムギなどの栽培種を含むオオムギ族に形態が似た植物珪酸体も含まれる。

(4) 微細植物片洗い出し分析

同定可能な種実は確認されず、植物はM-13東壁試料番号7から最大角3mm程度の炭化材5個（0.01g未満）が検出されるのみであった。植物以外では、J-9南壁試料番号5から二枚貝類1個やサンゴ類の破片7個程度、M-13東壁試料番号6から二枚貝類の破片1個、各試料から砂礫や土粒が確認された。

4. 考察

II d層（粘土質）およびII e層に包含されていた炭化材は、それぞれの層の堆積形成過程において取り込まれたものと考えられることから、その放射性炭素年代は、各層の堆積年代に近いが、堆積よりやや以前の年代を示していると考えてよい。今回の結果に従えば、II e層の堆積年代はおよそ2500年前頃、その上位のII d層（粘土質）の堆積年代はおよそ1400年前頃となり、層位的な矛盾はない。ただし、II e層の年代は、同層から数点出土したとされている爪形文土器との年代観よりもはるかに新しい。これについては、より古い時期の包含層からの流れ込みということも考えられる。また、II e層とII d層（粘土質）との間でその層相が異なることから、II e層からII d層（粘土質）への変化は、環境の変化に起因している可能性がある。II d層（粘土質）の色調と粒径から推定すれば、II d層（粘土質）の堆積時の環境は、周辺からの碎屑物の供給がII e層堆積時に比べて少なく、いわゆる安定した状態であったと考えられる。その安定化は、2500年前から1400年前までのある時期に起こったことが推定される。同じII d層である貝塚層がその遺物から弥生時代後期頃推定されるのでこの範囲内に入り調和的である。ただし、現時点では、この変化の原因および局地的なものであるか、ある程度広域的なものかについては不明である。今後、周辺地域における類例の蓄積が必要と考えられる。

一方、今回の分析では、II d層（粘土質）および直上のII d層からは、ともに環境を解析するほどの

表3. 花粉分析結果

種類 試料番号	M-13東壁	
	II d	II d(粘土質)
6		7
木本花粉		
マツ属	-	1
草本花粉		
イネ科	1	1
ヨモギ属	-	2
シダ類孢子		
シダ類孢子	2	9
合計		
木本花粉	0	1
草本花粉	1	3
シダ類孢子	2	9
総計	3	13

表4. 植物珪酸体分析結果

種類 試料番号	M-13東壁	
	II d	II d(粘土質)
6		7
イネ科葉部短細胞珪酸体		
ウシクサ族ススキ属	-	2
イチゴツナギ亜科	20	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科	2	-
ウシクサ族	2	3
不明	5	20
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	20	5
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9	23
総計	29	28

微化石は得られなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。よって、今回花粉が検出されなかった理由としては、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したためと考えられる。

検出された花粉化石種類についてみると、木本類ではマツ属が検出される。沖縄にはリュウキュウマツが特産として知られており、現在でも広く生育している。これらのことから、今回の試料もリュウキュウマツの可能性はある。草本類の花粉化石ではイネ科、ヨモギ属が検出される。これらは開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であることから、調査区周辺の草地に生育していたと考えられる。なお、ヨモギ属には花粉塊も認められた。花粉塊は、花粉を持った植物体が混入し、運搬の影響をあまり受けていない場合などに認められることから、局地的な植生を反映していると推測され、調査区の極近傍に生育していた個体由来であると想定される。

植物珪酸体については、亜熱帯湿潤気候下では堆積物中で珪酸分を含む無機成分の溶脱作用が起こる(松井, 1988) こと、また、湿潤な土壤や土壤温度が高い堆積物で植物珪酸体の風化の度合いが高いとされている(近藤, 1988) ことなどから、植物珪酸体の堆積後に溶解や消失が進み、土層中での植物珪酸体の含量が低下したことが考えられる。

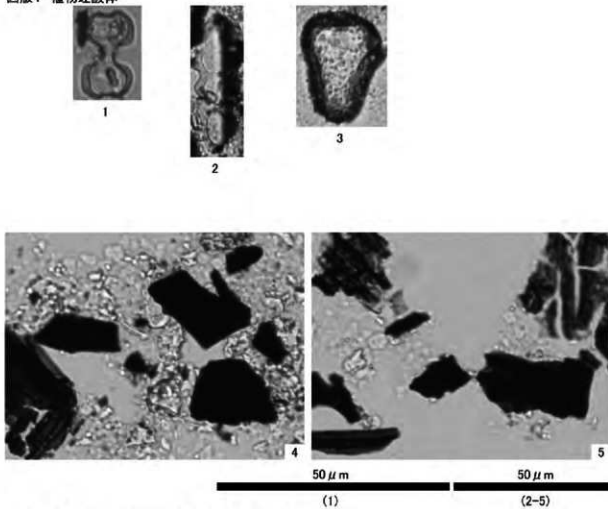
検出された植物珪酸体の分類群からは、少なくとも各層が堆積した頃にタケ亜科やススキ属、イチゴツナギ亜科が生育していたと思われる。イチゴツナギ亜科には、オオムギなどの栽培種を含むオオムギ族に形態が似たものも含まれていた。そのため、オオムギなどの栽培ムギが存在した可能性もある。

いずれにしても、今回の分析では、II d 層(粘土質)が水田層であることを示すような資料は得られなかった。上述したオオムギ栽培の可能性も含めて、今後も、さらに当該期の堆積物や同時期の炭化物を対象とした分析調査により検証することが望まれる。

引用文献

- 近藤 鍊三, 1988, 植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壤と年代, ベドロジスト, 32, 189-203.
近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究, ベドロジスト, 48, 46-64.
松井 健, 1988, 土壤地理学序説, 築地書館株式会社, 316p.
三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態, 植生史研究, 6, 15-30.
中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.
徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子, 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
氏家 宏・兼子尚知, 2006, 那覇及び沖縄市南部地域の地質, 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 産総研地質調査総合センター, 48p.

図版1 植物珪酸体



1. ススキ属短細胞珪酸体(M-13東壁Ⅱd層(粘土質);7)
2. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(M-13東壁Ⅱd層;6)
3. ウシクサ族機動細胞珪酸体(M-13東壁Ⅱd層;6)
4. 状況(鉱物と炭化物が散在)(M-13東壁Ⅱd層;6)
5. 状況(鉱物と炭化物が散在)(M-13東壁Ⅱd層(粘土質);7)

附篇 3 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果と考察	p. 2
引用文献	p. 3

<表一覧>

表1. 放射性炭素年代測定結果

表2. 暦年校正結果

はじめに

那覇市に所在する箕原C遺跡は、那覇市南西部の国場川河口よりもさらに西方へ1kmほど離れた海岸低地に位置する。氏家・兼子（2006）による地質図に従えば、遺跡の背後には島尻層群を構成する豊見城層からなる緩やかな丘陵地が広がるが、その縁辺には那覇層とされる石灰岩からなる小丘も分布している。遺跡が位置する低地については、埋め立て地となっており、本来の地形を窺い知ることはできない。ただし、箕原C遺跡および隣接する箕原B遺跡などの発掘調査により、海浜堆積物であるサンゴ礫を多量に含む砂礫層や海浜砂あるいは砂丘砂と考えられる砂層の堆積や、その南側（陸側）には低湿地の堆積物と考えられる腐植質なシルト層や粘土層などが確認され、海岸砂丘や砂丘背後の低湿地などの地形が伏在している可能性のあることが指摘されている。

本報告では、低湿地を形成していたと考えられる堆積物の各層位より出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行い、各層の堆積年代に関わる情報を獲得し、箕原C遺跡の地形変遷に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、調査区内各層より出土した炭化材5点である。試料名として、グリッドと層位名が用いられている。各試料の試料名は、K-17Ⅱd層、J-7Ⅱe層、H-10Ⅱf層、L-7地山、L-7東トレンチ地山である。

2. 分析方法

根等の目的物と異なる年代を持つと思われるものが混入している場合は、これらをビンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位での表記が通例とされるが、将来的に暦年

校正プログラムや暦年校正曲線の改正時の再計算、再検討に対応するため、本報告では1年単位で表記している。暦年校正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果と考察

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。K-17 II d層は1,490±30BP、J-7 II e層は1,690±40BP、H-10 II f層は6,040±40BP、L-7 地山は1,310±30BP、L-7 東トレンチ地山は1,350±30BPであった。

また、暦年校正結果を表2に示す。測定誤差 σ の場合の暦年は、K-17 II d層で6世紀後半～7世紀初頭、J-7 II e層は3世紀後半～5世紀初頭、H-10 II f層はおよそ6900～6800calBP、L-7 地山は7世紀後半～8世紀中頃、L-7 東トレンチ地山は7世紀後半であった。なお、暦年校正に関しては、より広範囲の年代幅内に真の年代値を持つ可能性を示すことになることから、確率の程度や他の調査成果等も考慮し検討すべきであると考えられる。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
K-17 II d層 貝塚下	炭化材	1,490±30	-32.34±0.69	1,610±30	IAAA-72834
J-7 II e層 粘土層	炭化材	1,690±40	-36.52±0.74	1,880±40	IAAA-72836
H-10 II f層	炭化材	6,040±40	-26.97±0.76	6,070±40	IAAA-72832
L-7 地山	炭化材	1,310±30	-33.13±0.71	1,440±30	IAAA-72833
L-7 東トレンチ 地山	炭化材	1,350±30	-31.62±0.76	1,460±30	IAAA-72835

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5688年を使用。
- 2) BP年代値は、1960年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表2. 暦年校正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代 (cal)				相対比	Code No.
		σ	2σ	cal AD	cal BP		
K-17 II d層 貝塚下	1,492±29	σ	cal AD 550 - cal AD 603	cal BP 1,400 - 1,347	1.000	IAAA-72834	
		2σ	cal AD 467 - cal AD 481 cal AD 534 - cal AD 643	cal BP 1,483 - 1,469 cal BP 1,416 - 1,307	0.017 0.983		
J-7 II e層 粘土層	1,690±36	σ	cal AD 263 - cal AD 277 cal AD 331 - cal AD 406	cal BP 1,687 - 1,673 cal BP 1,619 - 1,544	0.123 0.877	IAAA-72836	
		2σ	cal AD 255 - cal AD 422	cal BP 1,695 - 1,528	1.000		
H-10 II f層	6,042±43	σ	cal BC 4,999 - cal BC 4,896 cal BC 4,866 - cal BC 4,851	cal BP 6,949 - 6,846 cal BP 6,816 - 6,801	0.895 0.105	IAAA-72832	
		2σ	cal BC 5,053 - cal BC 4,830 cal BC 4,814 - cal BC 4,806	cal BP 7,003 - 6,780 cal BP 6,764 - 6,756	0.992 0.008		
L-7 地山	1,306±33	σ	cal AD 664 - cal AD 710 cal AD 747 - cal AD 766	cal BP 1,286 - 1,240 cal BP 1,203 - 1,184	0.708 0.292	IAAA-72833	
		2σ	cal AD 658 - cal AD 730 cal AD 735 - cal AD 772	cal BP 1,292 - 1,220 cal BP 1,215 - 1,178	0.681 0.319		
L-7 東トレンチ 地山	1,352±32	σ	cal AD 648 - cal AD 681	cal BP 1,302 - 1,269	1.000	IAAA-72835	
		2σ	cal AD 622 - cal AD 626 cal AD 632 - cal AD 714 cal AD 744 - cal AD 768	cal BP 1,328 - 1,324 cal BP 1,318 - 1,236 cal BP 1,206 - 1,182	0.006 0.912 0.082		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

今回の結果に従えば、層位名が与えられている、II f 層の堆積年代は、同位体補正を行ったもので、およそ6000年前頃、II e 層が1700年前頃、II d 層が1500年前頃となり、層位的な矛盾はない。また、L-7 地山層は、共に1300年前頃の値を示している。

これまでの箕隅原C遺跡の放射性炭素年代測定により与えられた堆積年代は、II f 層で、6100年前頃、II d 層で1400年頃前の値を示しており、今回の結果と概ね調和している。II e 層については、2500年前頃の値を示し、今回の結果と離れたものになるが、流れ込み等の可能性も想定されることから、少なくとも1700年以前の堆積層ということが推定される。一方、今回、地山層（直上）は、共に1300年前頃の年代値が与えられたが、層位的詳細は不明で、地山層上位層の認識と共に検討が必要と考える。

今回の測定結果で、各層の堆積年代が明らかになってきた。今後も年代値の蓄積を行なうと共に、この結果をふまえた地形・層序の検討および遺跡の古環境に関する総合的な検討が期待される。

引用文献

氏家 宏・兼子尚知, 2006, 那覇及び沖縄市南部地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 産総研地質調査総合センター, 48p.

附篇 4 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果	p. 2
引用文献	p. 2

<表一覧>

表1. 放射性炭素年代測定結果

表2. 暦年校正結果

はじめに

那覇市に所在する箕隅原C遺跡は、那覇市南西部の国場川河口よりもさらに西方へ1kmほど離れた海岸低地に位置する。氏家・兼子（2006）による地質図に従えば、遺跡の背後には島尻層群を構成する豊見城層からなる緩やかな丘陵地が広がるが、その縁辺には那覇層とされる石灰岩からなる小丘も分布している。遺跡が位置する低地については、埋め立て地となっており、本来の地形を窺い知ることはできない。ただし、箕隅原C遺跡および隣接する箕隅原A遺跡などの発掘調査により、海浜堆積物であるサンゴ礁を多量に含む砂礫層や海浜砂あるいは砂丘砂と考えられる砂層の堆積や、その南側（陸側）には低湿地の堆積物と考えられる腐植質なシルト層や粘土層などが確認され、海岸砂丘や砂丘背後の低湿地などの地形が伏在している可能性のあることが指摘されている。

本報告では、発掘調査によりIIc層および白砂層から採取された炭化材を対象として、放射性炭素年代測定を行い、箕隅原C遺跡の年代に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、P-10 IIc層、N-16 IIc層、H-11 白砂層、I-14 白砂層で検出された炭化材4点である。試料には試料番号1～4を付す。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行いうため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。較正には北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。また、暦年較正は測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。試料番号1は190±30BP、試料番号2は280±30BP、試料番号3は340±30BP、試料番号4は2,420±40BPを示した。表2には暦年較正結果を示す。測定誤差を σ として計算させた結果、試料番号1の暦年代はcalAD1,665-1,951、試料番号2の暦年代はcalAD1,523-1,656、試料番号3の暦年代はcalAD1,492-1,633、試料番号4の暦年代はcalBC706-408であった。これに従えば、試料1が17世紀中頃～20世紀中頃、試料2が16世紀前半～17世紀中頃、試料3が15世紀末～17世紀前半の年代幅を示す。試料4は約2600～2300年前の値を示すことから、縄文時代晩期に属すると思われる。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料番号	地点名	層位	試料の質	補正年代	$\delta^{13}C$	測定年代	Code No.	測定機関番号
1	P-10	Ⅱc層	炭化材	190±30	-24.76±0.64	180±30	10436-1	IAAA-83221
2	N-16	Ⅱc層	炭化材	280±30	-28.43±0.45	340±30	10436-2	IAAA-83222
3	H-11	白砂層	炭化材	340±30	-26.16±0.49	360±30	10436-3	IAAA-83223
4	I-14	白砂層	炭化材	2,420±40	-25.75±0.42	2,440±30	10436-4	IAAA-83224

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
		σ	2σ			
1	185±29	σ	cal AD 1,665 - cal AD 1,682	cal BP 285 - 268	0.199	10436-1
			cal AD 1,737 - cal AD 1,784	cal BP 213 - 166	0.513	
			cal AD 1,795 - cal AD 1,804	cal BP 155 - 146	0.094	
		2σ	cal AD 1,936 - cal AD 1,951	cal BP 14 - 1	0.194	
			cal AD 1,651 - cal AD 1,694	cal BP 299 - 256	0.222	
			cal AD 1,727 - cal AD 1,813	cal BP 223 - 137	0.575	
2	283±31	σ	cal AD 1,839 - cal AD 1,841	cal BP 111 - 109	0.002	10436-2
			cal AD 1,854 - cal AD 1,858	cal BP 96 - 92	0.004	
			cal AD 1,862 - cal AD 1,866	cal BP 88 - 84	0.004	
		2σ	cal AD 1,918 - cal AD 1,952	cal BP 32 - 2	0.192	
			cal AD 1,523 - cal AD 1,572	cal BP 427 - 378	0.604	
			cal AD 1,630 - cal AD 1,656	cal BP 320 - 294	0.396	
3	336±29	σ	cal AD 1,495 - cal AD 1,507	cal BP 455 - 443	0.021	10436-3
			cal AD 1,511 - cal AD 1,601	cal BP 439 - 349	0.590	
			cal AD 1,616 - cal AD 1,665	cal BP 334 - 285	0.373	
		2σ	cal AD 1,785 - cal AD 1,793	cal BP 165 - 157	0.016	
			cal AD 1,492 - cal AD 1,527	cal BP 458 - 423	0.323	
			cal AD 1,554 - cal AD 1,602	cal BP 396 - 348	0.474	
4	2,424±34	σ	cal AD 1,612 - cal AD 1,633	cal BP 338 - 317	0.203	10436-4
			cal AD 1,474 - cal AD 1,640	cal BP 476 - 310	1.000	
			cal BC 706 - cal BC 695	cal BP 2,656 - 2,645	0.062	
		2σ	cal BC 539 - cal BC 408	cal BP 2,489 - 2,358	0.938	
			cal BC 750 - cal BC 687	cal BP 2,700 - 2,637	0.186	
			cal BC 666 - cal BC 642	cal BP 2,616 - 2,592	0.054	
		cal BC 593 - cal BC 401	cal BP 2,543 - 2,351	0.760		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

引用文献

氏家 宏・兼子尚知, 2006, 那覇及び沖縄市南部地域の地質。地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 産総研地質調査総合センター, 48p.

附篇 5 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

鏡水箕隅原 C 遺跡の自然科学分析委託業務報告

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 土壌理化学分析・粒度分析	p. 1
(2) 微細植物片洗い出し分析	p. 2
3. 結果	p. 3
(1) 土壌理化学分析・粒度分析	p. 3
(2) 微細植物片洗い出し分析	p. 4
4. 考察	p. 4
引用文献	p. 4

<表一覧>

表 1. 土壌理化学分析および粒度分析結果

はじめに

前報では、発掘調査により推定された砂丘背後の低地に相当すると考えられる調査区において、湿地の堆積物が示唆されるような腐植質の土壌化した層位が認められたことから、その形成環境の推定を目的として、放射性炭素年代測定および花粉、植物珪酸体の各微化石分析さらに種実遺体の検出を目的とした微細植物片洗い出し分析を行った。年代測定により、腐植質の層位は、暦年で7世紀前半頃の堆積年代が推定されたが、微化石および微細植物片の産状は不良であり、それらの結果からは十分な古環境に係わる資料を作成することはできなかった。

本報告では、前報で対象とした腐植質の層位について、土壌理化学分析を行うことにより、その特性を把握し、形成環境特に水田あるいは畑作等の耕作土であった可能性を検討する。また、前回は微細植物片洗い出し分析の対象としなかった腐植質層の上部および前回は別地点の腐植質層について、同分析を行い、その産状を確認する。さらに、近世の溝とされた遺構および不定形不明ピット集中部におけるピットを対象として、生活残渣の検出や用途にかかわる資料の検出を目的とし、微細植物片洗い出し分析を行う。

1. 試料

土壌理化学分析の対象とした試料は、前報で微化石分析を行ったM-13東壁の試料である。ここでは、II c層の試料番号1、II d層上部の試料番号3、II d層の試料番号6、およびII d層（粘土質）の試料番号7の合計4点を選択した。また、II d層上部の試料番号3については、微細植物片洗い出し分析を行う。

さらに、M-13南壁で検出された近世の溝の覆土の試料番号3、K-15北畦で認められたII d層（粘土質）の試料番号2、不定形不明ピット集中部ピットより採取された土壌の3点を対象として、微細植物片洗い出し分析を行う。

2. 分析方法

(1) 土壌理化学分析・粒度分析

有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解－水蒸気蒸留法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、可給態リン酸はトルオグ法、可給態窒素はリン酸緩衝液抽出－水蒸気蒸留法、リン酸吸収係数は2.5%リン酸アンモニウム液法、粒径組成はピベット法でそれぞれ行った（土壌標準分析・測定法委員会，1986、土壌環境分析法編集委員会，1997）。

以下に各項目の操作工程を示す。

1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) 有機炭素

粉砕土試料0.100～0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

3) 全窒素

粉碎土試料1.00 gをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約3.0 gと硫酸10mlを加え加熱分解した。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量(T-N%)を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

4) 全リン酸

粉碎土試料1.00 gをケルダールフラスコに秤りとり、はじめに硝酸(HNO₃)10mlを加えて加熱分解した。放冷後、過塩素酸(HClO₄)20mlを加えて再び加熱分解を行った。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過した。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液(バナドモリブデン酸・硝酸液)を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定した。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)を求める。

5) 可給態リン酸

風乾細土試料1.00 gを300ml三角フラスコに秤りとり、0.002N硫酸溶液(pH3)200mlを加え、室温で1時間振とうし、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値から、試料中の可給態リン酸量(P₂O₅mg/乾土100 g)を求める。

6) 可給態窒素

風乾細土試料10.00 gを100ml三角フラスコにはかり、pH7.0リン酸緩衝液50mlを加え、室温で1時間振とうし、ろ過する。ろ液をケルダール分解し、水蒸気蒸留法によって窒素を測定する。この測定値とから、加熱減量法で求めた試料中の水分量から、乾土あたりの可給態窒素量(Nmg/乾土100 g)を求める。

7) リン酸吸収係数

乾土として10.00 gになるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5%リン酸アンモニウム液(pH7.0)20mlを加え、時々振り混ぜながら室温で24時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液100 μlを50mlメスフラスコに正確にとり、水約35mlとリン酸発色液a液10mlを加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後30分間放置し、420nmで比色定量する。定量された試料中のリン酸量を2.5%リン酸アンモニウム液(pH7.0)のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数を求める。

8) 粒度組成(ピベット法)

風乾細土試料10.00gに30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物を分解する。分解終了後、遠心洗浄を行い、脱塩した後、蒸留水約400mlと分散剤(4%ヘキサメタリン酸ナトリウム)10mlを加え、攪拌しながら20分間音波処理を行う。この懸濁液を500ml沈底瓶に移し、蒸留水で500mlに定容する。

沈底瓶を1分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に5 cmの深さから懸濁液10mlを採取する。採取懸濁液は蒸発乾固させ、秤量する(シルト・粘土の含量)。さらに、所定の時間が経過した後、沈底瓶から懸濁液を5 cmの深さから10ml採取し、蒸発乾固させ、秤量する(粘土含量)。沈底瓶に残ったシルト・粘土はサイフォンを使ってすべて洗い流し、その残査を乾燥・秤量する(砂含量)。これを0.2mmφの篩で篩い分け、篩上の残留物を秤量する(粗砂含量)。これら測定値をもとに粗砂(2.0-0.2mm)・細砂(0.2-0.02mm)・シルト(0.02-0.002mm)・粘土(0.002mm以下)4成分の合計を100とする各成分の重量%を求め、国際法によって土性区分を行う。

(2) 微細植物片洗い出し分析

試料(ピットは1kg、他は0.5kg)を容器に広げ、常温で数日乾燥させる。乾燥後の試料を肉眼やルーペで観察し、目に付いた炭化物や貝類などの遺物を拾い出す。乾燥抽出後の試料を水を満たした容器に

投入し、浮いた炭化物をすくい取って回収する。容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20-30回程度）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。

篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材などの炭化物を抽出する。分析後は、炭化材、貝類、残渣を70℃48時間乾燥後、容器に入れ返却する。

3. 結果

(1) 土壌理化学分析・粒度分析

土壌理化学分析結果を表1に示す。土壌の生産力を評価する上で、土壌中の有機物量を無視することはできないが、土壌有機物を直接測定することは難しい。そのため、土壌有機物量の指標としては、全炭素、全窒素量およびリン酸含量も指標とされる。分析結果では、下位の試料ほど有機炭素量および腐植含量の多い傾向が認められ、IIc層では有機炭素量が約0.3%、腐植含量が約0.5%であるが、II d層（粘土質）では有機炭素量は約0.9%、腐植含量は約1.6%を示す。全窒素量についても同様の傾向が認められ、IIc層は0.05%、II d層（粘土質）は0.09%である。C/N比も下位ほど高い値を示し、IIc層では6、II d層（粘土質）では10を示す。土壌有機物は作物の生育基盤となる土壌の物理性や化学性、生物性を改善し、生育や収量を高める効果を担うことから、一般的には腐植に換算して2%以下の土壌では有機物を施与するなどの改良が必要とされる。この観点からすると、腐植含量の最も高いII d層（粘土質）においても、作物が生育する基盤としては若干有機物量が不足しているといえる。

一方、生産力評価における養分豊富の指標としては、可給態リン酸量および可給態窒素が目安とされる。地力増進の基本的技術対策における可給態リン酸の改善目標値は10mg/100g以上とされ、可給態窒素の改善目標値は水田土壌で8~20mg/100g、普通畑土壌で5mg/100g以上とされている（鬼鞍, 1985）。この基準からみれば、IIc層からII d層（粘土質）までいずれの層位も可給態リン酸量の改善目標値を満足しており、特にII d層で高い値を示している。可給態窒素量は、IIc層とII d層上部で約1mg/100g、II d層とII d層（粘土質）で約2mg/100gであり、いずれの層位も上記の改善目標値が満たされていない。

全リン酸量は、II d層上部およびII d層で最も高く、7 P₂O₅mg/g前後の値を示し、次いでIIc層が約5 P₂O₅mg/gであり、II d層（粘土質）は約3 P₂O₅mg/gである。土壌中に普通に含まれるリン酸量については、いくつかの報告事例（Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991など）があり、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0 P₂O₅mg/g程度である。したがって、今回分析したいずれの層位も天然賦存量を超えるリン酸量を含有している。また、リン酸吸収係数は、IIc層で最も低く500mg/100gであり、II d層およびII d層（粘土質）で最も高く、約800mg/100gを示す。渡嘉敷（1993）に示された島尻マージの平均的な値は1000mg/100g前後とされているが、今回の各層位の値は、島尻マージの平均値よりも有意に低い。

粒径組成は、IIc層とII d層上部がともに粗砂の多い砂質壤土に分類され、II d層およびII d層（粘土質）は粘土分の多い軽塩土に分類された。ただし、II d層は粗砂、細砂、シルトがいずれも20%台を

表1. 土壌理化学分析および粒度分析結果

地点名	試料番号	層位	土色	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	全リン酸 (mg/g)	可給態リン酸 (mg/100g)	可給態窒素 (mg/100g)	有機吸収係数 (mg/100g)	粒径組成				
												粗砂 (%)	細砂 (%)	シルト (%)	粘土 (%)	土性
M-13 東型	1	IIc	2.5Y/4 黄褐色	0.30	0.52	0.05	6	5.13	29.7	1.3	500	71.2	6.2	6.7	15.9	SCL
	3	II d上部	2.5Y/3 オリーブ褐色	0.56	0.97	0.06	9	7.59	51.2	1.0	730	58.4	11.4	10.5	19.7	SCL
	6	II d	2.5Y/3/2 暗オリーブ褐色	0.83	1.43	0.09	9	6.73	70.1	2.2	830	25.7	20.4	23.0	30.9	LC
	7	II d(粘土質)	2.5Y/3/2 黒褐色	0.94	1.62	0.09	10	3.23	35.9	2.5	800	2.2	24.8	32.1	40.9	LC

注. (1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色誌（農林省農林水産技術会議監修, 1967）による。

(2) 粒径組成：3ϕ 砂質壤土（砂：65~85% シルト：10~20% 粘土：15~25%）、LC 軽塩土（砂：10~55% シルト：10~45% 粘土：25~45%）

占めるが、II d層（粘土質）は粗砂は約2%程しか含まず、シルトが約30%、粘土が約40%ある。この粗砂の含有量の少なさと実際に最も多く含まれる粘土の含有量は、特に「粘土質」とした層相の由来となっている。

(2) 微細植物片洗い出し分析

種実確認されず、炭化材がM-13東壁II d層上部試料番号3から0.01g未満（最大角1mm）、M-13南壁近世の溝試料番号3から0.01g未満（最大角1.5mm）、K-15北壁II d層（粘土質）試料番号2から0.05g（最大角4.5mm）、不定形不明ピット集中部ピットから0.01g（最大角3.5mm）検出されるのみであった。これらの結果からは、特に環境等の推定をすることはできない。また、別途、遺物整理時に検出された炭化物は、「N-11・PitNo.1・III'層」が炭化材であり、「L-12・II d層」がマメ科の種子（半分）である。

なお、植物以外では、動物遺存体（多量の貝類（巻貝、二枚貝）や、骨片、ウニ類の棘、サンゴ類など）や、土器（M-13東壁試料番号3）などが確認された。

4. 考察

土壌理化学分析の結果より、II c層からII d層（粘土質）までの全層位において、現在の耕作土と比べても十分な量を含有する可給態リン酸量と天然賦存量を超える全リン酸量が確認された。加えてこれらの層位では、島尻マージの平均値に比べると有意に低いリン酸吸収係数の値を示した。これらの特徴から、II c層からII d層（粘土質）までの層位では、施肥によるリン酸の富化があった可能性があると考えられる。発掘調査所見では、II d層の下位のII d層（粘土質）が耕作土である可能性が指摘されたが、可給態リン酸量と全リン酸量が最も高い層位は、II d層上部およびII d層であることから、この層位での耕作が行われたことが推定される。

今回の分析では、現在の耕作土に比べると腐植含量の少なさが指摘された。今後は、この問題も含めて、さらに耕作地の広がり等も想定する場合には、多数の地点における分析結果が必要である。これらと比較検討することにより、より詳細な土地利用状況の検討が可能になると考えられる。

引用文献

- 天野 洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発. 農林水産省農林水産技術会議事務局編, 28-36.
- Bowen, H. J. M., 1979, Environmental Chemistry of Elements. [浅見輝男・茅野充男（訳）, 1983, 環境無機化学, 元素の循環と生化学, 博友社, 297p.]
- Bolt, G. H. & Bruggenwert, M. G. M., 1976, SOILCHEMISTRY. [岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行（訳）, 1980, 土壌の化学. 学会出版センター, 309p.]
- 土壌環境分析法編集委員会編, 1997, 土壌環境分析法. 博友社, 427p.
- 土壌標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壌標準分析・測定法. 博友社, 354p.
- 川崎 弘・吉田 滯・井上 恒久, 1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発. 農林水産省農林水産技術会議事務局編, 23-27.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- 小川 吉雄・加藤 弘道・石川 実, 1989, リン酸緩衝液抽出による可給態窒素の簡易測定法. 土肥誌, 60, 160-163.
- 鬼鞍 豊, 1985, 土壌・水質・農業資材の保全. 博友社, 316p.
- ペドロジスト懇談会編, 1984, 土壌調査ハンドブック. 博友社, 156p.
- 渡嘉敷 義浩, 1993, 沖縄に分布する島尻マージおよびジャーガルの土壌特性. ペドロジスト, 37, 99-112.

附篇 6 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

鏡水箕隅原 C 遺跡の年代測定委託業務報告

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果	p. 2

<図表・図版一覧>

表 1. 放射性炭素年代測定結果
表 2. 暦年較正結果

はじめに

那覇市南西部の海岸低地に位置する箕隅原C遺跡では、縄文時代早期および中期相当期の遺物包含層や縄文時代前期相当期および弥生～平安時代相当期の貝塚などが確認され、グスク時代の遺構・遺物も検出されている。本報告では、調査区内で確認された堆積物の各層位より出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行い、各層の堆積年代に関わる情報を獲得し、箕隅原C遺跡における年代資料を作成する。

1. 試料

試料は、調査区内各層より出土した炭化材3点である。試料名として、層位名とグリッドおよび遺構名等が用いられている。各試料の試料名は、IIIb層N-9PitNo.12、IIIa層M-14西側畦、IIe層J-8南側トレンチである。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、2 σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、2 σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したも

のである。校正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。IIIb層N-9PitNo.12は2,080±30BP、IIIa層M-14西側畦は370±20BP、IIe層J-8南側トレンチは1,360±20BPであった。

また、暦年較正結果を表2に示す。測定誤差σの場合の暦年は、IIIb層N-9PitNo.12でcalBC156-53、IIIa層M-14西側畦はcalAD1464-1618、IIe層J-8南側トレンチはcalAD642-662であった。IIIb層N-9PitNo.12の暦年代は、現在の年代観では概ね本土の弥生時代中期後半頃に相当し、IIe層J-8南側トレンチの暦年代は沖縄貝塚時代後期、IIIa層M-14西側畦の暦年代は第一尚氏時代末から第二尚氏時代後期までの範囲に相当する。

表1. 放射性炭素年代測定結果

層位	試料番号等	グリッド	遺構名等	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
IIIb	061219-166	N-9	PitNo.12	炭化材	2,080±30	-28.36±0.59	2,140±20	IAAA-91573
IIIa	061218-69	M-14	西側畦	炭化材	370±20	-21.38±0.46	310±20	IAAA-91574
IIe	—	J-8	南側トレンチ	炭化材	1,360±20	-26.25±0.42	1,380±20	IAAA-91575

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

グリッド	遺構名等	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.				
			σ	cal BC	156	-	cal BC	135			cal BP	2,106	-	2,085
N-9	PitNo.12	2,083±25	σ	cal BC	115	-	cal BC	53	cal BP	2,065	-	2,003	0.770	IAAA-91573
			2σ	cal BC	176	-	cal BC	42	cal BP	2,126	-	1,992		
M-14	西側畦	365±23	σ	cal AD	1,464	-	cal AD	1,518	cal BP	496	-	432	0.673	IAAA-91574
				cal AD	1,594	-	cal AD	1,618	cal BP	356	-	332		
			2σ	cal AD	1,452	-	cal AD	1,524	cal BP	498	-	426	0.574	
				cal AD	1,558	-	cal AD	1,631	cal BP	392	-	319	0.426	
J-8	南側トレンチ	1,385±24	σ	cal AD	642	-	cal AD	662	cal BP	1,308	-	1,288	1.000	IAAA-91575
			2σ	cal AD	613	-	cal AD	669	cal BP	1,337	-	1,281	1.000	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
- 5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

附篇 7 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 放射性炭素年代測定	p. 1
(2) 微細物洗い出し分析	p. 2
(3) 灰像分析	p. 2
3. 結果	p. 2
(1) 放射性炭素年代測定	p. 2
(2) 微細物洗い出し分析	p. 3
(3) 灰像分析	p. 4
4. 考察	p. 4
(1) 遺構の年代観	p. 4
(2) 遺構の用途	p. 4
引用文献	p. 4

<表一覧>

- 表1. 分析試料
- 表2. 放射性炭素年代測定結果
- 表3. 暦年較正結果
- 表4. 微細物洗い出し・分類結果

はじめに

那覇市南西部の海岸低地に位置する箕隅原C遺跡では、縄文時代早期および中期相当期の遺物包含層や縄文時代前期相当期および弥生～平安時代相当期の貝塚などが確認され、グスク時代の遺構・遺物も検出されている。本報告では、爪形文系土器の縄文時代前期に相当すると考えられている堆積物を対象として、炭化物の放射性炭素年代測定と、炭化種実や炭化材の抽出を目的とした微細物洗い出し分析、燃料材や植生に関する情報を得るための灰像分析を行い、遺構の年代と用途に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、調査区内の焼土を含む炉跡などから採取された土壌4点で、表1の通り、放射性炭素年代測定、灰像分析、微細物洗い出し分析を行った。発掘調査所見では、縄文時代早期～前期の爪形文系土器出土層位相当と考えられている。

表1. 分析試料

グリッド	層序	位置	遺構	試料採取日	年代測定	灰像	洗い出し	備考
J-8	—	—	焼土遺構No.1	2005/12/25	○	○	○	焼土No.1
J-8	—	—	焼土遺構No.3	2005/12/22			○	
K-6	II f	東畦	炉跡1	2005/12/28			○	北から1m付近、東から25cm炉跡内
K-7	II f	北畦		2005/12/28	○	○	○	灰?サンプル土

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生産する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 95DH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差

として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴Cの半減期5,730±40年) を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

(2) 微細物洗い出し分析

試料約0.5kgを容器に広げ、常温で数日乾燥させる。乾燥後の試料を肉眼やルーペで観察し、炭化物や動物遺存体などの遺物を拾い出す。乾燥抽出後の試料を水を満たした容器に投入し、浮いた炭化物をすくい取って回収する。容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20-30回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材、動物遺存体などの遺物を抽出する。抽出された炭化材と動物遺存体は、個数と70°C48時間乾燥後の重量、最大径を表示した後、一部を同定対象とする。分析後は、抽出物と分析残渣を容器中で保存する。

(3) 灰像分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュワックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表2に示す。J-8焼土遺構No.1は5,860±30BP、K-7北畦II f層は6,360±40BPであった。また、暦年較正結果を表3に示す。測定誤差 σ の場合の暦年は、J-8焼土遺構No.1がcalBC4,776-4,695、K-7北畦II f層がcalBC5,374-5,304であった。

表2. 放射性炭素年代測定結果

試料名		種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
J-8	焼土遺構No.1	炭化材	5,860±30	-22.42±0.73	5,810±30	IAAA-102116
K-7	北畦 II f層	炭化材	6,360±40	-23.58±0.59	6,330±30	IAAA-102117

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

(3) 灰像分析

各試料からは、植物珪酸体が検出されない。分析プレパラート内には、鉱物粒子や炭化物粒子が散在する。

4. 考察

(1) 遺構の年代観

爪形文系土器の年代に相当すると考えられているピットの堆積物より得られた炭化材の放射性炭素年代は、J-8焼土遺構No. 1は $5,860 \pm 30BP$ 、K-7北畦Ⅱf層は $6,360 \pm 40BP$ を示した。伊藤（2007）によると沖縄県内で出土した爪形文土器の放射性炭素年代は、新しいもので $5,950 \pm 95BP$ 、古いもので $6,670 \pm 140BP$ と示されている。今回のピットの堆積物より得られた炭化材の年代は、爪形文系土器の年代観を支持する結果と言える。爪形文系土器に近い年代資料が得られたことにより、箕隈原C遺跡における縄文時代の人間活動は、 $5,850 \sim 6,400BP$ 頃にあった可能性が高いと考えられる。

(2) 遺構の用途

灰像分析の結果、J-8焼土遺構No. 1とK-7北畦Ⅱf層からは、植物珪酸体が検出されず、燃料材に由来する分類群の特定には至らなかった。一方、微細物洗い出し分析の結果、各試料から炭化材と焼骨を含む動物遺存体が検出された。炭化材は、一部（K-6東畦Ⅱf層炉跡1）が広葉樹に同定された。これらの炭化材は、当時の本遺跡周辺域の森林に生育していた樹種に由来することが推定される。また、ピットの堆積物は焼土を含むことと、焼骨と共に出土した状況を考え合わせると、火を受けたことが考えられる。

動物遺存体は、焼骨を含む骨片や、巻貝類を含む貝類、ウニ類の棘などが確認された。このうち、出土骨にはイノシシ、ネズミ類？を含む哺乳類や海水魚が確認された。少量であるが焼骨が含まれることから、ピット内に廃棄された食料残渣と示唆される。また、極めて微小な椎骨が含まれている点を考慮すると、網などで採取されて食材として利用できない小型の魚種が捨てられたことも考えられる。

引用文献

- 小林達雄編, 2008, 小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器. 株式会社アム・プロモーション, 1322p.
- 近藤隼三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- 伊藤圭, 2007, 南島爪形文土器文化研究史, 紀要 沖縄埋文研究 5, 沖縄県立埋蔵文化財センター, 25-54

圖 版



図版 1 遺跡一帯の空中写真

(S=1:8,000)



図版 2 遺跡の状況

1 段目左：遺跡遠景（南西から）

1 段目右：遺跡全景（東から）

2 段目左：遺跡全景（北西から）

2 段目右：遺跡全景（西から）

3 段目左：遺跡全景（北西から）

3 段目右：遺跡近景（北西から）

4 段目左：遺跡近景（西から）

4 段目右：遺跡近景（西から）



図版3 主な層序の状況

- 1 段目左：1・J-9グリッド東側アゼ
- 2 段目左：J-9グリッド東側アゼ・南壁
- 3 段目左：J-7～9グリッド南壁
- 4 段目左：J-6グリッド南壁

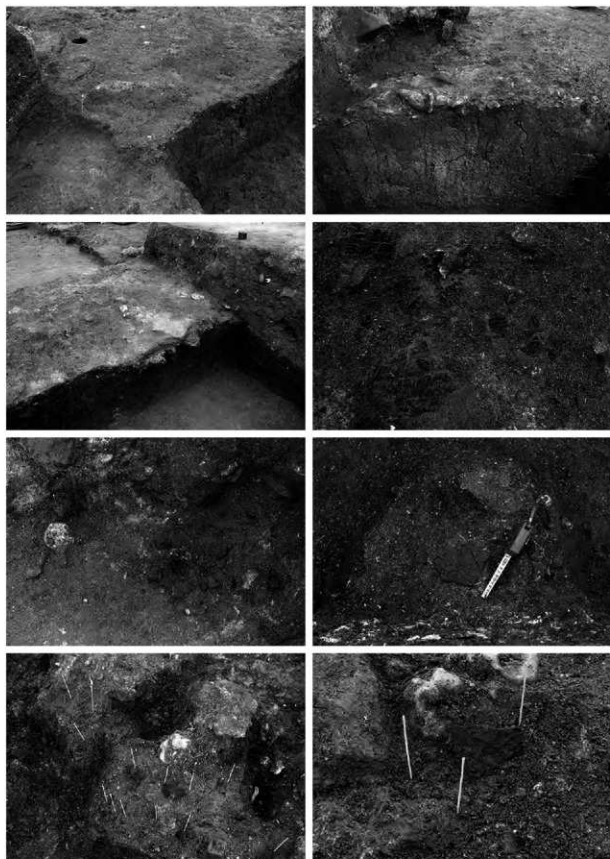
- 1 段目右：1・H-9グリッド東側アゼ
- 2 段目右：L・M-6グリッド東壁
- 3 段目右：J-7グリッド南壁
- 4 段目右：J-7グリッド南壁



図版 4 主な層序の状況

1 段目左: I-10~13グリッド北側アゼ
 2 段目左: H-14・15グリッド北側アゼ
 3 段目左: G-13グリッド南壁・西壁
 4 段目左: M-14・15グリッド南壁

1 段目右: K-8・9グリッド北側アゼ
 2 段目右: H-10~13グリッド北側アゼ
 3 段目右: K・L-13グリッド西壁
 4 段目右: M-8・9グリッド南壁



図版5 主な遺構と出土遺物（沖縄新石器時代前Ⅱ期）

1段目左：焼土遺構No.2・1（J-8グリッド）

2段目左：K-7グリッド遺物出土状況

3段目左：J-7グリッド遺物出土状況

4段目左：F・G-12・13グリッド遺物出土状況

1段目右：焼土遺構No.6（K-6グリッド）

2段目右：K-7グリッド遺物出土状況

3段目右：L-6グリッド遺物出土状況

4段目右：H-11グリッド遺物出土状況



図版6 主な遺構と出土遺物（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）

1段目左：貝塚検出状況（1・J-7～9グリッド）

2段目左：貝塚検出状況（1・J-7～9グリッド）

3段目左：貝塚測量状況（1・J-8・9グリッド）

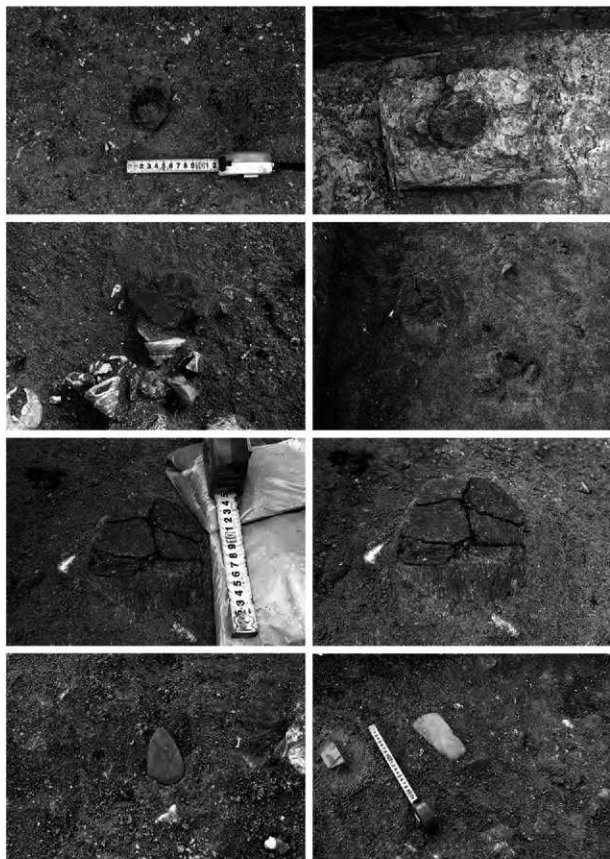
4段目左：貝塚近景（1・J-9グリッド）

1段目右：貝塚検出状況（1・J-7～9グリッド）

2段目右：貝塚検出状況（1・J-7～9グリッド）

3段目右：貝塚測量状況（1・J-8・9グリッド）

4段目右：K-7グリッド遺物出土状況



図版7 主な出土遺物（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）

1段目左：J-9グリッド遺物出土状況

1段目右：M-7グリッド遺物出土状況

2段目左：K-7グリッド遺物出土状況

2段目右：I-10グリッド遺物出土状況

3段目左：I-10グリッド遺物出土状況

3段目右：I-10グリッド遺物出土状況

4段目左：I-9グリッド遺物出土状況

4段目右：J-7グリッド遺物出土状況



図版 8 主な出土遺物（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）

1段目左：G-13グリッド遺物出土状況

2段目左：G-13グリッド遺物出土状況

3段目左：H-14・15グリッド遺物出土状況

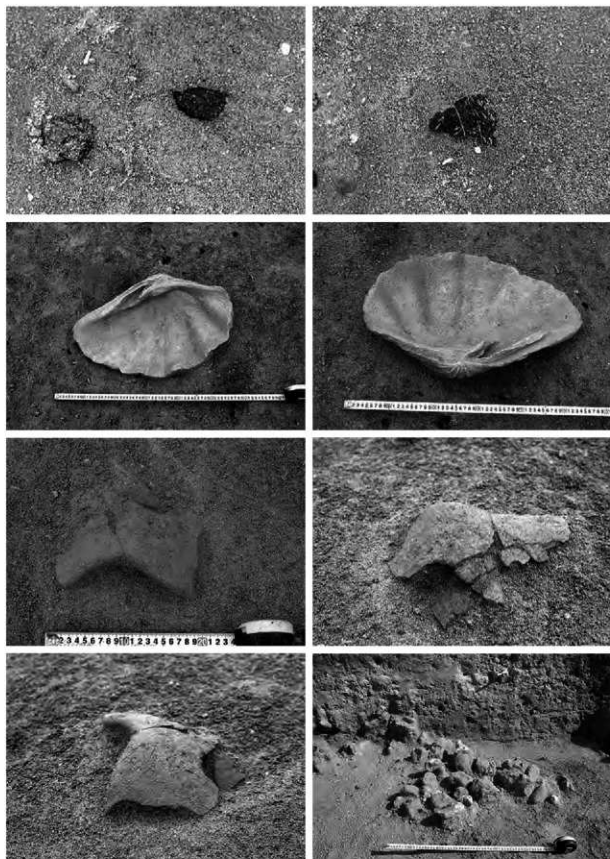
4段目左：H-14・15グリッド遺物出土状況

1段目右：G-13グリッド遺物出土状況

2段目右：G-13グリッド遺物出土状況

3段目右：H-14・15グリッド遺物出土状況

4段目右：H-14・15グリッド遺物出土状況



図版9 主な出土遺物（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）

1 段目左：H-14・15グリッド遺物出土状況

2 段目左：H-13グリッド遺物出土状況

3 段目左：H-12グリッド遺物出土状況

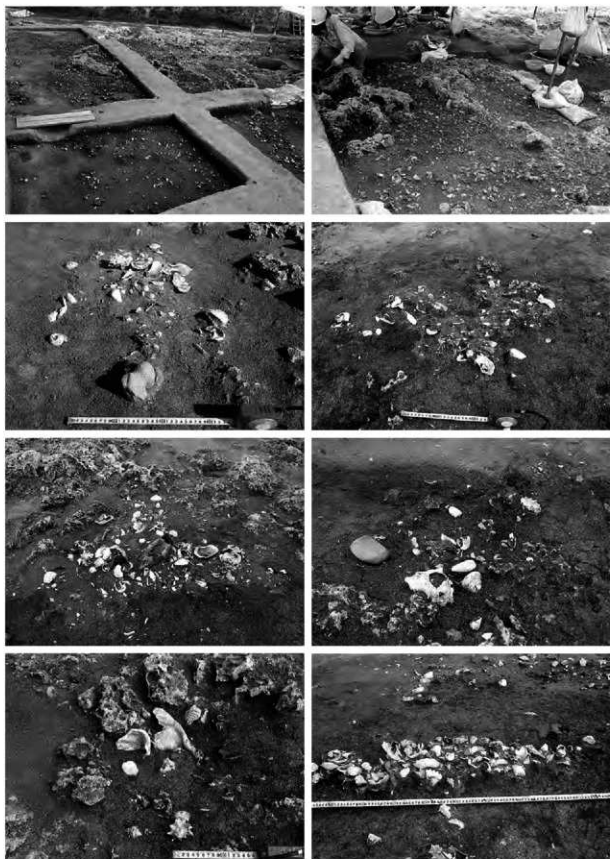
4 段目左：H-12グリッド遺物出土状況

1 段目右：H-14・15グリッド遺物出土状況

2 段目右：H-13グリッド遺物出土状況

3 段目右：H-12グリッド遺物出土状況

4 段目右：H-13グリッド遺物出土状況



図版10 主な遺構（沖縄新石器時代後期）

1段目左：貝塚検出状況（J・K-15～17グリッド）

2段目左：貝溜り遺構（1-17グリッドNo.1）

3段目左：貝溜り遺構（1-18グリッドNo.1）

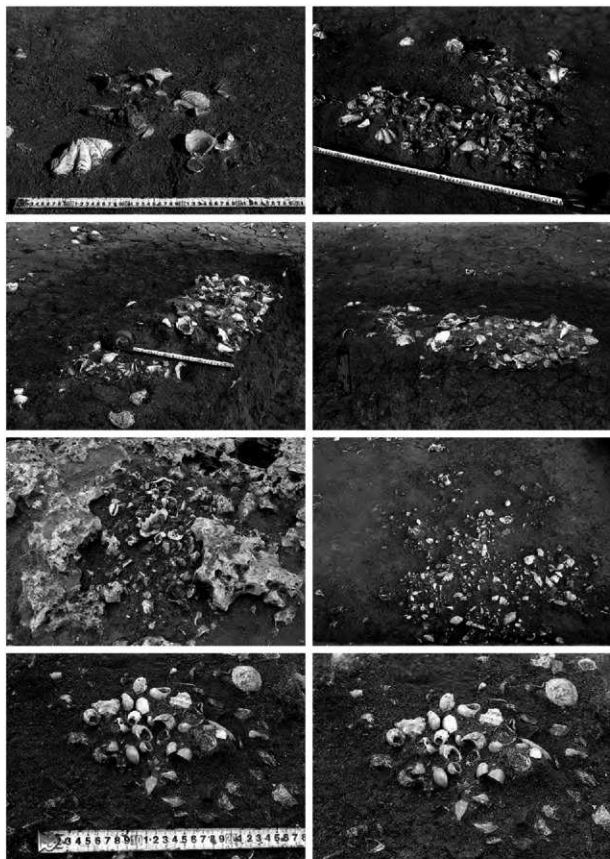
4段目左：貝溜り遺構（1-18グリッドNo.4）

1段目右：貝塚検出状況（K-16グリッド）

2段目右：貝溜り遺構（1-17グリッドNo.2）

3段目右：貝溜り遺構（1-18グリッドNo.3）

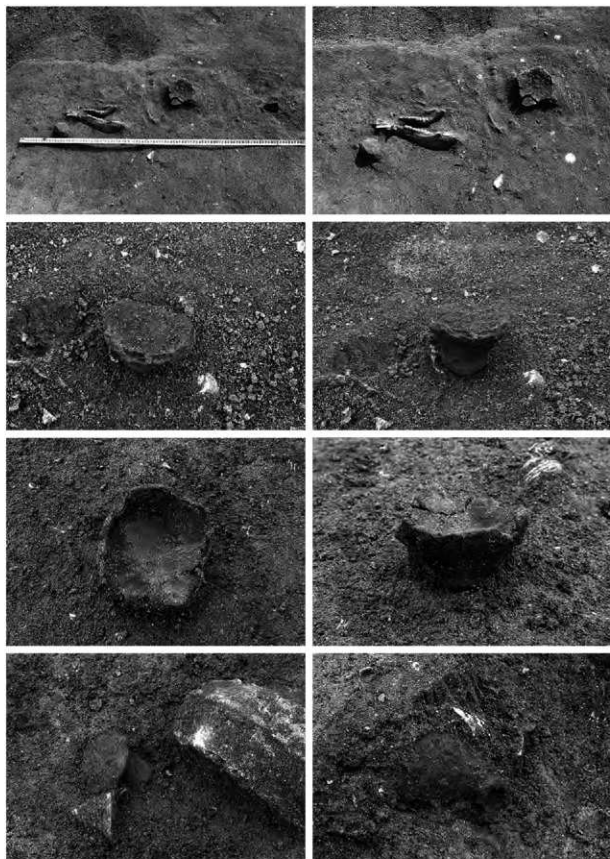
4段目右：貝溜り遺構（J・K-14グリッドNo.1）



図版11 主な遺構（沖縄新石器時代後期）

- 1段目左：貝溜り遺構（J-13グリッドNo.1）
- 2段目左：貝溜り遺構（K-14グリッドNo.1）
- 3段目左：貝溜り遺構（L-18グリッドNo.1）
- 4段目左：ヤドカリ集中部（K-15グリッド）

- 1段目右：貝溜り遺構（J-13グリッドNo.2）
- 2段目右：貝溜り遺構（K-14グリッドNo.1）
- 3段目右：1-18グリッド貝集中部
- 4段目右：ヤドカリ集中部（K-15グリッド）



図版12 主な出土遺物（沖縄新石器時代後期）

1段目左：I-14グリッド遺物出土状況

2段目左：I-13グリッド遺物出土状況

3段目左：I-13グリッド遺物出土状況

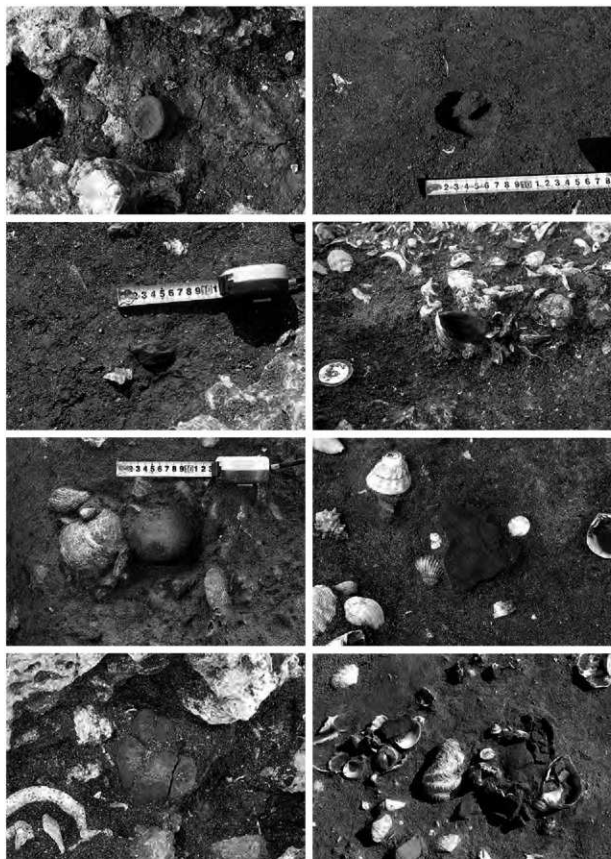
4段目左：J-16グリッド遺物出土状況

1段目右：I-14グリッド遺物出土状況

2段目右：I-13グリッド遺物出土状況

3段目右：I-13グリッド遺物出土状況

4段目右：J-16グリッド遺物出土状況



図版13 主な出土遺物（沖縄新石器時代後期）

1 段目左：L-17グリッド遺物出土状況
 2 段目左：L-18グリッド遺物出土状況
 3 段目左：I-15グリッド遺物出土状況
 4 段目左：L-17グリッド遺物出土状況

1 段目右：J-19グリッド遺物出土状況
 2 段目右：K-18グリッド遺物出土状況
 3 段目右：I-14グリッド遺物出土状況
 4 段目右：I-13グリッド遺物出土状況



図版14 主な遺構（グスク時代以降）

1段目左：遺構検出状況（N・P-5・6グリッド）

2段目左：遺構検出状況（N~Q-5~9グリッド）

3段目左：遺構半截状況（N~Q-5~9グリッド）

4段目左：遺構掘下げ状況（N・O-5~9グリッド）

1段目右：遺構検出状況（N・P-5・6グリッド）

2段目右：遺構半截状況（N~Q-5~9グリッド）

3段目右：遺構掘下げ状況（N~Q-5・9グリッド）

4段目右：遺構掘下げ状況（N・O-5~9グリッド）



図版15 主な遺構（グスク時代以降）

1段目左：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

2段目左：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

3段目左：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

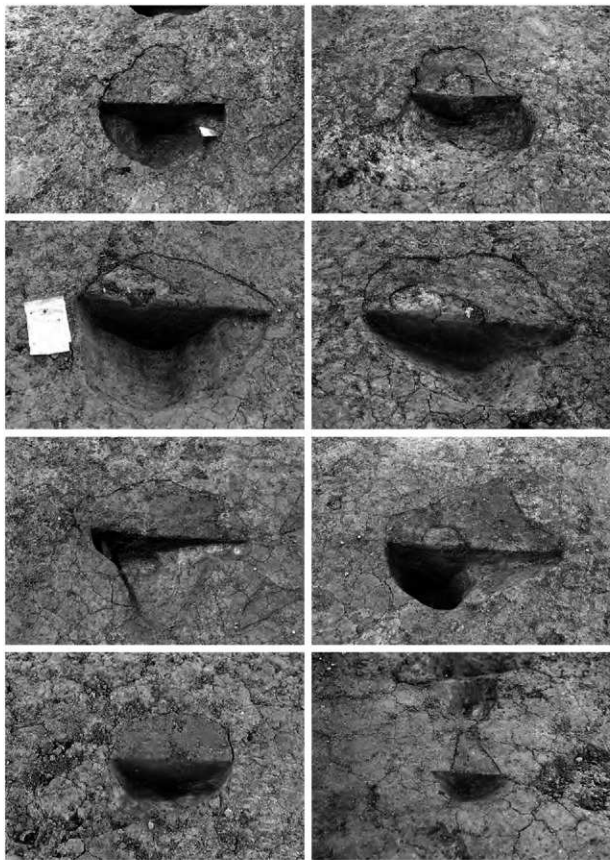
4段目左：遺構掘下げ状況（N-11・12グリッド）

1段目右：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

2段目右：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

3段目右：遺構掘下げ状況（N～Q-5・9グリッド）

4段目右：遺構検出状況（N・P-5・6グリッド）



図版16 主な遺構（グスク時代以降）

1段目左：遺構半裁状況（O-6グリッドNo.3）

2段目左：遺構半裁状況（O-6グリッドNo.14）

3段目左：遺構半裁状況（O-6グリッドNo.27）

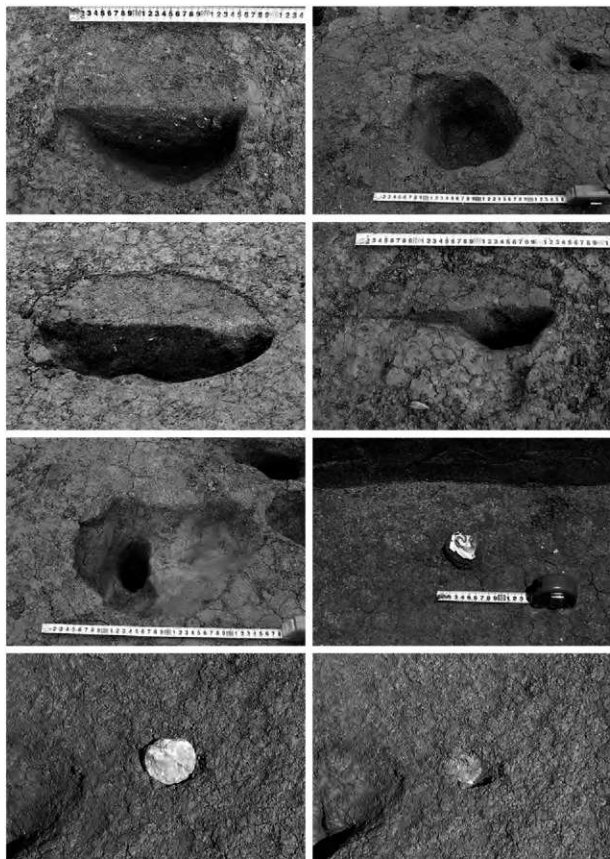
4段目左：遺構半裁状況（O-6グリッドNo.40）

1段目右：遺構半裁状況（O-6グリッドNo.6）

2段目右：遺構半裁状況（O-6グリッドNo.16）

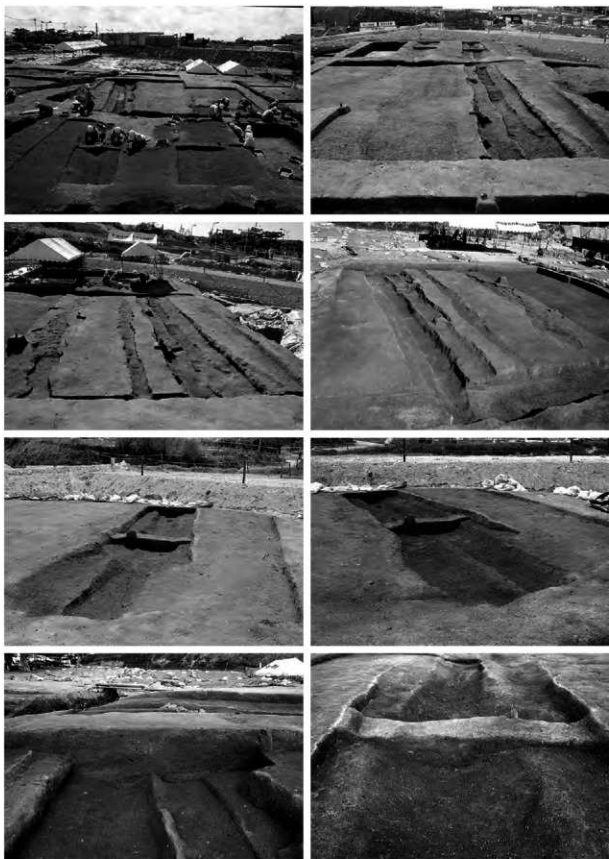
3段目右：遺構半裁状況（O-6グリッドNo.29）

4段目右：銀跡半裁状況（O-7グリッドNo.1）



図版17 主な遺構と出土遺物（グスク時代以降）

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 段目左：遺構半截状況（K-8グリッドNo.6） | 1 段目右：遺構完掘状況（K-8グリッドNo.6） |
| 2 段目左：遺構半截状況（M-9グリッドNo.42） | 2 段目右：遺構半截状況（L-8グリッドNo.10） |
| 3 段目左：遺構完掘状況（L-9グリッドNo.2） | 3 段目右：遺物出土状況（O-10グリッド） |
| 4 段目左：遺物出土状況（O-7グリッド） | 4 段目右：遺物取り上げ後の状況（O-7グリッド） |



図版18 主な遺構（近世）

1段目左：溝状遺構No.1の状況

2段目左：溝状遺構No.1・2・3の状況

3段目左：溝状遺構No.1の近景

4段目左：溝状遺構No.1の近景と層序

1段目右：溝状遺構No.1の状況

2段目右：溝状遺構No.1・2・3の状況

3段目右：溝状遺構No.1の近景

4段目右：溝状遺構No.1の近景と層序



図版19 主な遺構（近世）

1 段目左：溝状遺構No.5の状況
 2 段目左：溝状遺構No.5の状況
 3 段目左：溝状遺構No.5の状況
 4 段目左：溝状遺構No.6の状況

1 段目右：溝状遺構No.5の近景
 2 段目右：溝状遺構No.5の状況
 3 段目右：溝状遺構No.5の近景と層序
 4 段目右：溝状遺構No.6の状況



図版20 主な遺構（近代）

1 段目左：本土産磁器集中部（L-12グリッド）
 2 段目左：石囲い遺構の状況（H-16グリッド）
 3 段目左：石囲い遺構の撮影作業状況

1 段目右：本土産磁器集中部（L-12グリッド）
 2 段目右：石囲い遺構の状況（H-16グリッド）
 3 段目右：石囲い遺構の測量作業状況
 4 段目右：石囲い遺構の平面図作成作業状況



図版21 表土剥ぎ作業と樹木の移植作業

- 1 段目左：表土剥ぎ作業の開始直前の状況
- 2 段目左：表土剥ぎ作業の開始直前の状況
- 3 段目左：表土剥ぎ作業の状況
- 4 段目左：表土剥ぎ作業の近景

- 1 段目右：表土剥ぎ作業開始直前の状況
- 2 段目右：表土剥ぎ作業開始直前の状況
- 3 段目右：表土剥ぎ作業の近景
- 4 段目右：樹木の移植作業状況



図版22 表土剥ぎ作業と委託業務

1 段目左：表土剥ぎ作業の状況

1 段目右：表土剥ぎ作業の状況

2 段目左：表土剥ぎ作業の状況

2 段目右：表土剥ぎ作業終了後の状況

3 段目左：遺跡空中写真撮影委託業務の状況

3 段目右：磁気探査委託業務の状況

4 段目左：磁気探査委託業務の状況

4 段目右：磁気探査委託業務の状況



図版23 発掘調査作業の状況

1 段目左：発掘調査作業の全景
 2 段目左：発掘調査作業の近景
 3 段目左：発掘調査作業の近景
 4 段目左：雨天時の冠水状況

1 段目右：発掘調査作業の全景
 2 段目右：発掘調査作業の近景
 3 段目右：発掘調査作業の近景
 4 段目右：雨天時の冠水状況



図版24 発掘調査作業の状況

1 段目左：遺構の写真撮影作業

1 段目右：層序の写真撮影作業

2 段目左：断面実測作業

2 段目右：断面実測作業

3 段目左：断面実測作業

3 段目右：断面実測作業

4 段目左：断面実測作業

4 段目右：断面実測作業



図版25 発掘調査作業の状況

1 段目左：グリッド設定作業

1 段目右：グリッド設定作業

2 段目左：平板実測作業

2 段目右：平板実測作業

3 段目左：遺構の平面実測作業

3 段目右：遺構の平面実測作業

4 段目左：遺構の平面実測作業

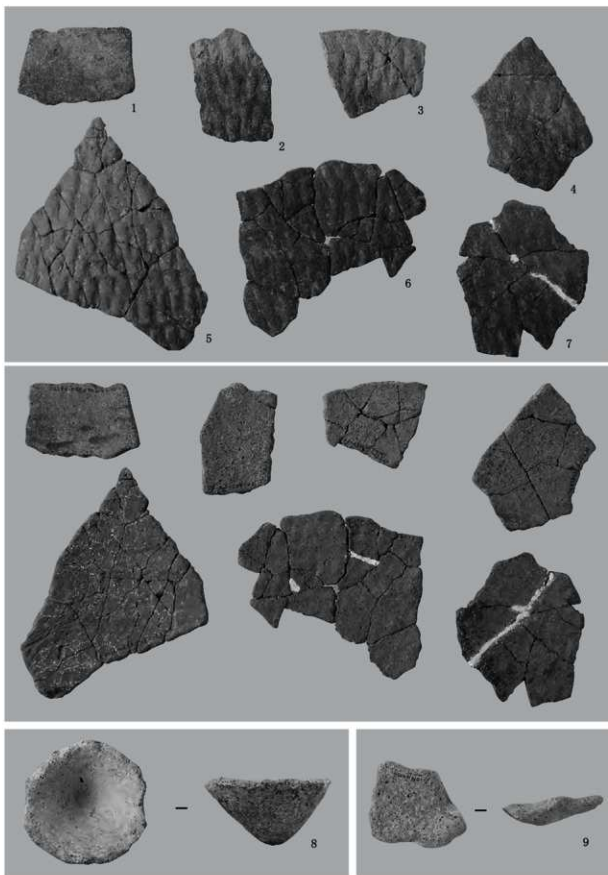
4 段目右：遺構の平面実測作業



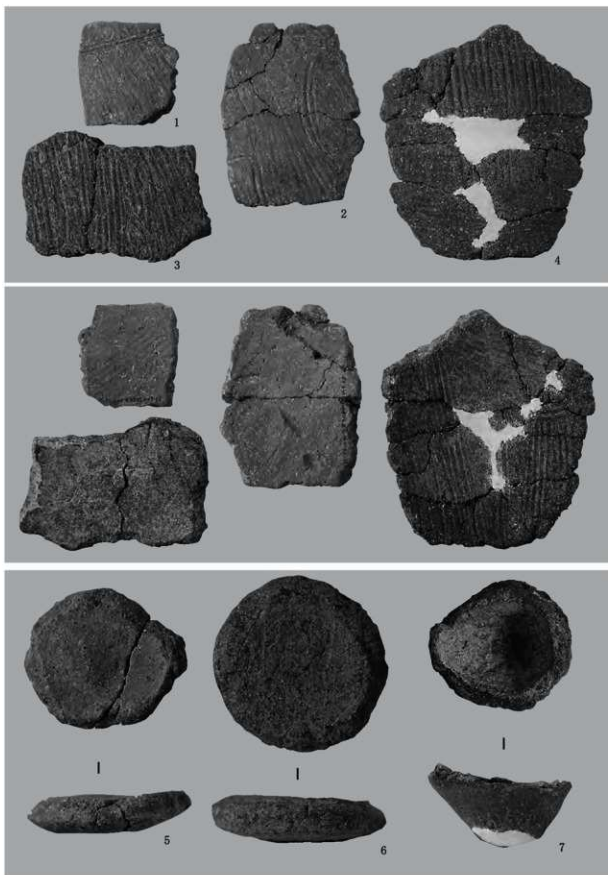
図版26 発掘調査作業の状況

1 段目左：電子図化のための測量作業
 2 段目左：出土遺物の洗浄作業
 3 段目左：現地説明会の状況
 4 段目左：現地説明会の状況

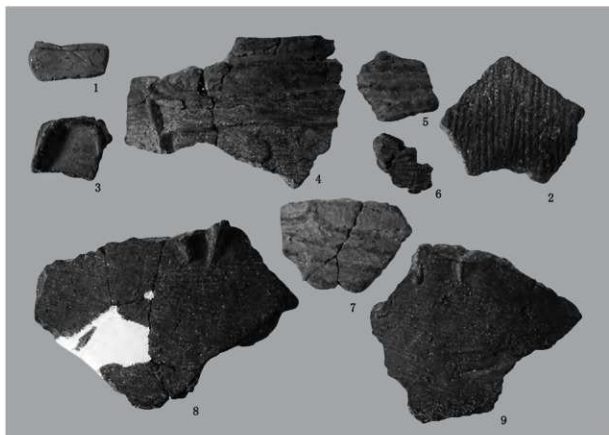
1 段目右：電子図化のための測量ポイント設定作業
 2 段目右：出土遺物の注記作業
 3 段目右：現地説明会の状況
 4 段目右：現地説明会の状況



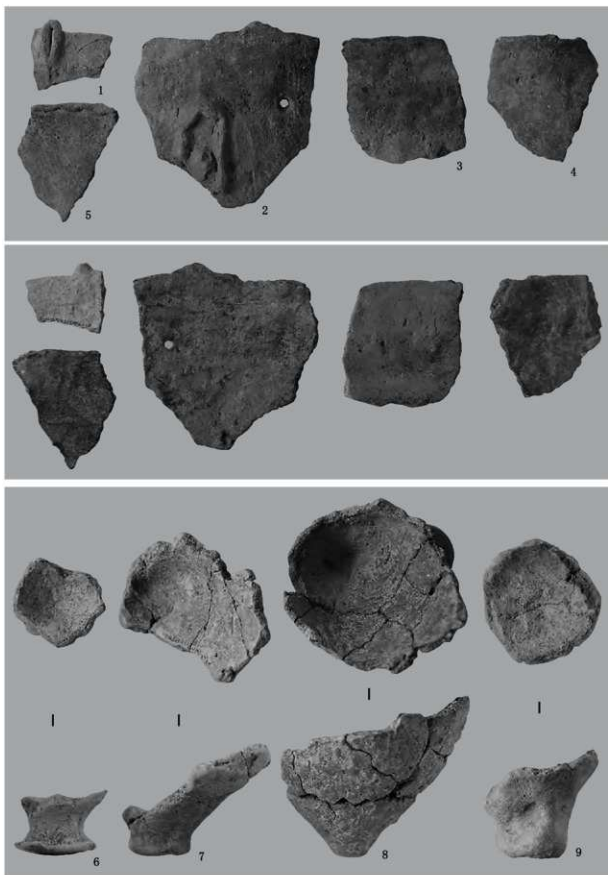
图版27 (第17图) 土器①



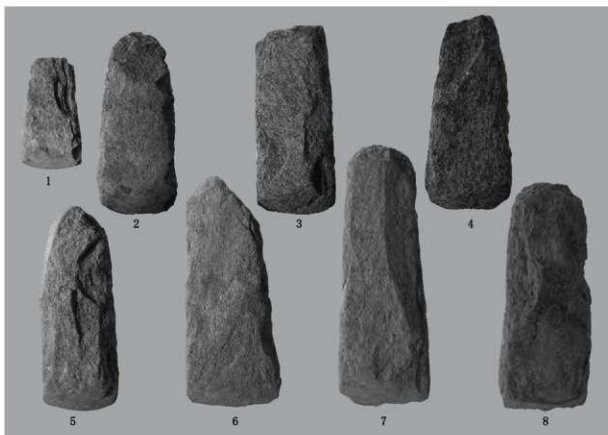
图版28 (第18图) 土器②



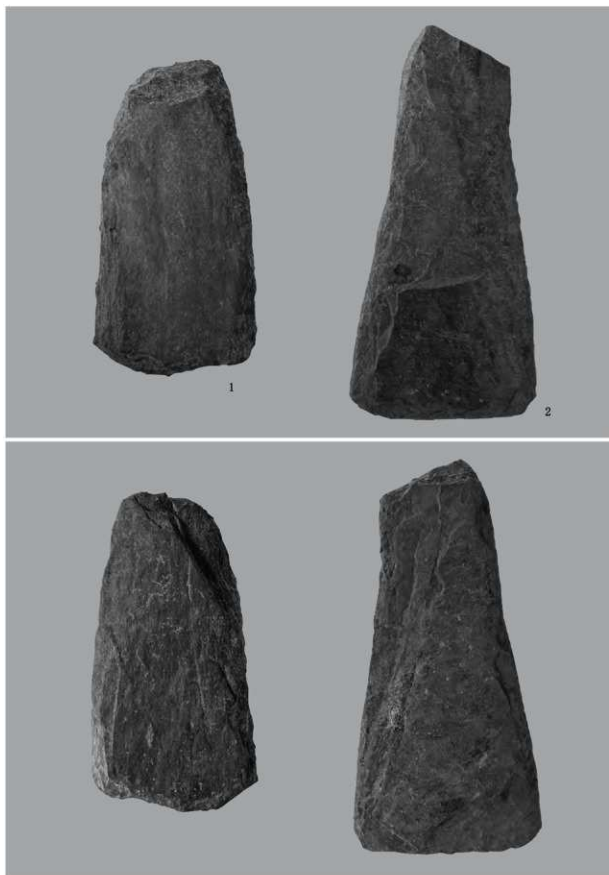
图版29 (第19图) 土器③



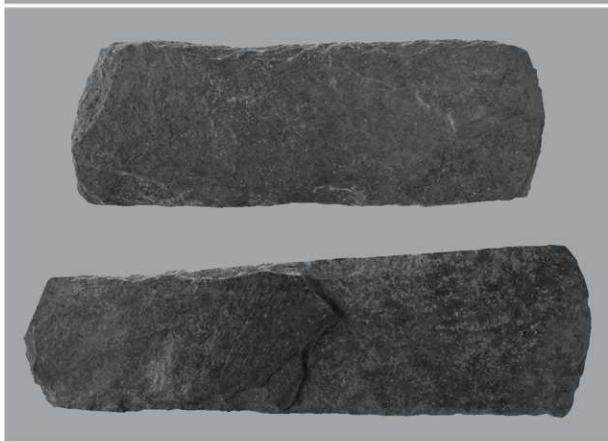
图版30 (第20图) 土器④



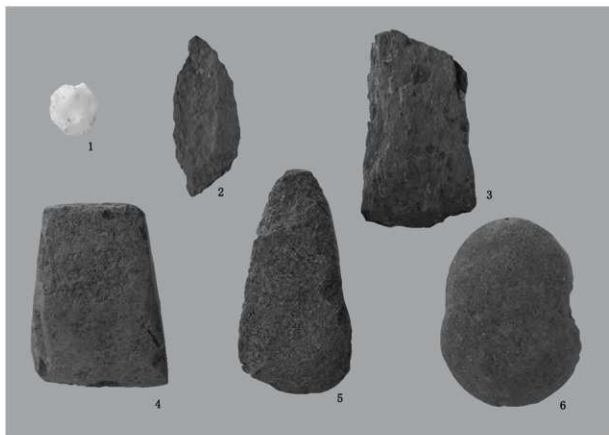
图版31 (第21图) 石器①



图版32 (第22图) 石器②



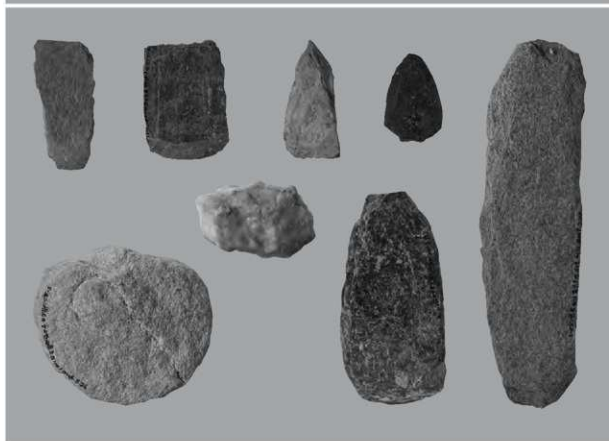
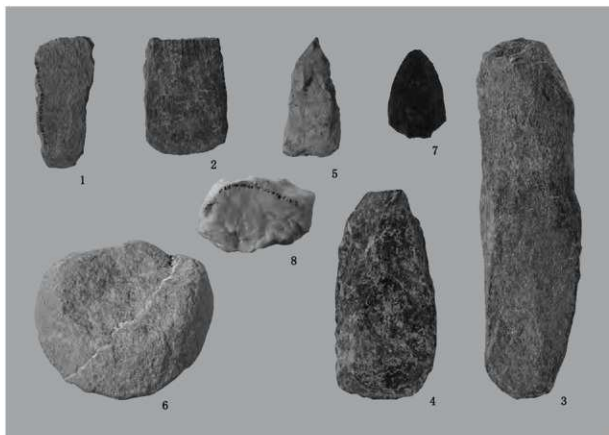
图版33 (第23图) 石器③



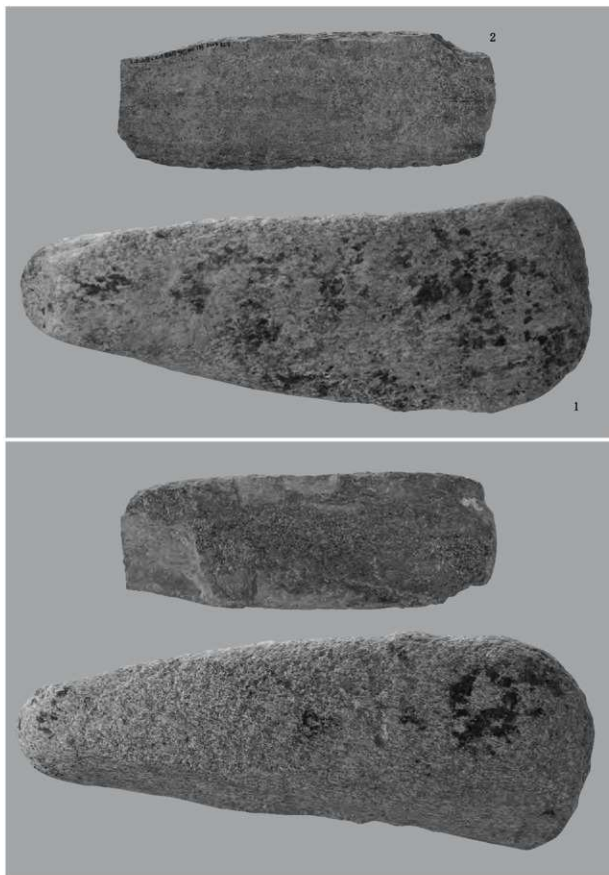
图版34 (第24图) 石器④



图版35 (第25图) 石器⑤



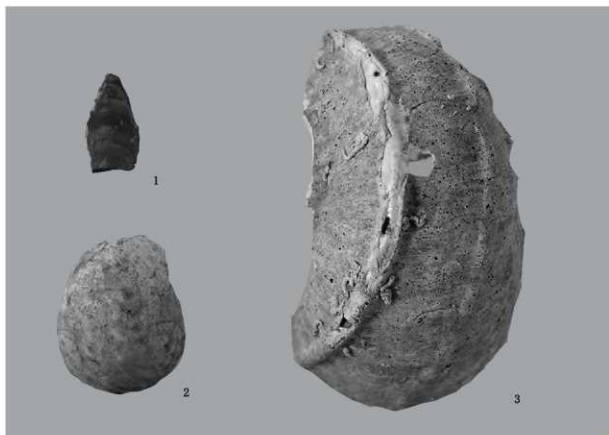
图版36 (第26图) 石器⑥



图版37 (第27图) 石器⑦



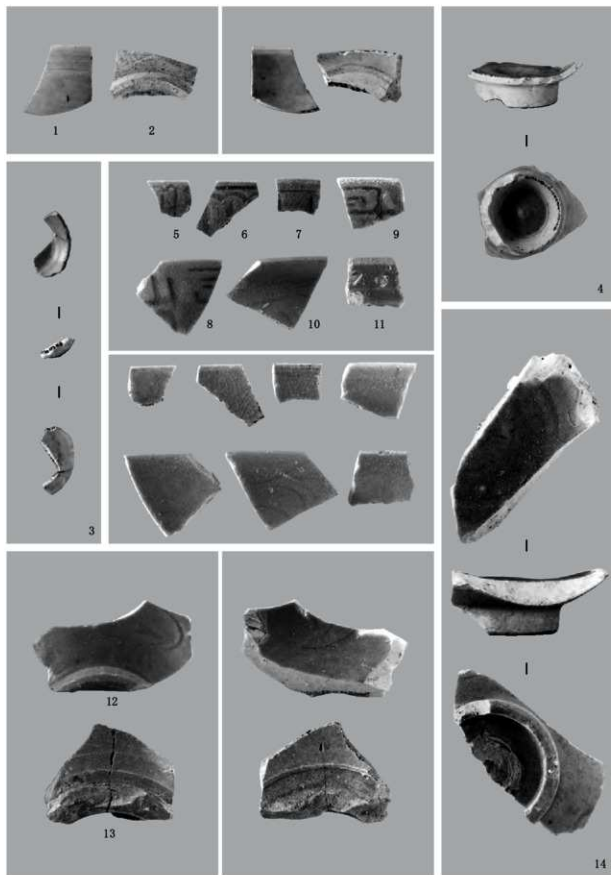
图版38 (第28图) 石器⑧



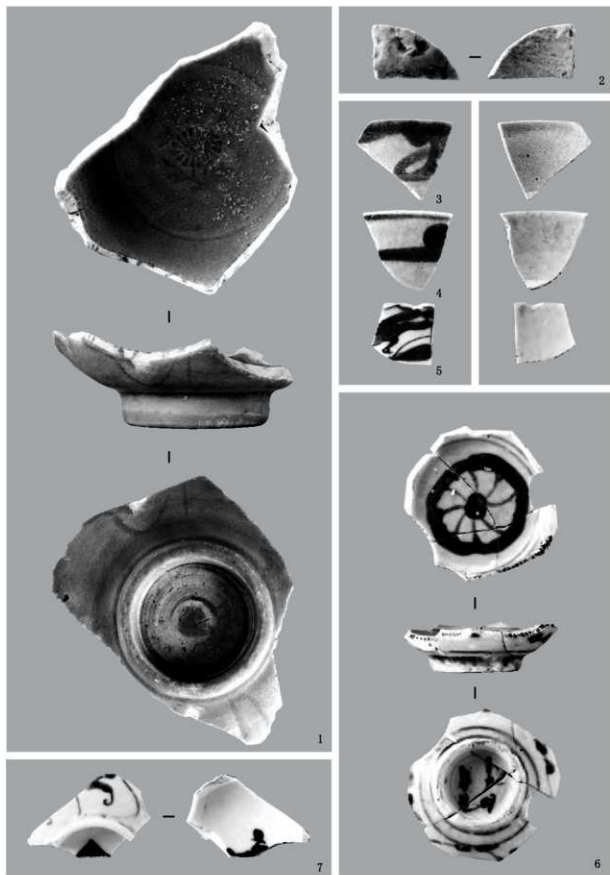
图版39 (第29图) 貝製品①



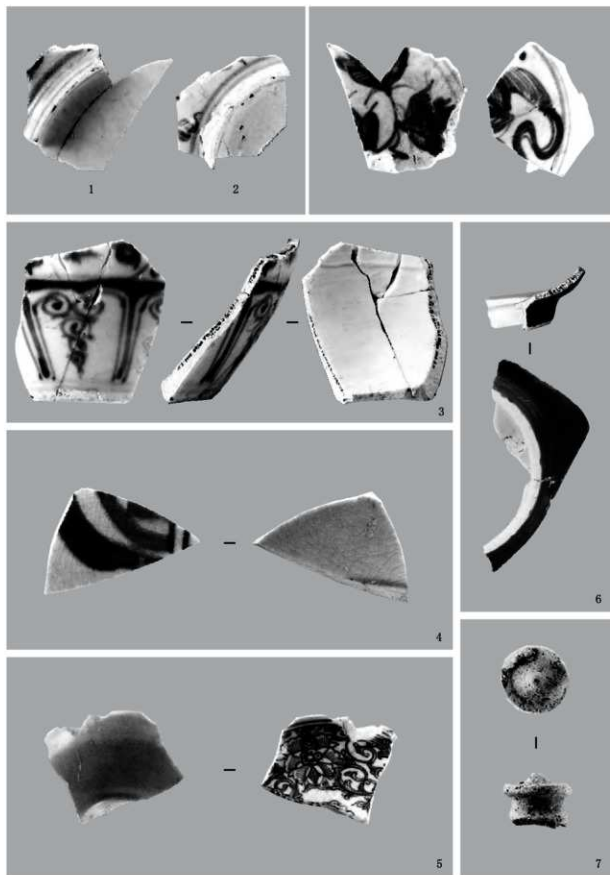
图版40 (第30图) 貝製品②



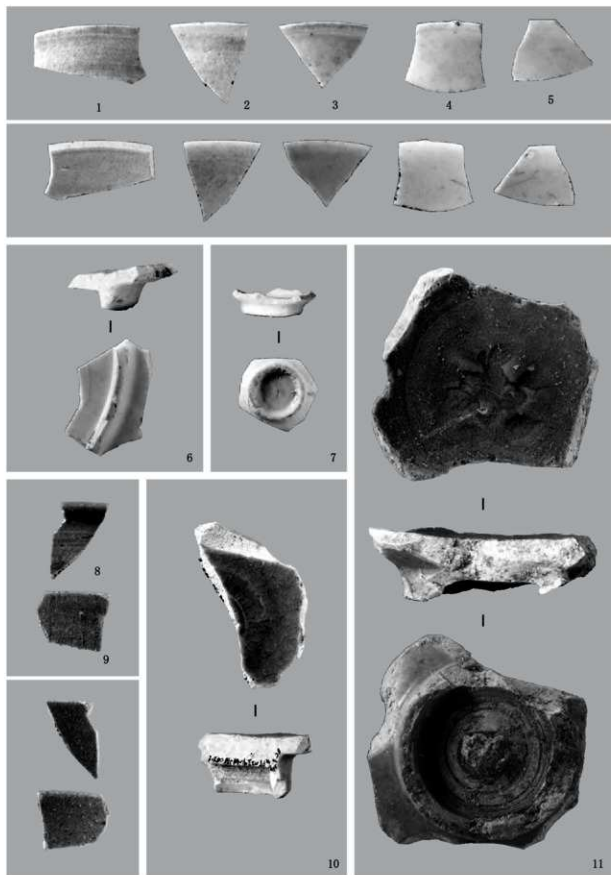
图版41 (第31图) 白磁・青磁



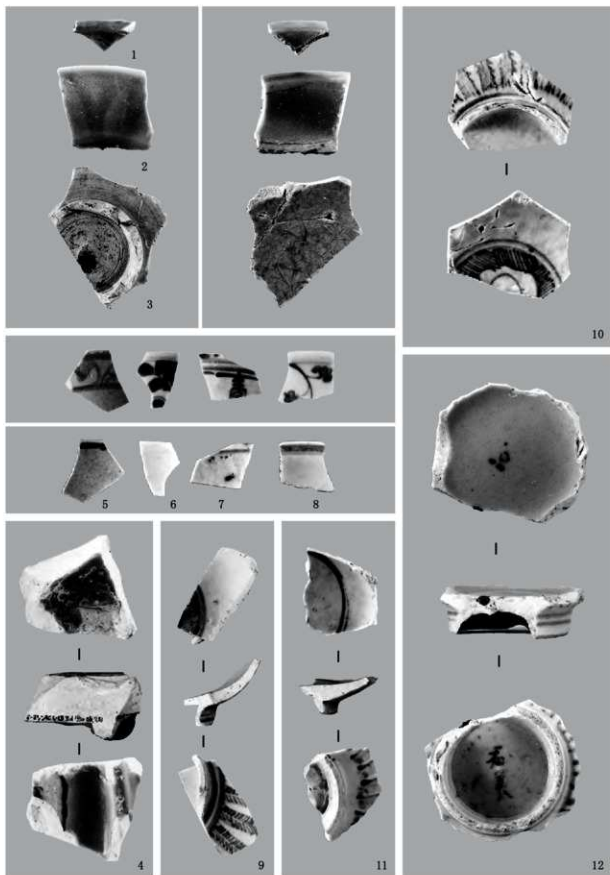
图版42 (第32图) 青磁·青花



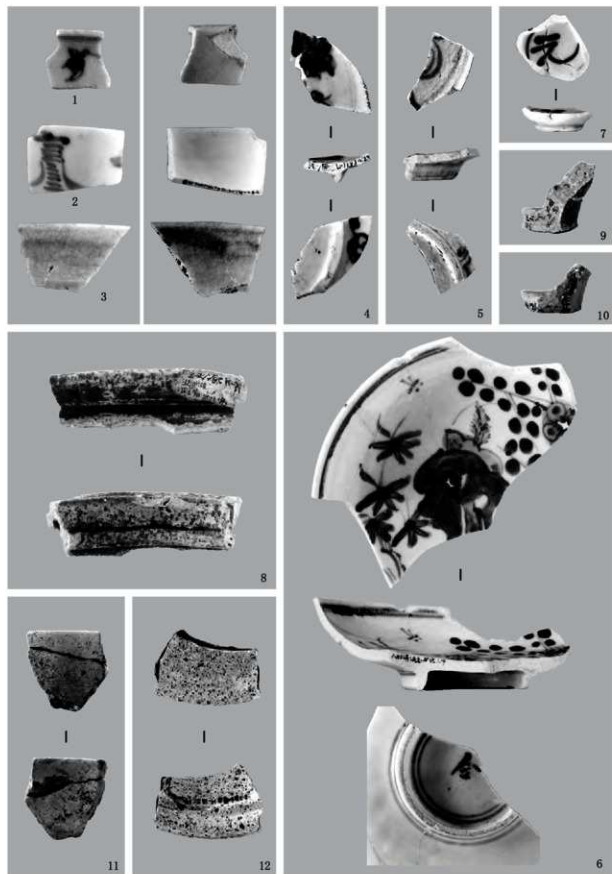
図版43 (第33図) 青花・青磁染付・瑠璃釉・タイ産半練



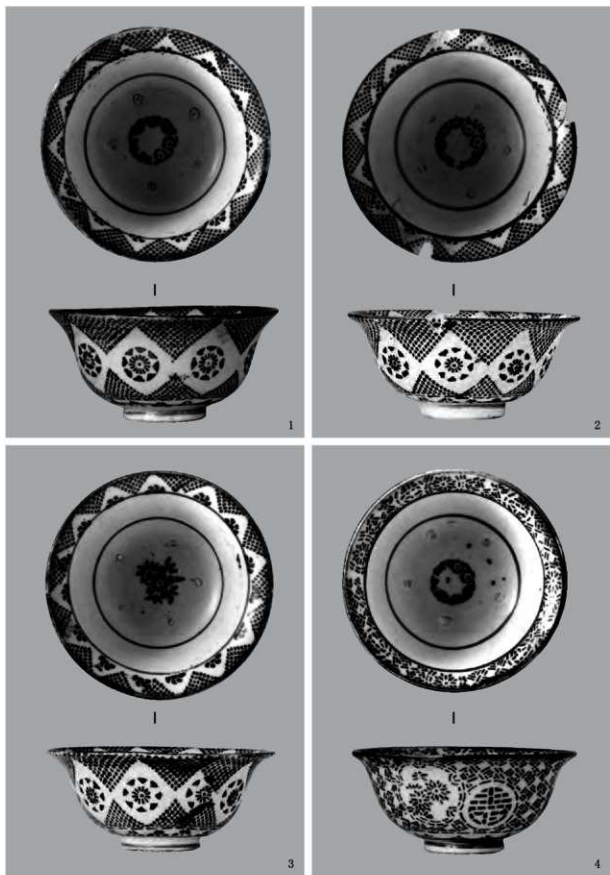
图版44 白磁・青磁



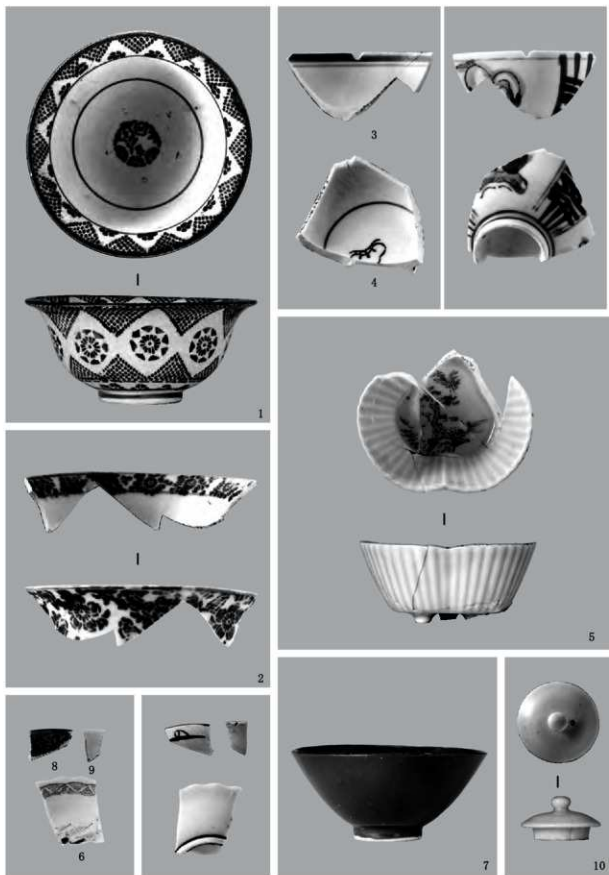
图版45 青磁·青花



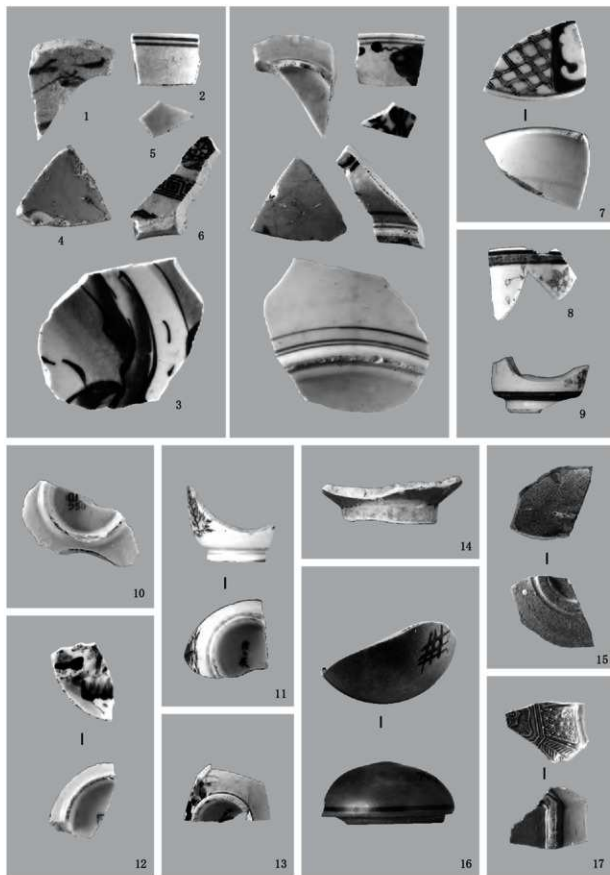
図版46 青花・褐釉陶器・タイ産半練



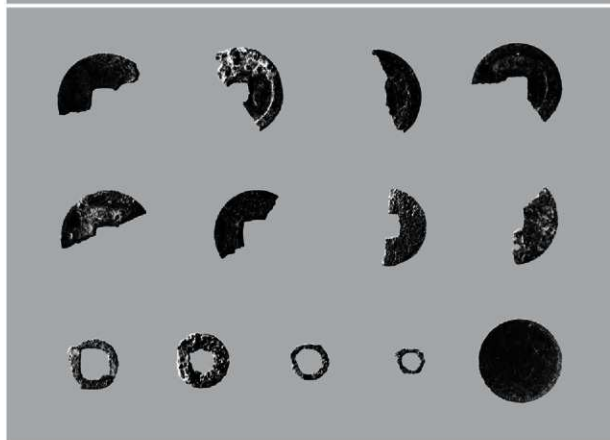
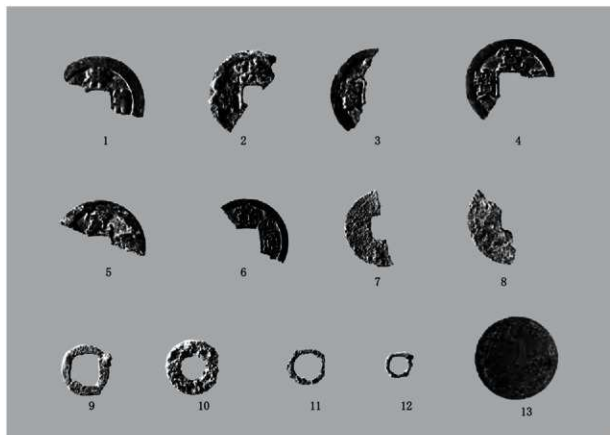
图版47 (第34图) 本土産磁器集中部出土遺物①



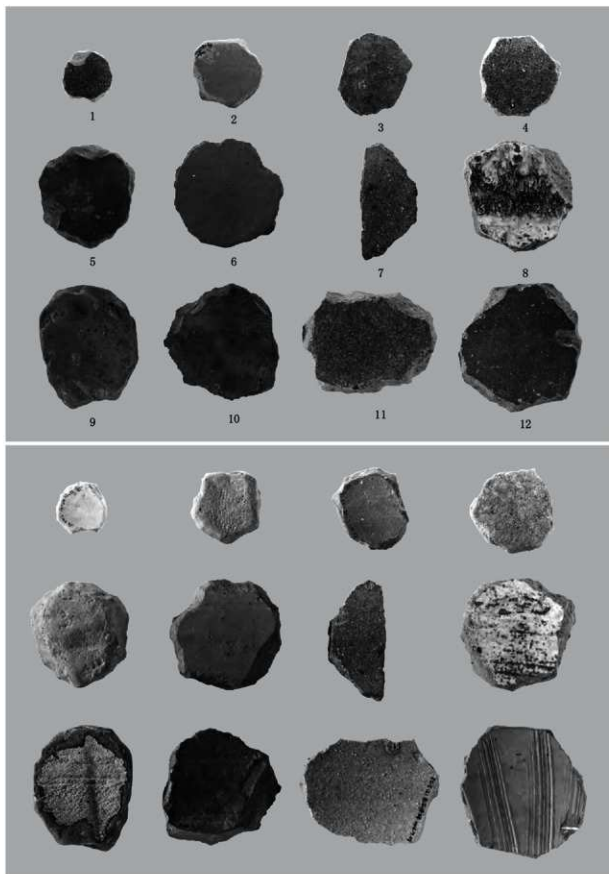
图版48 (第35图) 本土産磁器集中部出土遺物②



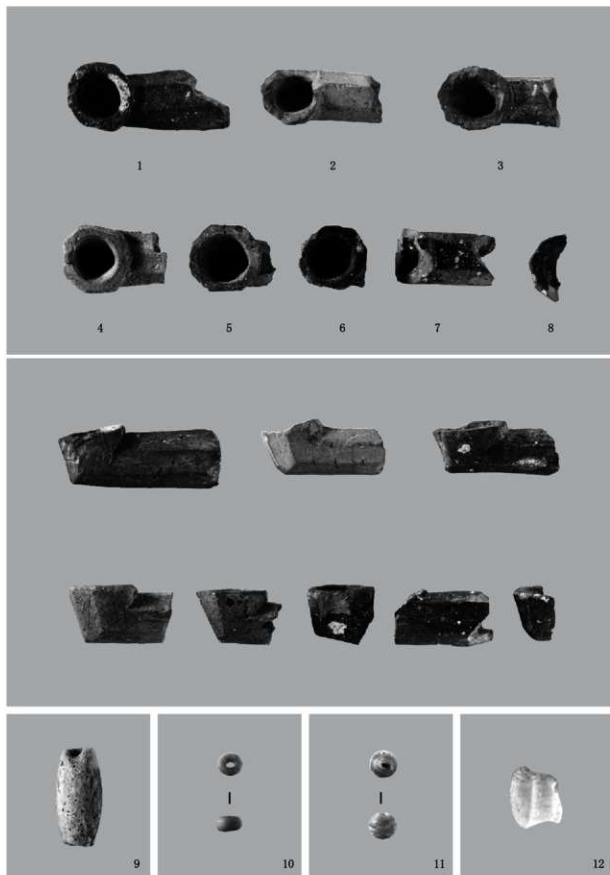
图版49 (第36图) 本土産陶磁器



图版50 (第37图) 钱货



图版51 (第40图) 円盤状製品



图版52 (第41图) 烟管·陶製品·玉

報 告 書 抄 録

ふりがな 書名	<small>ちくわんこーぬしんぼるしーいせき</small> 鏡水箕隅原C遺跡					
副書名	沖繩西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴う緊急発掘調査報告					
巻次						
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第87集					
編著者名	仲宗根啓・北條真子・樋口麻子・長堂綾・伊波かおり・城間千栄子・上田圭一・矢作健二・真栄田義人・斎藤紀行・松元美由紀					
編集機関	那覇市教育委員会文化財課					
所在地	〒900-8553		沖縄県那覇市前島3-25-1		TEL098-891-3501	
発行年月日	西暦 2011年 3月 30日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期間	調査面積 調査原因
<small>ちくわんこーぬしんぼるしーいせき</small> 鏡水箕隅原C遺跡	<small>ちくわんこーぬしんぼるしーいせき</small> 沖繩県 那覇市 かみずまらち 鏡水地内	47201	26度 12分 46秒 <small>(世界測地系)</small>	127度 39分 17秒 <small>(世界測地系)</small>	20050601 ～ 20060131 20060601 ～ 20070330	約2,400㎡ 沖繩西海岸 道路「那覇 西道路」建 設事業
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
鏡水箕隅原C遺跡	貝塚	沖繩新石器時代前Ⅱ期	焼土遺構 骸骨集中部		土器 石器 骸骨	字鏡水(陸 上自衛隊那 覇駐屯地) 地内で、初 めての本格 的な発掘調 査
		沖繩新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期	焼土遺構 貝塚 大型石器集中部		土器 石器 貝製品	
		沖繩新石器時代後期	貝溜り・貝塚		土器 石器 貝製品	
	グスク時代～	鏡跡・土坑(ピット)		外国産陶磁器 銭貨 ガラス製小玉		
	生産遺跡?	近世	溝状遺構			
		近代	本土産陶磁器集中遺構 礎石 井戸跡 石囲い遺構		本土産陶磁器 沖繩産陶器 銭貨	
要 約	本遺跡では、沖繩新石器時代前Ⅱ期に所属する爪形文土器が多数検出されたことで注目された。爪形文土器の出土層位からは、6,110±40、6,360±40BP(補正年代)の放射性炭素年代測定結果が示されている。また、鹿児島県で縄文時代中期頃とされている土器に類似した資料も出土している。遺構は、が跡の他、沖繩新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期及び沖繩新石器時代後期の貝塚、グスク時代～近世期と考えられる鏡跡、溝状遺構など多種多様な様相を呈する。					

那覇市文化財調査報告書第87集

鏡水箕隅原C遺跡

—沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴う緊急発掘調査報告—

発行 2016年5月31日
那覇市
〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市 市民文化部 文化財課
TEL 098-917-3501
FAX 098-917-3523

印刷 有限会社 金城印刷 那覇営業所
〒902-0073 沖縄県那覇市上間565-1
TEL 098-835-9475
TEL 098-835-9476
